

# 犬夜叉 獸身狼伝

凱聖

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

獣身騎士戯牙

それは守りし者が持つ魔戒騎士の称号の一つ。

これは秋月ダイゴでない異なる世界の獣身騎士の話。

男は、少女と半妖の少年とそこで出会う仲間達と強い妖力を持つ「四魂の玉」の欠片を命を懸けて集め心を成長させていく物語である。

※オリジナル性が高いので牙狼や犬夜叉とは離れた部分があります。気に入らなければ感想は入れないでください。

# 目次

桔梗	骨	能面	覚醒	子狐	蝦蟇	刀	墓	母親	櫛	戦い	来訪
294	269	236	205	172	139	120	97	74	44	15	1

水神	番外編 日記	祖父	傀儡	退治屋	接吻	死魂虫	再会	鬼蜘蛛	別れ	兄弟	墨	法師
601	591	568	545	516	494	473	453	425	403	381	347	319

幼兒	風穴	番外編
		過去1
671	643	632

## 来訪

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

今から500年前の戦国時代。

「犬夜叉だ!!」

村人達は、森の奥から出て来る何かに怯えていた。

そして出来たのは銀色の長髪に犬の耳を付け金の目をしている赤い着物を着た15、6才の少年が物凄い脚力とスピードで社の中に入ると光輝く玉、四魂の玉を祠から盗む。

「へっ！ぎまーみやがれ！これさえあれば俺は妖怪に成れんだ！」

そのまま四魂の玉を持って逃げようとした。

「犬夜叉!!」

一人の美しい巫女が犬夜叉に光輝く矢を放った。

ドスッ！

「あ・・・」

犬夜叉の手にあつた四魂の玉は地面に落ちた。

「き……桔梗……てめえ……よくも……」

犬夜叉は巫女の……桔梗の放つた矢で封印された時代樹に刺されて。

「四魂の玉……こんな物の為に……」

そして桔梗は、周りの村人達に頼み自分の亡骸と共に四魂の玉を燃やす様に頼み息を引き取つた。

その遺言通り亡骸は四魂の玉と共に燃やされ消えてしまった事になった。

だがそれは新しい物語のほんの序章でしかなかったのだ。

別の世界。

此処は人の陰我から生まれ人を喰う魔獣ホラーとホラーを狩る魔戒騎士の果てしない戦いが繰り返される世界。

「……」

建物内を一人のソフトモヒカン男が辺りを見渡す。

男は羽織りに近い布のベストを纏い上と下も無骨だが頑丈なデニムのロングシャツとズボンそして革靴を履ながら眉を寄せ何かの気配を感じ腕輪が光っていた。

それは男が狩る魔獣のいる証だった。

【シャアツツ!!】

物の陰から現れる黒いおぞましい魔獣ホラーが次々と現れる。

次の瞬間ホラー達は男に襲いかかる。

だが！

「テリアアツ!!」

男は瞬時にホラーを素手で首根っこを掴み別のホラーの所に投げ飛ばすが怪力と瞬発力にもホラーも驚く。

ホラーが後ろから寄るが受け流すと裏拳や掌底打ち等で怯ませる。

そして背中から魔戒騎士のみが使えるソウルメタルの斧を持ち構えホラー達に走り掛かる。

「はっ！たあっ!!」

豪快にホラー達を斬り叩き付ける。

だがその行動をした事で建物内のホラー達が次々と数を表していき全てのホラーが男に威嚇した。

【シャアアツツ!!!】

一斉に襲い始める。

ザック！

男は、ソウルメタルの魔戒斧で最初に来たホラーを刺すと自分の周りに円を描き魔法

陣が真上に召喚された。

バーンツ！

魔法陣から強力な衝撃波が生じると重量感を主張する緑色の狼の鎧と巨大なハルバードを持ち現れ目が銀色に光る。

そう男は鎧を召喚して鎧を纏い獣身騎士戯牙へと変身したのだ。

鎧を纏った瞬間より9.9秒の表示が目の前に現れるこれは鎧を纏える時間を意味している。

それ以上纏うとデスメタルに変換して鎧に喰われて暗黒騎士にならない様にする為である。

『ふんっ!!』

戯牙の武器獣身斧を地面に置いたまま左手に付いている鉤爪でホラー達を地面や壁にめり込ませてゆくと再び獣身斧を持ち構えた。

『トリヤアアアツツ!!』

ドーン！

獣身斧が地面に衝撃波を打つと壁や地面にめり込んでいたホラー達は爆発して消えた。

「ふっっつ！終わり、終わり！帰ろつと！」



鎧を解除すると何時もの気の抜いた顔になった男……ダイチは建物から出て行った。「どういう事だ!!ダイチよ!!」

此処は魔戒騎士達を統括する元老院で神官がダイチに説教をしていた。「別に言われた通りホラー退治しましたよ。」

怒鳴りが慣れているダイチは、平然と耳を掘りながら言い返す。

「そう言う事じゃない!!あの建物には、歴史的重要な文化財があつたんだ!それを巻き込まない様にホラー達を倒せと命じた事を忘れたのか!!我々が後々表の連中になんて言い返すかを考えろ!!」

どうやら重要文化財を壊したらしい。

「まったく!貴様の祖父から系譜になつた風情が我々に反抗するとは!」

その言葉を聞きダイチの瞳孔が開いた。

「おい!訂正しろよ!!あの人の悪口を言うな!」

ダイチの顔は鬼の様になったが直ぐに瞳孔も閉まり何時もの顔に戻る。

「いいか!今度命令無視したら極刑と思え!!それまで謹慎だ!!」

ビビりながら神官は、ダイチに言うと去つた。

ダイチは自宅の豪邸に戻るとまず仏壇の様に並んでいる家族の写真を眺める。

ダイチは、幼い頃魔戒法師の両親をホラーに殺され先代の戯牙であった祖父コウヤに育てられた。

祖父は、チンピラだろうがヤクザだろうが必要ならボコボコにしる殺さない程になつて言う位変わり者の魔戒騎士で通っていたがダイチ自身そんなコウヤが好きだった。

その証拠に現役からダイチの時まで魔導輪を使わず知り合いの魔戒法師にゲートとホラーの位置が分かるだけの道具を作ってもらった。

コウヤ曰く「共に闘うパートナーは、生涯アイツだけだ。だから魔導輪は不要。」と意味不明な言動を言っているがその道具は今もホラーを狩る時の為にダイチの手にはめている腕輪であった。

昔は、他の魔戒騎士と同様の考えを持つ一人だったがある任務から戻ると別人の様に変わってしまったらしい。

祖父は、何時も大切なことは守りし者の心だと稽古の時、耳にタコが出来る程聞いた。そしてその祖父も当時18才の俺に戯牙の称号を受け継がせた1週間後の朝に永眠し、それから10年後の今も戯牙の称号を貰っている。

ダイチは、祖父の書齋に向かい魔導書や図鑑を見て暇つぶしをしているとコウヤの趣味だったポラロイドカメラの一枚の写真を手にした。

「なんだ？これは何？」

写真にはダイチそっくりの若いコウヤと隣に巫女らしい服を着て剣を腰に付けている美しく優しげな女性がいた。

「これって婆さんじゃないよな。」

ダイチは、祖母を知っているがまったく別人だとわかった。

何故ならダイチの祖母は、親が生まれた時に死んでいるのでその若い写真であるからだった。

「なんだ、この羽根は？」

ダイチは、不思議に思い凶鑑を調べまくる。

「次元鳥の羽。」

この羽根は異世界に自由に渡る聖獣の物だとわかった。

更にその頃のコウヤの日記を見つける。

「jeeちゃんの・・・」

ペラ

一枚のページを開く。

俺はこの日記を書く事は恐らくこの任務を終えた頃からだ。

俺は、元老院から過去と現在と未来の陰我から生まれたホラー・クロノデインの討伐に俺を指名した事から始まる。

俺は、新しい系譜になった事で大手柄を立てて自分の名を上げようと頑張っていた。そしてその機会が出会ったんだ。

俺は元老院から次元鳥の羽を授かりクロノデインが出る情報の場所まで来た。

そこは普通の山奥だった。

突然吐き気が出る感覚が生じた。

俺は直ぐに次元鳥の羽を翳し時空の彼方に向かった先に奴がクロノデインがいた。

俺は戯牙へと変わり交戦したが奴は俺の想像以上に強かった必死の思いで距離をとったが奴は己の力で大きな渦巻きを生じて俺を何処か次元の彼方に飛ばした。

「クロノデイン？そいつと戦っていたのかじーちゃんは？はっ！」

気配を感じて振り向くといつの間にか指令書が置いてあった。

ダイチは、魔導火で燃やすと魔界語が浮かび上がりクロノデイン討伐の内容だった。

ダイチは再び元老院に向かう。

「ダイチ。これより最後のチャンスをやる。クロノデインの討伐に向かえ！」

威張ってそんな神官がダイチに向けて指令を言う。

「最後のチャンス？」

ダイチは、その言葉を逃さなかった。

「貴様は戯牙の称号になった10年間で度々問題を起こし我が元老院に他害なる損害を

被った。本来なら、称号剥奪並びに斬首だが！チャンスをやる。貴様の祖父コウヤが仕留め損なつたクロノデインの討伐だ。騎士として最後までその使命を最低はたせ！だからこそ任務失敗の責任と言う形でだ。わかつたな！」

ダイチはその神官の言葉に不愉快さを残すが仕事は仕事やるしかない。

「わかりました。この獣身騎士の名をかけてやってやるよ!!」

怒鳴りながら元老院を後にしてクロノデインの討伐に向かった。

「行つたようですな。」

「実力は認めるが問題児だからなこう言う処理しかできないな。何せあの黄金騎士も一目置く存在だからな。戯牙の鎧の紛失と獣身騎士を空位にさせるのは仕方ない。これ以上の損害は我々にも責任は負えない。それに大魔導輪ガジャリがあのコウヤとダイチには何もするなと言う程だ。」

「なんだって・・・クロノデインを倒し生還した騎士は未だに出てなく例外でコウヤだけが帰ってくる始末だからな。最後の貴重な次元鳥の羽を失うが仕方ない。自害しろとダイチに言っているようなものだからな。くれぐれも他の連中に・・・いや冴島鋼牙達に勘付かれない様に行く事だけが心配なだけだ。」

元老院の神官達は汚げに笑っていた。

そして祖父の日記の内容を見た通り山奥にたどり着く。

それから隅々まで調べ回した。

だが、手掛かりになるものは何も無い。

「本当にこの山奥にクロノデインがいたのか？」

半信半疑でも身体は、休まない。

すると……

「うっ！」

当然吐き気が生じた。

間違いない……クロノデインの入り口がある証拠だった。

ダイチは懐に閉まっていた次元鳥の羽を当たり全体に翳した。

一点だけ陽炎の様に空間が揺れている所を見つけ其処に次元鳥の羽を近づけると次元の入り口が開く。

「此処が寝ぐらか？行ってみるか！」

ダイチは、次元の空間に入った。

「何だ!? 此処は!？」

辺りを見ると光輝く星々と無数の時計が存在した。

「ん!？」

その奥に砂時計や日時計やデジタル時計など色々な時計が混ざった巨大な蛇がいた

それが！

「クロノデイン!!」

ダイチは直ぐに魔戒斧を構えた。

ピカッ！

クロノデインの時計の様な目が光るとダイチを確認した。

「また懲りずに来たか戯牙の称号の者よー」

クロノデインは、トグロを巻いてダイチに襲いかかる。

直ぐにダイチは、避けるが動く度にクロノデインの周囲から衝撃波が生じてそれだけでもかなりのダメージになる。

「くっー」

ダイチも流石に衝撃波でダメージがかなり来ていた。

次の衝撃波が来ようとするのと魔戒斧を描き鎧を召喚した。

その召喚の衝撃波とクロノデインの衝撃波でダメージを相殺した。

ダイチは、戯牙の鎧を纏うと衝撃波を注いだ獣身斧でクロノデインに振り下ろした。

ガキーンッ！

獣身斧でクロノデインの身体を斬り下ろそうとするがクロノデインの周囲の衝撃波がバリア代わりになっておりそれはまるで磁石のN極とN極をぶつけて当たらない様

な物だった。

『じーちゃんが想像以上に強いって言うのはこの衝撃波か!? ソウルメタルの武器も届かないのは何かしらの理解出来ないエネルギーか!!』

ダイチはこんな経験は初めてだった。

自らの衝撃波でもクロノデインの衝撃波の方が何倍も強いさらにはソウルメタルの武器で衝撃波をぶつけても当たらないのは生まれて初めても経験だ。

ダイチは、再び魔法陣を描くと緑の巨大な二本の角を持つ馬、魔戒騎士がホラーを100体倒した時に現れる試練に打ち勝った証、魔導馬を召喚した。

【詰まらん！彷徨え彼方に！】

クロノデインは大きな渦巻きを発生させて段々とそれが風のように生じ外へ外へダイチをどんどん追いやる。

『ウアアアアッ!!!』

ダイチは、なす術もなくクロノデインの作った次元の彼方に魔導馬共々飛ばされ鎧が解除されるとその風で鎧も魔界に戻る事なくそのまま一緒に飛ばされてしまった。

そして目の前が真っ白になり直ぐに真っ暗に変わった。

「.....ん？」

何故か光が当たっているそれに風の音が聞こえる。



「あつ！気が付いた！」

目の前には15才位の美少女が目映った。

「犬夜叉！目を覚ましたよ！」

「そうか！」

男の声が聞こえて振り向くと・・・

ピクピク！

「はい？」

ダイチは、目を疑った。

目の前にはこの少女と同じ年位の少年だが・・・明らかに犬の耳と赤い着物を来た変なコスプレだった。

そしてダイチが気になる耳を見ると咄嗟に。

モニユツ！モニユツ！モニユツ！

「耳！」

ダイチは何故かしたくなった。

そして！

ゴチーンツツ!!!

「勝手に触るな!!」

少年の……犬夜叉の拳がダイチの頭に完全に入った。

「ゆ……夢じゃないけど俺、ケガ人……ガクッ！」

ダイチは、再び気絶した。

「犬夜叉！おすわりっっ!!」

ドシーンッ！

犬夜叉の首にかけている言霊の念珠が光ると地面に犬夜叉をめり込ませた。

そうこのおすわりっっ!!っと言った少女日暮かごめと少年犬夜叉の最初の出会いでもあった。

## 戦い

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

ある民家の中でダイチが目を覚ますと犬夜叉に殴られて頭を撫でていた。

「悪かったよ。まさか本物と知らなかったんだ。」

「けっ!」

犬夜叉は、ダイチが謝るのにそっぽ向いていた。

「で? 此処は何処なんだ?」

「ここは武蔵の国じゃ。」

目の前に巫女装束の眼帯の婆さんが質問に答える。

「あつ! そうっすか、所で此処はコスプレのイベントか時代劇の撮影かなんかつすかね

?」

「??」

婆さんは、何を言っているんだこの男は? っと言う目で見るとかごめと言う少女が来

て口を開く。

「私、日暮かごめと言います。」

「ダイチだ。よろしく。」

「此処は500年前の戦国時代。私は近くの骨喰いの井戸を通って現代からこの戦国時代に来ちゃったんです。」

「………ん？」

ダイチは、何を言ってるんだと思うしかなかった。

「そうですよね。無理ありませんよね？」

かごめは苦笑していた。

「(あの子の言っている事ってまさか……)とここで？俺の武器知らないかな？斧なんだけど？」

ダイチは、かごめの言葉に気になりながらも魔法衣のベストの裏に閉まっている魔戒斧が無いことに気づきかごめに聞いた。

「あつ！ああ、あの重い斧なら外ですよ変な鎧と斧槍と一緒に。」

「へ？」

ダイチは、立ち上がり眼帯巫女装束婆さんの自宅から外に出ると目の前に魔戒斧が見事に刺っていた。

「本当は、気絶したダイチさんと一緒に持って行きたかったんですけど凄く重くてそこ

いる犬夜叉も持てないって言うんで。」

「けっ！」

またまたそっぽを向く犬夜叉。

ダイチは、トコトコ歩き魔戒斧の柄を片手で持つと軽々と持ち上げ魔戒斧を背中にしまうが入らない。

「ん？魔法衣に収まらない？」

通常なら魔界に通じており四次元ポケットの様に収まるはずだからだ。

「はっ？」

先ほどのダイチが魔戒斧を持ち上げるのを見てかごめと犬夜叉だけでなく他の村人達も驚く。

ソウルメタルは、本来は超重量の金属、ソウルメタルと心を通わせないと羽毛の様に軽く持つ事も出来ない品物。

ただ、その為には長い訓練が必要でもある。

「それとね、さつき言っていた鎧と斧槍って今何処にあるの？」

ダイチは、かごめに聞く。

「こつちです。」

眼帯巫女装束婆さんの自宅の裏に行くと言つて立っていた。

「変わった鎧ですね、特撮のセット道具ですか？」

かごめが戯牙の鎧に触れようとすると。

「!!触るな!!」

が!既に遅かった。

「えっ?」

チヨンチヨン!!

ガバツ!

ダイチは、かごめの触った指を直ぐに離す。

「おい!何かなってないか!?身体が砕けたとか無いよな!？」

「えっ、別に変わった所は無いしさつきも触っていたから。」

ダイチは、驚きを隠せなかった。

ソウルメタルの鎧と武器は、女性が触ると女性の身体が砕けるのであったからだ。

「何がどうなっているんだ?」

理解できないな現象に戸惑いを隠す。

魔戒斧を真上に円を描き召喚すると逆さま立ちになっていた戯牙の鎧にも同じ召喚の円が真上から生まれその召喚の円に入るとダイチの描いた円から戯牙の鎧が次々とダイチの身体に装着していく。

『鎧に異常は無いか……制限の時間が表示されない!』

ダイチは、直ぐに鎧を解除するとまた逆さま立ちで戻った。

「すいません!あの……」

眼帯巫女装束婆さんに向かってその名前ままの名前で呼ぼうとすると。

「わしは、楓だよ。ここの村の巫女をやっとおる。」

「楓婆さん。ここはこの世だよね?」

「!?何を言っているんじゃない?この世に決まっている。あの世じゃない!」

流石に当たり前の様に言う。

だが、この時間表示が出ないのは魔界かあの世、もしくはそれ以外の別の空間の時のみが正解だからだった。

それどころか女性が触る事を許さないソウルメタルが簡単に触れたと言う事は……ただ一つ。

突然変異としか考えられなかったので無駄だと思いが楓に重要な別の質問をする事にした。

「楓婆さん、この世界にホラーって魔獣はいる?」

「ほらー?妖怪か何かか?」

「あつ?妖怪!?ホラーはいなくても妖怪っているの!?ホラーの一種じゃなくて?」

「知らん。お主の言う事はさっぱりわからん？」

嘘を言っていないさうだ。

この事から考えられるポイントをまとめる。

1、鎧と武器が魔界に帰還しないで同じ空間で長時間しかもこの世に存在できる事。  
2、ソウルメタルの心を通わして持つ事が条件だが、女性が鎧に触れても身体が砕けない事。

3、鎧を纏っていても時間表示が無いあの世や魔界等ならもとかくこの世Ⅱ人界で時間表示が無い事。

4、この世界にはホラーがない代わりに妖怪が存在する事。

5、魔界に通じているはずの魔法衣が正常に働かない。

結果出した答えが異世界来てしまった。

異世界に訪れた事によるソウルメタルの物質の突然変異と言う事だと考える。

これは、物だからだ異世界から来たダイチ自身にも、もしかすれば体調に恐ろしい何が出来ている可能性もある。

「あの一！」

考え込んでいるとかごめが心配そうにダイチを見ている事に気づく。

「ワケを聞かせて下さい。」



「わかったよ。家の中で話すけど良いか？」

そう言いかごめと犬夜叉そして楓はダイチの言う通り自宅で聞く事にした。

「『魔戒騎士？』」

かごめ達は、知らんと言う表情でダイチを見る。

「俺のいた世界では、森羅万象から出る陰我を入り口にして現れる魔獣ホラー、そいつらは人間に憑依して人間を食う。俺たち魔戒騎士はそのホラーって言う魔獣を狩るのを生業とする連中だ。」

「なるほど確かにこの世界の人間でなさそうさ。ワシらの世界の森羅万象は、陰我などない。陰我と言う言葉は初めて聞くぞ。」

「で？どうしてその魔戒騎士が何していたんだ？」

犬夜叉が質問をしてきた。

「時のホラー・クロノデインを追いかけて負けてこの世界に飛ばされたが正しいな。」

溜息を吐きながらダイチは正直に言う。

「その黒野なんとかに負けたって事はおめえ大したこと無いって事だな。」

「ちよつと！犬夜叉！」

かごめが犬夜叉に注意したそうだがダイチは縦に振った。

「その通りだ。俺は弱い。だからこんな結果になったんだ。」

何をやっても結果が出なければ何も出来ない問題だと弱さを認めるしかなかった。

「ところどころかごめ。現代の人間が戦国時代に何故居るんだ？」

かごめの話だと現代で普通の女子中学生をやっていたが実家の神社の古い井戸から妖怪が出て無理矢理この時代にやって来た。

自分の体内に四魂の玉が隠されていておりその妖怪たちが四魂の玉を狙っており玉を盗んだ妖怪に矢を射つたら四魂の玉が砕け散った。

其処にいる半妖の犬夜叉は本物の妖怪になりたい為に50年前、四魂の玉を盗んだが桔梗と言う巫女に封印されており桔梗の生まれ変わりのかごめが封印を解いて目覚めたらしい。

そして犬夜叉とかごめは砕け散った四魂の玉を集めなければならなくなったと言う流れだった。

さらに身体を川で洗いたかったかごめが楓の自宅から出ると突然空間に亀裂が出来て気絶したダイチと魔戒斧と戯牙の鎧と武器が周りに都合良く落ちてダイチは手当てしてもらったという事だ。

「悪いんだけど川で洗いに私行きたいの。」

「ああ、悪かった。俺は近くを散歩しているから。(まあ・・・元の世界よりもこつちの方が楽しそうだしな・・・気楽なもんだなあ元老院がないと。)」

ダイチは、楓の自宅を後にした。

「も〜っ！信じられないっ！！冷たい！お風呂が無いなんて！」

服を脱いだかごめは冷たい川に身体を沈めた。

「かごめ。無理をせずにながって来い。」

川辺で焚き火を焚いている楓が座っている。

「嫌だ！血だらけだしドロドロだし、こんなベタベタな髪もう我慢出来ない！」

と言い頭も全て川の中に潜るかごめ。

楓も溜息をする。

その近くの木に犬夜叉が座って四魂の玉の一部に狙いを定めている。

「エレメントの反応もなしで俺の腕輪も反応なしか本当にホラーはいないのか・・・ん？」

ダイチはホラーが現れるゲートが存在が無いことを確認しながらブラブラ散歩して

いると焚き火を焚いている楓に出会う。

「楓婆さん。かごめはアソコか？」

コクン！

頷くとダイチは川が見えない方向に身体を向けたセクハラになりたく無いからだ。

「あれ？」

犬夜叉が木の上から何時でも狙っていると言わんばかりで構えているとダイチは野

球玉位の石を片手に持つと怪我しない程度に犬夜叉目掛けて投げた。

「ゴーンッ！」

「てっ！うわっ！」

突然の石が投げられてた事に痛いと言うよりも驚いた表情で此方を見ようとたがバラスを崩し木の下に落ちそうになる。

すると派手な音は聞こえない事から無事に着地したと推測する。

「きゃー！ー！！！」

「!?」

かごめの悲鳴で楓とダイチも驚く。

「おすわりっ！」

ドシーンッ！

すぐに犬夜叉の首につけている数珠、言霊の念珠が光り輝くと犬夜叉は地面にめり込んだ。

「おや？いたのか犬夜叉。」

「現代なら警察に捕まるぞ、おい。」

楓は犬夜叉を確認してダイチに至っては呆れ顔だった。

「クッソ！言霊の念珠の事を忘れてたぜ。」

言霊の念珠を掴む犬夜叉。

「いやらしいわね！こそこそ覗いたりして！」

葉がボウボウに生えてるところで着替えるかごめ。

「はあっ!?けっ！馬鹿かお前は俺はただなあ。」

「これか？」

楓からダイチは四魂の玉を貸してもらい犬夜叉に見せた。

「けっ！わかつているじゃねえか！」

「はあくくっ・・・全く先が思いやられる事だ。四魂の玉を見極めるかごめの目と犬夜叉お前の力を合わせねばとても全部集める事は叶わぬ。」

楓の説教が始まると鬱陶しそうな顔で楓とダイチの方を見る。

「だから、玉の為にそのいけ好かない女と組んでやるつってんだろ！」

「あんた、そっんなにあたしの事嫌いなんだ！」

巫女装束のかごめがやって来た。

「.....」

似合いすぎて声が出ないダイチ。

だが犬夜叉もそうだがダイチとは違う意味で黙り込んだ。

(桔梗.....)

それは、犬夜叉にとって懐かしいような愛しい様な複雑な感じにダイチは察した。

かごめは洗った制服を焚き火に当てて乾かしているとうっとうつと言っている犬夜叉がかごめを見ている。

「おいおい、どうしたんだ？」

「何て顔しとんるじゃ犬夜叉。」

焚き火に当たっているダイチと楓が犬夜叉を見る。

すると村の方から女性が訪ねて来た。

「あの・・・楓様。」

「ん？」

声が出した方に楓は向いた。

「あの・・・うちの娘が・・・」

女性の話を楓は聞き始める。

「そうか・・・いや直ぐに行く。ワシは先に戻るでな。ケンカするなよ。」

楓が村の方に向かうと女性はお辞儀して楓の後に続いて村に向かう。

そしてこの場が三人だけになると犬夜叉がかごめの方を見ていた。

「おい。」

「何よっ。」

「？」

犬夜叉がかごめを見るとダイチも二人の様子を伺う。

「脱ぎな。」

「ゴキーン!!ゴーンツ!!」

ダイチの拳が犬夜叉の頭に当たるとかごめも自分で持てる重い石を力強く当てた。

「て……てめえら何を!」

「馬鹿だろ!」

「いやらしい!」

「裸になれって言ってるんじゃネエツ!あの変な着物着れって言ってるんだ!!」

犬夜叉は、かごめの制服を指差した。

「巫女装束を着たかごめを見てどうした?」

ダイチはかごめを見ると続けて言う。

「桔梗に似ているから?」

「そんなに似てるのか桔梗って言う女に?」

ダイチが考えていると犬夜叉は気まずそうな顔になると

「へっ!関係ねえだろ!」

子供の様な態度を取る。

(全くこいつ中学生以下ね。)

(先が思いやられるが悪い奴じゃないな・・・)

かごめは呆れてダイチは面白そうに見る。

「とにかくね。そんな喧嘩腰とてもこれから一緒になんか・・・」

「だったら良いんだぜ。俺は一人でも行く。」

爆弾発言を犬夜叉は言う。

「おいおい！そんな言い方じゃあ「あつ！そう！あたしがいなくても大丈夫なのね。」ってかごめも落ち着けよ！」

かごめは半乾きの制服を持ち畳みはじめる。

「ん？何処に行くんだよ？」

「決心がついた。あたし帰るわ。さようなら犬夜叉。ありがとうダイチさん。」

「か！か！帰るっておい！」

「おいじゃない！私がかごめ。おい何て名前じゃあないわ。」

「まてよ！コラッ！」

「コラッ！でも無いわよ。」

「待てっておいこら!!」



「何よ!? 止めたって無駄よ!」

「玉の欠片持つてるんだろ? 置いてけ。」

犬夜叉は手を出してかごめめに四魂の玉の欠片を要求する。

(なんか嫌な予感がするな……)

ダイチは、犬夜叉から少し距離をとった。

「ああ、これね。……おすわりっ!」

ドシーン!!!

「て……てめえ……」

「おわづげよ。(もう信じられない! 犬夜叉なんて一度も私の名前呼んだこと無いんだから。)」

かごめは村とは別の方に行った。

「自業自得だな。全くこりゃ……」

またまた呆れるダイチ。

かごめは古い井戸の辺りにいた。

「(あたしの出てきた枯井戸。きつと此処から向こうに戻れる。) あっ!」

井戸の中を見ると妖怪の骸が残っている。

かごめは楓の言葉を思い出す。

《あれは骨喰いの井戸と言ってね妖怪の亡骸の捨て場なんだよ。何日か経つと何処かに消えてしまう。》

「やだ・・・入れなくなっちゃった・・・どうしよう。」

楓の言葉を思い出すと足に力が入らなくなり迷い始めるかごめ。

ユラツ

パラツ！

木の若葉が下に落ちると綺麗に真つ二つになる。

「っ！」

立ち上がると何かに当たり頬から血が少し滲む。

「これは髪!?」

よく見ると髪の毛が辺り一面に張り巡らされている。

「フウ〜ン! あんた見えるんだ。あたしの櫛の籠。」

真上にはくノ一の様な格好の女が髪の毛に乗ってかごめを見下ろしていた。

「でも、みえるだけじゃだめ。」

不敵に笑うくノ一女。

一方犬夜叉は、走りながら森の中を飛び回り村の方に向かっていた。

「おーい! 犬夜叉だっけ? 何処に行くんだよ!」

ダイチも犬夜叉同様に走りながら犬夜叉の後ろを飛び回って追いかけるが犬夜叉はダイチの声なんか聞いていない。

《あたし帰るわ。さようなら犬夜叉。ありがとうダイチさん。》

(けっ！あんな女いない方がせいせいする。)

そのまま村に降りる犬夜叉。

(かなりキツイ過去持っているな?)

ダイチは、そのまま森の中を飛ばずに走って追う事にした。

「ん?」

先に村に降りた犬夜叉は、宙に浮く女達を確認すると止まった。

「なんだ?てめえら?」

すると女達が鎌を待ち構える。

「へっ!おもしろー!俺と遣り合おうつてのか!」

その宙に浮く女達の身体にはくノ一女が操る髪の糸で繋がっていた。

その頭骨喰いの井戸では・・・

「私は逆髪の結羅。覚えなくても良いよ。アンタ終わりだから。」

結羅は髪のを使いかごめの持っている四魂の玉の欠片を探す。

「四魂の玉貰うわよ。」

「あっ！」

髪のかごめが持っている四魂の玉の欠片の入った袋を奪われる。

「まあっ！四魂の玉をこんなにしちやっ。残りの破片は何処？」

下のかごめに聞く。

「返してよ！」

「質問に答えなさい。残りの破片は何処!？」

「しっ！知らないわよ！」

「そう・・・」

結羅の近くに髪のかごめを使って刀が来て結羅が持つと。

「じゃあ！もう死んで良いよ!!」

結羅は急降下でかごめに向かって刀を振り下ろした。

「！」

かごめは無我夢中で避けるとそのタイミングで井戸の中に落ちてしまった。

「逃げたってダメ!!」

ヒュッ！

刀を井戸の方に投げる。

「？」

結羅は手応えない事に気付く。

髪の糸を使つて刀を戻すがかごめの姿はない。

「いない？なんだあの女？」

結羅は、その場を去つた。

その頃犬夜叉は、宙に浮く女達との戦いになろうとしていたがある事に気付く。

「？なんでえ村の娘達じゃねえか。何のつもりだ？今更俺を退治しようつてのか？だつたら容赦しねえぜ。」

犬夜叉は、指を鳴らす。

すると声が聞こえる。

「待て！犬夜叉！」

「ん？」

犬夜叉は、声のする方に行くと肩に血を流す楓が倒れながらを見る。

「娘達を傷付けてはならん！」

「楓ババア！」

犬夜叉は楓を確認すると飛び跳ねてくる。

「あつ！楓婆さん！犬夜叉！」

ダイチも楓の後ろからやって来た。

「何やってるんだ血だらけで？」

「大丈夫かぐらい言えよ怪我人みたいだしよ。」

「そうじゃ。他に言い方ないのか？」

顔を引きづる楓とダイチ。

「こいつらを傷付けるなだつて!?俺を狙っているんだぞ。」

「何者かに操られているだけ。はっ！かごめは！かごめはおらんのか？」

「あの女なら国に帰っちまったよ。」

「一応説得したんだけどな。」

頭を掻くダイチ。

「何こんな奴ら俺だけで退治してやら。」

「い！い！い！い！娘達に手出しするでない！」

「何綺麗事、抜かしてやがるんだ？てめえこいつらに殺されかかったんだろ？」

「違うだろ、婆さんが言いたいのは影で操っている奴を倒せって言ってるんだよ。」

「そうじゃダイチの言う通りじゃ。」

すると娘達が一齐にダイチと犬夜叉に襲いかかる。

「そんな悠長な事言つてられっか！」

ダイチと犬夜叉は軽々と娘達の攻撃を避けまくる。

「ならば犬夜叉！ダイチ！髪を！娘達に付いた髪を断ち切れ！」

「髪だと？」

ダイチは、見ると娘達の周りに付いた髪を確認する。

「あれか!？」

ダイチは魔戒斧で髪を断ち切ると娘達の一部が動かなくなる。

「髪!? そんなモン見えねえ！」

どうやら犬夜叉には見えないらしい。

その髪の糸を操っている結羅は木の上で娘達を操作していた。

「こつちの獲物はきつちり手に入れなくっちゃね。」

結羅は指であや取りする様に髪の糸を操る。

「テリヤアアアっ!!」

犬夜叉は娘達の一人を掴もうとするが素早く真上には飛ぶと他の娘達も続いて飛ぶ。

「!」

ダイチは髪の糸がわかるので直ぐに糸のない楓の所に飛ぶ。

「いかん！犬夜叉！」

犬夜叉は髪の毛の糸が複雑に絡み合い動けない状態だった。

「しゃーねーなっ！」

ブンっ!!!

ダイチは犬夜叉に絡んだ糸をブーメラン投げして全て断ち切る。

ガシッ!

ダイチは見事に魔戒斧を掴む。

ユルッ・・・

木の上で操っていた結羅は糸が急に緩くなったのを直ぐに自覚した。

「この感触、肉は切れてない。」

不快な顔で睨んでいた。

「はあっ!はあっ!はあっ!しっ!死ぬかと思っただぜ。」

「いや、普通の人間なら死んでるぞ。」

「全くじゃ。」

落ち着きながら突っ込む楓とダイチ。

ガチャ!

「!?!」

今度は村の男達も操られていた。



「この場合は引いた方がいいな。キリがない！」

「ああ、らちがあかねえ。」

ダイチと犬夜叉は意見があつた、

「い、い犬夜叉！ダイチ！此処はワシに任せてお！お！お前達は逃げる！」

「死に損ないがカツコつけるな楓ババア！」

ドタツ！

楓が倒れた！

「おい！楓婆さん!!」

「ちっ！仕方ねえな！」

犬夜叉は、楓を背中に担ぎ走り去るとダイチも続いて走り去る。

結羅は、ダイチが切つた髪の毛を回収していると何かに気付く。

「ん？綺麗な銀色の髪。」

恐ろしく微笑む。

一方犬夜叉は、楓を担ぎ森の中を飛び跳ねていた。

「捕まっている楓ババア！」

「き！気を付けろ犬夜叉！髪が！」

楓には髪が張り巡らせている事を眼力でわかるのだ。

「わっ！」

楓に髪が当たりそうになると。

シュツ！

犬夜叉の後を追いかけてきたダイチが直ぐに魔戒斧が断ち切る。

それ以外は、犬夜叉に当たっても頑丈な身体だったので痛みも傷もない。

「大丈夫！大丈夫！当たりそうになったら俺が切るし余裕だから。」

「そ……そうか……お主本当に人間か？」

ダイチが犬夜叉と同じくらいの身体力で驚きを隠せない楓。

遠くでは結羅が犬夜叉の髪を見て楽しい顔で犬夜叉の方に向かう。

「頑丈な奴。面白い。それにこの銀色の髪。フッフー！絶対に欲しいわ。」

結羅は楽しみがどうやら増えたらしい。

夕暮れになり深い山奥に楓を寝かせた。

「ババア。てめえ髪が見えると言っていたな。」

犬夜叉の質問に楓は頷く。

「髪の前にいる親玉の居場所を教えろ。」

「無茶言うな。ワシはこの有様だしそうでなくてもワシ程度の眼力では。」

「同感だな。俺も髪を見るだけで精一杯だ。」

ダイチは、溜息を吐きながら答える。

「かごめを・・・」

「あいつなら見えるのか?」

「マジかよ?」

「今度の相手はかごめが・・・かごめがいなければ・・・勝てぬ・・・」

そして楓は静かになる。

(婆さん・・・安らにご冥福を。)

何故か手を合わせるダイチ。

その頃のかごめは。

「ん・・・ん。」

真つ暗な空間で目を覚ます。

「い・・・此処は・・・」

周りを確認すると骨喰の井戸中だった。

「そうだ。あたし、女の子に襲われて井戸の中に。」

???

「この井戸の中は何度も見たじゃないか。」

井戸の上から聞き覚えある声が聞こえてくる。

???

「だって本当に姉ちゃんはこの中に入って行ったんだって。」

上からライトが見える。

「夢でも見てるんじゃないのか？」

「だって本当だってば！」

上にいたのはかごめの弟の草太と祖父だった。

「じーじーちゃん！草太！」

ライトを下に向けると巫女装束のかごめを祖父と草太は確認すると直ぐに登れる物を出してかごめを救出した。

「……」

かごめは、巫女装束のまま外をずっと見渡していた。

（戻って来た。私の時代。）

「か、かごめ。お前三日間も何処に。心配したんだぞ。」

「ね、姉ちゃん。どうしたのその格好？」

草太と祖父も驚いている。

（夢じゃない。帰って来た。）

ポロッ

目から涙を流すかごめは祖父の元に駆け寄る。

「じーちゃん!!怖かったよ〜っつ!!」

かごめは祖父にそのまま泣きつく。

「かごめいったい何が!?!」

祖父も動揺していた。

犬夜叉達はと言うと。

「犬夜叉!このぐらい深ければ良いか?」

「ああ、そんなもんだろ?」

二人で地面に穴を掘っていた。

「楓婆さん。安らかに眠ってくれ。」

「此処に埋めてつてやるぜ。」

犬夜叉とダイチは、楓に土をかける。

「おい・・ワシヤまだ生きとるぞ。」

「そうだったの?もうあの世にいるのかとおもった。」

「勝手に殺すな。」

ダイチの言葉に冷や汗をかく。

「此処に隠れてろつて言ってるんだ。忘れてなければ後で掘り起こしてやら。」

「本当だな？断じて忘れるなよ。」

「大丈夫だつて俺も居るから。」

楓はその時この二人に不安を覚える。

そして二人が行こうとすると。

「忘れるなよ犬夜叉！ダイチ！」

念押しする楓。

「あゝ！わかつた！わかつた！」

「冗談抜きに覚えてるよ！」

そして本当に行く二人。

犬夜叉とダイチは素早く森の中かごめを探す。

「畜生、あの女！こんな時に何処で何をしてやがる。」

「風呂に入っていたりして？」

ダイチは適当に言うが間違いじゃない。

「あゝ幸せ。」

かごめは自宅でお風呂を満喫していた。

ダイチと犬夜叉は全ての神経を使いかごめを走り探す。

「!？」

ダイチは真後ろから髪が来ているのを瞬時にわかった。

「フッフ、何処に逃げようと絶対に逃さないんだから。」

結羅は、直ぐに二人を追いかけろがダイチと犬夜叉は余裕で逃げ切る。

「んん。気持ち良い。」

髪の毛を洗えて幸せなかごめ。

この後どんな展開になんかも知らずに。

## 櫛

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

かごめの実家の日暮神社。

「おじいちゃん。かごめの話は本当なの？」

リビングでかごめの母親と草太と祖父が話している。

「本当だって。中からお化けが出て来てきらって行ったんだ！」

（我が神社に伝わる骨喰いの井戸の井戸の由来。物の怪の亡骸を何処かに消滅せしめる妖しの井戸と言う。）

祖父は、考えると立ち上がる。

（その何処からが時の流れだとすればこうしては、おれん!!）

祖父は、大工道具と木の板を持つと骨喰いの井戸を塞ぎ井戸全体にお札を何枚も貼った。

「これでよしと！ふっふっふっふっふっふっ！」

自信満々の祖父、それは宮司として信じているからだ。



「えっ？封印？」

ドライヤーで髪を乾かしているかごめが祖父の言葉に耳を傾ける。

「うむ。霊験あらたかなお札で封印し結界を張った。二度とあの井戸が開く事はない。」

「ふうくん……」

かごめは、少し向こうの世界が気になっていた。

一方犬夜叉とダイチは、森の中を休む事なく走り続ける。

「間違いねえあの女の匂い。」

犬夜叉は止まるとかごめの匂いを確認した。

「こんなところに？」

周りを見ても骨喰いの井戸以外に物はない。

「あの女の着物。」

犬夜叉が確認するとダイチも確認する。

「つて事は井戸の中か？」

「あいつ本当に逃げ帰りやがったのか？」

犬夜叉とダイチは井戸の中を見る。

「こん中か！」

「よっと！」

二人は、井戸の中に入る。

かごめは自宅の部屋でくつろいでいた。

「はあくく。やっぱり我が家が一番だくく。」

かごめはベッドで休んでいるが井戸に落ちた時からの戦国時代いたなんて嘘の様に思えた。

「あの逆髪の結羅って言ったっけ？何者だったんだろ？やっぱり玉を狙って・・・玉の欠片を奪われた事を犬夜叉に知られたら怒るだろうな。」

《いけ好かないんだよお前は一人でも良いんだぜ。》

「そうよね。犬夜叉は私がいなくなっただって！」

かごめもかなりあの時の言葉に根を持っていた。

パン！

かごめは、両手で一回叩く。

「よし！忘れよう何もかも。もう二度と向こうの世界に行く事はないんだから。」

「かごめ。由加ちゃんから電話よ。それからご飯よ。」

下からかごめの母親の声がする。

「はくいつー！」

かごめは下に向かう。

「ねえ、じいちゃん井戸の封印ってもう開いたりしない？」

リビングで草太が心配そうに祖父に聞く。

「無論だ。ありがたいお札で硬く封印してあるのだ。いかなる妖怪や魔物でも突破不能。だからかごめもワシの霊力を信じて安心するがよい。」

だが

「わ〜〜！おでんだ！おでんだ！おでんだ！おでんだ！おでんだ！おでんだ！おでんだ！」

聞いていなかった事に祖父泣く。

（はあ〜、なんて素晴らしい時代なんだろう。）

かごめは、好物のおでんを見て幸せに思う。

するとかごめの自宅の廊下で二人の足音が聞こえる。

「いったきま〜す！」

夕飯を食べ始めるその時。

トンツ！

リビングの襖が開く音がすると。

ダイチと犬夜叉がいた。

かごめとかごめの家族はダイチと犬夜叉を見た。

「あつ！夜分遅くに申し訳ありません。自分達かごめちゃんの知り合いなんです。よろしく願います。」

「あつ！いえいえ！こちらこそよろしく願います。」

「よろしく願います。」

何故かつられて祖父と母親はダイチに挨拶する。

一方の犬夜叉は。

「てめえ、誰が勝手に帰って良いと聞いた？」

「あんた何処から出てきたのよ？」

「井戸に決まってるだろ!？」

「そう、井戸から。」

「えっ？だつて井戸は!？」

その言葉にかごめは、驚く。

「嘘を言いなさい！あの封印は、我が神社に伝わる由緒正しい」

言い切る前に犬夜叉とダイチがお札を見せる。

「この紙つぺらのことか？効かねえぞ？」

「それじゃ何の役にも立たないよ。おじいちゃん。」

二人はお札をピラピラと祖父に見せる。

ガーン!

祖父は、泣きながらショックを受ける。

「じいちゃん。」

草太も呆れる。

「さあ!とつとと来やがれ!」

犬夜叉は、かごめの腕を掴む。

「ちよつとやだ!」

「犬夜叉!落ち着け!無理矢理はマズイぞ!」

ダイチは、かごめを無理矢理連れて帰ろうとする犬夜叉を止め入る。

「お待ちなさい!」

かごめの母親が来る。

「なんでえ!」

「ママ。」

母親が来て安心する。

が!

モニユツ!モニユツ!モニユツ!

「耳!」

犬夜叉の耳を掴む。

「本物?」

「次僕!」

草太も来るとダイチが抱き上げて母親の後ろに並ぶ。

「よし!じゃあお母さんの次な!」

「次!ワシも!」

ダイチはノリでやっていると祖父までも後ろに並ぶ。

「ママ、そんな事している場合じゃあ。あたしもやったけど・・・」

「んまあ俺もな。」

かごめとダイチも犬夜叉の耳を掴んだ事があるからかごめの家族の気持ちかわかる。

「ん?」

犬夜叉の体に髪の毛が一本見えるのを確認するかごめ。

「犬夜叉、髪の毛。」

「ん?髪の毛だと?」

「あるな。犬夜叉にはそれ見えないらしいぞ。」

かごめは、その髪の毛を掴む。

シユルルッ

掴んだ手から血が出る。

「かごめ！」

「どうしたんじゃ！その血は？」

「お母さん達見えてないな。」

それを確認出来るのは今の所ダイチとかごめだけだった。

「（結羅の操る髪の毛・・・）まさか！」

かごめは、外に出ると骨喰いの井戸の方に向かう。

「!?」

かごめは、井戸を見ると無数の髪の毛が井戸に存在していた。

「髪・・・追ってきている！」

「楓ババアの言った通り目だけは良いらしいな。」

「だな。」

「あんた達！とんでもないもの連れて来てくれたわね！」

そう髪はダイチと犬夜叉を追ってだった。

「かごめ！」

「姉ちゃん！」

外から祖父と草太がやって来た。

「入って来ちゃ駄目！」

骨喰いの井戸へ続く扉を閉めた。

(此処で食い止めなきゃ！)

髪の毛の束が襲い始め正面から襲いかかる。

「犬夜叉！正面!!」

犬夜叉は、かごめの言われた通り切ろうとするが直ぐに髪は避ける。

「たっ！」

ダイチも魔戒斧で自分に襲い来る髪を斬る。

ピクッ!

犬夜叉も耳で髪の音を聞き分けて避けるが直ぐに髪に捕まる。

シュッ!

ズバッ!

犬夜叉が爪でダイチが魔戒斧でそれぞれ髪を切るが髪が未だに無くならない。

「切っても集まってくる。これじゃあキリがない。」

犬夜叉は、髪が見えないので苦戦中。

ダイチも見えるが対抗策をつかめない様子。

「ん?あれは。」



かごめは、一本に伸びた髪の毛を発見した。

「あれだわ。髪を操っている本線。」

かごめは、本線の近くまでやって来る。

「犬夜叉、ダイチさん。この髪を切って！」

「何処だ！」

「すまん！お前達に攻撃する髪を防ぐのに精一杯だ！」

犬夜叉は、本線を見る事もできないしダイチに至ってもかごめや犬夜叉を襲いかかる髪の毛の束から魔戒斧で守るのに精一杯だった。

「犬夜叉には見えない。だったらこれしか！うっ！」

かごめは本線の髪を手で持つと血が出でそれを目印にした。

「見えた！」

シュッ！

犬夜叉の爪が本線を切ると今まで動いていた髪の毛の動きが止まり消えた。

「収まりやがった。」

「おわったな。」

「（おかしいわ。逆髪の結羅の目的が四魂の玉なら目的は果たした筈なのに。ひよつと

してあたし達を狙っている。」犬夜叉、ダイチさん。戻るわよ。」

「ん？やけに物分りが良くなつたじゃねえか。」

「大丈夫なのか？かごめ？」

「本当は嫌なんだけどね。」

「はあっ？」

（このままこつちにいたら。じいちゃんや草太、ママまで酷い目にあう。？）

かごめよ頭に何かが覆いかぶさる。

「火鼠の毛で織った衣だ。下手な鎧より強いぜ。」

「あ、ありがとう。」

犬夜叉の思わぬ行動に驚くかごめ。

「なんか、オメエめちやめちや肌弱そうだからよ。」

「あんたが変なのよ。」

「ははは、やれやれ。」

犬夜叉がかごめに対して思いやりに微笑むダイチ。

「まあ何でも良いや。行くぞ。」

「うん。」

「おう！」

そして三人は、井戸の中に入った。

その頃向こうの世界の結羅は、自分の巢で犬夜叉が来るのを待つ。

「もうそろそろ戻ってくるかな？ 今度はたつぷりとおもてなししなくっちゃ。」

結羅は、赤い鬪體を持ちながら言う。

またまたその頃楓は。

「良いか犬夜叉。かごめは桔梗お姉様の生まれ変わり。しかし、まだ自分にどんな力を授かっているか分かっておらん。お前の手助けが必要なのだ。」

隠れている所で独り言を言う。

「気をつけて。井戸の周りの髪の毛だらけよ。」

井戸から声がする。

井戸から犬夜叉とかごめ、ダイチが次々と出てくる。

「その逆髪の結羅って言うのが俺たちを狙っているって言うのかよ。」

「そうよ。だって四魂の玉の欠片を奪い取ったのにまだ追いかけて来るなんて！」

「えっ！ そうだったのか？」

「えっ!?! って取られたのか!?!」

ダイチと犬夜叉は驚いているが構わず目の前を見るかごめ。

「この中に何本か光る髪が見える。それが本線の髪。だったらその本線の集まる方向に

逆髪の結羅がいる筈。あっち！」

「よっし！」

「おう！」

三人は、行動を始める。

楓も未だに独り言を言い続ける。

「仲違いなどしている場合ではないぞ。お前にはかごめが。かごめにはお前がなのだ。そしてこの困難を二人で乗り越える為に支えてくれダイチ。」

その三人は森の中を走り続けいると焚き火が灯っていた。

「焚き火だ。」

焚き火の周りを見ると首の無い落武者達の亡骸が横たわっている。

「首がない。」

「落武者だ。髪の毛の罨に引っかかったな。」

「運が無い連中だな。」

犬夜叉は、かごめが何かを確認すると気になり始めた。

「何へたり込んでいるんだよ。腰が抜けたなんて言うんじゃないやねえだろうな。」

そう言うかごめは、目の前に弓と矢を確認して持った。

「これ……借りてこうと思って。（早く結羅を倒さないと。関係の無い人が沢山死ぬ。）」

それから更に奥を目指す三人。

「弓矢なぞ持つていたつてどうせ役に立たないだろうが！」

「練習すれば！」

「練習？したのか？」

「したの？」

かごめを乗せた犬夜叉とダイチは木に乗るとかごめに聞く。

「これから！絶対に上手になつて見せる。」

（この女、頼りねえけど根性いるじゃねえか。）

（良い心がけしているな。）

二人はかごめに感心する。

「本線が集中している。近いわ。」

シュルルルツ！

バツカッ！

髪の毛が木を軽く切断する。

犬夜叉とダイチは、直ぐに避けるが次々と髪のが襲つて来る。

シュルルルツ！

髪束が犬夜叉の片手を掴むと他の髪束も反対の片手と両足を掴む。

「犬夜叉!」

「ちっ!」

かごめは、犬夜叉を心配しダイチも同様に心配すると魔戒斧を取り出す。

犬夜叉の捕まった近くには髪の毛の玉が存在した。

「髪の毛の玉? 結羅の隠れ家?」

そして隠れ家からその結羅が出て来た。

「あら? 見事な獲物が引つかかった。」

「くっ!」

犬夜叉は髪を引きちぎろうとしだが全く千切れない。

「あなた犬夜叉ね。」

「逆髪の毛の結羅か? どうして俺を知っている?」

「風の噂で聞いたのよ。犬夜叉っていう半妖が生まれ変わりの巫女の手下になって四魂の玉を守っているってね。」

「はあ? 俺があのマヌケ女の手下だと? 跌坐せるな!」

「そう・・・マヌケよね二人とも。四魂の玉をこんなにしちやっただから。」

結羅は、四魂の玉の欠片を見せる。

「あれは昼間かごめが持っていたヤツか?」

「あたしから奪った四魂の玉の欠片。」

ダイチとかごめも結羅が持っている四魂の玉の欠片を見る。

「ともかくあなた達を始末してそれからからゆつくりとこれを集めようと思つてね。」

「へっ！俺を始末するだど？お前こそ俺の目の前にノコノコ現れた事を後悔させてやるぜ！」

犬夜叉は、髪束を力一杯に引きちぎると結羅に向かつて攻撃するが結羅は簡単に避ける。

結羅は赤い櫛を使って髪を犬夜叉に襲わせる。

「何度も同じ目に……うわあああああつ！」

先程よりもたくさん髪束がまた犬夜叉を捕まえる。

「うっ、鬱陶しい！」

そうしている間に結羅が後ろにやってくる。

「綺麗な銀色の……あら？ちゃんと手入れしていないわね。枝毛がこんなに。」

「うるせえ！」

犬夜叉も負けずと攻撃するが結羅は直ぐに避けて真下に落ちて下の髪糸を使って再び真上に上がってくる。

ズバツ！

「ぐあっ！」

結羅は刀を持つと犬夜叉を切る。

「犬夜叉！」

「かごめ、手伝ってくれるか？」

「え？」

かごめはダイチに何かを作戰があるのかと思つて聞いた。

「くっ・・・」

「このままなます切りにしてあげるわ。」

刀に付いた犬夜叉の血を舐める結羅。

そのまま刀を犬夜叉に向かつて斬りこもうとしたとの時！

ヒュウツ！

結羅の目の前に矢が横切った。

結羅は、後ろに下がると下でかごめが弓矢を構えていた。

「犬夜叉を離しなさい！そうしなきて今度はちゃんと狙うわよ！」

かごめは、弓矢を結羅に向ける。

「井戸に消えた女？」

「さあ！早く！」



かごめは、睨む、

「犬夜叉を離してだつて？ 仲が良いのねお二人さん。」

「馬鹿野郎！ 俺に構わず隠れていろつて言つてるんだ！」

「大した髪じゃないけどあの子のも貫とこうかな？ どうしようかな？」

結羅は、かごめには興味が無かつた。

「大した髪じゃないですつて！？ これでも毎日トリートメントしてんだからね！ 失礼な事  
言わないでよ！ あつ！」

かごめは、弓を放つたが間違えて犬夜叉に当たりそうになる。

「どこ狙つてやがるんだ！ このド下手！」

犬夜叉を通り越して結羅の巢に矢が当たると当たった部分が光出し巢の中から無数の  
の髑髏が出て来た。

「はっ！」

かごめも驚く。

「酷い！ あたしの獲物が!？」

「さつきの落武者共の髑髏か？」

「あんたの髑髏も直ぐにあの中に入れてあげる。でもその前に。」

結羅は、櫛を持つとかごめに狙いを定める。

「そのの女。あんたの怖いから死んで！」

炎が髪に移ったその瞬間。

ブンブンブン！

回転する何かが結羅がかごめに向かって放った炎を斬って行く。

「!？」

「よそ見し過ぎだろ？」

「いつの間にか!？」

結羅は、背後を振り向くと別の髪の毛の上に乗っているダイチが先程まで回転していた魔戒斧を手に戻して気配も無く真後ろに立っていた。

「いや〜、本線を利用して此処まで来るのは大変だったな。結構バランス感覚が必要で。魔法衣の頑丈な特性はあるな。」

そう言いながらも余裕の表情のダイチの革靴は魔法衣で出来た靴だったのでそう簡単には壊れる品物でない。

ダイチは、自分が結羅の近くに行くまでの間かごめには逃げられる範囲の圏を使った揺動作戦を行っていた。

「ハのー」

結羅が刀をダイチに向けると犬夜叉は、自らの爪を身体に刺し血を爪に付ける。

「くらえ！血刃鉄爪！」

結羅の背後から血の刃が結羅を襲う。

(血の刃!?)

もうすでに遅く刀の持っている片手は、血の刃で落ちた。

「髪が緩んだ。」

ブンブンブン！

その隙に犬夜叉の捕まえていた髪の毛の束を魔戒斧で全て投げ切るダイチ。

「あたしの手……」

「これで髪も操れないだろう！ええ！」

「あんた達、女には優しくするものよ。みんなに笑われてもしらないんだから。」

巣から落ちてきている鬮髑達が笑う。

「悪いが俺お前を女と思っていないから。」

平然と言い返すダイチ。

「うっ！」

犬夜叉の背後に刀を持っている結羅の片手が髪の毛を使って犬夜叉を刺した。

その刀を持っている片手も結羅の元に来ると髪の毛が集まり直ぐに繋がる。

「犬夜叉！」

流石の光景にダイチも声をあげる。

「ふっ、やっぱり半妖は、半人前か。」

ブチッ

その言葉を聞いてダイチの表情が何時もの落ち着いた表情から羅刹の様な顔付きに変わる。

「……てめえ今、俺の仲間を馬鹿にしやがったな？」

次の瞬間革靴の裏が結羅の顔に重く見えない早さで蹴りを入れる。

「……………」

驚きを隠せない犬夜叉とかごめ。

首がへし折られるが髪の毛で直ぐに再生する結羅。

「何すんのよ！あたしの顔に！」

「ああ！何だコラア!!」

ダイチは、既にボルテージが上がっている。

(こ、こいつ平気なのか？結羅の急所は？)

犬夜叉は、冷静に弱点を探す。

「！」

結羅は、櫛が何かに引つ張られるのを感じ振り向くとかごめが巣だった所を登り始め

ている。

「あの女！」

結羅は、櫛を操ると巢が動き始める。

「何余所見してやがる！」

落ちている結羅の刀を手にすると結羅に切る。

だが直ぐに髪の毛で再生する。

「うるさいよ！」

結羅は、犬夜叉を縛るがダイチに至っては見えるので何の役にも立たない。

「斬っても殴ってもヘラヘラしていたお前が妙に焦っているじゃねえか。」

「彼処に嫌な物でもあるんか？」

犬夜叉とキレ気味のダイチは、結羅の行動を直ぐに悟る。

向こうに弱点がある事を。

「犬夜叉！ダイチさん！赤い髑髏に何かある！」

「赤い髑髏？」

「くっ！」

結羅は、かごめの方に飛ぶ。

「逃がしやしねえ！」

「待ちやがれ!!」

犬夜叉とダイチは、そのまま追いかける。

「櫛の檻!」

櫛で巣を変化させるとかごめは、落ちない様にしがみついていた。

「ひい!!」

流石に髪の中に髑髏が沢山あればビビるのが通常。

「そんなに嫌ならお離し!」

結羅は、かごめに向かって刀を投げた。

が! 全くの無傷だったがかごめは髪の本に捕まる。

「あんたなんで傷つかないの!?!」

(なんで斬られたのに無事なの?)

するとある事を思い出した。

《火鼠の衣だ。下手な鎧より強いぜ。》

「犬夜叉・・・」

気付くと結羅が近づいてかごめの周りを確認する。

「身体は、普通の人間にしか見えないけど。でもこれでどうかな?」

結羅は、かごめの首に髪の本で締め付けようとした。

「うっ！」

かごめは、苦しみ始める。

「血刃血爪！」

そう叫ぶと結羅の背中に血の刃の雨が降る。

ピシッ！

ユル

「い・・・犬夜叉・・・」

間一髪なかごめ。

さっきの攻撃で巣が完全な崩壊が始まる。

「気絶すんなよ！面倒見切れねえからな！」

犬夜叉はかごめを抱きかかえてダイチと共に着地する。

「犬夜叉！危ない！」

ドス！

「ぐあっ!!」

刀が犬夜叉に貫く。

「あたしは不死身なのよ！っ！」

結羅が攻撃しようとした時かごめが矢の刃で赤い髑髏を壊そうとしていた。

「これだわ！この赤い髑髏から出ている髪が結羅の手につなかつている。」

かごめは結羅の弱点を見つけ出す。

「あの女！殺してやる！」

刀をかごめに切ろうとした時！

シュツ！

ダイチは魔戒斧が刀の繋がる糸を断ち切った。

「かごめ！俺が時間を稼ぐ！早く壊せ！」

「はい！」

かごめは、壊す作業をする。

「お仕置きの時間だ！」

「身体を髪で引きちぎってくれる！」

ダイチの周りに無数の髪の毛をが絡もうとしたその時！

素早く魔戒斧で円を描き召喚の光が現れるが髪の毛が既に絡まり肌を切ろうとしていたが衝撃波が襲い髪の毛が全て消し飛んだ。

そして深緑色の重い鎧にそれに似合うハルバード獣身斧を持ち現れたのは獣身騎士

戯牙だ。

「そんな鈍鎧！鬼火で焼いてくれる！」



櫛から炎が出るが戯牙は全く平然としてそのまま鉤爪の付いた左手で衝撃波を放つと結羅はかごめからかなり離れた距離まで伸びた。

「くっ！」

結羅は、諦めずにかごめの方に行くが直ぐに戯牙に足でも手でも何度でも掴まされると衝撃波で再び離れた距離まで戻る。

ガシッ！

片手で結羅の頭を握るとクルクル周りに地面に叩きつける。

ドシーン!!!

「・・・・・・・・」

その無茶苦茶な戦い方にかごめと犬夜叉は驚く事だけだった。

「あたしの顔を！・・・・・・・・！」

結羅は、動こうとしたが途端に動けなくなる・・・・いや正確には動けないが正しい。

『動いてみるよ！』

その威圧感、昼間かごめ達に見せた鎧とは全くの別物そう猛獣そのものの視線だった。

「はあっ！」

パキッ!

かごめの矢が赤い髑髏に輝を入れると直ぐに光が出して中であつた櫛も割れた。  
「!」

結羅は、煙と変わり消えた。

戯牙もそれを確認すると解除してダイチに戻る。

「はあっ!はあっ!はあっ!」

かごめは、赤い髑髏の中にあつた櫛を手を持った。

「それが逆髪の正体か。」

犬夜叉は、確認した。

「この赤い櫛?」

「こんなんがか?」

かごめとダイチも驚く。

「ああ、それりや人が死んだ時に使う死化粧の櫛だ。きつと死人の髪をとかすのにウンザリした櫛が化けて出たんだろうさ。この時代櫛の一本や二本化けてもおおかしくねえ。うっ!」

先程結羅に刺された傷をおさえる犬夜叉。

「おい!大丈夫か!」

「犬夜叉……あんた酷い怪我。あたしに火鼠の衣を貸してくれたから？」

ダイチとかごめは、心配そうに見つめる。

「大した事はねえ。それより四魂の玉は！」

かごめは、探すと結羅の着ていた服の近くに四魂の欠片の入った袋を手にして四魂の欠片を出す。

「これを集めるのにあとの位かかるんだろう。」

「先が長そうだな。」

「行くぞかごめ、ダイチ。」

犬夜叉がかごめとダイチの名前を呼んだ。

「「え？」」

二人も驚く。

「なんでえ？」

「初めてあたしの名前を呼んだ。」

「俺も！」

「それがどうした？」

「少しは仲良くする気になったんじゃないの？」

「けっ！調子に乗るな。誰がお前みたいなグズな女と。」

「何よ！あたしのおかげでたすかったんでしょ!？」

トン！

「うっ！」

犬夜叉は、傷をおさえる。

「元気で何よりだ!!」

ドーン！

かごめの倍くらい犬夜叉に叩くダイチ。

「~~~~~!!」

流石に蹲る犬夜叉。

「ちよつと犬夜叉大丈夫!？」

「ワリイ！つい嬉しくて力入った!!!」

ゴンツ！

「うるせえ！」

犬夜叉は、力一杯ダイチの頭を叩き頭をおさえるダイチ。

その頃楓は

「犬夜叉よ……二人力合わせ戦うのだ。そしてワシを埋めた事を思い出すのだ！ヒエツ、ヒエツクシューン!!」

その後楓は、ダイチが来るまでに風邪を引いたらしい。

ダイチ

この物語の影の主人公であり獣身騎士戯牙の称号を持つ28歳の男。

CV：竹本英史

性格

極めていい加減かつマイペースで厳格な秋月ダイゴと正反対の不良魔戒騎士。

普段から喋りが多く卑屈を言う事から他の魔戒騎士や元老院の神官達からも嫌われているが結果を出したりしているのでギリギリのラインで元老院に入られ称号を持つ騎士でいられる模様。例え相手がチンピラでも山賊でもこの人は時と場合によるが腕っ節で倒す事が多く魔戒斧もたまたま使う事もある完全な不良で絶影騎士とは違う。

特に白夜騎士とは犬猿の仲。

自分の事を馬鹿にされるのは平気だが仲間や祖父のコウヤを侮辱した際には鬼の様に怖くなる。

それ以外の魔戒法師などと組むのが多いので魔戒法師からの絶大な人望を持っており組んだ者たちはやる時はやる男と言われる。

モデルは、らんま1/2の真之介。

## 母親

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

満月の夜に男が月を見ていた。

その男は武士のような着物を着て右肩にはモコモコの毛を背負っていた。

その近くでは岩で積まれた墓らしい建物が存在してその手前から女と翁の顔が付いた杖がやって来ていた。

「おお！これは！」

やって来たのは茶色の着物を着た全身緑色の小柄の妖怪がその建物を確認した。

「殺生丸様！殺生丸様！」

小柄の妖怪がその名を呼ぶと先ほどの男であった。

「此処か？」

「はい！」

殺生丸にそう答える小柄の妖怪は、邪見と言う妖怪である。

「この杖は此方の方角を示しておりました。そしてこの墓に辿り着きました。直ぐに調

べまする。」

邪見は、墓の方に向かうと無数の狼の群れが現れた。

「げげ！何故獣めが墓守を？殺生丸様！やはり此処です！此処に間違いありません！」

殺生丸が来ると邪見は、彼の背後に隠れた。

狼達は、直ぐに殺生丸に威嚇を始めると殺生丸は狼の牙を見る。

狼達が襲いかかり右手から光る鞭のようなものが出るとクルクル回り始める。

そして一瞬で狼達を血肉の塊と化した。

「邪見。人頭杖を。」

「はい！ただいま！」

邪見は、岩の建物に乗ると人頭杖を置いた。

すると女の顔が鳴き始めた。

「なんと女の面が鳴きましてございます。ここはお探しの墓ではないと言う事でございませうか？ああ！殺生丸様！お待ちください！」

邪見は、直ぐに行つてしまった殺生丸の後を追う。

殺生丸の攻撃から逃げた何匹かの狼達は何処かに向かつていた。

「ふうふうつ、危ない、危ない、何奴だ彼奴は。急いでくれこの事を伝えねばならんのだ。じゃ犬夜叉様に。」

狼の毛に入っているノミが狼達に命じた。

シュツ！

クルツ！

ダン！ダーンツツ！

月夜の下で己の力の更に磨く為にダイチは、木々を飛び魔戒斧を器用に使うのと同時に祖父コウヤから叩き込まれた喧嘩殺法の体術を使い鍛えていた。

「しかし、身体に異常もない。だが……」

ダイチは、楓が言った事を思い出していた。

《何の修行もしないで結羅の髪の毛が見えるなどと考えられん。ワシとて眼力を身につくのにそれなりの時間と修行を費やした。桔梗お姉様の生まれ変わりのかごめはともかく。お主、靈力に目覚めたのでないか？》

「……」

やはりこの異世界に来た事による突然変異が徐々に起こっていると確信しているダイチ。

「？焼ける臭い？人間の焼かれる臭いだ!!」

人間のダイチでも嫌なぐらいわかる臭いに気付くと臭いの方に向かう。

「ふん、跡形もないわこの愚か者共め。逆らわねば皆殺しに会うことも無いのに。殺生



丸様の行く所武将共の勢力図がコロコロ変わってしまいうわい。「変わった杖持っているな。」ん?」

いつの間にかダイチが邪見の真後ろにいた。

「何じゃ貴様は!!」

邪見も驚き直ぐに人頭杖を構える。

「そんなオモチャで俺とやるのかい?」

「小賢しい!くらえ!」

人頭杖から火が出る。

ダイチの正面から火が来るとこの場で消滅した。

「フツ。他愛もない。「おーい!だから余裕なだけど?」な!!」

ダイチは、人頭杖の上に立って邪見を見下していた。

「?」

ダイチは、殺生丸を見るとその殺生丸もダイチを見る。

そうこの瞬間から二人は臨戦態勢に入っていた。

ダイチにはわかる、ヤツの殺生丸の身体から凄まじいエネルギーが覆っている事に。

殺生丸もダイチが先程殺した人間の武将と比べ物にならない程の歴戦の猛者の雰囲気。

気を。

ヒュツ・・・

木の葉が落ちると同時に二人は目にも見えない速さでぶつかり合う。

殺生丸が右手から光る鞭を出すとダイチと魔戒斧で鞭を弾く。

直ぐに殺生丸の右手を真下から掌底打ちを打ち込むが殺生丸の左手から異様な匂いが発しているので左足で向かって来る殺生丸の左手を受け流し両者間合いを取りしばらく動けない、いや・・・正確には隙が全く無いからの方が正解かもしれない。

(何じゃあの人間は!? 殺生丸様と互角に渡っている!?)

邪見ですらも両者の白熱した戦いに動けないでいた。

するとダイチの口が動いた。

「あの子・・・悪いんだけど、ウンコしたいからやめない?」

意外な言葉に邪見は、啞然とする。

すると殺生丸は、先程の雰囲気が無くなったのかもしくはそのダイチの言った言葉に戦意を喪失したのか殺気が無くなり背中をダイチに見せて川に浮かんでいる船へ向かう。

「せつ! 殺生丸様!」

邪見も後を追う。

(あの野郎・・・何だか鋼牙に似てたな・・・)

ダイチは、殺生丸と現代の黄金騎士牙狼の継承者冴島鋼牙を重ねながらウンコしに行く。

「殺生丸様？」

「何だ？」

船で移動している時に邪見が殺生丸に聞く。

「犬夜叉なら知っているかと思えますが？」

「犬夜叉？」

「パンツ！」

殺生丸は、邪見を川に殴り飛ばし人頭杖で邪見の頭を押し付けて息をさせないでいる。

「思い出したくない名前だ。」

「ゴコゴコ！お許しを！」

必死で謝る邪見だが未だに人頭杖に押さえつけられていた。

「第一ヤツは生きてはいない。50年前に封印されたと聞いているぞ。」

「バツ！バツ！ですからその封印が最近になって解かれたと！ポツ！ポツ！それに時よ  
り杖の行く先が変わっております。それは何か犬夜叉の目覚めに関わりあるのではと

！とところで殺生丸様、そろそろこの杖をお離し下され！い！息が！息が！！ボコツ！」  
邪見は、溺れて気絶した。

数日後の朝

「よいつしよつとー！」

骨喰いの井戸から自転車を持って？（何故？持ったまま？）上がって来たかごめが現れた。

「ふう、疲れた。」

余裕そうなかごめ、この子意外と凄すぎる・・・

「犬夜叉やダイチさんと仲良くやっていけば良いな。」

そのまま自転車に乗ると犬夜叉のいる方向まで向かった。

ピョーン！ピョーン！

「ふい、3日も歩き続けじゃ。ここいらで一休みするかの・・・はて？なんの音じゃ？」

振り返ると自転車に乗ったかごめのタイヤが真後ろに存在していた。

「のええええええ！！」

プツ！プツ！

「？何か引いたみたいなの？気のせいかな？」

気にせずに行くかごめ。

「傷の手当てだ？ いらねえよ。」

犬夜叉は、木の上で寝ながらかごめに言い返す。

「駄目よ。酷い怪我してたじゃない。降りてよ。」

「嫌だね！」

意地でも降りない犬夜叉。

「降りなさい。」

「へっ！」

やはり降りてこないの……恒例のアレが。

「おすわりっ！」

ドシューーンッ！

「て！ てめえ！ 何しやがる!!」

犬夜叉が言い返すが気にせずに救急箱を持って来るかごめ。

「治療に決まっているでしょう。コテンパンにけちよんけちよんにやられたばかりじゃない。」

「言つとくけどな！ もう治っているんだよ！」

かごめは聞く耳を持たずに犬夜叉の服を脱がせようとする。

一方怪我した所に包帯をしている楓がダイチと子供達と一緒に犬夜叉達のいる方向に向かっていた。

「楓様？お怪我は大丈夫なの？」

「ああ、大分楽になったよ。」

笑顔で子供の心配に答える楓。

「優しいなお前達は。」

微笑ましく子供達を撫でるダイチ。

「四魂の玉の欠片早く集まると良いね。」

「ははは、子供は心配せんでいい。ただもう少し犬夜叉とかごめが仲良くしてくれと助かるのだが……。」

「？」

「！」

子供とダイチは、近くのある物を見ていると子供が楓の方を向く。

「ふふ！仲良いみたい。」

「？」

楓もよく見ると

「大人しく脱いで！」

「やめろよ！」

「脱いで！」

「やめろよ！」

かごめが犬夜叉にある意味襲いかかっている様に見える。

「見てはならん！」

楓は、子供達の前に見えない様に塞いだ。

「良いか？ああやってお前達のお父さんとお母さんも仲良くする時やるんだよ。」

「へえ……」

しやがんだダイチが子供達に教えると。

「変な事を吹き込むな!!」

楓に突っ込まれた。

「ん？」

かごめと犬夜叉が振り向くと楓とダイチがいた。

「随分打ち解けた様だな。」

「まさか肉體関係に突入する気だったのか？」

険しい顔の楓と茶目つ気な事を言うダイチが二人を見た。

「あ！」

直ぐに犬夜叉は、かごめを振り払った。

「俺の身体は特別だつてのが解らねえのか？」

犬夜叉は、先程の傷口が完治した事を脱いで見せた。

「えっ！もう治っている!？」

「スゲエな、おい！」

かごめとダイチは、驚いた。

「アレだけの刀傷が跡形も無いとは。流石だな。」

「けっ！人間なんかと一緒にするな！こんな事で感心されても嬉しくもねえ。」

犬夜叉は、服を着ながら言い返した。

（人間じゃないけど妖怪じゃない。半妖って一体？）

「ん？」

かごめが考えているとダイチは、犬夜叉に何かがかくつ付いたのを見た。

「イテ！」

その犬夜叉も何かがある事に気付いたのか脱ぐとノミが犬夜叉さん血を吸っていた。

「ちゅー、お懐かしや犬夜叉様。」

犬夜叉が叩く前にダイチの手が先にノミを叩く。

「すまん！こいつの声がムカつく白夜騎士の魔導輪の声に似ていてつい。」



犬夜叉は、気にせずにい叩いたノミを見た。

「??何でいノミジジイの冥加じゃねえか。おい！なんか用なのか冥加ジジイ！」

「おお！お懐かしや犬夜叉様。・・・ドン!!

グリグリ！

地面に再び踏みつけるとグリグリと潰すダイチがいたそれも暗い表情の。

「悪い！なんか今までの鬱憤をコレで晴らしたかったから。もうしないから。」

正気に戻ったダイチが冥加に謝る。

「どうしたんだよダイチ？」

「ダイチさん？」

「昔色々あつてな。」

そんなこんなで冥加を楓の家に連れて行く犬夜叉達。

「俺の親父の墓を暴こうとしている奴がいるだど？」

「この冥加、墓守として居ても立っても居られず。こうして・・・」

冥加は事情を話した。

「墓を捨てて逃げて来たんだろ？」

「何アソコは墓石だけでお骨は別の場所にありますから。」

「?じゃあ骨は何処だよ?」

「さあ？ワシも本当は知りません。」

「大した墓守だぜ。」

呆れる犬夜叉。

「犬夜叉、お主の父親は、確か西国を根城にしていた化け犬であつたと聞いていたが？」

「あんまし覚えてねえけどな。」

「それはそれは強くて立派な大妖怪でいらした。何よりも美味しい血をしていられた。犬夜叉様のその血を受け継がれておられる。」

冥加は、犬夜叉の父親を語る。

「現代だとマフィアの大ボスみたいなものか。」

ダイチの言い方のほうが正しいかもしれない。

「へえ、じゃあお母さんは？」

かごめが言うと犬夜叉の目の色が変わった。

「母上様も大変お美しい・・・ドン！」

犬夜叉は、冥加を踏み潰した。

「ちよつと犬夜叉！酷いじゃない！」

「おれの母親はとつくの昔に死んじまったよ！」

犬夜叉は、そのまま家を出て行った。

「何で？何かあたし気に触る事言った？」

「さてのお。」

かごめの言葉に楓は知らん顔した。

「迫害を昔されたんだろ？おそろくな。」

楓の代わりにダイチが答えた。

「？あたしお母さんの事を聞いただけよね？」

「母君様の事となると犬夜叉様はいつもああだ。」

冥加もなぜか困った様な悲しい様な表情になる。

そしてかごめは、犬夜叉を探しに行くとそのまましばらくしてダイチもかごめの後を追いかける。

木の上で月夜を見る犬夜叉を発見するとかごめは、近く。

（お父さんが大妖怪で犬夜叉は半妖。半分妖怪って事は後半分は人間？だから・・・）

《ふっ、やっぱり半妖は、半人前か。》

結羅の言葉を思い出す。

（半分が人間。完全な妖怪じゃない。その事が犬夜叉のコンプレックス。犬夜叉のお母さんは人間。）

「お母さんが人間だから。だからお母さんが嫌いななの？」

「そうじゃないと思うぞ、かごめ。」

「え？」

後ろからダイチが来た。

「あいつは心根が優しくお母さんが大好きなのさ。憎いのは迫害をした周りの人間だと思おう。」

ダイチのその言葉に不思議とそんな感じがするかごめ。

「!？」

すると何か変な気配を感じるとかごめとダイチだけじゃなく犬夜叉も感じた。

「かごめ！伏せろ！」

犬夜叉は、かごめをそのまま地につけた。

「痛そうだな・・・」

つられて伏せるダイチが顔を引きつった。

「う！犬夜叉！」

顔に土で汚れて文句を言うかごめ。

「わかるか？スゲー妖気だ。」

「？あ！」

かごめは、空に何かある事に気付く。

(この気配?あの殺生丸がいるな・・・)

ダイチは、数日前に戦った殺生丸が近くにいる事に気付く。

「牛車?」

かごめは、そのまま見ると中に女の人に乗っているのを確認する。

「女?犬夜叉どうしたんだよ?」

犬夜叉の顔付きが変わった事にダイチは、聞く。

「どうしたの?」

「お・・・お袋?」

「何?あれがお前の母さんか?」

空に浮かぶ牛車に乗る犬夜叉の母親らしき人も犬夜叉を確認する。

「お前は犬夜叉?あ!」

犬夜叉の母親は、振り返ろうとしたが牛車の中には小鬼が鎖を持って犬夜叉の母親を縛る。

「お袋!」

「どうゆう事?確か犬夜叉のお母さんは死んだって!」

「どうなってるんだ!一体!」

三人は空を見上げていると牛車が巨大な手に掴まれた。

そのまま牛車が壊れ犬夜叉の母親を捕まえた。

【ギャアアアアッ!】

巨大な真つ赤な鬼が姿を現した。

「犬夜叉のお母さんが!」

「この!」

「おし!」

犬夜叉がジャンプするとダイチも飛ぼうとしたが空に何がある事に気付き止まる。

ボウッ!

空から火が降って来て犬夜叉は避ける。

「あの火は!」

ダイチは、見覚えがある物だった。

「ちっ!」

鬼の腕には人頭杖を持った舌打ちする邪見がいる。

「あいつ!まさか!」

ダイチは、鬼の近くを探すと犬夜叉もダイチと同じ物を確認した。

「邪見、殺すのは話しが済んだ後だ。」

「へっ!へへい!」

邪見は、頷く。

「あの時の殺生丸と言う奴か？」

「何？どうゆう事だ！」

「ん？稽古している時に会って少しやり合つたな。」  
頭を掻きながら説明する。

「どういう事だ殺生丸！」

犬夜叉は、睨んで殺生丸に言う。

「ほう……感心に覚えてくれたか兄の顔を。」

「へえ……あの野郎が犬夜叉の兄貴か……」

ダイチは、全然似つかない事に気付く。

（おそらく向こうは母親が妖怪だからだろうな。）

「兄って？犬夜叉のお兄さん？」

かごめもやって来た。

「貴様はあの時の……ん？」

ダイチを確認するとかごめの方を見る。

「な、何よ？」

かごめは、犬夜叉の後ろに隠れる。

「犬夜叉よ……貴様は人間達とつるむのが誠に似合う。人間等と言う嫌しき生き物を母に持つ半妖。一族の恥さらし者が！」

殺生丸は、軽蔑の表情で犬夜叉を見る。

「こいつ……ムカつく、ぶっ殺したくなる……」

ダイチは、少しムツとした。

「くっ！」

犬夜叉も不愉快な顔になる。

(やっぱり犬夜叉のお母さんは、人間なんだ。)

かごめは、確信した。

「殺生丸！てめえ！わざわざそんな事言う為に来やがったのか!？」

「たわけ者！私はそれ程暇ではない！父上の墓の在処を貴様に聞こうと思つてな。」

「親父の墓だ!?!知るかそんなモン!!」

「見えるが見えぬ場所。真の墓守は決して見る事が出来ぬ場所。それが墓の手がかりだ。」

意味ありげな言葉を殺生丸は、言う。

「何の事だかさっぱり解らねえな！例えば知っていたつてお前に教えるか！」

「そうか……ならば仕方ない。貴様の母が苦しむだけだ。」



殺生丸は、右手で光る鞭を出して鬼に叩きつけると鬼は犬夜叉の母親を握り潰し始めた。

「犬夜叉!」

「おい!犬夜叉!」

かごめとダイチが言う。

「馬鹿かてめえ!お袋はとつくの昔に死んでいるんだ!そんなまやかashiに俺が引つかかると思つてやがったのか!」

犬夜叉は、殺生丸に言い返す。

「まやかashiか?」

不敵に笑う殺生丸。

「解らぬ奴め。死人の魂を死者の国から連れて来ることなど殺生丸様には容易き事。わざわざ肉体まで与えてやったと言うのに。息子が信じてくれぬのであればせつかく生き返つた寂しかろうて!」

邪見も不敵に笑う。

(そんな事が簡単なのか?)

ダイチは、少し疑問になる。

「ああ!犬夜叉・・・」

犬夜叉の母親は、犬夜叉を見ると手を差し伸べる。

(まやかしじゃねえのか?)

犬夜叉も動揺して判断できなくなっていた。

「この身体、私は一度死んだ身・・ああ！」

犬夜叉の母親は、小鬼に更に鎖で縛られて気絶した。

「ちくしょう！散魂鉄爪!!」

犬夜叉は、鬼の腕を切り母親から切り離れた。

「犬夜叉のお母さん！」

「しっかりしろ！」

かごめとダイチは、犬夜叉の母親に寄る。

「かごめ！ダイチ！お袋を連れて逃げる!!」

犬夜叉は、二人に言う。

「この役立たずが！」

殺生丸は、光る鞭で鬼を叩きつける。

鬼もそのまま犬夜叉に襲うが。

「犬夜叉！」

ピカッ！

犬夜叉の母親は、両手から光を出して犬夜叉や他のダイチ、かごめも光の中に消えた。「やれやれだ。」

「上手くいっております。全てこの邪見にお任せを。」

「つまらぬ芝居に付き合わせおつて……これで失敗したら殺すぞ。」

その言葉に邪見もビビる。

光が消えると犬夜叉は、一人倒れていた。

「ん?」

辺りを見るとかごめしか倒れておらずダイチは居なくなっていた。

「此処は?」

まるでこの世の物とは違う天国の様な場所に来ている気分だった。

「此処はこの世とあの世の境。」

「?」

振り向くと犬夜叉の母親がいた。

「此処から母はあの世に戻ります。」

「あの世に? そうだよな……お袋はとづくに死んじまっているんだもんな。」

犬夜叉の母親が後ろを向いて歩くと犬夜叉もかごめが気絶している事を確認すると

母親の後を歩いて行く。

「犬夜叉、すっかり大きくなりましたね。」

「そりやな。お袋が死んだ時はほんのガキだったから。」

「何もしてあげずたった一人にしてしまい。すみません。辛い思いをさせました。」

「べ、別にお袋のせいじゃねえさ。」

「犬夜叉・・・」

犬夜叉は、母親を見る。

「？」

かごめが目が目をさます。

(犬夜叉のお母さん？無事だったんだ。あれ？か！身体が動けない。)

かごめは、そのまま綺麗な池を見ると犬夜叉の母親の顔が無い事に気付く。

(はっ！顔が写っていない！犬夜叉！犬夜叉！こ！声が出ない！気付いて犬夜叉！この  
人顔が写っていない！その人あんたのお母さんじゃない！)

つづく！

## 墓

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

前回のあらすじ

犬夜叉の父親の墓守をしていた冥加が突如犬夜叉達の前に現れ真の墓の在処を探る者が現れたと犬夜叉に伝えた。

そして死んだ筈の犬夜叉の母親が現れると言う不思議な現象が起こると犬夜叉の兄の殺生丸が現れる。そう殺生丸こそが真の墓の在処を探る者だった。犬夜叉は戦おうとした中で犬夜叉の母親が出した光で犬夜叉達は別の場所に移動していた。だが目を覚ましたかごめが最初に池で見たのは顔の無い母親だった。それは犬夜叉自身も未だに気付き事なく徐々に何かの罠に嵌ろうとしていた。

(気付いて犬夜叉！顔が写っていない！その人あんたのお母さんじゃない！)

かごめが何度も心で言うが犬夜叉にはその心で言う声が聞こえない。

「犬夜叉、母はもうあの世に戻らねば。」

「ああ、行くのか？」

すると母親が両手から蓮の花を出して池に沈めた。

「犬夜叉、水面を見てごらん。」

犬夜叉は、母親に言われるままに池の水面を見た。

「!」

犬夜叉が水面を見た先に驚いた物は幼い頃の犬夜叉と母親の思い出だった。

「あれは俺がガキだった頃の姿だ。」

「覚えておいてくれたのですね。お前が幼い頃に母が抱きしめていた頃を。」

母親は犬夜叉を後ろから抱きしめた。

「さあ、いい子だ。心まで抱きしめてあげようね。」

グサツ!

母親が両手を犬夜叉の背中に刺した。

「うっ!」

「もう離さない。私と一つになりましょう。」

犬夜叉は、気絶しながら母親の中に捕まった。

(犬夜叉! 何で? 何で身体が動けないの!?! はっ!)

かごめは、よく見ると身体に鎖で縛られておりその原因で喋る事や動く事も出来なかった。

更に周りの池も風景も徐々に汚れ始め本来の姿になった。

(これは何もかもまやかしかだったんだわ。)

「かごめ！ワシじゃ！ノミジジイの冥加じゃ！」

「おい！しつかりしろかごめ！」

冥加とダイチが現れた。

そうダイチは、あの時犬夜叉の二セ母親が光を出す前に素早く森の中に隠れて気配を隠していた。

「全く！殺生丸といい邪見といい、嫌な連中だあ！ん？」

すると服に何かが居るのに気付くと直ぐに掴む。

「てめえは、ノミジジイの冥加！」

「覚えていてくれたか。」

「潰して良い？潰して良い!？」

ダイチは、あのまま掴まずにいたら犬夜叉の様に血を吸いそうだったので生理的に嫌だった。

「待て待て！ダイチよ！消えた犬夜叉様たちは必ず近くに居る急いで探してくれ。」

「仕方ねえな。状況が状況だ。協力するさ。」

そして冥加とダイチは、先程かごめを発見した。

「可哀想に金縛りで動けんじゃろ？今ワシが術を解いてやるぞ。ふふふ、美味そう♪」  
冥加はかごめの首筋に狙いを定めた。

が！

ドン！

そのまま地面にダイチの固くて厚い革靴が冥加を潰した。

「犯罪だぞ?!変態ノミジジイ!!」

無慈悲なくらいの踏付けで真つ平らになる冥加。

タンツ！

かごめを仰向けに寝かすとダイチは、両手をかごめの両肩に少し痛い位に叩いた。

「ありがとうダイチさん。じーっ！」

かごめは、ダイチにお礼を言うのと冥加に対して軽蔑の目で見た。

池の奥から小船に乗る邪見がニセ母親の元に来ていた。

「ぼうや・・・私のぼうや・・・」

ニセ母親は、服を脱ぐと犬夜叉を吸収する様に身体に引き込もうとしていた。

「いーらー無女ー！」

邪見は、走り向かうと人頭杖でニセ母親をやっていた無女の頭を叩く。

「いきなり吸い殺してどうする!?!」



「邪見さま・・・」

「お前がこやつをどうしよう構わない。だがその前に探り出したのか!? 犬夜叉と殺生丸様の父君の墓の在処を!」

邪見と無女の様子を見ていたダイチ達は、チャンスがうかがっていた。

「あの邪見とか言う奴殺生丸の手下よね?」

「人頭杖、あの杖には気をつけるのだぞ。」

「確かにあのおもちゃは人を簡単に殺れるからな。」

ダイチ達はそれぞれ行動を開始した。

「犬夜叉、犬夜叉。」

無女は、犬夜叉の心の中を探り始めた。

《《思い出してごらん。父上の墓は何処?》》

(知らねえ・・・)

《《よく思い出して。母に心の中を見せてごらん。》》

無女は、犬夜叉の心の先にあつた答えを見つけた。

「右の・・・黒真珠。」

意識を無くした犬夜叉の言葉からその答えを言う。

「右の黒真珠? それだけでは分からぬ! もっと聞き出せ!」

邪見は、要求する。

「邪見様。これ以上探ればこの子の魂が壊れまする。」

無女も本心的にはあまりやりたがらない様子。

「構わぬ!やれ!」

無女も嫌々行つた。

が!

「おい。止めときな、そんな事しても何にもならないぞ女妖怪。」

邪見の後ろから声が響くと杖が無くなる。

「え?」

ドンツ!

ダイチの堅い靴底が邪見の頭をめり込ませる。

「この小悪党!」

人頭杖を持ったかごめがフルスウィングで邪見を飛ばし池に落とす。

「犬夜叉!待って!犬夜叉を離して!」

かごめは、無女を追うが無女も距離を置いて逃げる。

「嫌じゃ!」

無女は、更に犬夜叉の身体を取り込み続ける。

「どんだん吸い込まれていく。」

「かごめ!」

かごめの近くで冥加がやって来る。

「犬夜叉様の魂を起こせ!」

「魂?」

「どう言う事だ?」

冥加の言葉に耳を傾ける二人。

「あれは無女。飢えや戦で子を亡くした母達の無念の魂が集まって出来たもの。無女の術に抱き込まれた魂を起こせば体も離れるはず。」

「つつても!どうするんだよ!」

「魂を起こすつて、でもどうすれば?あ!」

そう言っている間に無女は犬夜叉のほとんどを取り込んでいた。

「ちっ!」

ダイチは、猛スピードで無女に近付き犬夜叉の残っている手を握ると引つ張り始めるが全く取れないどころかどんだん吸い込まれていく。

「間に合わない!...?」

かごめは、水面に映る物に気付く。

「あの子供？犬夜叉？」

「そうじゃ！あれが無女の術の正体に違いない。」

「あの写っている物を消せばきつと！」

かごめも走り出す。

「かごめ！早くしてくれ！！もう限界だ！」

ダイチもかごめに言う。

「犬夜叉！目を覚まして！」

水面に映る子供の犬夜叉を水面を乱すと無女は苦しみ出し犬夜叉を離れた。

「間に合った・・・」

ホッとした表情のダイチ。

「犬夜叉。大丈夫？」

かごめが犬夜叉に寄り心配した。

「・・・チクシヨウ！チクシヨウ！よくもこんな真似を！お袋をダシにしやがって！」

犬夜叉が怒るもの無理もない。

「あの殺生丸と邪見の仕業よ。」

「つくづくムカつく連中だ！全く！」

「何だと!？」

かごめは、犬夜叉に言っているとダイチも不愉快になる。

「犬夜叉よ！」

「「!?!」」

殺生丸の声が聞こえ三人は顔色を変えて声の方を見る。

「墓の在処がわかったぞ。」

「殺生丸！」

犬夜叉が叫ぶと素早く犬夜叉の首筋を掴む。

「ちっ！余所見し過ぎた野良公!!」

ドンッ！

殺生丸は、空に飛ぶとそのまま急降下でダイチを足で蹴り踏んだ。

「くっそー！」

ダイチは起き上がろうとするが流石に殺生丸の方が力では上で起き上がれない。

「てめえー！」

「まさか、こんな所にあるとは。この殺生丸も見抜け何だわ。父上も妙な所に墓を託したものよ。」

掴んでいたい手を構える殺生丸。

「右の黒真珠。おそらく父上は骸を暴かれぬ為にそこに墓を封じたのだらうな。」

「てめえ何言ってる!？」

犬夜叉は解こうとしたが全く取れない。

「ならばこの兄と一緒に父上の墓参りにでも行ってみるか？」

ピカッ!

「ああ!」

殺生丸の空いた手が犬夜叉の右目に向けると光が出てその光が右目から黒真珠を取り出した。

「退け!」

ダイチは、足を器用に使い殺生丸を振り払った。

「ふっ!いくら地中を探しても見つからなかったワケだ。見えるが見えない場所。真の墓守は決して見る事こ出来ぬ場所。それが貴様の右目に封じられていた黒真珠だったとはな。」

殺生丸は、黒真珠を見ながら説明した。

「そんな事のためにニセのお袋まで仕立て上げて!」

犬夜叉は、殺生丸に攻撃したが直ぐに避けられる。

「何処見せやがる野良公!」

真上で待ち構えていたダイチが魔戒斧で交戦しながら直ぐに殺生丸の手に持ってい

る黒真珠を奪い返すが！

ビリッ！

(な！なんだ！これは!?)

ダイチは黒真珠を持つとこの一秒にも満たない時間で全ての映像が流れて来た。

「(ハハ)は・・・?」

いつの間にか貴族屋敷にいるダイチ。

貴族達が外で蹴鞠を楽しんでいる様子が伺える。

「ん?」

すると貴族達の輪の中に赤い着物を着た銀色の長髪と犬耳の少年が入って来た。

「まさか！これって?」

どうやら何だからの理由で黒真珠に宿していた犬夜叉の幼い頃の記憶を見てしまっていた。

幼い犬夜叉が蹴鞠を欲しがっているが貴族達はその犬夜叉を汚物を見るような目で見ると蹴鞠を捨てて何処に行く中で「薄汚い半妖め！」と言いながら貴族達は去っていった。

「下衆野郎どもが!!・・・犬夜叉・・・」

ダイチは貴族達の方が余程の醜い妖怪に変わらない気持ちで軽蔑と共に幼い犬夜叉

を心配でならなかった。

《半妖?》

この頃の犬夜叉は、幼くその言葉の意味を理解していなかった。

其処に先程の貴族達とは雰囲気の違いを優しそうで美人な女性が来ていた。

《母上!》

幼い犬夜叉は、母親に抱き付く。

《半妖って何?》

ポロツ・・

母親は、涙を流し犬夜叉を優しく抱きしめた。

そう彼女は、息子の行く末を心配して流していた。

映像が終わると再び殺生丸と黒真珠を取り合いをしていたが殺生丸の出す光の鞭で

黒真珠を奪われる。

「死ね!」

殺生丸は、次に犬夜叉に目をつけて光の鞭で攻撃をする。

ヒュッ!

殺生丸の光の鞭が犬夜叉のトドメを刺す前に何かの間に入った。

「えっ!?!」



「あれは無女!？」

そう犬夜叉の前に入ったのは無女だった。

「犬夜叉を庇ったって言うの?」

「無女は、母が子を思う情念の妖怪。子を守ろうとするのも無女の性なんじゃ。」

冥加は、説明した。

「ぼうや・・・」

無女は、まるで犬夜叉が無事を確認すると満たされた声の様に見える。

パンツ!

殺生丸の光の鞭が無女にトドメを刺した。

「ちよつとアンタ!」

「逆らうなかごめ!ワシらも殺される。」

「だって!」

かごめは、言い返したい気持ちでいっぱいだった。

「邪見!邪見!」

殺生丸は、邪見を探す。

「殺生丸様!人頭杖、取り戻しましてございます。」

殺生丸は、人頭杖を持つ。

「この時を待ち侘びたぞ。」

黒真珠を地面に置くと人頭杖を刺した。

【カツカツカツカツカツカツカツ！】

人頭杖の翁の面が鳴いた。

「翁の顔が笑った墓が開きまする。」

次元の歪みの穴が現れると殺生丸と邪見はその中に入って行った。

「犬夜叉様。」

冥加が犬夜叉の肩に乗る。

「入り口が閉じる前に早く！殺生丸様は、父君の財宝を独り占めなさる気ですぞ。」

「そんなモンに興味はねえ！」

「そんな勿体無い！」

「黙れノミジジイ！」

ダイチが冥加に一括した。

「誰が行かないと言った！殺生丸の野郎！ぶち殺してやる!!」

「その意気だ！俺も行くぞ！仲間の思い出を利用したあの野良公を許せねえからな!!」

ダイチは、黒真珠で見た犬夜叉の過去を見て許せない気持ちになつていた。

「おう！かごめ！お前は危険だから此処で・・・ん？」

「はあ？」

犬夜叉とダイチは、背後にいるかごめがない事に気付き振り向くと入り口の近くにいたのに驚く。

「何ぐすぐすしてんのよ！」

先にかごめが入り口に入る。

「おい！」

「俺達よりもかごめが勇ましい・・・」

二人も続けて入る。

「中には殺生丸がいるんだぞ！」

「だから一発殴りに行くんじゃない！あんな血も涙も無い奴許せない！」

犬夜叉は、かごめを心配したがかごめも怒っていた。

「無理すんなよ！」

やれやれの顔でかごめを見るダイチ。

入り口の空間が抜けると三人は、空の上に出ていた。

犬夜叉とかごめは、骨だけで飛んでいる大鳥に乗るとダイチも同様に別の大鳥に乗った。

すると大きな甲冑を着た大犬の骨が存在していた。

「親父・・・」

「あれが犬夜叉のお父さん？」

「親父さん大きいな・・・」

「見りゃわかるだろう。」

犬夜叉の父親の骨を見て驚くかごめとダイチ。

「父君は年月を経てた大妖怪でしたからな。これこそ変化を解いた真のお姿。父君の亡骸の中に眠る宝刀。殺生丸様の狙いはそれを奪うことですじゃ。」

かごめの肩に乗る冥加が説明している間に父親の口に入る。

「遂にたどり着いたぞ。父上の骸の体内に納められし宝刀。」

先に乗り込んだ殺生丸が骸の中にあるボロボロの刀を眺める。

「一振りで百匹の妖怪を薙ぎ倒すと言う牙の剣。その名を鉄砕牙。」

殺生丸は、鉄砕牙に触れようと進む。

「鉄砕牙は父親の牙から研ぎ出した剣と聞き及びます。すなわちこれを手にすると言う事は・・・父君の妖力を受け継ぐも同じ。」

邪見は、殺生丸が鉄砕牙を抜く瞬間を見ようとしている。

が！

ビリビリビリ!!!

なんと鉄砕牙が殺生丸を拒み結界が張られていた。

「殺生丸！」

「おい！野良公！」

真上から犬夜叉とダイチが降ってきた。

「まだ決着はついてねえぞ！」

「たあっ！」

犬夜叉は爪で攻撃しダイチも魔戒斧を振る。

シュッ！

殺生丸は、素早く避ける。

「何処に消えた！」

「出て来い野良公！」

犬夜叉とダイチは、探す。

「父の御前だ。静かにせんか！」

殺生丸は、真上の骨の上に乗っていた。

「何抜かしやがる！お前こそ墓荒しだろうが！」

「同感だ！出てけ野良公！」

犬夜叉とダイチは、殺生丸に怒鳴る。

「犬夜叉様、後ろ！後ろ！」

冥加が肩に乗ると犬夜叉に後ろを向かせる。

「これです。これこそ父君の牙から研ぎ出した妖刀鉄碎牙。」

「何だよ。この刃こぼれだらけのボロ刀。てつなんとかだ？こんなんじやまともに大根一つ切れねえぞ。」

「!?」

ダイチは、鉄碎牙を見ていると何やら不思議な力を宿しているのを感じた。

「いや、そうでもなさそうだ。」

「はあ？」

ダイチの言葉に耳を傾けると冥加が続けて言う。

「その通りです。犬夜叉様、その台座から鉄碎牙を抜きください。殺生丸様、貴方様には鉄碎牙は抜けなかった。そうですな？」

「犬夜叉なら抜けると申すのか？」

「当然じゃ。言わば鉄碎牙は犬夜叉様に形見分けされた宝刀なのじゃから。」

冥加は、犬夜叉の後ろに隠れるそうとう殺生丸が怖いと見られる。

「父君が犬夜叉様に墓を託された何よりの証拠。」

完全に隠れる。

「とりあえず抜いてみたらわかるだろう?」

ダイチも犬夜叉に言う。

「何が形見だ!何が宝刀だ!俺はこんなオンボロ刀に興味はねえ!」

「分かちやいないな犬夜叉。」

「何?」

「もしも野良公が抜けないのが抜けたら面白い事になるぞ?」

「そうよ!ダイチさんの言う通りよ!抜いちやいなさいよ!」

真上で隠れているかごめがダイチに続いて言う。

「かごめ!」

「その刀、殺生丸には抜けなかったのよ。それを易々とアンタが抜いたら殺生丸の面目

まるつぶれよ!」

「赤っ恥かくのは野良公の方だつて事だ!」

かごめとダイチの言葉に面白くなる犬夜叉は鉄砕牙の方に向かう。

「てめえの吠え面が見たくなつたぜ!」

鉄砕牙を握ると殺生丸と違い結界が発動しない。

「嘘!殺生丸様を跳ね返した結界が犬夜叉を受け入れた。」

邪見も驚きを隠せない。

「はやり鉄砕牙は犬夜叉様が持つべきものなんじゃ。」

冥加は確信した。

「抜いちやえ犬夜叉!」

「抜いてやれ犬夜叉!」

二人も続けて犬夜叉に言う。

「うおおお!!」

そう鉄砕牙は犬夜叉に抜ける。

と思いきや・・・

「ぐおおおっ!」

全く抜けない・・・

「え?」

かごめは驚く。

「はい?」

嘩然と口を開けるダイチ。

「おい!」

「ギクリ!」

犬夜叉は、直ぐに冥加を掴む。



「抜けねえじゃねえかよ！」

「何故でしょう？」

冥加も困った顔で言う。

「おかしいな？・・・あれほどの力が宿っている刀が何故何だ？」

ダイチも疑問で仕方なかった。

「茶番は終わりだ！」

殺生丸は、素早く接近すると犬夜叉とダイチも避けて交戦し始める。

「犬夜叉！ダイチさん！」

かごめが降りてきた。

「ふふふ！殺生丸様ご加勢を！」

邪見は人頭杖を構える。

「この小悪党！」

かごめが降りた場所には偶然邪見が居てそのまま踏み付けた。

「卑怯者！」

「何を！」

邪見は人頭杖で攻撃するが直ぐにかごめに掴まれ力の押し合いに突入した。

「この小悪党！」

「この小娘！」

「人間だつてやる時はやるんだから！」

「今度は負けぬ！」

邪見は、力一杯に人頭杖でかごめを鉄砕牙の方向に押し倒した。

「どうした？そこまでか？」

邪見は、挑発しているとかごめも負けん気がしたのか無我夢中で背後の鉄砕牙に手を伸ばす。

「くそ！まだまだだ！あ！」

かごめは犬夜叉達の方を見ると殺生丸に徐々に押されているのに気づく。

「犬夜叉あああああつ！！」

かごめは、鉄砕牙を手にしたまま犬夜叉達の方に向かう。

スポッ！

「あれ？」

かごめは鉄砕牙が抜けて驚くと。

「!？」

殺生丸も驚く。

「はあっ？」

ダイチと犬夜叉も驚く。

そう全て此処にいる者達が驚きお隠せなかつた。

「ごめん……抜けた……」

何が何だかわからないかごめが犬夜叉に謝る。

「どごうしょう……」

つづく

## 刀

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

前回のあらすじ。

犬夜叉の右目に隠された黒真珠を手にした殺生丸はそれを使い父の骸が眠る場所を開き宝刀鉄碎牙を手にしようとしたが鉄碎牙の結界によって手に入れられなかった。そこへ仲間と共に犬夜叉がやって来て鉄碎牙を握る事が出来たが今度は抜けないと言う事になり殺生丸との交戦が始まるが美少女かごめが鉄碎牙を偶然抜くと言うアクションが起こり周りの者達は驚きを隠せなかった。

「あああーばー馬鹿な！犬夜叉はともかく殺生丸様にすら抜けなんだ鉄碎牙を何故人間が!？」

邪見は理解できない状況に戸惑いを隠せなかった。

「余所見してんじゃねえ！」

犬夜叉とダイチは、そのまま殺生丸を攻撃するが直ぐに避け移動する先はかごめの目の前だった。

「わっ!？」

「貴様何者だ？何故この鉄碎牙が抜けた？」

殺生丸はかごめに問い詰める。

「もはや犬夜叉様は、眼中に無い様で命拾いしましたな。」

ホツとする冥加。

「ドアホ！殺生丸！その女は関係ねえ！」

「俺らが相手だ!!」

二人が殺生丸に怒鳴るが殺生丸は、振り向こうともしない。

「犬夜叉！来ないで！切るわよ！」

かごめは殺生丸に威嚇を示す。

「私にもお前にも抜けなかった鉄碎牙。その結界を容易く解いた女。それを見逃せと言うのか？」

殺生丸はかごめを殺す気なのは確実だった。

「結界が何故解けたかは俺にもわからねえが！そいつはただが人間の小娘だ！かごめ！殺生丸に鉄碎牙を渡せ！」

「嫌よ！こいつはこの刀が抜けなかったでしょ!?!それって刀の持ち主はこいつじゃ無かってことだもん！だから絶対に嫌！」

「馬鹿野郎！人間の面前には関係ねんだ！これ以上でしゃばんな！」

「で！でしゃばるなですって！」「ふっ！犬夜叉・・・つくづく人間が気になるらしいな。何故庇う？何故逃す？何故愛する？何故つるむ？」

殺生丸は、犬夜叉達にふり向きながら言い続ける。

「偉大なる父上の力。人間に対する慈悲などと言う言葉は私は受け継がなかった。人間の女を・・・貴様の母を思うなど生まれた心の隙が父上をこの骸に陥し入れたのだ。」

殺生丸は、父親の死の真実を知るかの様に話を続ける。

「貴様には汚れた人間の血が流れている。その血がお前を人間に近づけているのか？私には見えぬのだ。人間などと言う低俗極まりない者は・・・」

殺生丸の手から怪しい光が出る。

「はっ！」

ダイチは、一目散にかごめの前に立つと彼女の盾になる様に掴み殺生丸に後ろを向けた。

「ああ！犬夜叉！」

「うわあああつ!!」

殺生丸から毒の瘴気が出るとそのままかごめとダイチを溶かした。

「かごめ！ダイチ！」

犬夜叉も寄るがもう既に二人は溶けてなくなっていた。

「つまらんなのう？犬夜叉？」

「殺生丸！」

「人間も半妖も！」

「散魂鉄爪ツツ!!」

犬夜叉は、力一杯技を繰り出す。

シユルルツ！

「くっっ！」

犬夜叉は、殺生丸のモコモコしたのに巻かれた。

「気付け！貴様の汚れた血では私に触れる事も出来ん！」

そのまま殺生丸は、犬夜叉を何故飛ばした。

「くそ！うっ！」

犬夜叉は、立ち上がるが今度は光る鞭が犬夜叉に隙など与える事なく攻撃していく。

「半妖が！半妖如きが！薄汚い半妖が!!」

「半妖だろうと人間だろうと関係ねえ！そんなお袋の事をダシにしやがった事も許せねーが！そのお袋の為にも俺はお前には負けるわけにはいかねんだ！」

犬夜叉は、今以上に早く殺生丸に近づいた。

ギリッ!

微かに殺生丸に当たる。

「これはお袋の分! もう一発はかごめとダイチの分だ!!」

再び犬夜叉は殺生丸に力強く当てると殺生丸の防具が壊された。

「何で!?! さっきまでカスリもしなかったのに!?!」

邪見は、どういう事なのかわからない状態だった。

「たかが人間二人の事での怒りか? そんな感情に動かされるとは真哀れな奴よ!」

犬夜叉も流石に怒りが宿る。

「てめえ! 腸引きずり回してのたうち回してやる! 詰まらねえ死に方をしたかごめとダ

イチの為にもよ!」

殺生丸に対して怒りが頂点に達していると!

「おーい! 勝手に殺すな!」

「ぶふあ! 死ぬかと思った!」

何故か二人は溶けたか液の中から平然と出て来た。

「もう! あんた! あたしまで本気でやったわね! たつぷり反省させてやるから覚悟しな

さいよ! はい!」

「は?」



「何かこの刀凄いいみたい。頑張つてね。」

「おめえら何でそんなにピンピンしてんだよ？」

「？」

「俺が代わりに説明しよう。」

ダイチが説明を始めた。

「こいつには強力な結界が張られていて持つていると殺生丸の毒の瘴気程度なら耐えられるらしい。俺もかごめをあの時に掴まなかつたら死んでいたな。いや／＼参つた、参つた。鉄砕牙様々だ。」

ふざけた口調で言う。

「殺生丸様の毒牙爪を跳ね返すとは流石鉄砕牙！犬夜叉様躊躇う事などありません！殺生丸様のお身体にて鉄砕牙の試し斬りをなさいませ。」

冥加は、何故か強気で言う。

「よくもほざいたな！半妖の貴様如きが使えるがどうか？この殺生丸が見届けてくれるわ！」

殺生丸の身体が徐々に変化していき真っ白な大きい化け犬に変わった。

「化けた!？」

「いや！あれが奴の正体だろ。」

「とうとう正体を現せやがったか!？」

三人は正体を現した殺生丸に警戒する。

「へへへ!この鉄碎牙欲しさにまさかな。」

殺生丸は、文字通り鉄碎牙が欲しいあまり正体を現した。

「本当にこんなボロ刀にスゲー力が備わっているっていうのか?」

犬夜叉が鉄碎牙をブンブン振ると殺生丸は吠え始めた。

「かごめ、その辺に隠れている。」

「その辺ってどこ?」

かごめの質問も無視して犬夜叉は、殺生丸に向かった。

「行くぜ!鉄碎牙の威力を!」

犬夜叉は鉄碎牙を殺生丸に向かい攻撃するが弾かれる。

「わっ!」

「ちっ!」

ダイチは、かごめを抱えたまま殺生丸の攻撃から避難し続ける。

「跳ね返された?」

犬夜叉は、どういう事から理解できないまま殺生丸から回避する。

ジュウウウッ!

殺生丸が自分達の父親の骸を嘔むと溶け出しその涎からも溶けるのを確認出来た。

「おい！冥加ジジイ！どうなってるんだ！？斬れるどころかタンコブ一つも出来やしねえ！」

「と……とにかく犬夜叉様……その刀は父君の形見。刀の妖力を信じなされ。ゆめゆめ手放してはなりませんぞ！ではこれにてごめん！！」

「あ！てめえ！」

「殺生丸様を刀のサビになさいませ！」

冥加は、逃げた。

「これは！毒か!？」

犬夜叉は、殺生丸の涎からの臭いで理解した。

「犬夜叉！俺はかごめを連れて外に避難する！流石の俺でも吸ったらひとたまりもねえからな。」

「おう！頼んだぞ！」

犬夜叉は、ダイチの判断が正しいと思いい任せた。

「さあ！かごめ！俺の背中に乗れ！」

ダイチは、かごめを背負って上に登り始めた。

「犬夜叉！」

かごめは、すでにダイチの背に乗りながら下を見ていた。

「構わず此処は逃げるのじゃ！あの毒気に当たれば妖怪でもいちころじやい！」

冥加は、構わずに上に登る。

「じゃあ犬夜叉は!?」

「かごめ！今は犬夜叉を信じろ！信じる事も仲間の務めだ！」

「わかったわ！」

ダイチは、すぐに跳躍しながら骸の頭の辺りまで避難した。

ドーン！

しばらくすると右肩から犬夜叉と大犬の殺生丸が飛び出して来た。

「犬夜叉!!」

二人は犬夜叉を確認すると殺生丸が片目を閉じてる事から鉄に刺さったと推測される。

「犬夜叉様！どうです鉄砕牙の威力は？さあ！殺生丸様にトドメを！」

「馬鹿言え！こんな刀支え棒にしなならねえよ！」

「では父君の形見の宝刀ではないと？」

しゅっ！

「あっ！逃げた！」

「なんて最悪なノミジジイだ．．．」

かごめとダイチは、冥加が逃げるところを全て見ていた。

「ちくしょう！このポロ刀で何とかなるのかよ!？」

犬夜叉が愚痴つても殺生丸は攻撃をやめないので戦い続ける。

「頑張つて犬夜叉！今の一発効いているわよ！」

かごめが応援を始めた。

「あのな！全然効いてねんだよ！」

「だってそれアンタの刀なんでしょう？あたしは信じているからね。アンタの力。」

「良いのかよ？そんな事言っていて俺は頑丈だから良いけどよ。このままじゃあお前死

ぬかもな。」

憎まれ口を言いながらかごめに言う。

(おいおい．．女にそれ言うのはNGだけどな?)

呆れ顔のダイチは、犬夜叉に向けた。

「やっぱりダメなの?」

かごめは涙を流した?

「え?お!おれが泣かせたのが?」

「そうだろ?」

ダイチは、頷くと答えた。

「泣くな！」

「じやな泣けつての？」

「やかましい！おれがお前を守るって言っているんだ！」

「えっ？」

かごめは、犬夜叉の言葉に驚く。

「くそ！そこで見物でもしてな。」

犬夜叉は、殺生丸の方に向かう。

「いまあたしを守るって・・・」

「そうだよな。今犬夜叉はかごめを守るって言ったな・・・本当に良い奴だな。なあ？」

「うん。（犬夜叉は、乱暴だけど。殺生丸と何かが違う。何かが!?）」

かごめも確信していた犬夜叉が殺生丸との違いに。

「くっそ！こうなったらどうにでもなれだ！来やがれ化け犬！」

ドクン！

「!?」

犬夜叉とダイチは、鉄碎牙の脈動を直ぐに感じた。

「ようやくお見せするのか鉄碎牙様々は？」

「えっ?」

かごめは理解していないが、ダイチは刀身の力が台座に刺さっていた時以上に力を解放した事を見て理解してニヤリと笑い。

「鉄碎牙が脈打ってる? (聞こえる? これは鉄碎牙の鼓動? 違う! さつきまでとは違う!.)」

犬夜叉は、さつきと今の鉄碎牙の違いに気づいた。

「殺生丸様! 犬夜叉如き半妖なんぞ頭から食ってしまいなされ!」

ゴン!

「まだ、負けないわよ!」

かごめは、邪見に鬨體を投げつけた。

「おうおう! 随分と調子乗ってるなこの野郎!」

邪見の胸倉を掴んで犬夜叉の父親の骸に何度も叩きつけるダイチ。

(頑張つて犬夜叉!)

かごめは、心の中で応援をする。

「ケジメをつけろよ!」

邪見をボコボコにしたダイチが笑顔で言う。

殺生丸が犬夜叉に飛びかかる。

「いけるー！」

犬夜叉も飛ぶ。

「テリヤアアツツ!!」

ズバツ！

なんと犬夜叉は、鉄碎牙で殺生丸の左手を切断した。

「これは牙？」

先程までの刃こぼれの刀が変化して牙を削った大刀に変わった。

「フフフツ！牙か・・・親父も大したモンを遺したもんだな。だかよ！殺生丸！親父の形見を奪い合っている俺たちは？親父の身体に比べりゃなんて小せんだ！わかっているか！俺たち親父の腹ん中や身体の上で戦っているんだぜ？まだまだ親父に敵わないって事か！」

殺生丸は、唸り始める。

「親父に可愛がられた記憶は無いがこの親父の牙が俺の眼の中に隠されていた以上何処の誰でも渡しやしねえ！それがご立派な兄貴様でもな！」

ズバツ！ズバツ！ズバツ！

犬夜叉は、殺生丸を斬り続ける。

殺生丸は、父親の骸から投げ出された。



「殺生丸さま〜ツツ！」

ダイチにボコボコされた顔で殺生丸の所に来ると投げ出された殺生丸は光の球体に変わりそれを追いかけて行つた。

「犬夜叉！」

「やつたじゃねえかよ！」

二人は犬夜叉に駆け寄る。

犬夜叉は、鉄碎牙を刺してしやがみこむ。

「犬夜叉大丈夫？」

「へへへ！ありがたいぜ親父！良い形見遣してくれたじゃねえか。」

犬夜叉も満足だった。

「いや〜流石は犬夜叉様！この冥加犬夜叉様を信じておりましたぞ。」

ガシツ！

ダイチは二つの指で冥加を捕まえた。

「逃げたよな？逃げたよね！」

ダイチは、冥加に尋問を始める。

「待て待て！あれあれ！」

冥加が言う先を見ると来た時に乗ってきた鳥を2頭持つて来ていた。

「ワシは帰りの足を確保していたのです。逃げたわけではありません。」

そう言うのと犬夜叉は、ダイチに掴まれた冥加の所に来る。

「じゃあ本当に逃げたんじゃなかったのか？」

「え？」

冥加は、爽やかすぎる笑顔の犬夜叉に戸惑うとタジタジになる。

(怖えな・・・ある意味・・・)

ダイチは、直ぐに悟る。

「申し訳ありません！殺生丸様に勝てぬと思いきこの冥加逃げ出しました。」

犬夜叉に直ぐに本音を良い謝罪する冥加。

「ダイチ良いか？」

「おう！持ってけ！」

ダイチは、呆れ顔になり冥加を犬夜叉の手の平に乗せた。

グシャツ！

犬夜叉は直ぐに冥加を握り潰した。

そして冥加はヒラヒラの形になり制裁を喰らった。

「だから言わねえ方が良いのによ・・・」

頭を掻くダイチ。

そして帰りの足の鳥を使い元の世界に戻る三人。

戻ると直ぐに黒真珠が右目に戻った。

「大丈夫なの犬夜叉？」

「問題無いんだろ？」

「ああ！元に戻っただけだ。もうお宝も何もねえ親父も静かに眠れるだろうよ。」

そしてこの事を楓に報告する冥加とかごめそしてダイチ。

「しかし、何故かごめに鉄砕牙が抜けたのか？やはりお主には不思議な力が備わっているのかの？」

「うゝゝん・・・」

かごめ自身もよくわからなかった。

「ワシが思うにかごめが人間だったからこそ抜けたのでは無いかと思う。元々鉄砕牙は犬夜叉様の父君が人間である母君の身を守る為に妖刀なのじゃ。人間を慈しみ守る心が使えぬ刀。」

「じゃあ、あの野良公に使えねえのは当然だな。」

「そうか！それであの時反応して。」

「元々人間に慈悲なんて物を持っていない野良公には鉄砕牙が使えないのが筋が通っているな。」

かごめとダイチは納得した。

「しかし不思議話だな。犬夜叉は半妖を自分の弱点。だから自分の母親の事を触れられなくなかったのだろうか。犬夜叉には人を思う心が必要なのだと父親は伝えたかったのかもしれん。」

楓がそれを語ると犬夜叉の父親が息子にそれを教えたいと思うのが感じられた。

「親父さんの性格を受け継いだのは野良公より犬夜叉の方だったな。しかし羨ましいよ。犬夜叉は……」

「え？」

ダイチの言葉にかごめ達は耳を傾ける。

「実はよ黒真珠に触った時……少しかだけ犬夜叉の過去が見えたんだ。ノミジジイの言う通りお袋さん美人で優しそうだったし親父さんも死んでも息子に伝えたかったて感じる。俺の両親は小さい頃に死んだからわからねんだよな……」

ダイチの顔は寂しそうな顔をしながら楓の自宅を後にした。

「ダイチさん……」

何故かかごめは意外な過去にダイチを可哀想だと思う。

ダイチ本人も自身の両親がいなから理解したのだと。

一方犬夜叉は、木の上で鉄砕牙を振っていた。

「何でい？ただのボロ刀に戻っちまった。」

「犬夜叉！」

「ん？」

「教えてあげようか鉄碎牙の使い方。」

「何!？」

犬夜叉は、木の上から降りてきた。

「？」

ダイチも近くに居たので近くの橋を渡って来ていた。

「お前わかるのか？」

「ねえ？その刀でしっかりあたしのことを守れる？」

かごめは鉄碎牙の使い方方のヒントを言った。

(へえ、けど今の犬夜叉に言ってもな・・・)

既に犬夜叉の後ろにいたダイチは、静かに聞いていた。

「何譫言言っているんだ？大丈夫か頭ん中は？」

”俺は一生お前を守る” って言ったでしょ!？」

「一生なんて言ってるねえだろが！いいか、かごめ。俺ははずれ本物の妖怪、それも大妖怪になるんだぜ！この刀さえあればその為の四魂の玉を集めるなんざ。あつと言う間に

集められる。という事はだな……おめえの為に使う暇なんぞ微塵もねえよ！」  
威張る犬夜叉。

「!」

かごめも怒るとそのまま橋の所に犬夜叉を連れて行く。

(あ……ヤバイ……)

直ぐに橋から避難するダイチ。

「おすわり。」

ドシーン!!

「もしかすると良い奴かもしれないと思ったあたしが馬鹿だったわ!」

そう言い残し帰るかごめ。

「やれやれ……最強なのはかごめだな……言霊の念珠をつけられたら黄金騎士も勝てないな……」

かごめに続けて帰るダイチだった。

## 蝦蟇

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

「はあく〜っ！気持ちいい！水も綺麗だし空気も美味しいしこう言う所に関してはこの時代も悪くないわね。」

川で水着を着て泳いでいたかごめが遊泳をしていた。

「村を出てから3日だ。四魂の玉の欠片はもうこの武蔵の国にねえんじゃねえか？」

「確かにここまで探すとそう思うな。明後日までこれが続いたら隣の国に行った方が良  
いじゃないか？」

「はあく〜・・・」

かごめが遊泳している所から少し離れた所でダイチと犬夜叉が冥加に言うが二人の  
言う事に聞いておらず遊泳しているかごめの方を見ていた。

「おい！聞いているのか？」

「え？ああ、そうかもしれないな。しかし若い女子のピチピチした肌はいいものです  
な〜・・・」

「お前な・・・」

「ただのエロジジイだな。こりや・・・」

二人は呆れる。

「ちよつと覗いて参りますです！」

「やめとけ張り倒されるのがオチだ。」

「こりねえな、あのノミジジイは。」

シユツ！

「!!」

呆れながら言う素早く二人から後ろを横切る存在を確認するとかごめの方に向かう。

「?もおうく犬夜叉様にダイチめ!やはり好きなんじゃございませんか!」

スケベ顔で二人を見る冥加。

「きやああああ!!」

かごめが何かに悲鳴をすると犬夜叉とダイチは、急停止してそれぞれ川に置かれてい  
る岩に乗る。

「な!なんだよ!?!別に覗きに来たんじゃねえ!」

「俺らは変な物がかごめの方に来ていたから追いかけていただけだぞ?」



ややこしくなるので犬夜叉の後にダイチがフォローを言う。

「あたしの服を取り返して！」

「は？」

ダイチと犬夜叉は、かごめの指差す方を見ると変な物がかごめの衣服を持って何処かへと向かう。

ピューーーーッ！

「指笛？」

犬夜叉がその指笛の方に走るとダイチも後に続く。

「よしよし！日吉丸ご苦労であったな。」

指笛を吹いていたのは若い男だった。

「ウキッ！」

変な物の正体は白く小さな猿の日吉丸と言う猿。

男は、日吉丸の持って来た物を確認するとかごめのブラジャーを手にした。

「……これは食べ物ではない！」

男は、食べ物でない事に直ぐに気づいた。

「……！」

「変な物の正体はこの猿か？」

「服を返してください。」

草むらからかごめ達が現れる。

「な！何者！怪しい奴らじゃ！」

男は、刀を抜いてかごめ達に向けるが！

ドン！バゴォーン！

「それはコツチの台詞だ！」

犬夜叉は男に足で踏みつけるとダイチは拳で殴り付ける。

しばらくして男が敵でない事を知るとこの男何日も食べていない事を言うとかごめは荷物に入っているポテトチップスを男に渡すと猿と共にポテトチップスを勢い良く食べ始める。

「よっぼどお腹を空かせていたのね。お茶いる？」

かごめは荷物からお茶のペットボトルを男に渡した。

「こつちも魚焼けるから食うか？」

ダイチは、先程の川で魚を調達すると直ぐに火を起こして焼き魚を男に渡す。

「犬夜叉とダイチさんも食べる？」

「そつ！そうか？じゃあポテトチップスを貰うか？」

ダイチはかごめからポテトチップスを貰う。

「いらねえよ。」

「食べれば荷物が軽くなるのに。」

「そうだぞ?」

かごめにつられて言うダイチ。

「だから何で井戸に戻るたびにこんなに重い荷を持って来るんだよ!」

犬夜叉は、かごめのリュックを持って言う。

「だって!着替えとか宿題とか。」

「あんな・・・」

犬夜叉は、呆れる。

「女の子は荷物の多いものなんだから勘弁してやれよ。」

ダイチは、ポテトチップスと焼き魚を食いながら犬夜叉に言う。

「うむ!うまい干し芋と魚であった。礼を言うぞ娘、男。」

男が礼を言う。

「あたしかごめって言うの。コッチは犬夜叉とダイチさん。それと・・・」

プツッ!

男の頬に止まる前に親指と人指し指で冥加を漬すダイチ。

「ノミの冥加ジイちゃん・・・」

かごめが顔を引きつつていた。

（こやつら何者？）

男は、警戒する。

「共の者と逸れて難儀をしていたって言うけどアンタ何処かの坊ちゃん？」

「わけあつて言えんがワシは信長と申す者。」

かごめの質問に男は・・・信長（？）は答える。

「信長!? うっそー!?! 握手してください! それとサインお願いします!」

かごめは、握手を信長（？）にするとサインのやり方を説明する。

「あいつ何興奮してんだ？」

犬夜叉は、ダイチに聞く。

「ああ、織田信長らしい。俺やかごめの世界じゃ有名な。たぶんな。」

「たぶん？」

ダイチの曖昧な言葉に気になる。

「甘利信長？」

かごめがサインの名前を読む。

「やっぱりな別人だ。」

ダイチは、予想していた様に頭を掻く。

「織田信長じゃあないの?」

「ワシは武田の者。あの様な尾張のうつけ者とされては困る。」

「うつけ者?」

「馬鹿者の事じゃ。」

「織田信長じゃなないなら先に言つてよね!」

かごめは、がっかり顔になった。

「馳走になったなワシには重大な任務がある故失礼する。さらばじゃ。」

信長は去る。

「?おい、そつちは。」

「どうした?」

犬夜叉が信長の行つた方向に何かある事に思い出すとダイチも聞く。

「わああああつ!」

信長の去つた方向からド派手な音がした。

「崖だつっーの。」

「こんなうつけ者なのに織田信長じゃないんだ。」

「だな。」

三人は、呆れて信長を見る。

信長をほつとけないかごめ達（犬夜叉は行く気はない態度を取る。）は、そのまま彼について行った。

しばらくすると村が見えて来て侍達が娘達を次々と連れて行く様子が見受けられた。

「なんとあの噂は誠であつたか。」

「何で俺たちがこいつに付き合わなきゃいけないんだよ！」

「だつてこの人ほつとけないもん。」

「ああ、下手したら転んで死にそうなタイプだしな。」

かごめとダイチは、この信長がある意味心配だった。

「此処だけの話だが城の殿様は物の怪に取り憑かれてるちゆう話だぞ。」

村人がそこそこそんなはなしをしていると犬夜叉はその言葉を聞き逃さなかつた。

「何!？」

「四魂の欠片の匂いがするな。」

こうして犬夜叉達は城に忍び込む事にした。

その城の中では、包帯を顔から全体に巻かれた男と若い位の高い女が男に酌をしていた。

「ぐひっ！露姫、この暮らしに慣れましたかな？」

男は、露姫と言う女に聞くが彼女自身怯えていた。

「はい、何不自由無く。」

「うむ、それはけっこう。」

「あの殿？」

露姫は、殿に勇気を持つてある事を聞いた。

「ここ、この頃国中から若い娘をお集めなっているとか？娘達を何処へ？」

すると飲んでいた酒の器を落とすと態度が変わる。

「知らんでよろしい！」

殿は、露姫に怒鳴り返した。

「お！お許してください！差し出た事を！」

殿はそのまま何処かへと行く。

（か、帰りたい甲斐の国に！）

露姫は、そんな感情を持ってしまった。

その夜

「間違いいねえ、物の怪の匂いがプンプンしやがる。四魂の玉持っているに違いねえぜ。

よし！一飛びするぞ。負ぶされかごめ。」

かごめが犬夜叉の背に負ぶさると何故か信長も負ぶさろうとした。

「ん?」

流石のダイチも不自然な光景に驚く。

「こら! 何でオメエーまで乗るんだよ!」

「ワシもこの城に用がある。」

「だつたら自力で登れ!」

信長を乗せながらない様子の犬夜叉。

「わかつた! わかつた! 俺が負ぶさつてやるから乗れよ!」

そういう展開になる事は大体予想していたダイチは、魔戒斧を横のベルトに器用に付けて信長を乗せた。

犬夜叉がジャンプするとダイチも負けじと同じくらいのジャンプで城の中に潜り込んだ。

城の中に入ると門番の兵士が何故か寝ていた。

「随分と不用心なお城ね。」

「何か怪しいな。」

かごめが兵士の様子を見るとダイチもおかしい事に気付く。

「犬夜叉様、お気を付けなされ! これは妖術で眠らされておる。おそらく城の者達全て。」



冥加の言葉を通り城の者達は眠っていた。

「姫！露姫様！」

信長は、城中の部屋を開いては大声で露姫を探す。

「良いのかな？こんな大声出して？」

かごめは、心配そうだった。

「まっ！みんな妖術で寝てるしな。」

「彼方さんから現れるだろうしな。」

犬夜叉とダイイチは、戦う気満々だった。

「はっ！露姫！」

信長は、部屋を開けると女が倒れているのを確認すると直ぐに駆け寄る。

「しっかりなされよ！・・・う!!？」

信長は、顔を見ると老婆だったが。

「姫！何というお姿に！」

信長は、泣く。

ドン！

「何でそうなんだよ!？」

ダイイチは、信長の頭にチョップした。

「コッチはじゃないの？アンタが探しているお姫様は？」

かごめが指差すと信長は、直ぐにそれが露姫とわかった。

「おお！何と美しい姫じゃ！お起こしせねば！」

冥加が向かうが！

ドン！

またまたダイチに革靴で踏み付けられる。

「やめろ。犯罪だから！」

ダイチは、露姫を仰向けすると両肩を軽く叩く。

「姫！」

「信長？」

信長の声に気付いたのか露姫は、信長を確認した。

「何故ここに？」

「露姫様？ワシがお分かりか？」

「其方を忘れるわけがない。其方は、私にとって心優しき幼馴染です。」

「ありがたき幸せ！ワシの事など忘れたのかと・・・」

信長は、顔を真っ赤にした。

「池に落ちたり、馬糞で凡て転んだして何時も私を笑わせてくれました。」

露姫の言葉聞いてずっこける信長。

「それだけやりや！忘れねえな！」

ダイチは、笑いながら腹を抑えた。

「ねえ、犬夜叉。信長くんお姫様の事好きなんじゃないかしら？」

「けっ！くだらね！」

他人の恋には、興味ない犬夜叉だったが。

「あの頃に戻りたい！」

露姫が泣き始める。

露姫の話によると殿の様子がおかしくなったのは彼女が嫁いでしばらくの事だったらしい。庭の池の辺りで倒れて高熱を出して性格が変わったと言うよりも人が変わった様になったらしい。

信長の方も同じだったらしい。殿の様子がおかしくなり国中から娘達を集めており戻らないという噂を聞いた信長の所のお館様が露姫を連れ戻す様に信長に命じたらしい。

「信長……」

露姫は、信長を見つめる。

「露姫様。」

信長は、顔を真っ赤にさせた。

「頭の上で……」

露姫が指差すと日吉丸が信長の頭の上で曲芸をしていた。

「日吉丸……」

信長は、泣いていた。

「ん？どうやらお出ましの様だぜ！」

「あくやつと来たか……随分とエライご身分だな。」

犬夜叉と魔戒斧を持ったダイチが立った。

「行くぞかごめ。」

「うん！」

かごめも弓矢を持つとダイチと犬夜叉と共に廊下に行く。

「ぐひっ！くせ者！」

包帯を巻いた殿様に少しビビるかごめだがかごめの前に立つ二人は戦意満々だった。

「現れやがったバケモン！」

「ツラを見せろよ！」

二人は殿様に飛びかかる。

ニユルンツ！

口から長い舌を出すのがダイチと犬夜叉は直ぐに避けて犬夜叉は爪でダイチは魔戒斧で包帯を切り裂く。

「ぐひっ！」

包帯から蛙の顔が出て来た。

「か、蛙？」

かごめは驚くが後ろにいる露姫はと言うと。

「と・・・殿？」

露姫は気絶した。

「ひー姫！お気を確かに！」

信長は、露姫を介抱する。

「見えた四魂の玉！」

かごめは、犬夜叉とダイチに言う。

「へへへ！持っている割には弱そうだな。」

「油断なさるな犬夜叉様！此奴は齡300年の妖怪。九十九の蝦蟇。一筋縄ではいきま

せぬぞ。」

冥加が犬夜叉に説明した。

「けっ！一発で仕留めてやら！」

「テリヤアア!」

再び犬夜叉とダイチは、攻撃するが九十九の蝦蟇は口を膨らませるとガスを吹いた。  
ブシューウウウウツツ!!

「ぐあああつ!」

流石に犬夜叉とダイチも驚く。

「いかん! 瘴気じゃ! かごめ吸ってはならんぞ!」

「アンタいつの間に其方に?」

かごめは、冥加の逃げ足の速さに驚きながら口を瘴気が入らない様に塞ぐ。

「ケホケホケホ!!」

犬夜叉とダイチは、瘴気で動けなくなっていた。

「ん?」

信長は、露姫を抱き抱えてながら目の前に九十九の蝦蟇がいる事に気付く。

「ぐへへ露姫!」

「退がれ化け物!」

信長は、刀を抜いて戦おうとする。

「バーカ! 何を抜かす! 人間の分際で!」

ニユルン!

グサツ!

「ぐあー!」

信長は、九十九の蝦蟇の舌に肩を貫かれて血を出す。

「信長くん!」

かごめは、駆け寄るが九十九の蝦蟇は、露姫を抱き抱えて何処かに逃げる。

「ひー姫!」

「動いちゃダメ! 酷い怪我よ!」

「わー! 我が命尽きるとも姫をお救いせねば!」

信長の覚悟が伝わる。

「信長くん、アンタ本当にお姫様のことが好きなのね。」

「な! なぜわかった!」

「えっ?」

信長は、隠してたらしい。

「あ・・あう・・・(くそ! 毒の耐性は、持つてるのに何故なんだよ! これも異世界に  
来た影響か?)」

ダイチは、かごめの所に来た。

「ダイチさん! どうしたの声?」

かごめは、ダイチの声の様子に異変がある事に気付く。

「九十九の蝦蟇の瘴気に直に浴びたからじゃ。あの程度ならしばらくしたら治る。」  
かごめの肩に乗っていた冥加が説明する。

「あの糞蛙絶対に許さねえ！」

起き上がった犬夜叉が瘴気に浴びさせられた事でキレていた。

「きやあああああ!!!」

外から露姫の声が響く。

「先に行くぜ！」

犬夜叉が先に向かう。

「ん？」

コクン！

ダイチもかごめに頷くと俺も行くと言う顔で犬夜叉の後を追う。

「何処だ！糞蛙！」

犬夜叉は、露姫の声のした方向に爪で扉を壊す。

「ぐへへ！もう遅い。」

九十九の蝦蟇は、露姫を蛙の卵の様な中に入れて露姫を抱き撫でた。

「!？」



「何これ!？」

犬夜叉の後にダイチと信長を連れ来たかごめもやって来た。

「露姫様!」

信長は呼ぶが露姫は卵の中に入っている為か意識がない。

「噂に聞く通りまるで蛙の卵じゃ。」

かごめの肩に乗る冥加が説明し続ける。

「九十九の蝦蟇はこうして娘の魂を熟成させてから食らうのじゃ。此奴は四魂の魂の妖力で殿の身分を一国を乗っ取りおったか。」

周りを見ると蛙の卵の中で服を纏わない女性達が卵の中で露姫同様に捕らえられていた。

（困るな・・・目のやり場がねえな・・・ん?この光景何処かで・・・あ!）

ダイチは、元の世界でホラーで同様に食べるのを狩った記憶を思い出した。

（たしか・・・そいつを攻撃しても・・・また・・・）

ダイチは、確かに覚えていたそのホラーを攻撃する度に捕らえ熟成させた人間を食べる再生する事を。

「覚悟しろ!殿様蛙!」

犬夜叉は、鉄碎牙を抜いた。

「・・・あ・・・う！（犬夜叉！やめろ！攻撃をするな！やめろ！）」

ダイチは、声が出ないが懸命にするが出ないものは出ない。

（よすんだああああ!!!犬夜叉あああああつ!!!）

キイイイイイインンンツツ!!

「よすんだああああ!!!犬夜叉あああああつ!!!」

「うっ!!」

犬夜叉とかごめは、頭を抑えた。

「な！何？頭の中にダイチさんの声が響いて？」

かごめもどういいう事がわからない。

「何だ！今のは!!」

犬夜叉も同様だった。

「犬夜叉！この場で攻撃するな！女達が死ぬ事になる！」

今度は集中させながら犬夜叉に向かって言う。

「だったら、どうしろってんだ！」

「奴をこの場から離して一気に決める！それしか方法がない！」

犬夜叉は、声を出しながらテレパシーでダイチが言う。

「どうした？斬らんのか？ぐへへ！」

グチャー！

「姫！露姫！」

九十九の蝦蟇がダイチと犬夜叉に意識を向けていると怪我した信長が卵の中に入った露姫を刀で斬り助けた。

「信長！信長！！」

露姫は、信長を抱きしめた。

「つ・・・露姫様？」

信長も抱き締めた。

「姫に何をする!?!」

九十九の蝦蟇が信長の方に行く。

ゴーン!!

九十九の蝦蟇の頭に鉄碎牙と魔戒斧で殴る。

「コラッ！テメエーが言うな！」

すると九十九の蝦蟇の意識が無くなり目覚めると先程の雰囲気とは異なるのに変わる。

「つ・・・露姫？ワシは・・・ワシは？」

雰囲気の違う九十九の蝦蟇は周りを卵の中に入った女達を見渡した。

「これはみなワシがやった事か？」

九十九の蝦蟇が聞いた。

「ああ？今更何とボケてんだ？」

「いや、正確には本来の人格がさっきの衝撃で入れわかつたんだろ？」

ダイチが犬夜叉に説明した。

「この声は優しかった頃の殿の声です。」

「そうか！蛙の身体の中で殿様は生きているのよ！」

露姫が元々の殿様の声を思い出すとかごめもダイチ同様に殿様が九十九の蝦蟇の中で生きている事に気付く。

「な！何という悍ましい・・・事を！ワシは物の怪に取り憑かれた当初はそれでも人間の心はあった・・・だが！この頃ではワシを殺せ！」

「ん？」

「このままでは露姫を喰うとしまふ。頼む！ワシごと蝦蟇を斬ってくれ！」

殿様は犬夜叉達に殺す様に頼んだ。

「へっ！中々良いこと言うじゃねえか！流石殿様だ！それじゃあ遠慮なく！」

「おい！待て犬夜叉！殿さんどうするんだよ！」

「そうよ！まだ人間の心が残ってるんだから！」

ダイチがテレパシーで言うとかごめもダイチのが聞こえたらしく犬夜叉に言う。

「ごちやごちやうるせえな！殿様が斬ってくれて言ってるだろ！下らない同情してんじやねえよ！」

「やめろ！」

犬夜叉達三人が揉めていると信長が殿様の前に立ち塞ぐ。

「まだこの物の怪の中には殿の心がまだ生きてる！」

「テメエー！退かねえと一緒に叩き斬るぞ？」

犬夜叉は、鉄砕牙を信長に向ける。

「それは困る！」

「だったら退け！」

「それも出来ん！まだ心が生きてる殿を見殺しには出来ん！いやコレが殿でなくてもワシが死ぬのは嫌なんじゃ！」

「信長（くん）・・・」

かごめとダイチは心を動かされる。

「この戦乱の世に甘い事を言うと笑われるかもしれん！それでもワシはワシは！」

信長の意味は変わらない。

犬夜叉は、鉄碎牙を鞘に収めた。

「わかった俺は一切手を出さない！後はオメー等で始末しろ！」

「犬夜叉・・・」

かごめは安心した。

「ぐへへ！命乞いご苦労！」

九十九の蝦蟇の舌が信長を貫いた。

「信長くん！元に戻った！」

本来の九十九の蝦蟇に戻るとかごめは信長の元に行く。

「犬夜叉！」

「俺が斬ったら殿様は死ぬぜ！」

（全く子供なんだから・・・）

犬夜叉の言葉にダイチは、呆れる。

「か・かごめ殿・ワシに構わず露姫を連れて逃げろ！」

「わかった！さあ！」

かごめは、露姫を連れて逃げる。

「？」

九十九の蝦蟇は、露姫を追いかけるが足元に信長が掴んで邪魔をする。

「退けえ！」

「うわっ！」

九十九の蝦蟇は、信長を退かすと露姫を逃げた方に向かう。

「馬鹿が！ちつとは目が覚めたか？」

「殺してはならん！」

「こいつ……」

犬夜叉もこの信長の意思に心を動かされる。

「姫……」

するとダイチが先に九十九の蝦蟇を追うと犬夜叉も九十九の蝦蟇を追う。

「何か！何か良い手は？」

かごめは何か対策はないか考えていた。

「妖怪蝦蟇とは言えども所詮は蛙。熱いものには弱いはず！」

肩に乗っていた冥加がかごめに助言をする。

「熱いもの？」

「奴に湯を浴びせるのじゃ！」

「湯？」

「さすれば蝦蟇は殿の体から飛び出す。」

「そんな事言つたつて！今ここでどうやって！」

かごめは、冥加に文句を言う。

「待てー！ー！！」

九十九の蝦蟇が追つてきた。

「うわ！来たー！ー！！何か熱いもの！そうだ火よ！松明とか大きい火はある？」

「え？」

「ウキッ！」

露姫にくついでしてきた日吉丸が火を探しに行く。

「あつ！」

露姫は転んだ。

「待て！二人とも喰ろうてやる！」

九十九の蝦蟇は、追いついた。

ガシッ！

「ん？」

九十九の蝦蟇の首根っこが何かに捕まれ動けない。

「やつと声が出るな！」

「ダイチさん！」



かごめもダイチが来て安心した。

「貴様！ワシを殺せば！こいつは死ぬぞ？」

ググッ！

ダイチは、その九十九の蝦蟇を持ち上げた。

「殺さなければ文句ないんだろ？まあ熱いものが来るまでお仕置きしてやるよクソ蝦蟇

！若い娘達を糧に喰らい！信長を侮辱したテメエーに対するお仕置きだ！」

ブンッ！

ダイチは、九十九の蝦蟇を真後ろに投げ飛ばした。

魔戒斧で円を描き召喚陣が現れると獣身騎士戯牙に変わる。

ニユルッ！

ガシッ！

九十九の蝦蟇は、舌で戯牙を貫こうとしたが目にも止まらない速さで蝦蟇の舌の先を  
掴む。

シユウウウツツ!!

九十九の蝦蟇は、そのまま瘴気を吹くが。

シユッ！

ピタッ！

先程の舌を口に投げるとそのまま口を両手で閉じる。

『こちら・・同じ手が通用するかよ!』

戯牙の目は猛獣の威圧感で九十九の蝦蟇を脅す。

「?」

日吉丸が戻ると火らしき物を持って帰ってくる。

「火だ!でかしたわ!日吉丸!」

よく見ると油に刺した灯り用の火だった。

「小さすぎる・・あつ!」

かごめは、荷物にある物がある事に気付く。

それはヘアースプレーだった。

「待ちやがれ!蝦蟇!」

犬夜叉も来た。

「犬夜叉!」

「これ以上綺麗事言っても始まらない!俺はやるぜ!」

犬夜叉は、鉄砕牙を九十九の蝦蟇に向かって攻撃し始める。

「綺麗事なんてそんな・・ヘアースプレーに火?出来る!蝦蟇を追い出せる!」

ピクッ!

『ん？まさか！』

戯牙もかごめの言葉を聞き逃さなかった。

火とヘアースプレーで危険な事が出来る事を知っていたからだった。

「やるしかねえ！」

犬夜叉は、九十九の蝦蟇に使う。

「かごめ！俺は鎧で守られているから火には大丈夫だ！犬夜叉は頼む！」

戯牙はテレパシーでかごめに言う。

「わかったわ！犬夜叉!!おすわりっ!!」

ドシーン!!

犬夜叉は、床にめり込んだ。

ボオオオオオオツツ!!

「ぐひひひひ!!」

九十九の蝦蟇は、ヘアースプレーによって火炎放射器の様になった火で苦しみ始める。

そして九十九の蝦蟇の本体が殿様の身体から出て行った。

「やった！犬夜叉四魂の玉を！」

「言われなくても分かってら！」

犬夜叉は、走り出す。

ガシッ！

『仕上げだ犬夜叉！』

戯牙は、九十九の蝦蟇を掴むと円盤投げの様に犬夜叉目掛けて投げる。

「くたばれ！」

ズバッ！

犬夜叉が鉄砕牙で一刀両断で九十九の蝦蟇の本体を斬ると四魂の欠片が現れ犬夜叉が手にするとダイチも戯牙の鎧を解除した。

「犬夜叉！犬夜叉！」

負傷をした信長がやってきた。

「ん？」

「よく！よくやってくれた！殿はご無事じゃ！蝦蟇が出る刹那までよう耐えてくれたな  
！」

信長は、感謝の気持ちで一杯だった。

「いや・・・俺は別に！」

「そう言う事にしときなさいよ。」

「そうそう。」

かごめとダイチが小声で犬夜叉に言う。

「信長……」

露姫が信長の方を見る。

「露姫様！」

「信長！」

「露姫「よく殿を守ってくれました！」

露姫は、殿様に抱き付いた。

そして信長は、ズッコケる。

「露姫。」

「殿いつものスツキリしたお姿に戻られて。」

「色々すまなかつた。」

顔に至っては平凡そうな男だった殿の顔。

「優しそうなお殿様ね。」

「けっつだ！」

「まっ！人生こう言う事も在るさ！」

ボン！

ダイチは、信長を優しく叩く。

こうして蝦蟇の妖術で女達は、全員犠牲なく済んだ。

「あの・・・元気出してね信長くん？」

「そうだ！女の数なんて星の数ほどいるんだから頑張れって！」

翌朝かごめとダイチは、信長を慰めていた。

「けっ！やっぱ此奴大うつけだぜ！殺されそうになりながら恋敵の命乞いしやがってよ  
！」

犬夜叉は、呆れている。

「そうだな。ワシは織田信長以上の大うつけじゃ。」

「でもなその大うつけの人一人助かったんだ。それで良いじゃねえか？」

犬夜叉は、犬夜叉なりに信長を励ましていた。

「よーしっ！元気が出て来た。行くぞ！」

信長は、帰ろうとした。

「えっ？行くって？」

「おい！」

「信長、そっちは・・・」

犬夜叉が言い続けようとするや信長は消えた。

ドーン！

「崖だっつーの！」

「やっぱり大うつけね。」

「あーあー・・・」

三人は、崖から落ちた信長が大うつけだと確信した。

（しかっし・・・何であの時からテレパシーが使えるんだ？まあ・・・良いか便利なのが  
出来て。）

と思うダイチだった。

## 子狐

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

ピッ！ピッ！ピッ！ピッ！

カチッ！

時計からタイマーの音が聞こえるとかごめがタイマーのスイッチを切った。

「はい三分経ったわよ。」

「あー！ウメくな！かごめ。これウメくな！」

犬夜叉は、カップ麺を食べて美味しいと言う。

「そっ！良かったわね。」

しかしかごめは、不愉快そうな顔をしていた。

「お前も食わないのか？」

「そうそう、食わないと身体に悪いぞ？」

犬夜叉の隣に座るダイチもカップ麺を食いながら言う。

「もう！あんた達！よくこんな所で食べられるわね！こんな戦場跡で！腹減った！何か



食わせろ！丁度昼飯っばいからさ！って勝手に人のリュックの中を引っ掻き回して！もっと綺麗な小川とかお花畑とかゆつくりお昼食べたって罰は当たらないでしょう!?! 本当にもう！一つもデリカシーってもんが無いんだから！」

「かごめ、大丈夫だ。小川やお花畑はすでに骸になった奴等が代わりに行っていてもしれねんだから。もしかしたらお昼もそいつらゆつくり食べているかも知れねんだぞ？」

「屁理屈言わないでよ!!」

かごめは、ダイチに突っ込んだ。

「しかしかごめの国には、色々便利な物があるな。」

ダイチのカップ麺のナルトを食べている冥加がかごめの物を見てる。

「自転車なる物にも驚かせれたが時を告げる物やこの忍者食を見るとかなりの南蛮との貿易が盛んなのじゃな。」

この戦国時代は、西洋との貿易が始まった頃で様々な物が今後の日本の文化に影響を与えた。

「あら、流石冥加じいちゃん。博学ね。でもね、このカップ麺は日本人が発明したのよ。宇宙に持っていくので考えられたんだって。」

「うちゆう?」

犬夜叉と冥加は、聞きなれない言葉に頭を傾けた。

「そうよ。人間は宇宙に行ったり。そうだ！月にも行った事があるんだから。」

「なんと！月に!？」

かごめの言葉で冥加は驚く。

「どうやって?」

犬夜叉が方法を聞く。

「ロケットで!」

「ろけつとつて?」

犬夜叉は、かごめの言葉に質問した。

「こー大きくて!したから火を付けてそんでもってドカーンつて!」

ポン!

眉に皺を寄せたダイチがかごめの肩を軽く叩く。

「かごめ・・・多分それだと犬夜叉達に説明しても理解出来ないと思うぞ?」

「今度来る時までには勉強しとくわ!」

かごめも顔を真っ赤にした。

すると辺りが暗くなる。

「何?暗くなっただけど?」

かごめは、キヨロキヨロ辺りを見渡す。

「何だ!？」

「犬夜叉様、投げ捨ては！」

「全くおつちよこちよいだな犬夜叉は。」

ダイチは、犬夜叉の食べたカップ麺の器を直ぐに拾う。

「んな事言っている場合か!？」

そう言いつつも鉄砕牙の柄を持つ犬夜叉と魔戒斧を構えるダイチ。

【貴様らしく．．．四魂の玉を持っているな．．．】

「何?！」

「何だあの火は?！」

「これは狐火。」

冥加が説明した。

「狐火だと!？」

狐火が消えると何かが出てきた。

ボン!

「はあ?」「はあ?」

一同は丸くピンクの怖く無い物体に啞然とする。

「よ～～こ～～せ～～．．．

こ～～ろ～～す～～ぞ～～。」

カプツ!

丸い物体は犬夜叉の頭を噛む。

ぱんっ!

犬夜叉は、丸い物体にビンタをする。

「わあ～～～っ!!」

丸い物体は、犬夜叉のビンタで後ろに飛ばされると狐火と共に元の姿になる。

「いてててて．．．．」

「?」

「子供?」

「子供の妖怪か?」

犬夜叉達は、頬を抑えた幼い狐の少年妖怪に目を止める。

「何するんだ!この外道!ああーっ!」

少年妖怪は、逃げるが犬夜叉に尻尾を持たれ捕まる。

「尻尾なんか付けてやがる。子ダヌキが化けてたのか?」

「いやいや犬夜叉、違うぞ子カワウソが化けてたんだろ?」

「狐じゃ！」

犬夜叉とダイチの言葉に少年妖怪は、突っ込んだ。

「えっ？狐？可愛い！次抱かせてね。」

かごめは、少年妖怪を見ると可愛くて触りたくなる。

「何後ろに並んでるんだよ？」

「好きだろ可愛いのか？」

「好きよ。」

ダイチの質問に答えるかごめ。

ドシーン！

犬夜叉の手が重くなると地面に転び見るとお地蔵と少年妖怪が入れ替わっていた。

「お地蔵さん？あつ！」

かごめは、後ろを振り向くとリュックを荒らす少年妖怪の姿があった。

「あつた四魂の玉の欠片じゃ！貰ったさならばじゃ！」

ポウッ！

少年妖怪は、狐火と共に消えた。

「消えた？」

「何処行っただ！」

かごめと犬夜叉は、探したが少年妖怪は見当たらない。

「おーいー！いるぞー！」

「ー！」

犬夜叉とかごめは、振り向くとダイチが骸骨の中に隠れた少年妖怪を捕まえていた。

「こらっ！離せ！」

少年妖怪は、暴れるが直ぐに。

ゴンッ！

骸骨ごと少年妖怪の頭をチョップして骸骨が壊れるのと同時に大きいコブを作って目を回す少年妖怪。

「オラの名は七宝。」

目が覚めた七宝はかごめにコブを作った所を消毒で治して貰っていた。

「何で四魂の玉を狙ったのよ？」

かごめが聞くと重い口が開いた。

「おっとうの仇を打ちたかつたんじや！」

「仇ってお父さん死んじやつたの？」

「親父さん殺されたのか？」

かごめとダイチは、心配そうに七宝をみる。

「ふうくん……それでこの四魂の欠片で妖力を付けようとしたってのか？」

犬夜叉は、懐をから四魂の欠片を取り出すと七宝に見せる。

それを見ていたかごめは、犬夜叉から取り返そうとした。

「ふん！そんな物の力を借りなくたってオラは強いは！」

「ちよつと何でアンタが持っているのよ！」

「何しやる!？」

「お前等落ち着けよ！」

七宝の話の聞いていない三人は、かごめが犬夜叉から四魂の欠片を取り返そうとする  
が犬夜叉が嫌がり変な争いをダイチが仲介で止めに入っていた。

「聞いとるんか!?!こら!!」

「!?!」

三人は、全く聞いていなかった。

一方犬夜叉達の場所から少し離れた所では戦が始まっていた。  
すると空が曇り雷鳴が轟き二体の何かが現れる。

「狩るぞ満天！」

人に近い姿の男が両足に車輪の様な道具を付けて槍を持っていた。

「はいよ！飛天兄ちゃん！」

満天と言う男は獣の様な姿をして雲の様な乗り物に乗って現れる。

「雷撃刃！」

飛天が槍を向けると稲妻が現れそのまま戦をしている人間達を攻撃した。

満天も口から電気を集めている。

そして！

ドオオオンツツ！

そのまま電気をブレスの様に吐き全ての人間達を殺した。

「面白かったな満天！」

「そうだね兄ちゃん！」

そうこの二人は暴れ者で有名な雷獣兄弟の飛天と満天だった。

「四魂の欠片を付けてから力が余っちゃまうぜ。楽しいぜ！」

「だよ！だよね！」

「だったらもつともつと！集めようぜ！」

飛天は、満天の雲に背持たれると提案する。

「うん！このバケ狐の様に四魂の玉の欠片を持っている奴を片っ端からぶつ殺しちゃおう！」

満天の腰にはバケ狐の毛皮を巻いていた。



雷獸兄弟は、また何処かに行ってしまった。

その頃かごめは、七宝を自転車の後ろに乗せて移動していた。

「え？七宝ちゃんのお父さんも四魂の欠片を持っていたの？」

かごめは、七宝が何故四魂の欠片を欲しがっているかを聞いていた。

「彼奴らは、欠片を持っていて妖怪を倒して回っているんじゃない。」

「彼奴らって誰だ？」

自転車の横隣を走っていたダイチが七宝に聞く。

「雷獸の兄弟じゃ。」

「雷獸だと？」

木の上で移動していた犬夜叉も七宝を聞いている。

「飛天、満天の事かな？しようがない乱暴者の兄弟と聞いていたが。」

犬夜叉の肩にいる冥加が説明した。

「何にしてだ。そいつらを倒せば沢山の四魂の欠片を手に来るって事か。」

「笑わせんな！お前なんぞが勝てるないわい。」

下で聞いていたが七宝が犬夜叉に言い返す。

「お前半妖じゃろ？人間の匂いが混ざつとる。下等な半妖の分際でオラ達妖怪の戦いに

しやしやり出てくるな！」

(可哀想に……親を殺させて気が動転しているな……)

ダイチは、普段なら仲間を侮辱されて怒るがやはり家族を殺されて悲しい七宝を可哀想に思う。

「七宝ちゃん。そう言う言い方は……」

すると犬夜叉が下に降りて来た。

ポカン！

当然犬夜叉は、七宝の頭を殴る。

「……この……」

七宝は、涙目で振り向くとそのままゲンコツの雨が七宝を襲う。

「犬夜叉！」

「はい！ストップ！ストップ！」

かごめが止めるとダイチも犬夜叉の腕を持って宥める。

「すいません！すいません！すいません！」

七宝は、泣き顔で土下座をして謝る。

「けっ！解りや良いんだよ！」

犬夜叉も許す。

「お詫びの印に……」

ドシーン！

犬夜叉の両手にお地藏さんが乗ると地面にめり込む。

ペシッ！

七宝は、何かのお札をお地藏さんに貼る。

「おいおい！いたずらはそこまでだ！」

ダイチも七宝を両手で掴むと……

ドシーン！

ペシッ！

犬夜叉同様に今度は両手をお地藏さんが乗りめり込むとお札を貼られる。

「えっ!?ちよっ!ちよっと!!何で俺までやられんの!?!」

流星に気が緩んでいたダイチは、七宝の術にかかってしまう。

おい獣身騎士!しっかりしろ!

「てめえっ!」

犬夜叉は、怒り起き上がったが動けない。

「はっはっはっはっ!その地藏の札を外さん限り動けんぞ!」

「七宝ちゃん!少しは悪いのよ。犬夜叉もダイチさんも!何時までも遊んでないで!」

かごめは二人に言うがどうも様子が違う。

「ほ！本当に動けねんだ！」

「いや！マジで動けねえから!!」

二人は思い切り力を入れるがお地藏さんは動かない。

「女子に手荒な真似はしとくなかったが．．お前もしばらく寝てて貰う！」

トンツ！

七宝は、ただかごめの首を叩いただけだった。

「痛いでしょ！」

かごめも怒る。

「狐火！」

狐火でかごめを距離を置く程度の物を出した。

「じゃーん！」

七宝は、四魂の欠片が入った小瓶をいつの間か盗む。

「これで雷獣共をおびき寄せらんじゃ！」

「はっ！四魂の欠片!?!」

七宝は、直ぐに逃げる。

「返しなさい怒るわよ！」

かごめは、自転車に積まれた矢と弓を持ち七宝を追いかける。

「おい！かごめ！札外してから行け！コラー！ツ！」

（何時までこの格好なんだろう・・・）

犬夜叉は、騒いでいるがダイチは諦め状態だった。

池の辺りには雷獣の満天が頭の髪を見ながら気にしている様子だった。

「髪がな・・・もうちよつとあれば飛天兄ちゃんみたいにモテるのに。」

満天は、髪を大事そうに櫛でとかしている。

カサツ！

「ん？」

満天は、草むらから何か音が聞こえ振り向いた。

「へっ！追つて来ないな。」

草むらから七宝が出て来た。

「はっ！」

七宝の目の前に満天が立っていた。

「何だ・・・この間の狐妖怪のガキか。」

「お前は・・・あ!!」

七宝が見たものは雷獣に殺された父親の毛皮を満天が腰に巻いていた。

「おめえの親父の毛皮あつたけえぞ。」

不気味に笑うと満天。

「てめえっ！よくもおつとうを！」

七宝は、飛びかかる。

が！

ドシッ！

満天に殴り飛ばされる。

その拍子に四魂の欠片の入った小瓶が落ちる。

「あっ！それは、四魂の欠片!？」

「はっ！」

七宝は、小瓶を掴むが満天に尻尾を踏まれ逃げられない。

「おめえそれは四魂の欠片だろ？出せよ。出さねえと！」

口から満天は、電気を溜め始める。

ドスッ！

満天の鼻に矢が刺さる。

「あっ！当たった！」

かごめが矢を放ち七宝を助ける。

「動くな！次は脳天の打ち抜くわよ！」

かごめは、矢を構える。

一方犬夜叉達は。

「うわあああつ!!化け物!!」

通りすがりの人間は、直ぐに逃げた。

「おい！逃げるな！札を外しせよ！」

「まだか？かごめは？」

犬夜叉は、焦っているがダイチはかごめの帰りを待っている。

再び戻り。

「かごめ？」

七宝は、助けてくれたかごめを見る。

「鼻がいてえ・・・」

満天は、鼻を抑える。

「動かないで！七宝ちゃんこつちにおいで。はやく！」

七宝は、直ぐにかごめの所に向かう。

「逃げるな！四魂の欠片を置いてけ！」

満天は、追かける。

「あれは!？」

かごめには、見える満天の額に四魂の欠片が二つ埋め込まれている事に。

「あそこを射抜けば倒せる!」

かごめは、矢を満天の額に目掛けて放つ。

が!

ガキーン!

矢は弾かれた。

「しまったかすった。」

かごめは、矢を構えるが満天の様子がおかしい。

「あああ・・・俺の髪が!!」

そう髪が薄いのを気にしている満天には、さっきのかごめの矢で髪が何本か抜けたからだった。

「あぶない!逃げるんじゃない!これでおらのおっとうもやられた!」

七宝は、逃げながらかごめに説明した。

ドカアアアンンンツツ!!

「きゃああああつ!!」

かごめ達はギリギリでかわしたが満天の放つ雷撃の衝撃でかごめだけ気絶した。



「仕留めたかな？」

満天は、気が晴れたのかかごめ達を探し始める。

「かごめ！しつかりせい！はっ！」

七宝は、かごめを起こそうとするが満天の足音が響き隠れる。

「ん？何だ女だけか。ん？」

満天は、かごめをよく見た。

「か！可愛い！」

満天もかごめの美少女だと確信した。

「はっ！」

草むらで隠れていた七宝は、雷の音が聞こえると空には雲に乗りかごめを連れ去る満天の姿が見えた。

「かごめ。おらを助けてくれたのにおらは見捨てて逃げちまった！ち！ちくしょう！」

七宝は、悔しがり犬夜叉達の方に向かう。

「ダメじゃ！犬夜叉様、ダイチ！ワシにはこの札は外せん！」

冥加は、二人の貼られた札を剥がそうとしたが取れない。

「ちくしょう！あのチビ狐め！」

犬夜叉は諦めずに地藏を持ち上げるが札のせいで上がらない。

「おいー！」

「ん？」

犬夜叉とダイチの目の前に七宝がいた。

「助けてやっても良いぞ。」

「何かあったんだなかごめに？」

七宝の姿を見て直ぐにダイチは、質問した。

「かごめは雷獣にさらわれた！」

「何!？」

ダイチは、驚く。

「その代わり、殴らんと約束せい！」

「殴らねえよバーカ！」

チラッ

ダイチは、そう言う犬夜叉を見ると俺も殴って良いかという目で見ると犬夜叉も頷く。

術を解いた。

そして！

ゴキーンッ！

ダイチが一発だけ軽く頭にゲンコツをする。

ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！

犬夜叉は、ゲンコツのマシガンに七宝に食らわせる。

そしてダイチが犬夜叉を止める。

「お前は二分の一位やれば十分なんだよ。」

「殴らんと言つたじゃないか！」

「つとそうだ！持つ一つ、四魂の欠片は。」

犬夜叉は、七宝の尻尾を掴むと激しく揺する。

「あつた！あつた！」

ダイチは、四魂の欠片の入った瓶を持つと犬夜叉に渡す。

「良かった無事か。」

犬夜叉は、四魂の欠片を確認する。

「所でさつきかごめが雷獣にさらわれたつて言つていたがどう言う事だ？」

ダイチは、七宝に質問をする。

「フウくん……仇を討ち果たしたつて面でもねえな。テメエかごめが攫われるのを見てい

たのか？」

「喧しいさつさと助けに行かんか！お前の女じゃろうが！」

「なっ!」

犬夜叉は、顔を真っ赤にした。

「かごめは、お前の女だろ?」

ダイチも迷い無く言う。

「そんなんじやねえ!」

犬夜叉は、七宝を離すと顔をダイチ達に背中を見せる。

(嘘つくくなって・・・)

ダイチは、顔を掻く。

「助けてやってもいいぜ。そうだな、土下座でもしな! そうしたら今までの事を水に流してやら。」

「な!」

七宝は、怒るが冥加が七宝の肩に乗る。

「七宝。大人しくお願いせい。此処はお主が大人になって。」

冥加が七宝を説得する。

「くっ!」

七宝は、自分の力ではかごめを助けるのは無理と理解したのか土下座の体勢に入る。

「お願いします。」

七宝は、頭を地面に降ろす前に誰かの手が止めた。

「その心掛けだけで良い。」

止めたのはダイチだった。

「ほら犬夜叉、行くか？」

ダイチは、かごめの自転車を持ち言う。

「つて仕切るな！」

「そんな無駄な事しているなら四魂の欠片を持った奴等を倒す方が何倍も良いぞ。」

ダイチが言うとうろつと唸ったがダイチよりも先に前に出る。

「けっ！言つとくが俺は四魂の欠片を手に入れるんだ！かごめの為でもねえよ！」

犬夜叉は、七宝の土下座の事を言わなくなったがかごめを助けたいと言う気持ちはあるらしい。

（全くツンデレは、これだから面倒臭いんだよな。）

「はっ？」

「根は良い奴だから許してやってくれ。」

ダイチは自転車に乗せた七宝に言う。

一方かごめは

「ん……はっ！」

目がさめると知らない場所におり満天が何かを煮ていた。

「ん？起きたか？」

満天は、かごめの方に振り向く。

「( )は？」

かごめは、満天が煮ている物を見る。

「あんた！あたしを食べる気!？」

「違うよ。美少女の血肉は、髪に良いって言うからお前を煮溶かして頭に塗るんだ。」

どちらにしても最悪だった。

「そんな事される位なら食われた方がマシよ!!」

泣きながらかごめは叫ぶ。

「しっ！大声出すな！飛天兄ちゃんに本当に喰われちゃうぞ！」

ドーン！

扉が破れる音が聞こえると飛天が女妖怪を連れてやって来た。

「何だよ満天。帰ってたんか？」

「ヘエ、似てない兄弟だね。」

満天は、飛天を見てビビる。

「ん？何だその女。」

「これは俺の獲物だ。」

「安心しろ。取りやしねって。お前の方が良い女だもんな。」

機嫌良く言う飛天。

(こつちの方が人間っぽい。少しは話を通じるかも！)

「それよりも満天。四魂の欠片は、見つかったんか？」

「あつ！そう言えば！」

何かを思い出した満天。

「あん？」

「ごめんよ兄ちゃん！つい！」

「ついつって何だよ？」

平然な顔の飛天。

「お前、四魂の欠片より女が眩んで取り逃がしたのか!!」

ドスツ！

飛天は、急に激情して女妖怪の顔を貫いた。

「「ひいー！」」

満天とかごめめは、驚き叫ぶ。

「ごめん兄ちゃん！」

「全く！俺の弟でなけりや命が幾つあつても足りねえぞ！」

この光景まさに極悪そのもの。

（なによ、こいつ！もつと最悪！）

そして飛天は、満天からかごめをさらった経緯と四魂の欠片が誰が持っているかも説明した。

「何？狐のガキが四魂の欠片を持っているだど？」

飛天は、部屋を後にしようとした。

「取りに行くの飛天兄ちゃん？」

「当たり前だろう！行くぞ満天！」

飛天は、満天を仕切る。

（今だ逃げるチャンス！）

かごめは、逃げる準備をした。

「ちよつと待つてよ兄ちゃん。」

満天は、包丁を持つとかごめに振る。

「きやつ！」

間一髪で包丁の一撃を避けるかごめ。

「な！何するのよ！」



「何ってお前。逃げられねえように殺しとくに決まっているだろう？ お前は俺の大切な毛生え薬になるんだし。」

殺人鬼の顔の満天が言う。

「まって！殺したりしたら・・・」

「殺したりしたら？」

「えっと・・・」

かごめは、考え抜いた。

「四魂の玉が取れなくなるわよ！」

「何!？」

満天は、驚く。

(よっし！弟は馬鹿だからOK。兄貴の方は・・・)

かごめは、飛天を見ると興味あるのか見ている。

「(良かった。ハマリそう!) あんた達、犬夜叉とダイチって知っている？ 結構強いんですけど?」

かごめは、自信満々に飛天にも言う。

「強いだ? 聞いた事あるがそいつら確か半妖と人間だろうが。」

「強いのだよ! だって犬夜叉は、片っ端から妖怪倒して四魂の欠片ほとんど集めているし

ダイチも犬夜叉と同じ位強くてさらに鎧を召喚して纏うと大妖怪も一撃で倒す位なんだから。」

「な！何!？」

雷獣兄弟は、驚く。

(よしっ！バッチリつかんだ！)

かごめは、人物の口車に乗り安心した。

「おい。嘘じゃねえだろうな！」

飛天がかごめに近付き確認する。

「ふっ！それに犬夜叉の方はねあたしに惚れているの。きうと四魂の欠片とあたしって

言えば大人しく四魂の欠片を渡す筈よ。」

嘘八百を並べて言うかごめ。

「飛天兄ちゃん！こんな話嘘に決まっている。」

「俺は信じても良いぜ。」

「え？」

飛天は、かごめに寄り胸倉を掴んで持ち上げる。

「女、その犬夜叉とダイチに案内しな！だだし！」

先程の殺したり女妖怪を見せる。

「もしも口から出たデマカセならこの可愛い顔を風穴で開けるけどな！」  
(本気ねこのデコツパチ。)

かごめは、雷獸兄弟に連れてかれた。

その頃犬夜叉達は。

「わ~~~~っ!!」

七宝がダイチに抱えられて岩から岩へ飛び跳ねてた。

そしてその前には自転車を持った犬夜叉も同じ様に飛び跳ねてた。

「どうした七宝? ひっくり返ってるぜ?」

「このまま帰るか?」

犬夜叉とダイチは、七宝に聞く。

「ドアホ! おらはおつとうの仇を討つんじやい! お前らこそ本当に強いんじやろうな?」

雷獸共は四魂の欠片で妖力を高めているんじやぞ?」

「その方がぶつ倒しがいいがあるってもんだぜ。」

大きい岩山に一旦集まる犬夜叉とダイチ。

「それよりかごめの身が心配じゃ!」

冥加が何故か汗だくになっている尋常でない。

「あの女は大丈夫だろ? 妙にしぶといからな。」

犬夜叉は、全然心配そうじゃない。

「だと良いんじやが、何しろあの雷獣兄弟……良い女を攫っては即刻食ってしまうとの噂ですじゃー！」

「マジかよ!？」

「本当か!?!そしたらかごめはもう!」

ダイチと七宝は驚くが犬夜叉に限ってそうでなかった。

「バーカ!かごめの何処が良い女なんだよ?」

かごめを良い女だと思わない犬夜叉。

「何?お前の目ん玉は節穴か?」

「んんん……わしも良い女だと思いませんぞ犬夜叉様。」

「俺も思うがかごめは、邪美や烈火やカオルよりも良い女で美少女だぞ?」

「誰だそいつら!？」

「おれの元々の世界にいる女達の名前だ。」

淡々と言うダイチ。

「きつと喰われちまつてる!オラのせいだ!」

「美人薄命ともうしまうからな。」

「おいおい、勝手にかごめを殺すなよ。」

苦笑したダイチが突っ込んだ。

「犬夜叉！何素つ頓狂な顔をしている!?!かごめは美人だから喰われているのかも知れんのだぞー！」

「だから、何処をどうするとかごめが良い女になるんだよ？」

「いやいやあれは普通に美少女だぞ犬夜叉。」

ダイチは、ウンウンと答える。

「前々から思っておりましたが犬夜叉様の美意識は、少しズレています。」

「あゝゝっ！どうりで変な髪型でわけのわからん服を着ると思った。」

「確かに赤色一色と言うのは少し問題ありますな。もう少し粋な格好がよろしいかと。」

「この際だからイメチェンも「ワーーーーー!!もうてめらうるせい!何で俺の格好な話になつてんだよ!」

ピカッ!

雷が犬夜叉達の所に落ちた。

シュッ!

犬夜叉達は、避けた。

「ふっ！避けたか？人んちの玄関先でゴチャゴチャわけのわからねえ事言っている割には良い動きしてるよな。テメエらだな犬夜叉とダイチって言う半妖と人間は。」

飛天が空にいた。

「犬夜叉様、雷獣の兄飛天じゃ。」

「こら！かごめはどうした!？」

七宝が犬夜叉の肩に乗り聞く。

「安心しな！まだ指一本も食つちやいねえよ。満天。」

「はいよー！」

満天が現れかごめを見せる。

「犬夜叉！」

かごめの無事がわかった。

「かごめ！（まだ生きてたか・・・）」

何故か安堵をする犬夜叉。

「へっ！その話だと女の話は本当らしいな。四魂の欠片を洗いざらい全てだしな！惚れた女を助けたかったらな！」

雷が降り注ぎ終わると犬夜叉の様子がおかしい。

「惚れた女？」

「まさかそんな話術で雷獣を騙すとは流石かごめ。」

犬夜叉は、ますます不愉快な顔になりダイチに至っても感心する。

「待てコラ！誰が惚れた女だあ!？」

犬夜叉は、睨む。

「何照れてるのよ!」

「おめえやつぱり嘘か?」

満天は、かごめの頭をぐりぐりしながらかごめも可愛つ娘ぶつてえへっ!言い返す。

「誰がお前の為に大切な四魂の欠片を渡すかよ!」

「何よ!あんたあたしを捨てる気!？」

「捨てるだあ?それじゃあ俺とお前が出来てるみたいじゃねえか!」

「四魂の欠片とあたしの生命どっちが大切だと思ってるのよ!欠片なんて言ったらその口品曲げやるんだから!」

夫婦漫才の様になりそうになるかごめと犬夜叉。

「なんにしろだ。四魂の欠片を持つてゐるって事だけは本当らしいな。ぶっ殺して懐探らせて貰うぜ!」

飛天は、急降下で犬夜叉の方に向かう。

「へっ!返り討ちにしてやら!」

犬夜叉は、鉄碎牙を抜く。

「雷撃刃!」

飛天の槍に雷光が集まる。

ガキーン！

犬夜叉と飛天の押し合いが始まる。

「俺の雷撃に何時まで耐えられるかな？」

「でりやあああ!!」

犬夜叉は、押し返した。

「余所見すんな！」

ダイチがブーメラン投げで攻撃する。

「よつと！」

飛天は、かわす。

「ダイチ！手出すな！」

「あいよー！」

魔戒斧が戻ったダイチは、犬夜叉の戦闘に今のところ参加しない様子だった。

「それじゃあ！楽しんで貰うぜ！」

（この雷獣野郎！厄介だぜ！）

犬夜叉は、この飛天の力を先程の押し合いではつきりと理解した。

つづく



## 覚醒

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

前回のあらすじ

四魂の欠片を集め旅をする犬夜叉達は、雷獣兄弟に父を殺され仇を討とうとする子狐妖怪の七宝に奪われる。

そんな七宝を追いかけるかごめは雷獣兄弟の満天に攫われてしまう。

かごめを助けたいと思いい犬夜叉達に頼む七宝は、犬夜叉達と共に雷獣兄弟の場所に向かう。

かごめも攫われながらも得意の話術で雷獣兄弟に殺されず犬夜叉は自分に惚れていると嘘を言い雷獣兄弟と共に犬夜叉達の所に向かう。

そして互いに出会い戦闘が始まるのであった。

「ふっ！ 罫りがいがありそうだな。楽しませて貰うぜ。」

「けっ！ 今まで俺にそんな口を聞いて楽しい思いをした奴は一人もいねんだよ！」

犬夜叉は、飛天の言葉に喧嘩腰に言い返す。

「上等だ！俺の雷撃刃たつぷりと味わいな！」

再び雷が降り注ぐ。

「どうした!?ちゃんと受けないと死ぬぜ！」

「くっ！」

流石の犬夜叉も飛天の雷撃刃を浴びれば危ないと理解したのか鉄砕牙で隙のない防御を構える。

「犬夜叉、飛天の始末は任せたぞ。」

岩の陰で隠れていた七宝がかごめを救おうとしていた。

「犬夜叉！」

「はっはっはっ！頑張れ飛天の兄ちゃん！加勢するぞ！」

満天は、口に電気を溜め始める。

「二人がかりなんて卑怯よ！えーい！」

かごめは、隙を見つけて満天を乗っていた雲から落とした。

「やった！えっ？」

満天が地面に落ちると乗っていた雲は、消えてかごめも落ちた。

「きゃああああっ！」

「かごめ！」

犬夜叉は、助けに行こうとするが。

「へっへっへっ！女の心配している場合かよ！」

飛天に邪魔されて犬夜叉は、かごめを助けに行けない。

「かごめ！俺が来るまでがんばれよ！」

「この状況をどう頑張れって言うのよ！」

そうかごめは、高い場所から落ちているのである。

シユツ！

「よう！お待たせ！」

ダイチが上空でかごめをキャッチした。

「ダイチさん！」

かごめも安心したが未だに高い場所にいる。

「よっし！真下に丁度いいクッションがあるから大丈夫だろ？」

「クッション？」

かごめは、真下を見ると満天が倒れていた。

ドシーン！

「グフツ！」

満天は、ダイチにそのままクッション代わりに使われて怯んだ。

「無事に着地成功。」

ダイチは、かごめを降ろすとVサインをした。

「このアマ！この野郎！」

満天が起き上がる。

「狐妖術！潰しコマ！」

大きいコマが満天の頭に押し潰して動きを止めていた。

「かごめ！ダイチ！こつちじゃ！」

ダイチとかごめは、声のする方に向かう。

「七宝ちゃん、あんた凄い技持っているのね？」

「まあな！」

「ん？七宝？なんか隠しているだろう？」

ダイチは、七宝の顔を見て察したのか聞く。

「ダイチの言う通りじゃ。」

七宝の肩に乗っていた冥加が説明を始まる。

「狐妖術は、所詮はまやかし幻にすぎん。」

「「え？」」

かごめとダイチは、振り返ると先程の大きいコマが徐々に小さくなっていきただのコ

マに戻る。

「くそっ！あの狐のガキ！はっ！」

満天の二本ある髪の毛の一本が抜ける。

「そっ！そんなあ?!」

満天は、触ると髪の毛が・・・髪の毛があと一本しか残っていないかった。

「俺の髪!!」

満天は、口から電撃のブレスを吐きまくる。

「わああああっ!!」

ダイチとかごめは、一目散に逃げる。

ダイチはダイチで避難出来る場所にかごめはかごめで七宝や冥加と共に避難出来る場所にそれぞれ距離がある所に逃げた。

「何処だくく!?!毛生え薬と子狐野郎!?!」

満天は、かごめの方に行き探し始める。

「あのブサイク、毛が無いことにコンプレックスを抱えているのか。」

ダイチは、冷静に遠くから満天の言葉を聞く。

「ど、どうしよう?見つかつたら殺される。」

隠れた所で満天に刺さった矢を見るかごめ。

「そうだあの矢！もう一度使えるかも。七宝ちゃんちよつと。」

かごめは、七宝の耳元で何かを言うとうわかったかのように七宝は行動を始める。

「そこか！」

満天は、電撃のブレスを気配のする方に目掛けて放つ。

「ん？」

目の前にはかごめしか倒れていなかった。

「このアマ！逃げられると思つたのか!？」

満天は、かごめの長い髪を驚掴みにして持ち上げる。

「うるさい！」

突然目覚めて大声を上げて満天に笑う様子のおかしいかごめ。

「ほれ！お前の好きな髪の毛じゃ！」

かごめの髪が伸びて満天に絡みつく。

真横からかごめが出て来た。

「な！女が二人!？」

満天もどういふ事が理解出来なかつた。

「あたしの矢返して貰うわ！」

満天に刺さった矢を抜くかごめ。

「テメエ狐か!？」

「おつとうの仇を討たせて貰う!」

かごめに化けていたのは七宝だった。

「七宝ちゃん、そのまま抑えてて!」

かごめは、矢を満天の額の四魂の欠片を貫けば倒せると確信した。

「たあ!」

かごめは、カ一杯満天の額に目掛けて刺そうとした。

が!

満天は、髪を引きちぎってかごめの攻撃を跳ね返して七宝も投げ飛ばされた。

「首を絞めて殺してやる!」

満天は、かごめの首を絞めて始めた。

「くっ・・・犬夜叉・・・」

かごめは、微かな声で犬夜叉を呼んだ。

「かごめ!」

犬夜叉は、かごめの危機を直ぐに目で理解した。

グサッ!

犬夜叉の肩に飛天の雷撃刃が刺さる。

「何余所見してんだよ！」

飛天は、そのまま犬夜叉を斬り倒された。

「ぐああああつ！」

犬夜叉は、鉄砕牙が離れると変化が解けて元の姿に戻る。

「へっ！口程にもねえ。俺は楽しみたかったによ！腰抜けが！ゆっくり手足もいで鬻り殺そうか？」

雷撃刃を向ける飛天。

流石の犬夜叉とかごめが気になって上手く戦えない様子だった。

「見ろよ満天！腰抜かしちまったぜ！」

満天に聞こえる声で飛天は、言う。

「こつちも楽しいよ飛天兄ちゃん！はっはっはっ！面白いな死にかけてた女の顔はよ！」

満天は、かごめを鬻る事に快感を持っているようだった。

「く！くそ！止めろ！」

七宝が止めに入る。

「うるさい！」

満天は、七宝を殴り飛ばす。

「はっはっはっはっ！悔しいだろ!?子狐！待つてろよ、この女を殺したら次はテメエの



毛皮を剥いでやる！親父みていにな。」

満天は、腰に巻かれた七宝の親父の毛皮に手を当てて言う。

七宝の目には怒りが宿る。

「テメエの方は頭巾にしてやるかな。親子揃って毛が抜けるまで使い込んでやるぜ！」

「ほう、満天！お前も言うようになったじゃねえか！」

飛天は、残酷な事を言う満天を褒める。

「ゆるさねえ！」

七宝は、走り出し満天の喉元を噛んだ。

「ばーか！」

満天には、効かない様子らしくそのまま離そうとしたが七宝は離さない。

「死んでも離すもんか！」

「離せよっ！離さねと頭の骨を粉々にしちまうぞ。」

満天は、七宝を殴り続けるが七宝はそれでも離さない涙が出ても。

ガシッ！

七宝の頭を殴っていた満天手が止まる。

「？ダイチ……」

七宝は、目を開けて見ると鬼の形相のダイチが満天の手を掴んでいたが七宝にとって

はその姿は希望に等しくそのまま気絶した。

「ワリイな。遅くなった。」

「何だテメエ！」

満天が言うのと掴んだ手が少しずつ音が出て来た。

バキィッ！

「わあああああつっ!!」

満天は、かごめを離すと地面に転がり折れた手を抑えた。

「誰の毛皮を剥いで毛が抜けるまで使い込んでやるって？テメエは、髪の毛を気にしてるなら全部抜いてやる!!」

ピリッ！ピンッ！

ダイチは、満天の背後のお下げ髪を抜き頭の最後の毛を手で掴み取った。

「お！俺の髪の毛!!」

満天を怒らせ口に電撃を溜めでダイチの方に放つがダイチも魔戒斧を回しながら正面に円を描いた。

「はっはっはっはっ！消し飛んだぜ！」

電撃のブレスを放った場所は、未だに煙が舞い上がっている。

『おい、そんなもんか？』

「!?」

煙が消えると戯牙になったダイチが現れる。

そして戯牙のあたりの地面は消し飛んでいなく満天の攻撃が放った瞬間に左手で余裕で防いでいた。

『じゃあこつちのターンだ!』

戯牙は、獣身斧を持っていたのを地面に刺す。

『おりゃあああ!!』

戯牙は、右手で満天の腹にボディーブローを決めると左足で首狩りが終わると怯んだ満天の頭を軽く持ち逆さまにさせ瞬時にパイルドライバーを決め3コンボが決まる。

「調子こくな!」

満天は、またさっきの攻撃をするが。

『馬鹿か? 同じのが通用すると思うのか?』

戯牙は、満天の顔にギリギリで見ると獲物を見ると天敵の威圧感で満天に恐怖を産ませた。

吐こうとする電撃を戯牙は、掌底の構えに両手を変えそれぞれ右手で顎を左手で頭を挟み電撃を出なくさせた。

その結果。

ボウツ!!

逃げられない電撃が満天の頭の中で発電して頭が焦げた。

「くそっ……」

満天は、未だに倒れない。

『俺はな、自分自身ロクでもない位の人もボコボコする程の不良魔戒騎士だけだな……お前から害獣兄弟を見てると不愉快だ! そう思うだろう犬夜叉?』

飛天の所にいる犬夜叉を見る。

「ああ、まったく俺もそれ程いい奴じゃねえけどよ……なんかテメエら胸糞悪いや! 血刃鉄爪!!」

犬夜叉は、飛天に傷付けられた所を使い血刃鉄爪を使って距離を置いた。

そして変化の解けた鉄碎牙を持ち再び変化をさせると飛天に目掛けて投げる。

「バーカ! どこ見てやがる!」

飛天は、鉄碎牙を余裕で避けるが何か違う。

「やったか?」

「何!?!」

飛天は、その後ろには満天がいる事に気付くがもう遅い。

「ぐああああっ!」

満天は、鉄碎牙に刺されると戯牙も獣身斧を持ち両手足を斬り最後には首まで斬った。

「満天！」

飛天は、満天の所に向かう。

『かごめ！七宝！無事か？』

戯牙は、二人の無事を確認した。

「うん。あつ！犬夜叉の鉄碎牙。犬夜叉に渡さなきゃ。」

「お・おつとう。」

「そうだ。七宝ちゃんのお父さんの毛皮も。」

かごめは、鉄碎牙を満天から抜こうとしたが気絶している七宝を見て満天に巻かれて  
いる七宝の父親の毛皮を取る。

「満天!!」

飛天が満天の所に向かうとかごめ達に雷撃刃を放った。

『ちっ！』

戯牙は、かごめと七宝を抱き抱えると飛天から離れた所に避難した。

「おい！生きてるか!?!」

すると犬夜叉がかごめ達の方に来た。

「犬夜叉ごめん。鉄砕牙取り損ねちゃった。」

「それでグズグズしてたんか？くだらない心配してじゃねえ！刀なんぞ無くつたて俺が  
あんな奴に負けるか！」

本当はかごめが心配な犬夜叉だった。

「満天・・・わああああっつ！！満天が死んじまった！」

飛天は、満天の首を抱き抱えて泣いていた。

「可哀想に！兄ちゃん！いつまでも一緒にいてやるからな・・・」

飛天は、満天を食べ始めた。

『おいおい！』

「た、食べてるの!?!」

戯牙とかごめは、驚く。

「いや！そうじゃない。」

戯牙の肩には冥加が乗っていた。

「飛天の奴、満天の額にあった四魂の欠片を体内に取り込んでおる。犬夜叉様、用心なされよ奴は5つの四魂の欠片の力を得た事になる。」

冥加は、自分が今までいたかのように説明した。

「それはいいが冥加ジジイ。今までどこにいたんだ？」

『こつちが大変な時によ!』

「どうせ安全な所に逃げてたんでしよう?」

犬夜叉達の推理は当たっていた。

「都合のいい時だけ出てきやがって!」

『いつかしつけてやろうかと思つてたが。』

犬夜叉と戯牙は、冥加に突つかかる。

「こゝ細かい事をぐちぐちと。」

冥加は、屁理屈をこいていた。

『「ん?危ない!」』

犬夜叉は、かごめを戯牙も七宝を持つて飛天の雷撃刃を素早く避ける。

「デメエら・・・よくも可愛い弟を!絶対に許さないからな!」

飛天は、殺る気満々だった。

(雷撃刃の威力が増してやがる5つになった四魂の欠片は伊達じゃねえな!)

犬夜叉も今の飛天が以前よりも危なくなっている事がわかる。

「かごめ、七宝を連れて出来るだけ遠くに逃げろ!」

『今回ばかりは俺らでも手が余りそうだからな。』

「うん!」

かごめは、七宝を連れて安全な所に避難した。

「弟の怨み思い知れ！」

飛天は、雷撃刃から雷撃を放つが先ほどの10倍以上に膨れ上がっていた。

「デカすぎる避けきれねえ！」

『先行くぞ！』

戯牙は、犬夜叉の前に来ると雷撃刃の雷撃を両手で押し付けたが！

『ぐああ！』

ズズッ！

徐々に背後に押されてる。

「犬夜叉様！鞘じゃ！鉄碎牙の鞘を使いなされ！」

犬夜叉の肩にいる冥加が助言をする。

「何だと!？」

「必ずや雷撃を防ぐ筈！」

「本当か!？」

犬夜叉は、目の前に来る雷撃を鞘を使い戯牙と共に防ぐ事にした。

「何!？」

すると雷撃の威力が徐々に減って行く事に驚く飛天。



『何だよ？これ？』

「何なんだ？」

戯牙と犬夜叉は、鉄碎牙の鞘の力に驚く。

「やっぱり思った通りじゃ。妖刀鉄碎牙を納める鞘であるからには雷獣の妖力を封じられん筈はない。」

冥加は、当てずっぽうながらも説明した。

「つて！やっぱり当てずっぽうか！」

『博打感覚でするな！下手したら俺でも危ないんだぞアレ！』

犬夜叉達は、冥加に文句を言う。

「兎に角！ワシとて逃げ遅れ危うい所じゃった。折角命拾いしたんじゃ逃げましょう！」

冥加は、逃げたいらしい。

「冗談じゃねえや！こいつは使えるぜ！」

『同感！良い攻略道具が見つかったんだぶつ倒すに決まってる！』

犬夜叉達は、飛天に向かう。

「洒落臭いや！」

飛天は、再び雷撃を放つ。

「懐に入ればぶっ倒せる！」

『隙が出来たら俺だけで防ぐから自由にやんな！』

「おう！」

雷撃が消えると犬夜叉は、奥にいる飛天を探すがいない。

グサツ！

「ぐあー！」

飛天は、背後に回っていた。

「誰の懐にだよ！」

そのまま犬夜叉は地面に落ちていく。

『おうらー！』

戯牙も飛天を殴り返そうとするが飛天の足に付けてある火車が上昇して避けられるとそのまま柄の部分を使い地面に叩き落とした。

「犬夜叉！ダイチさん！」

かごめは、離れた所から見守る事しか出来なかった。

「うう・・・」

気絶していた七宝が目を覚ますと父親の毛皮を確認して触る。

「七宝ちゃん気が付いた？」

「かごめ？満天はどうした？」

「犬夜叉とダイチさんが倒してくれたんだけど。兄の飛天の方が。」

かごめは、七宝に気絶している間の事を説明した。

「丸焼きより！なます切りにされてえか！」

飛天は、雷撃刃で犬夜叉と戯牙に素早い攻撃で押していた。

「犬夜叉達苦戦している。」

かごめが再び見ても犬夜叉に分が悪い事には変わらない。

「あいつは空を自由に飛べるからな！」

七宝の言葉を聞いた後にその飛ぶ元を見るかごめ。

「飛天の火車？そうだ！」

かごめは、閃き何かを探す。

「ああ、弓さえあれば！」

「オラに任せろ。恩を返さないとおっとうに怒られちゃうもんな。」

七宝は、頭に葉っぱを乗せると変化を始める。

（そっか！弓に化けるのね！）

変化が終わると変な生き物に変わる。

「それってカタツムリ？」

「弓じゃ……」

七宝は、すまない気持ちで一杯だった。

『ぐああああつ!』

犬夜叉達もそろそろ限界らしく倒れた。

「ん……」

かごめは、七宝の化けた弓で矢を構えるが放とうとしない。

「どうしたんじやかごめ?」

「矢は一本しかないし、あんま当たった試しが無いの。」

「恥ずかしそうに言う。」

「オラも力を貸す!」

「ありがとう七宝ちゃん!」

かごめは、飛天の火車に目掛けて矢を放つ。

「パキッ!」

「何!?!」

見事に火車の片一方の方を射ぬけて壊した。

「当たった!」

かごめは、命中した事に喜んだ。

『犬夜叉！良いぞ！』

戲牙は、飛天の両足を持って犬夜叉を見る。

「今だ！」

犬夜叉は、雷撃刃を直接握った。

「馬鹿かテメエら！」

そのまま雷撃が犬夜叉と足を掴んでいる戲牙に攻撃される。

「無茶じゃ！いくら頑丈な犬夜叉様や鎧をつけたダイチとて無理じゃ！犬夜叉様は直接雷撃刃を握って何ができると言うんじゃ!？」

冥加が何故かかごめ達の所にいた。

「冥加じーちゃんいつの間にかここに？」

かごめは、軽蔑の目で見ていた。

「えーい手を離せバカモーン！」

そう言うのと。

「この鞆邪魔だ！」

犬夜叉は、投げ捨てた。

『良いぞ！良いぞ！命知らずで面白いな犬夜叉は！』

戲牙に対しては犬夜叉の面白い行動に笑っていた。

「大バカ者！誰が鞆の方を手放せと言った!？」

冥加は、また怒る。

「この方が良いんでい！」

鞆が投げ捨てた代わりに拳を作り飛天に殴り飛ばす。

「思い知ったか！このデコ助!!」

犬夜叉は、飛天に殴って馬鹿にした。

「殴り飛ばした!?!」

「簡単だけどすげー!」

確かに簡単だか誰にでも早々に出来るだけ事ではない。

「流星は、犬夜叉様！体力勝負に持ち込まれた！そこじゃ！鞆の連続攻撃じゃ!」

「今さつきバカ呼ばわりしてなかった?」

かごめが冥加に突っ込んだ。

「へっ!」

殴り飛ばされた飛天は、起き上がる。

「面殴られたのは生まれて初めてだ!」

飛天は、光り出すと周りの温度が上がっていく。

「ヤバイ!」

犬夜叉は、投げ捨てた鞘を持つと飛天の雷撃刃を受け止めるが。

「この半妖野郎がさんざん悪足掻きしやがって！」

パキッ！

鞘にヒビが入る。

『不味い！』

鉄牙は飛天に殴るが異常なくらいの電気の光が飛天の鎧の様になっており逆に跳ね返され飛ばされる。

「いかん！ 鞘の結界が破れたらいくら頑丈な犬夜叉様でも！」

「ダメなの？」

かごめは、飛天が犬夜叉達に注意していない事に気付くと鉄碎牙のある方を見る。

「鉄碎牙を犬夜叉に渡さないと！」

「よっし！ オラが！」

「七宝ちゃんダメよ！ 今動いちゃ！」

かごめは、七宝を追いかける。

「？」

飛天は、首を後ろに向けるとかごめと七宝を見て口から電気を貯めている。

「（これは満天の雷撃!? 弟の技も使えるのか？）あぶねえ！ 逃げろ！」

犬夜叉は、叫ぶが遅かった。

飛天の放った雷撃は、かごめ達に命中した。

「かごめ！」

「へっ！ぎまーみやがれ！」

「かごめえええええ!!」

犬夜叉は、叫んだ。

「死んだ様だな女もガキも！」

『かごめ!!七宝!!』

起き上がる戯牙は、先ほどの飛天の攻撃を見ており何がとてつもない怒りが湧き上がる今まで感じたことがないほどの。

『許さねえ……』

ギリ……

戯牙は、拳を血が滲む位の握り締めた。

シュッ!

そして犬夜叉と取っ組み合いしている飛天の横腹をストレートパンチが決まり吹っ飛んだ。

「なっ！」



犬夜叉は、先ほどの戯牙の攻撃でない事に気付き戯牙を見ると戯牙の身体から何が浮かび上がっている。

(これは、何だ!?ダイチの身体から出ているのは・・・霊力だ!桔梗のと同じ位の霊力が溢れてやがる!?)

犬夜叉でもわかるほどの強大な霊力だった。

「やってくれるじゃねえか!・・・?」

『おらああ!!』

ドカーン!

「ぐああああっ!」

目に見えない拳を飛天に放つ。

『飛天!俺はな敵でこんな殺してやりたいと思つたのは生まれて初めてだ!』

ピカッ!

銀色の瞳に霊力の光が宿る。

「仲間を殺されて頭に血が上ったか!?そんな下らないもの為にガタガタすんじゃねえ!弟を殺された兄貴の気持ちがあんな物なのかテメエの腸に教えてやら!!」

飛天は、雷撃刃を振り下ろすが戯牙も左手で軽々と受け止める。

『お前はテメエ自身の快樂の為に罪も無い妖怪や人間達を殺し!そして俺の仲間のかご

めや七宝を殺めた!』

戯牙のマシガンのようなパンチが放たれると飛天は、雷撃刃を手放した。

「くっ!!」

ゴコ!バコン!

戯牙のフックとアッパーを飛天に食らわせる。

そしてまたマシガンパンチを飛天に当て続ける。

『ダメエらに殺され行き場の無い魂達の思いを込めて!俺の血までもがお前を殺す為に燃え上がっているんだ!!』

ガゼルパンチを決める戯牙。

「調子こくじゃねええ!人間風情が!!」

飛天は、口に雷撃を貯めるが先程と比べ物にならない程の量を放った。

『気合いだあぁあ!!』

戯牙は、足を左右力強く踏み込むと右手に靈力を貯めてそのまま左手で投げ飛ばした。

『オリヤアアアアッ!!』

飛天と戯牙の攻撃は、互いにぶつかり合い押し合っていた。

そして

ドカーン!

互いの力は相殺したのか辺りを爆発させた。

『はあっ!はあっ!はあっ!はあっ!はあっ!』

戯牙は、流石にブツブツケ本番の様な未完成技を出して動けないのか膝を地面につけた。

カチツ!

『!』

飛天は、雷撃刃を持って戯牙の前にいた。

「不味いここのままだと!」

ドクンツ!

すると鉄碎牙の鞘が脈打った。

「鉄碎牙!」

鉄碎牙が自然とやって来た。

ガシツ!

「鞘が刀を呼んだ!」

遠くから見てる冥加も驚いた。

「鉄碎牙!」

犬夜叉は、鉄碎牙を飛天目掛けて斬り下ろした。

飛天も戯牙に目が行っていて犬夜叉に眼中に無かったのか直ぐに雷撃刃で防ごうとしたが動かない。

『余所見すんな!』

戯牙が雷撃刃を力一杯持っている。

ズバツ!

飛天は、真つ二つになる。

「俺が負けた?・・・半妖野郎と人間にこの俺が・・・」

直ぐに飛天の身体は砂の様になり無と化した。

そして残ったのは5つの四魂の欠片だけだった。

戯牙も直ぐに鎧を解くとダイチになり身体全身汗まみれで倒れる。

「チクシヨウ!俺がもつと早く飛天を倒していれば。」

犬夜叉は、悔いても悔やみきれない。

「しっかりしろよ犬夜叉。」

起き上がったダイチが心配そうに見つめると何やら青い光が見える。

《犬夜叉。色々とありがとう。》

振り向くと青色のを纏ったかごめと七宝がいた。

「おお、あれぞ二人の魂。」

冥加は、かごめ達を見て言う。

「何か・・違う気がしなくも無いんだけど・・」

ダイチは、おかしすぎて疑う。

「待て行くな！」

犬夜叉は、かごめの手を掴んだ。

青い炎が空へ向かって成仏して来い。

「かごめえええええ!!」

「はい？」

犬夜叉は、叫ぶがかごめは未だにいる。

「つて生きてる？」

「ああ、生きてるな。」

「え？」

かごめは、犬夜叉とダイチの言葉に何言っているんだという顔で見た。

(おつとう狐火でオラ達を守ってくれたんだな。)

七宝は、成仏した父親に感謝した。

「うむ、ワシが見た通りあれは毛皮から発した狐火であつたな。」

冥加は、自分が言ったかの如く説明した。

「二人の魂じゃなかったのか？」

犬夜叉とダイチは、顔を引きつけて言う。

「あの……」

犬夜叉に手を掴まれて顔を真つ赤にするかごめ。

「けっ！」

犬夜叉も顔を真つ赤にして手を振り払った。

「テメエら紛らわしい事言ってるんじゃないやねえよ！死ぬなら死ぬ！死なねえなら死なねえ！はつきりしやがれてんだ！」

真つ赤になった犬夜叉は、顔を背後に向けた。

そして犬夜叉達は、そんな状態が旅をしていも続いていたのでかごめが聞き始めた。

「ねえ犬夜叉どうしたのよ？何怒ってるのよ？」

「うむ、感動的に勘違いしてしまった事が恥ずかしいのじゃ。犬夜叉様もまだまだ幼い。」

冥加が調子良くしていると犬夜叉は、グーの構えを見せてビビりかごめの自転車に隠れる。

「おい、七宝！そろそろ帰れよ！」

そう何故か七宝も付いてきてしまった。

「何じやい!? オラが一緒にいたらいかんのか!」

七宝も不満に言い返す。

「良いじゃねえかよ。一人増えた位よ。」

「そうよ。七宝ちゃん一人ぼっちなんだから。」

ダイチとかごめが七宝をかばう。

「そうじゃ! そうじゃ! これでもオラはか弱い子供なんじゃぞ?」

「けっ! 都合のいい時だけガキツラしやがって! で! 七宝何時になったら帰るんだ!」

「かごめ! ダイチ! こいついじめっ子じゃ!!」

ダイチとかごめに助けを求める。

「犬夜叉! いい加減にしなさい!」

「その辺にしとけよ。」

注意するかごめと宥めるダイチ。

「おすわりっ!」

犬夜叉は、いつものパターンでかごめに倒された。

## 能面

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

「よし！良い調子になって来たじゃねえか草太。」

「本当？ダイチにいちちゃん!？」

サッカーボールをリフティングしながら言う草太。

何故ダイチがかごめの弟の草太にサッカーを教えているか。

二日前

「はあく、退屈だなく……ん?」

いつも通りの稽古を終え村を散策していた。

そんな時にダイチの目に入って来たのは骨喰いの井戸だった。

「かごめは、犬夜叉と何か楽しそうに話しているみたいだし行くか。」

ダイチは、そのまま骨喰いの井戸に飛び込んだ。

先に断っておくがかごめは犬夜叉と何か楽しそうに話しているわけじゃない。

なぜなら……



「だから！私は中3で受験が控えているの！」

「けっ！そんな事言つて逃げるつもりなんじゃねえのか!?」

「だから何度も言わせないでよ！五日後には大切なテストがあるの！」

そんなやり取りで中々かごめは大ファン（?）の犬夜叉に逃がしてもらえなかった。

「この暗い感じがごめの時代だな。」

ダイチは、井戸を登りそのまま外へ出る。

「わわっ！」

草太は、サッカーボールでリフティングの練習をしていたが中々バランス感覚がうまくいかずに転んだ。

「おいおい、大丈夫か?」

ダイチは、直ぐに駆け寄り草太に手を差し伸べる。

「あ！あの時の確か・・・」

草太は、思い出そうとしたが名前が思い出さない。

「ダイチだ。よろしくな。」

「僕は、かごめ姉ちゃんの弟の草太。」

草太は、自己紹介をダイチにする。

「サッカーボールか・・・」

ダイチは、サツカーボールを持つとインサイドやアウトサイドやヘッドのリフティングを落す事無く数分間草太に見せる。

「すご〜い!!あのさ僕にも教えてよ!」

「つて良いのか?俺みたいので?」

「良いに決まっているじゃない。僕の知っている人で上手いのはダイチにいちちゃん位だよ。」

目をキラキラさせた草太がダイチに頼む。

「まあっ、テキトーに教えるから真剣に受けるなよ。」

頭を掻きながらも快く了解するダイチ。

「もう少し落ち着いてやって構わないからな。気付いたらノートとかにまとめを書く事が良いかもな。」

ダイチは、さりげなく様々なアドバイスを草太に教える。

「草太、帰つてたの?」

教えるいるとかごめのママが買い物袋を持ってやって来た。

「あら?貴方は確か・・・」

かごめのママは、ダイチの事を覚えていたらしい。

「ご無沙汰しています。かごめちゃんの知り合いのダイチつて言います。よろしくお願

いします。」

ダイチは、礼儀正しくかごめのママに挨拶をする。

「いつもかごめがお世話なっているわね。ところで草太は、ダイチくんと何していたの？」

「うん。ダイチにいちちゃん僕の為にサッカーを教えてくれたんだ。」

草太は、かごめのママに説明する。

「良かったら夕飯食べていけない？」

「え？けど……」

ダイチは、草太を見る。

「いいよ。食べていきなさいよ。」

草太は、快く誘ってくれた。

そんなこんなでダイチは、この二日間草太のサッカーの練習をしながら神社の手伝いをしながら過ぎていった。

「さて始めるかの。」

かごめの祖父は、陰陽師のような格好になりそのまま骨喰いの井戸へ向かう。

「かえりくたまえくく！もどりくたまえくく！」

祈祷を始めるかごめの祖父。

「じいちゃん本当に効くのその祈祷？」

「効く！これは我が日暮神社に伝わる由緒正しく祈祷。最後に清めを。」

かごめの祖父は、酒を骨喰いの井戸に投げ込もうとした途端にダイチが止める。

「おじいちゃん。そんなちつとじゃダメだつて！この位大きいお酒をやらないと効果ないよ。」

何故かダイチは、ビールの入った樽を両手で持つ。

「いや・・量が多いの問題じゃあない気がするがな。」

「何事も試しと気合！気合！」

「そうじゃな。」

かごめの祖父は、神酒の入った桶を井戸にダイチの持ったビール樽と同時に流す。

「かえりくたまえく！もどりくたまえく！」

ドバアアアアツ！！

「・・い」

井戸から声が聞こえた。

「何か聞こえた？」

草太は、直ぐに井戸に向かうが。

「空耳だろ？ほら草太も手伝え。」

ダイチは、ウオツカの入った瓶を草太に渡した。

「え？僕も？」

「もしかしたら三人でお酒を入れ続ければ成功するだろ？」

「うん！わかった！」

草太は、ウオツカの瓶を開けるとかごめの祖父も神酒が無くなってビール樽をダイチと共に二人がかりで入れ続けてた。

「「かえりくたまえく！もどりくたまえく！！」」

三人は、ひたすらお酒を井戸に入れる。

「ちよつと！いるからやめてよ！」

「「ん？」」

かごめの祖父とダイチは、井戸の中を見るとかごめがお酒まみれでいた。

「おお！効いた!？」

ダイチは、適当にお酒を入れ続けてかごめが現れたことに驚く。

「おお！かごめ！我が祈り成就せり！」

かごめの祖父は、涙を流しながら喜ぶ。

「じいちゃん・・・心配してくれるのは嬉しいけど・・・ヒック！」

かごめの顔は既に真っ赤になっていた。

「草太！見てみるよ！」

ダイチは、草太を呼んだ。

「うわ！本当に祈祷が成功した！」

「我が跡取りよ！大祈祷しかと伝授したぞ！」

かごめの祖父は、草太に自信気に言う。

「え？僕跡取りなの？」

「当たり前だ！」

「嫌だよサッカー選手になるんだもん！」

「まあ可能性にはあるかもな！」

ダイチは、苦笑いで草太を見る。

「サッカー選手？フオワード？キーパー？」

三人は、別の話で盛り上がっていた。

「そんな事良いから・・・ヒック！荷物・・・手伝って・・・うつ・・・」

かごめは、直ぐに酔いが回りそうになる。

「あ！悪い！悪い！待ってるよ！」

ダイチは、体をロープで巻き直ぐに井戸に降りてかごめと荷物を引き上げた。

だが既にかごめは、酔いが回り寝てしまう。

そして気付くと自身の部屋におりその翌日の早朝になっている。

かごめは、シャワーを浴びて軽食していた。

「にやう！」

かごめの膝にいる日暮家の愛猫ぶよは変なクシヤミをしていた。

「どうしたのぶよ？変なクシヤミして？お酒の匂い取れてないのかな？」

かごめは、匂いを確認するとぶよも距離を置いた。

「はい！新しい制服お部屋に置いておくからね。」

「ママ、ありがとう。」

かごめのママがやって来て制服を見せるとかごめの部屋に持つて行った。

「かごめ？犬夜叉は、どうしたんだよ？」

「そうそう、犬の兄ちゃんも連れてこなかったの？」

ダイチと草太も軽食をとってかごめ聞いた。

「当たり前でしょ。連れて来るどころか振り切つて来る大変だったんだから。」

「どうやってだ？」

ダイチは、かごめに説明を求めた。

かごめの話によるとかごめは、全速力で自転車を使い骨喰いの井戸に行こうとしたが直ぐに犬夜叉に追いつけられてしまい、高校受験の為に帰るだけと言つても犬夜叉に理

解して貰えずそのまま大岩で骨喰いの井戸を壊そうとしたのでおすわりを何回も連呼されそのまま大岩に潰され動けなくしてから現代に戻って来たらしい。

「不憫な奴だな犬夜叉も。おすわりのスコアが新記録したな。」

トーストを食べながら片手で拝む。

「ダイチさんは、今までこの二日間家にいたの？」

「ああ、大体そうだな。成り行きで。」

コーヒーを飲みながら答えた。

「ねーちゃん。ダイチにいちちゃん凄いなだよ！サッカー上手でこの二日間教えてくれたかったんだ。教えるのも上手いから。」

草太がダイチについて言う。

「まあ、俺元々導師やっていたからな。教えるのは得意なのかもしれない。」

顔を真っ赤にしながら顔を掻く。

「導師？」

かごめと草太は、その言葉に聞き覚えがないのか疑問系が最後に付いていた。

「そうだな。導師って言うのは言わば魔戒騎士の先生みたいなもんだな。けど俺はある掟を破って直ぐに導師をやめさせられた。」

「え？掟？」



かごめは、ダイチが導師を止めさせられた理由が気になる。

「導師は、修練場で教えるんだけどその時魔戒騎士の子供に本当の名前を言わない為に赤とか山吹とか鉢巻の色で呼ぶんだけどな。」

「何でなの？」

草太も聞いた。

「魔戒騎士になれない子供が未来の魔戒騎士の名前を知られない様にする為らしんだ。だけどそんな古い考えは、窮屈だから俺は子供たちに本当の名前を呼んだ。そしたら他の導師と対立してな。四十万ワタルとも対立したな。まあ、そんなこんなで子供たちが修練場から終わった途端直ぐに導師を止めさせられた。俺が教えた子供達は、全員魔戒騎士になれたけどな！」

頭を軽く叩きながら大笑いした。

（この人・・・根っからの不良だ。）

日暮姉弟は、同時に思う。

「まあ、人を殺す以外は殆ど破ったな。鋼牙よりも問題児かもな！けど未だに破っても何の罰もされてないな。謹慎以外はな。」

そう、何で掟を破ったのに何の罰もされないのか通常なら命を削られるのが当たり前だが何もされていない、それはこの物語を進めて行く家にわかる事らしい。

「ねえダイチにいちちゃん。魔戒騎士って何？」

草太がダイチの職業を聞いてきた。

「まあ、公務員みたいなもんか？それよりもう時間じゃ無いのか？」

ダイチは、時計に指を指す。

「ああ！」

日暮姉弟は、驚く。

「あととはかごめに聞いてくれかごめには説明してあるから魔戒騎士について！」

コーヒーを飲みながらマイペースなダイチだが日暮姉弟は、急ぎ支度をする。学校に向かいながら草太はかごめから魔戒騎士について説明を聞いた。

かごめが学校に行っている間、荷物の四魂の欠片を部屋に置いていと日暮家の物置の中にある札の付いた玉手箱が光り出した。

これが事の始まりでもあった。

「おはよー！」

かごめは、自分の通う中学校に着くと友達に挨拶をする。

「かごめ！」

「もう学校来て平気なの？」

友達は、心配そうに聞く。

「へっ?」

かごめは、さっぱりわからなかった。

「心配してアンタの家に行ったら親戚のダイチさんって人が言っていたんだけど重度のヘルニア。」

「私が行った時は骨粗鬆症。」

「その前は白血病の検査入院だって言うし。」

「アンタ大丈夫?」

友達は、心配をかなりしてきた。

(ダイチさん・・・つくならマシな嘘について!)

泣きながら思うかごめ。

???

「日暮!」

かごめは、後ろからの声に振り向くと自転車に乗った少年がやって来た。

「もう身体良いの?」

「え?」

やって来た少年は、かごめの隣のクラスの北条と言う少年だった。

「若いのに大変だな。高血圧なんだって?親戚のお兄さんが言っていたけど?」

(違う！)

かごめは、内心泣いていた。

※ダイチは、結構悪戯好きなので決して悪意で言っていない。

「これ、何もできないけどさ。」

北条は、袋に入った物をかごめに渡した。

「「きやああああ!!」」

かごめの友達は、叫びながら後ろに下がる。

「何、これ？」

かごめは、袋を開けるとサンダルが入っていた。

「健康サンダル！履けよ！」

北条は、爽やかに言うとう自転車をこいて中学校の駐輪場に向かう。

「はあっ？」

かごめは、何故北条にプレゼントされたのかわからなかった。

「ちよつとかごめ！」

「北条君と付き合っているの？」

かごめの友達に驚きのあまりにかごめ聞いた。

「まさか！そんな暇ないよ！」

「けど北条君、かごめに気があるんだ？」

「シヨック・・・」

等とかごめの友達は、北条と言う少年がクラスでも上位に来るぐらいの男子だとわかつていた。

「全然付き合う気無いの？」

「だって・・・」

「まさか！彼氏でもいるの？」

「わあ！彼氏いるんだ!？」

かごめの友達は、そんな風に言うのには訳がある。

かごめがお酒で酔って寝ている時。

「ん？ああ、かごめのお友達か？どうしたん？」

「かごめちゃんは、いますか？」

「ん？かごめはね、今ある奴に連れて行かれてるから今いないよ。」

「ええ？」

「じゃあかごめは？」

「ごめんね、あるわけで病欠は病欠だけど身体が大丈夫な時に面白い奴がいつも来てかごめを誘うんだ。けど奴は根は良い子だから心配無いよ。」

「ある奴つてまさか!」

「まあ、男だね。」

笑顔で言うのと親指を立てた。

「「きゃあああつ!」」

一瞬で黄色い声が響く。

「ああ、そうそう!三人ともワザと知らないふりして聞いてみな!そうするとかごめは、必ず口にするからそいつの事を。タイミング外さないで。」

悪戯好きな笑いでかごめの友達に言う。

「本当?本当にいないの?」

「だつたらどんなタイプが良いの?」

かごめの友達は、良いタイピングだとわかりかごめに質問をした。

「そうだな……乱暴じゃなくてワガママじゃなくて怒りっぽくなくて優しく聞いて聞き分けが良くて……(そう、犬夜叉と正反対な人があたしは好きなのかも。)」

(「(やっぱり本音を言った。)」)

ダイチの指示通りに事が動きかごめの友達は、驚く。

そんな中、日暮神社では大変な事になっている。

「ん?火事か!」

外で掃除を終えたかごめの祖父は、煙の出ている物置に向かう。

「何だ？」

ダイチもかごめの祖父と共に掃除をしているが正反対の所を担当しており直ぐにダイチも物置に向かう。

「何事だ!？」

先に物置に入ったのはかごめの祖父だった。

パリーン!

物置にしまわれた玉手箱が壊れると能の面が現れる。

「此奴先祖代々伝わる封印のお札を壊した!」

【体を・・よこせ・・】

能の面が話してきた。

かごめの祖父は、御神酒をかぶり懐ろから札を出した。

「この面は先々先代が能楽者から除霊を頼まれた面。なお、肉付きの面と聞いておる。こんなにも強力なパワーを持つておるとは・・・テリヤアツ!」

かごめの祖父は、札を投げたが直ぐに肉付きの面の放つ火で燃やし尽くされる。

【体を・・よこせ!】

肉付きの面は、かごめの祖父に向かうが直ぐにかごめの祖父も避ける。

「此奴の目的は生身の肉体か！」

すると天井の柱の一部が壊れかごめの祖父は、下敷きになる。

【体を……体を……よこせ……】

絶体絶命の状態になりかごめの祖父は顔中に札を貼りまくる。

そして肉付きの面は、それでもかごめの祖父に近付き顔に貼りそうになる瞬間。

シュッ！

一閃の光が現れる肉付きの面をフルスウイングした。

「おじいちゃん大丈夫!?何だ!?!」

現れたのはダイチだった。

【体を……よこせ……】

肉付きの面は、ダイチに近寄る。

ダイチは、直ぐに魔戒斧を円を描く。

「鎧の召喚が出来た！」

肉付きの面は、ダイチの顔に貼るが召喚陣の衝撃で直ぐに離れる。

『ワケのわからん奴だ!とにかく今はおじいちゃんを助けて撤退だ!』

戯牙は、左手の鉤爪を使い瞬時に柱の一部を振り払い下敷きになっっているかごめの祖父を連れて外に出る。



「ダイチ……これを扉に直ぐに貼れ！」

戯牙は、直ぐにかごめの祖父から札を持つと目一杯札を貼りまくる。

「おじいちゃん！おじいちゃん！」

戯牙の姿を解くとかごめの祖父は、気絶した。

そして火災報知器が鳴り直ぐにかごめの祖父を安全な所に運ぶと消防や警察が来る前に身を隠れる事にした。

もしもこの場で警察に事情聴取されれば真っ先に親戚の人が嘘になり容疑者として捕まりそうだったから。

「ん？うちの方からサイレン？」

中学の帰り道にかごめは、救急車やパトカー、消防車が日暮神社の方に向かっているのを知り嫌な予感がすると直ぐに日暮神社に向かう。

「え!？」

かごめは、人溜りが出来ている所が日暮神社だと気付くと直ぐに警察の隙を見て日暮神社に入る。

「どうもありがとうございます。」

かごめは、警察官にお礼を言うと警察官は去る。

「ママ、どうしたの!？」

「倉庫が燃えたの。おじいちゃんが煙に巻かれて・・・」

「じいちゃんが!？」

かごめは、心臓が止まりそうな気持ちになった。

「大丈夫、ダイチくんが助けて命に別状は無いの。」

「まあ、そんなトコだ。」

突如ダイチが出てくる。

「わあっ!」

かごめは、驚きのあまり飛び跳ねた。

「悪い!悪い!警察がいなくなると俺が勝手に容疑者扱いされそうだから。」

苦笑いで言うダイチ。

「それでママとダイチくんこれから病院に行ってくるわ。」

「あたしも行く!」

「草太がまだ帰ってないの。貴方はこっちにいてくれる?」

「うん。」

かごめは、ママの言葉に従った。

「かごめ、気を付けろよ!」

「?」

かごめは、ダイチのテレパシーに気づく。

「物置に変な面の妖怪がいた。だが、奴は火事が消えると突然気配がなくなった。」  
(えっ? だったら!)

「それは俺で捜すから今は草太に表上の事を説明しろ。大丈夫、見つけたら直ぐにテレパシーでお前や犬夜叉に繋がったら伝えるからよ。」

そしてダイチは、かごめのママと共に病院に向かう。

日暮神社の近くの裏路地では・・・

「ん? 何だ?」

ホームレスが何かを発見すると其処には肉付きの面が落ちていた。

【体を・・・よこせ・・・】

ピタツ!

「う! うう!」

肉付きの面は、ホームレスに取り付くと直ぐに身体を操作して闇の中に溶け込んだ。夕方、かごめの祖父が入院している病院。

「ママ、おじいちゃんは?」

ダイチと一緒にいるかごめのママは、かごめに説明をし始める。

「お医者様は、もう何も問題無いって言うけどおじいちゃんまだ意識が戻らないの。」

かごめは、心配そうにかごめのママを見る。

「心配無いと思うけどおじいちゃん歳だから……」

「？」

かごめのママは、手に何か持っている事にかごめが気づく。

「ママ、それは？」

「救助された時にこれを沢山持っていたって……」

???

「うう！」

するとかごめの祖父の病室から祖父がうなされていた。

「肉付きの面……肉付きの面……」

かごめの祖父は、繰り返し繰り返しその言葉を言いながらうなされている。

「ママさん俺先に帰っています。」

「ええありがとうね、ダイチくん。」

ダイチは、先に帰ったふりをして肉付きの面を探し始める。

裏路地

「いー！やめなさいー！」

裏路地では中年のサラリーマンが高校生の不良グループに絡まれカツアゲされている

た。

「お！結構良いもの付けてるじゃんおっさん。」

不良は、サラリーマンから腕時計や財布から札束を取り出すと帰ろうとした。

「ん？」

不良の一人が振り向くと肉付きの面をつけたホームレスが現れる。

【もつと……もつと……四魂の玉を取りにはもつと強い体を……】

肉付きの面の左右が開くと鋭い牙が出てきた。

ニョロ！

面が伸びると不良の一人に目掛けて伸びると頭をサメのごとく啜え食べ始める。

「うっ！わぁー！！！」

「きゃああああ！！」

次々と逃げる不良たちを肉付きの面は、食っていく。

「ひいひい！！」

サラリーマンも逃げるが直ぐに肉付きの面に追いつかれる。

シュッ！

前から斧がブーメラン投げされると肉付きの面に当たりそのままホームレスに当たる。

「逃げるー！」

ダイチは、片手に腕時計や札束の入った財布をサラリーマンに渡すとサラリーマンは逃げる。

「さて！ケリをつけるか！」

魔戒斧を手にするるとダイチは、構える。

「おらっー！」

ダイチは、素早く踏み込むと肉付きの面の攻撃をかわし縦振りに放つ。

「!?」

ダイチは、違和感が走るいつもなら魔戒斧で攻撃したら大方手応えがわかる。

だが今回は、何故か攻撃したのにも関わらず不思議と肉付きの面の気配が消えない。

「!?」

よく見るとホームレスの首だけ無くなり他の頭や不良たちの体もなくなっている。

「逃げたか!?」

ダイチは、直ぐに高い跳躍力を使って探し始める。

その夜。

「ねー、ねーちゃんこで寝ていい〜?」

草太は、自分の布団を持って受験勉強をしているかごめの部屋に来た。

「何言つてんの、男の子でしょ！」

「だつて〜〜〜」

「本当に弱虫なんだから。」

かごめは、草太に呆れる。

「じいちゃん、お札を持つていたつて言うし何かあつたんだよ。」

草太の言葉にかごめもダイチのテレパシーからしても何か変わった事に。

「！」

かごめは、四魂の欠片の入った瓶を見る。

「これ、四魂の欠片があるから？」

かごめは、それしかないと確信した。

ガシャーン！

窓が突如割ると先ほどの不良たちの体を取り込んだ肉付きの面が現れる。

(能面!?)

かごめは、ダイチが話していた面の妖怪を思い出す。

【お前の持つ玉を・・・よこせ・・・】

「！」

直ぐに一連の騒動が何故起きたか理解した。

四魂の欠片が現代に來た為眠っていた妖怪が目覺めたのだと。

かごめは、硝子の破片が飛び散る中に現れる四魂の欠片の入った瓶を持ち逃げるが草太は突然の事で固まった。

「ばかっ！何固まってんのよ！」

かごめは、固まった草太を持ち抱えるとぶよを抱き締めた草太を連れて逃げる。

(犬夜叉・犬夜叉も呼ばなきやつ！)

そう今はダイチが何処か行ってしまい頼れるのは犬夜叉しかいないと思い始める。

「走って草太！」

かごめは、草太を連れてひたすら走る。

「……」

草太は、かごめの手を見ると血が出てる事に気づく。

「ねくちゃん！血がく血がく！」

泣く草太。

「泣くなっ！ガラスで切っただけよっ！」

「ひっ！」

後ろから肉付きの面がやってきた。

(妖怪の狙いはこの玉の欠片……)



するとかごめは、四魂の欠片を持つと草太から離れ逃げる事で草太を安全にさせる為だ。

「ね、ねーちゃん！」

「草太！祠の井戸に走って！犬夜叉呼んできて！」

「え？僕一人で!？」

「四魂の玉があるって言えばあいつ大喜びでとんでくるから！いいわね！」

かごめが走り去ると肉付きの面も追いかける。

草太は、骨喰いの井戸に向かって飛び込んだ。

だか！

ドーン！

しーん

何も変わらない。

「え？なんでえええ!？」

ワケが分からなかったがこのままではかごめが死ぬと思ひ無我夢中で井戸を掘りまくる。

「つながれ！つながれ！じゃないとねーちゃんが死んじやうよ!!」

泣きながら叫ぶと当たりが光り犬夜叉が現れた。

「困ってるみていじやねえか？」

犬夜叉に草太は、全て説明すると直ぐに犬夜叉も草太を乗せて向かう。

「でもどうして・・・？ぼく、井戸に通れなかったのに・・・」

「かごめの血がついてただろ？おめーの手に。俺は鼻が利くんた。かごめがどこにいたって俺が見つけ出して助けてやる!!」

草太は、かごめが犬夜叉についての話を思い出した。

「犬夜叉つてのはね、乱暴でワガママで全然優しくくないの。付き合うの大変なんだから。」

だがダイチの話だと。

「犬夜叉は、お母さん思いで根の優しく面白く頼りになる奴だ。まあ、今まで酷いことを人にされてたからヤサグレてるけどな。」

（ダイチ兄ちゃんの言う通りかも・・・優しくて頼りになるかもしれない!）

草太は、かごめの言葉よりもダイチの言葉の方が正しいと思う。

建設現場

「はあっ!はあっ!」

かごめも流石に息が切れそうになる。

（まだなの?まだ犬夜叉は、来ないの!?)

そうしているると肉付きの面が近くまで来た。

【おのれ・・・】

肉付きの面がかごめの方を見るとかごめは、建設現場の建物の上にいる。

ニユルツ！

肉付きの面の面が伸びるとかごめがいる階まで噛み付き残っている体も上がって行き振子の原理でかごめに体が襲いかかる。

「きやああああ!!」

かごめは、逃げるが振子の原理でスピードを増した肉付きの面から逃げられない瞬間。

「散魂鉄爪!!」

犬夜叉が肉付きの面の体を2つに切った。

「ねーちゃん!」

「草太!」

草太は、かごめの所に行く抱きしめる。

「なんでえ、ピンピンしてるじゃねえか!」

本当は心配な顔だった犬夜叉。

「もう大丈夫よ。犬夜叉が妖怪を倒してくれるわ!」

犬夜叉は、かごめの前に行く腕を組んだ。

「助けてやらんでもないけどな……その前にこの間の事を謝ってもらおうか？」

かごめは、犬夜叉が入っている言葉を思い出す。

「ああ、あの時のこと？ごめん！ごめん！謝るわ！」

軽く謝った。

「ちくしょう！ちつとも心が籠ってねえ！帰ろうかな？」

「何言ってるのよ！あのお面四魂の欠片を持つてるのよ。どういうつもりよアンタ！」

「ふん！」

犬夜叉は、そっぽ向いた。

(気のせいだろうか……犬夜叉の兄ちゃん……狭い！圧倒的に心が狭い！)

「おいおい！何夫婦漫才してるんだよお二人さん！」

高い跳躍力でダイチが現れた。

「あ！犬夜叉！ダイチさん！」

かごめは、指差すと肉付きの面の体が再びくっつく。

【おのれ！わらわの体を！】

「能面が奴の本体よ！」

かごめには、四魂の欠片のが肉付きの面についている事がわかる。

【わらわは肉付きの面。数百年の昔四魂の欠片を受けた大桂の木から掘り起こされた面。以来体が欲しく人を食い続けておる。直ぐには朽ちぬ良き体が欲しいぞ。】

「なるほどな、それで四魂の欠片も欲しくなったのか。」

ダイチは、かごめの手を持っている四魂の欠片を見た。

「今まで何人食ったかは知らねえが、太り過ぎなんだよ！」

犬夜叉は、拳を肉付きの面に向かい放った。

ガッ！

「何?！」

肉付きの面は、犬夜叉の手を噛み付いた。

【かかったな！もはやわらわから逃げられぬ!】

犬夜叉は、肉付きの面に引き込まれそうなる。

「しやらくせい!！」

犬夜叉は、力一杯に再び切り裂く。

「けっ!たあいのねえ!！」

ガキッ!

肉付きの面は、別れた2つの面を犬夜叉に挟み犬夜叉を体内の中に閉じ込めると本体

の面だけ分離してかごめの所に向かう。

バコーン！

ダイチの魔戒斧が肉付きの面を振り払う。

「やってやる！」

魔戒斧で戯牙になりダイチは、肉付きの面に近寄る。

バキツ！

戯牙は、肉付きの面を獣身斧で壊した。

「やった！」

草太は、喜んだ。

「ダイチさん！まだ駄目よ残りの片面の四魂の玉の欠片を取らなきゃ！」

その片面は、すでにかごめと草太の真後ろに来ていた。

『間に合わない！』

戯牙の距離では間に合わない位置にいた肉付きの面。

「きやつ！」

【わらわの勝ちじゃ．．．この娘の体．．．もろうた．．．】

肉付きの面は、かごめの顔に取り憑こうとしていた。

「かごめ！面から手を離せ！」

肉付きの面の体だった肉体から鉄碎牙を抜き壊すとかごめに近づく犬夜叉。  
「えっ!？」

かごめは、直ぐに手を離れた。

「いいか!動かなよ!」

ズバッ!

犬夜叉は、鉄碎牙で器用に片面だけを壊した。

片面から四魂の玉の欠片が出ると肉付きの面は消滅した。

「犬夜叉・・・」

「かごめ、怪我はねえか?」

「えっ?うん。」

朝日が犬夜叉を照らすとかごめは、何故か優しい事に気づく。

(あれ?ちよつとだけだけど・・・犬夜叉がカツコよく見える。)

「かごめ?いいの?」

戯牙を解いたダイチがやってくる。

「え?」

「確かお前、テストじゃねえのか?」

「はっ！しまった!!今日は、テストだった!!?」

かごめは、直ぐに自宅に向かおうとする。

「おい!かごめ!!」

「あ、じゃあね。犬夜叉、ダイチさん。草太!そこの四魂の欠片を持って帰って来て。犬夜叉!取っちゃ駄目よ!」

唾然とする犬夜叉と頑張れと言うような顔のダイチ。

クイクイ!

「ん?」

犬夜叉の袖を引っ張る草太。

「あの、すぐくカツコ良かったよ!」

「そうか?」

「そうじゃねえ?」

ダイチは、日暮神社に戻り犬夜叉は戦国時代に戻る。

そして再びテストが終わりかごめとダイチは、戦国時代に戻った。



## 骨

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

平行世界いわゆるパラレルワールドとはご存知だろうか？

そうダイチの世界ではホラーがいるが妖怪や霊力がなく、犬夜叉達の世界ではホラーは存在しない代わりに妖怪や霊力がある。

だがもしも犬夜叉達の世界における平行世界の更に平行世界が存在するとしたらどう想像するだろうか？

この話はこの主人公と深く関わる事かもしれない話かもしれない。  
ん？ここは？

ダイチは、ある景色を見ていた。

映っているのは自分の手だが誰かに手を掴まれていた。

それも自分の手が幼い。

『お姉ちゃん。喉乾いたから少し待って。』

幼い頃の自分の声がある女性に向かって元気良く言う。

『ああ、わかったよ。』

女性は、優しそうな声が響く。

水を飲むために池の水を飲み終わり池に写る姿は、幼いダイチの顔だった。

・・・何だよ!?! これはまるで子供の頃の俺じゃねえか!?

その子供が走って戻ると女性は、待っていた。

よく見るとかごめにそっくりな女性だった。

『本当に僕もついて行って良いの?』

『大丈夫だ。途中まで一緒の道だからな、兵一。』

『わかったよ桔梗お姉ちゃん。』

桔梗!?

目に入って来たのは巫女装束を身に付けたかごめにそっくりな女性がその子供を兵

一と呼び再び歩き始める。

ザザッ!

草むらが直ぐに音が聞こえると鋭い音が響く。

『お姉ちゃん!?!』

倒れ込む桔梗を見た兵一は、直ぐに駆け寄る。

『くっ・・・』

桔梗の右手には、四魂の玉が存在した。

手を伸ばそうとすると何かの足が桔梗の手を踏み付けた。

『バカが、人間なんざになる気なんざさらさらねえよ!』

聞き覚えのある声だ。

そう犬夜叉の声だった。

『犬夜叉! やめてよ! やめてよ!』

兵一は、直ぐに犬夜叉にしがみつく。

が!

ドスツ!

『ああ...』

兵一の下腹が犬夜叉の爪に切り裂かれ倒れる。

『へ...兵一...』

桔梗は、倒れたまま兵一に四つん這いで歩み寄る。

『犬...夜叉...?』

何故自分達を攻撃したのか理解できない桔梗。

ん? 何だよ! あの犬夜叉の身体から出てるドス黒い物は!?

兵一の映る物を見て犬夜叉に似ているが何か別の何かが違うとダイチは気づく。

だがダイチは、見ているだけで何も出来なかった。

『ふっ、この玉もつと怨みの血を吸わせなきやいけねえな。このガキ同様に村の奴ら皆殺しだ。』

犬夜叉らしい者は、四魂の玉を持って去る。

『兵一．．兵一．．．しつかりしろ兵一。』

涙を流しながら桔梗は、抱き締め兵一の意識を確認する。

『お姉ちゃん．．．死ぬの僕．．．？』

『気を．．．しつかり持つのだ．．．』

だが桔梗には、声をかけるしかなす術がなかった。

『もしも．．．生まれ変わったら．．．またお姉ちゃんに．．．会っても良い？』

『ああ、良いとも．．．だから．．．しゃべる．．．ありがとう．．．う．．．』．．．兵一？』

すでに兵一は、笑顔のまま息絶えた。

『おのれ．．．犬夜叉．．．おのれえええっ!!』

桔梗は、瞳から再び涙を流し怒りの声で立ち上がり村に向かい犬夜叉を矢で封印した。

「わっ!」

全身寝汗塗れで起き上がる。

「ダイチ? どうした?」

今日は楓の自宅で寝ていたので近くで寝ていた楓が起き上がる。

犬夜叉達は、四魂の玉を集めるので村の外に出てる。

ダイチは、稽古に集中したいからと今回は外した。

「あ、婆さん。すまん、起こしたか?」

「お主何かに魔されていたぞ?」

楓が心配そうにダイチを見る。

「なあ、婆さん。少し聞いても良いか?」

ダイチは、勇気を持って楓に話す。

「婆さんの姉ちゃん桔梗は、何で死んだんだ?」

「.....」

楓は、黙り込む。

「いや、身内の死を聞いて不快ならこの事は聞かなかった事に「お前なら話しても良いだろ。」え?」

楓は、布団から起きると暖炉に火を起こし昔の事を聞かせた。

「桔梗お姉様は、犬夜叉の爪で切り裂かれただけでなく近くにいた兵一と言うお姉様を慕う子供が先に命を落としその後お姉様は、犬夜叉に最後の力を振り絞って封印して直

ぐに息絶えた。」

「兵一？」

ダイチは、その兵一と言う子供を夢で見ていた。

「兵一は、この村に流れ着いた戦争孤児でなお姉様が薬草を取る時に連れて来た。わたしも可愛い弟の様に可愛がっていた・・・可哀想にまだ4つの子供だったのに。わしが目のある事件で負傷して目が見えなくなつたのにどうしても薬草を取って治すからと言ふ優しい子だった。」

楓は、悲しい表情でその子を思い出す。

「婆さんすまねえなそんな話を聞いて・・・少し夜風に当たりに行くから寝ててくれ。」

何故か複雑な気持ちのダイチは、楓の自宅を後にして月夜の出る外へ歩く。

（何故あんな夢を見たんだ？）

いつの間にかダイチは、村からかなり離れた場所に来ていた。

キヤーンツ!!

「今の悲鳴は!?!」

ダイチは、聞き覚えのある声そうかごめの声が聞こえて直ぐに走り出す。

「どうしたんだ!?!」

ダイチが犬夜叉とかごめと七宝が野宿している火の光を確認すると犬夜叉達に近づ

く。

「あれダイチさん？」

かごめは、無事らしい。

「いって！」

顔を抑える犬夜叉。

「いきなり何するんでえ！」

犬夜叉は、どうやらかごめにピンタされたらしい。

「あ、ごめん。寝ぼけて怖い妖怪が襲って来たのかと思つて……」

かごめの答えにホツとするダイチ。

「ダイチさんこそ何で此処に？」

「いやな・・夜の散歩してたらかごめの悲鳴が聞こえて来たんだ。……ん？」

後ろを振り向くと老婆の妖怪が何かを持って通り過ぎて行く。

「あいつ何持つてるんだ？」

「湿った土の匂いと骨の匂い……」

犬夜叉が独り言のように老婆の妖怪を見て言う。

「！」

ダイチは、嫌な予感がして直ぐに村に戻る。

「ねえダイチさん？」

「おいー！」

ダイチは、かごめと犬夜叉の声を無視して全速力で走る。

「!?」

ダイチが日が出る頃にようやく村にたどり着くと楓の自宅の奥にある社が壊されていた。

「楓婆さん!? どうしたんだこれは!？」

頭に傷を負う楓にダイチは、聞く。

「ダイチ・・・盗まれた・・・」

ダイチは、何か重要な物だと楓の口調からして察する。

「まさか！桔梗の何かか？」

ダイチは、ハッとすると楓が頷く。

「ダイチさーん!!」

空を見るとかごめと寝ている七宝に荷物を背負った犬夜叉がやって来た。

「なんでえ楓ババアの血の匂いがしたが生きてたかの。」

どうやら犬夜叉は、あの老婆の妖怪から楓の血の匂いがしたので追って来たらしい。

「そうか・・・妖怪からワシの血の匂いを嗅ぎつけて。」



「まったく生傷の絶えねえババアだなおめえも。」

かごめとダイチに支えられている楓の後ろで犬夜叉は、生意気にいうが。

「(へー。) 楓ばあちゃんが心配で戻ろうって言ったんだ。」

「優しい野郎だな犬夜叉は……」

かごめとダイチは、犬夜叉の思いやりに感心する。

「で？ 壊された此処には桔梗の何があつたんだよ？」

ダイチが話の続きを楓に聞き直す。

「此処にはな桔梗お姉様の墓だつた所だよ。」

「此処にお墓が？」

「桔梗の骨をか？ 何か物騒だな。」

かごめが驚くとダイチも嫌な予感が当たる。

「お姉様は、巫女の中でも並外れた力を持つた方だつた。その骨を妖怪の手に渡ればどのように悪用されるか……」

その話を聞くと犬夜叉は、社から離れようとする。

「犬夜叉？」

「断る！ 楓ババア俺と桔梗は、敵同士だつたんだぜ。どこのどいつがこの胸に矢を放つたか忘れちまつたんじゃねえだろうな？」

犬夜叉は、手には胸を当てて楓に言う去る。

「そうだったな……」

楓は悲しい表情で諦めていると。

「俺は行くぞ婆さん。」

「ダイチ？」

流石の言う人物に楓も驚く。

「なんだかよ。他人事に思えないんだ。（それに昨日の夢が物凄い胸糞悪いしな！）」

ダイチは、犬夜叉に続いて社を去る。

（犬夜叉？）

ダイチは、社から出ると村の木下で背もたれしている犬夜叉を発見した。

「！」

すると犬夜叉の目の前にかごめがやって来た。

「行こうよ犬夜叉。」

「どこに？」

かごめの顔を見ると目をそらす犬夜叉。

「ねえ可哀想じゃない桔梗。お骨取られるなんて……あんとどんなに憎しみ合っていたってもう良いじゃない。桔梗は、ずっと昔に死んじゃったんでしょ？」

かごめは、犬夜叉を優しく説得した。

「……」

プイ

何故か今日の犬夜叉は、かごめの顔を逸らす。

ムッ!

「ちよつと!」

かごめは、目をそらす犬夜叉の髪を引っ張って自分と顔を向く合わせる。

「な!なんだよ!」

「なんかあんた!昨日から私の顔を見ようとしないわね!」

かごめは、昨日の夜からの犬夜叉の異変に直ぐに勘付く。

「別になんでもねえよ……」

「わかった!私の顔が桔梗に似ているからでしょ!だから嫌なの!?だから嫌いなもの!」

だが犬夜叉の目に映るかごめが桔梗に見えて仕方ないそれを本人は自覚していた。

すると犬夜叉は、かごめの手を握る。

「そんなんじゃ!」

「えっ?」

かごめは、自分手を犬夜叉が握るのを見ると犬夜叉の顔を見る。

「そんなんじやねえ……」

（え……な……何？）

かごめの胸の高鳴りが高くなる。

「ちよ！ちよつと！何よ!!」

ドン！

かごめは犬夜叉を押し倒した。

（な、な、なんなの今のは？）

落ち着こうとするかごめ。

（やれやれかごめは、鈍感だね……惚れてるのな犬夜叉に。）

無自覚なかごめに溜息を吐きながら呆れるダイチは隠れて見ている。

「「ん？」」

三人は振り向くと楓が馬を引き連れて来た。

「婆さん？」

「楓婆ちゃん。」

「わしとて妹巫女。桔梗お姉様の骨は我が手で取り戻す。犬夜叉、裏陶がどちらの方角に行つたかで良い教えてくれ。」

「死にてえのかババア？」

「俺も行くからついでに教えてよ。」

ダイチは、楓の馬を触る。

「楓婆ちゃん、ダイチさん。」

かごめが止めに入る。

「止めたつて無駄だろ？」

犬夜叉がかごめ話の途中で割り込んで来た。

「桔梗の骨は兎も角ババアとダイチの骨は拾つて帰つてやるよ。」

馬の手綱を持つと犬夜叉は、案内をし始めた。

「すまん犬夜叉。」

「ははは・・・勝手に殺すなよ。」

楓とダイチは、安心して犬夜叉を見ると。

「楓婆ちゃんあたしも行つていい？」

「かごめ？」

かごめは、犬夜叉の後をついて行つた。

(犬夜叉のさつきの目はあたしじゃなくてあたしの中に桔梗を見ていた?)

かごめは、自分の自転車を持つと七宝を連れて馬に跨つた楓とダイチと共に犬夜叉の後を追いかけた。

夜、日が暮れたので野営をする事になった。

「みんな寝たな。」

ダイチが辺りを見渡すと疲れているのかかごめ達は、寝ている。

「ダイチおめえも早く寝ろよ。朝早く突入するからよ。」

「犬夜叉。」

「ん？」

ダイチは、犬夜叉が起きているのである質問をする事にした。

「前々から気になっていたんだけどよ。かごめは桔梗の生まれ変わりなんだろう？かごめと桔梗はどう言うところが違うんだよ？」

妙な質問に犬夜叉は、迷わず口が動く。

「桔梗は……かごめよりも賢そうだし美人だ。かごめは、暴力的で心が狭いぞ。」

ゾクッ

「え？」

ダイチは、何故か悪寒が走り犬夜叉から離れる。

その時。

「おすわりっ！」

ドシューーンッ!!



「……」

ダイチは、今起きているのかごめと自分だけだと把握した。

「俺よ、昨日怖い夢を見たんだ。」

「怖い夢？」

かごめは、そのままダイチの話の聞く。

「草原で俺は小さいガキになっていて誰かといいや・小さいガキの俺はそいつの事を桔梗って言っていたんだ。」

「桔梗？」

かごめは、今回関連する名前を聞いて驚く。

「桔梗は、俺の手を握って反対側の手には光る玉……そうだな四魂の玉だと思う。それからいきなりの桔梗は背後から犬夜叉に爪で切り裂かれた。」

「犬夜叉が!？」

あり得ない顔でかごめは表情を変える。

「でもよ俺が見た時なんだか何時もの犬夜叉の雰囲気じゃなかったんだよ。まるで何か化けて犬夜叉の姿になっている感じだった。それで俺はその犬夜叉を止めようとして爪で腹を切り裂かれ四魂の玉を奪って消えた。その後桔梗が俺を抱き締めて泣いていた。息を引き取った後の桔梗は、怒りと悲しみに溢れた表情になってその夢は終わっ



たんだ。」

ダイチは、全てをかごめに話すと無言がしばらく続く。

「よかった・・・」

「へ？何が良かったんだ？」

「だってダイチさんは、その夢の犬夜叉が偽物だってわかったんでしょ？あたしもその夢を見ていたらきつとそんな風に思うもん。あいつ心が狭いけど優しいところあるし酷い事をする奴じゃない。」

かごめの言葉を聞いたダイチは、プツと笑う。

「何よ？」

「いや、安心して笑ったんだ。かごめは、俺よりも犬夜叉の事わかってるじゃん。で？俺が居ない間に何があつたんだよ。」

ダイチは、かごめから色々話を聞くと何でも犬夜叉は朔の日に人間に戻ってしまう事を説明した。

かごめ自身も犬夜叉が人間になる日があれば信頼して守ってくれるのをダイチしかないと思ひ打ち明けた。

「確かにヤバイな俺も朔の日にいる時は出来るだけ見張つてやるから。」

この状況は流石に危険だと真顔でダイチ自身も理解した。

翌朝。

「一刻も早く桔梗お姉様の骨を取り戻さねば。」

早朝、一同は準備を済ませると再び動き始める。

「はあく、なにやら悍ましい予感がしてならぬ。」

「何が悍ましい予感だ。」

楓の乗っている馬の後ろに乗る犬夜叉が喋り出す。

「そんなに取られたくなかつたら川にでも流しちまえば良かったんだ。未練がましくこんな事になるんだろ？」

「犬夜叉、お前は墓とはどう考える？墓とは単に遺体や遺骨を納める場所ではない。本当に墓を必要とするのは残された者達の心なのだ。」

「残された者達の心？」

「続けてくれよ婆さん。」

楓の言葉にダイチも食らいついた。

「お姉様は、巫女として生まれ村人の為に霊力を使っておられた。物の怪を避けつけず難病や飢饉も共に戦い励まし続けた。お姉様が亡くなられた後も村人は決して挫ける事なく強く生きてこうとしとる。しかし、人とはか弱き生き物。困難や不安が容易く押し潰される。面影を慕いたいのだ。その心の拠り所たつたのだ。あの墓は。」

「可哀想だな・・・桔梗は。」

「ダイチさん？」

「まるで魔戒騎士の様に孤独なものだったんだろうな。戦う時も。強い霊力を持った為に誰かを愛する事も好きな事も全て犠牲にして来たんだな。」

《お姉ちゃん！》

ダイチの頭には丘から空を見上げる桔梗の姿が突然現れた。

《兵一。》

振り返った桔梗は、優しい笑顔で兵一の頭を優しく我が子を撫でる様に触り愛おしくも見えた。

ポロツ・・・

「どうしたのだダイチ？」

「ん？」

楓の言葉に気付くと目から涙が流れていた。

「な！何で涙を？」

目を拭くと何故自分が涙を流していたのか理解できないダイチだった。

（あつ！あの時の目だ。あたしの顔が桔梗に似ているから？嫌いなもの!?《そんなんじやねえ・・・》あの時の犬夜叉、あれは人を憎んでる目じゃなかった。もしかすると・・・

犬夜叉は本当は桔梗の好きだったんじゃない？50年間も封印されてだとしたらこいつメチャクチャ可哀想な奴かも。」

「!」

視線に気づいた犬夜叉は、かごめを見る。

「な!なんでえかごめ。」

「なんでもない(かわいそう。)」

「なんかすげえムカつくぞその目つき。なんだその憐れむようなまなざしは!」

「犬夜叉かわいそー!」

犬夜叉の背後にいるダイチがふざけ口調で犬夜叉な可哀想な視線を送る。

「何がだ!」

犬夜叉は、ダイチを睨むとかごめを見る。

「あ、ごめん、変な事を考えちゃって・・・」

「えくくくつ!てめえらなに考えていたんだコラ!」

「あーもうるさい!」

「犬夜叉かわいそー!」

かごめは、自転車を漕ぎまくりダイチもイタチごつこの様に犬夜叉から逃げる。

此処は裏陶の住処兼工房の様な場所だった。

「うひひひ．．．なかなか良い焼き上がりじゃ。」

工房の中の粘土を焼く窯の中を開けると裏陶は、頭に付けている草を粘土に置くと窯の火が消えて始める。

「桔梗の霊骨と墓土を練り込み、我が鬼窯にて焼きたる人器。どおしくれ。」

裏陶は、鎌で粘土を刺すと割れ始める。

その粘土の中から若く美しい女．．．桔梗が生まれたばかりの衣服を着てない状態で現れた。

「桔梗よ、お主は昔この世にある時巫女として四魂の玉を狙って来る妖怪どもをことごとく葬り去ったと言うではないか？これからはこの鬼女裏陶の僕として四魂の玉を集めて貰うぞ。立て桔梗！そして戦え！」

裏陶か妖力を使い桔梗を動かそうとする。

が！

ヨロツ・・・ドシヤツ！

直ぐに倒れた。

「んんん？」

裏陶は、倒れた桔梗の髪を鷲掴みにして持つとある事に気付く。

「魂が戻っておらぬ！これではただの抜け感！この裏陶の術が魂を取り逃がすはずはなし。と言うことは・・・魂はすでに転生し、他の体に生まれ変わっていると言うのか？」

その頃犬夜叉達は。

「こころわくわく。」

今にも壊れそうな橋を渡っていた。

「大丈夫か？」

ダイチは、かごめを心配する。

「ねーこの橋いつぺんに渡って大丈夫かな？」

「落ちるかとしんねーな。」

「可能性はあるな。」

「え?」

犬夜叉とダイチのさりげない言葉にかごめは、驚く。

「何か来るぞ!」

七宝は、何かが橋の奥から来るのに気づく。

「え? な、なにあれ?」

人形で出来た侍達がゾロゾロとやって来た。

「(鬼婆の兵隊か!?) かごめ、楓ババア、ちよつと揺らすぜ。」

「一暴れするからな!」

手を鳴らす犬夜叉と魔戒斧を構えるダイチが直ぐに戦いを始める。

「散魂鉄爪!!」

「おうら!!」

犬夜叉は、爪で戦いダイチも喧嘩殺法の技を使いながら魔戒斧で倒して行く。

「粘土?」

ダイチは、敵を倒すと今までの触感とは違う事に気づく。

「きゃ〜! どんどん来る〜!」

「ちっー！」

犬夜叉とダイチは、再び戦いを始める。

「まったく何奴じゃ、この忙しいのに．．．ん？あの小娘．．．」

裏陶は、外のうるささに気づいたのか見に来るとかごめに目が止まる。

「似ている！あの面差し、桔梗にそっくりじゃ！」

裏陶は、直ぐに飛び出してかごめに向かう。

「どけ！てめえらー！」

犬夜叉は、敵を倒すが土人形で出来ているのか壊れていない手の部分が犬夜叉を次々と掴む。

「くっー！」

犬夜叉の身体から纏わり付いて離れない。

「おい！犬夜叉！ん!?」

真横を見ると裏陶が見えると裏陶は、鎌を振り下ろし橋を切った。

「きやつー！」

かごめが落ちそうになった時裏陶が捕まえてさらわれてしまう。

「楓婆ちゃん！犬夜叉！ダイチさん！」

犬夜叉達は、崖から落ちた。



「あ、あんた！」

「うひひひ、この高さから誰も助からん。」

「犬夜叉ー!!」

かごめは、裏陶の住処に連れさらわれてしまった！  
続く。

## 桔梗

前回のあらすじ

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

ある夜にダイチがある悪夢を見たその夜に鬼女裏陶が桔梗の遺骨を盗む。それを取り返そうと向かう桔梗の妹の楓と犬夜叉一行。時は既に遅し裏陶は桔梗の仮初めの肉体を作り上げたが肝心の魂がない事に驚く犬夜叉一行が裏陶の住処に潜り込むと人形の兵隊達が現れて交戦する中で騒ぎを聞きつけた裏陶がかごめ見た瞬間に桔梗と瓜二つだと気付きかごめを連れ去り犬夜叉達は、橋の下に落ちてしまった。

「犬夜叉は無事じゃろーか？」

「あいつは落ちても死なん。」

「まあ、頑丈は一番だからな。」

七宝の術の大きい葉っぱでパラシュート代わりになり無事に楓とダイチそして七宝は犬夜叉の真下に落ちた。

「おいてめえら！」

「なんだよ？こんなトコで寝てる場合か？」

「なわけねえだろが！てめえらが降つて来たんだろが！」

犬夜叉が突っ込んでいると楓が目の前に来てる。

「犬夜叉よ、覚えているか？かごめが初めてわしらの前に現れた時。わしが言った事じゃ、かごめは桔梗お姉様の生まれ変わりだと……」

「ん？」

ダイチは、楓が言っている事に耳を傾けていると落ちて壊れた人形の兵隊の一体から何かを見つける。

「婆さん！これを見ろよ！」

「これは人の骨。」

フワツ……

人形の兵隊から光る玉が出て来た。

「これは人間の魂。」

楓がその言葉を言った瞬間ダイチは、素早く目つきが変わり裏陶の住処に向かおうとする。

「婆さん！急いだそうが良さそうだ！」

「そのようじゃな！」

ダイチの言葉に楓も動く。

「おい！どう言うことだ!？」

「あの妖怪は人形を骨と魂で動かしていたんだぞ？それだけでわかるだろ？盗まれた桔梗の骨と後は？」

「まさか!？」

犬夜叉は、直ぐにダイチの言葉に気づく。

「我らは今から桔梗お姉様会うやもしれぬ。裏陶に作られた桔梗お姉様と戦う事になるだろう。」

犬夜叉達は、直ぐに裏陶の住処に向かう。

その頃かごめは

「ちよつと！何すんのよ！」

裏陶の住処に連れてかれたかごめは、裏陶に縛られ風呂位の大きさの器に入れられると薬草の入った液を流し込まれる。

「うるさい娘じゃのう。これで良しと！」

スツ・・・

裏陶が薬草の液を流し終わると女がやって来た・・・そうかつて四魂の玉を守っていた巫女だった桔梗の身体がまるでかごめに引き寄せたかの様にやって来た。

「だれ？」

自分と瓜二つな顔にかごめは驚く。

「おお、着替えか済んだかやはり巫女の姿お前にはよう似合う。霊骨と墓土焼き上げて身体は出来た。後はそこに魂を入れるのみ。」

「魂？」

かごめは、何の事やら理解出来ない。

「薬草の効果により間もなくお主の魂は身体より離れる。返してもらおうよ。桔梗の魂を。」

（桔梗の魂？この人が桔梗なの？）

「うっ！く！苦しい！身体がうごかな・・・」

かごめは薬草の効果が徐々に効き始めていた。

「何!?!この娘、直ぐに意識が無くなるの筈だ?何が?」

ピカッ!

かごめの首にかけている四魂の欠片が光り始める。

「この光り!?!四魂の欠片を持っていたのか!?!なんたる大幸運!もらっておくぞ!」

ピカッ!!

かごめの周りに突然結界らしきものが張られ裏陶が近づけない。

「これは怒れる魂じゃ!桔梗の生前の魂が怒り狂っている。凄まじい怨念じゃ!余程前の世に忌まわしい事があったに相違ない。」

桔梗の身体はその魂に振り向いた。

その先には犬夜叉達がいた。

「!?!」

「お姉様。」

「あれが桔梗か?」

ダイチは、巫女装束を着た女を見た。

(呼ぶな・・・私の名を呼ぶな・・・)

「うっ!何だ!?!今・・・頭に女の声が夢の声が聞こえる?まさか!?!犬夜叉!呼ぶな!!!」

ダイチは、頭に響く声で夢の中の桔梗の声だと気付き犬夜叉が彼女の名前を呼ぶと恐ろしい事になると気付き叫んだがすでに遅かった。

「き……桔梗。」

犬夜叉の声がするとかごめの様子がおかしくなり魂が全て桔梗に乗り移る。

「かごめの魂が桔梗の中に!?!」

犬夜叉は、確信したかごめは桔梗の生まれ変わりだという事に。

「かごめ!」

「しっかりしろかごめ!」

ダイチと七宝は、かごめに駆け寄る。

「この娘は魂の無い抜け殻あとで味噌漬けにして食ろうてやるわ。」

「裏陶とやらお主桔梗お姉様の骨を使って!」

「察しの通り我が術にて桔梗の霊骨より肉体を蘇らせた。言わばこの裏陶は生みの親桔梗は、ワシの意のままに動く僕よ。さあ桔梗!お前の霊力で出始めにこの邪魔な連中を……ん?」

桔梗は、フラフラ歩くと裏陶に近づき肩に触れると……

ポッ!

霊力を裏陶に込めて放ち頭と胴体が爆発して分離した。

「ばか……わしじやな……」

「お前だ！私を引きずり出した……私は、二度と目覚めるつもりはなかった。」

目覚めた桔梗は、裏陶に靈力の力を注ぎ倒した。

「犬夜叉？なぜ生きている？お前は私が封印したはずだ？」

裏陶を倒した桔梗は、顔の表情を見せずに俯き犬夜叉に質問した。

「へっ！生憎だったな50年ほどかかちまったが俺はこの通りピンピンしてるぜ！」

犬夜叉の言葉を聞き終わると頭を上げた桔梗の表情は悲しみに溢れていた。

「憎い……」

桔梗の目から涙が出そうな表情で犬夜叉を睨む。

「私はお前が憎い！」

犬夜叉に桔梗が近づくとその時。

ピカッ！

「うっ！」

右肩を左手で抑えようと肩から血が流れる。

「何故裏切った!?何故、何の罪もない兵一を殺した!!犬夜叉あつ!!」

桔梗は、右肩から流れる血らしき物を流しながら犬夜叉に怒りを打つける。

「な！なんだ！その血は!?それに兵一のチビがどうしたんだ!?!」



犬夜叉は、どういう事なのかわからなかった。

「犬夜叉、あれはお前が桔梗お姉様を死に至らしめた傷では？そして兵一もお前の爪で命を落としたんだぞ？」

「婆さんから俺も聞いたぞ？」

楓は、犬夜叉に聞いたのだした。

「なんだって!? 知らねえぞ楓ババア！俺そんな事した覚えがねえ！」

「はあっ？」

「誠か!? 何がどうなっているんだ？」

ダイチと楓も犬夜叉の口から真実を聞き驚く。

「まさかな・・・こんな言い逃れを聞くとはな・・・やめてくれ犬夜叉、見苦しい！やめてくれ、やめてくれえっ！」

桔梗は、犬夜叉の言葉を聞きたくなかった。

「犬夜叉・・・お前は申したではないか？人間になると。」

「マジでか!?!」

「人間!? 犬夜叉が？」

ダイチと楓は、振り向いて犬夜叉を見る。

「お前は人間になると言った・・・私はその言葉を信じて四魂の玉を持ちお前の元に行っ

た。幼い兵一と共に行く最中……お前は私を切り裂き四魂の玉を奪い……そして……その爪で兵一の腹を切り裂き命を奪った……」

桔梗の言葉は、重く重く念押しする様に犬夜叉に言った。

「おい？今のは本当なのかよ犬夜叉？」

「俺はやってねえ！」

嘘の顔じゃあねえなつとダイチは、犬夜叉を安心して見る。

「犬夜叉が？犬夜叉にその様なその様な事が出来たのであるうか？」

「俺がやったっていうのか!？」

犬夜叉は、自信の潔白を主張するが肝心の桔梗と言うと

「そうだ……だから私は末期の力を振り絞ってお前を封印した。」

桔梗は、犬夜叉の方にゆっくりと歩き始める。

「犬夜叉……」

桔梗が犬夜叉の名を呼ぶ瞬間にダイチは怒りと悲しみだけでなくまるで犬夜叉を愛おしく思う感情が混じっている複雑な物を感じてしまう。

「二度と再び巡り会う筈はなかったのに……」

キュッ！

桔梗は、犬夜叉の火鼠の衣の袖を掴む。

ビリビリッ!

「ぐあああつ!」

桔梗が掴んだ火鼠の衣の部分が破れ犬夜叉が飛ばされ倒れる。

「はあつ!何!?!霊力つてスタンガンみたいにも出来んのっ!?!」

ダイチは、啞然として桔梗の力に絶叫した。

「おやめください桔梗お姉様。」

楓が止めに入る。

「お前?」

流石の桔梗も妹が老婆になった事に気付いていない。

「妹の楓でございます。お姉様が亡くなって50年生きてまいりました。」

「その楓が何故犬夜叉を庇いだてする!?!貸せ!」

「わっ!」

止めに入った楓の弓と矢を奪う。

ヒュッ!

弓から矢を放つと矢が破魔の矢と化して犬夜叉を狙う。

ドカーンッ!

「!」

犬夜叉は、避けるが破魔の矢の威力が強大過ぎて振動が響き七宝も伏せてダイチが底う。

「楓！」

桔梗は、楓の矢筒を見ると矢を取ろうとするが楓が抵抗する。

「いけませんお姉様！犬夜叉は敵ではありません！」

「何を言う!?!貴様もこの半妖に誑かさせたのか!?!」

「お姉様！」

「矢を渡せ！」

「なりません！」

楓は、必死に拒み続ける。

「楓、犬夜叉はお前も弟の様に可愛がつっていた兵一を殺した張本人なんだぞ！それにお前は私の何だ！血を分けた実の妹じゃないのか？その妹が姉の命令を聞けぬと言うのか!?!」

桔梗は、楓の矢が入った矢筒を強引に奪おうとした。

「お姉様！」

「どけ！」

桔梗は、楓を振り払おうとした時だった。

ガシッ!

矢筒を手にした手を止める手があった。

「そのへんにしとけよ。」

ダイチが割り込んで来た。

「貴様……」

桔梗は、睨むが動じないダイチ。

「いくら実の妹だからって老人だぞ? 善良な老人は大切にしろってママから習わなかったのか?」

ピリッ!

破魔の力がダイチの手に犬夜叉同様にスタンガンのように流れる。

「おい、そんなんじや俺は負けないぞ?」

ダイチも負けず嫌いなのか桔梗の攻撃に倒れない。

「何度だってお前を止めるぞ?」

揺るぎなき眼で桔梗を睨むが。

ドン!

「くっ!」

今度は破魔の力が宿した弓を振りダイチを払い飛ばした。

桔梗は、犬夜叉を見る。

「あの時お前は人間になると言った。人間になって共に生きようと。」

桔梗は、矢を犬夜叉に向けた。

「かごめは、どうなるんじや!」

「どうなんだよ婆さん?」

「桔梗お姉様が憎しみを断ち切らぬ限り魂が鎮まることは無い。魂が戻らない限りかごめは永遠に眠り続ける。」

「そ! そんな・・・」

七宝は、眠り続けるかごめを見る事しかできない。

「ダイチ・・・お姉様のその身体を壊せ。所詮は無理に蘇らされた紛い物魂をそこから出してやってくれ。」

楓は、涙を流しながらダイチに頼んだ。

「俺は嫌だ。」

「・・・」

「だがよ。止める範囲ながらする。」

ダイチは、魔戒斧を手にした。

「死ねええ!」

桔梗は、破魔の矢を犬夜叉に放つと犬夜叉も鉄碎牙を抜き防ぐが破魔の矢が鉄碎牙の変化を時元のポロ刀に戻した。

「うわああああつ!!」

破魔の矢は犬夜叉の心の臓を目指して貫こうとする。

「止めてやるぜ意地でもな！」

ダイチは、魔戒斧で召喚陣を描くと戯牙に変わると飛び上がり獣身斧で破魔の矢目掛けて振り下ろした。

『気合いジアアアアアアアツツ!!』

バキィツ!

渾身の一撃を獣身斧で破魔の矢を折った。

『おまけじやあああああつ!!』

バキィツ!

さらに桔梗に近づくと弓だけ獣身斧で壊した。

「っ!」

犬夜叉は、意識があるのか鉄碎牙を捨てるとそのまま戯牙を通り越して桔梗の元に駆け寄り自身の両手で桔梗の両手を掴んだ。

「俺はやってねえ。」

「とぼけるな．．．あれはおまえだった．．．あの時お前は私の爪で私を斬り裂き四魂の玉を奪っただけでなく何の罪も無い幼い兵一まで手に掛けた．．．」

「俺はお前も兵一もやってもねいし覚えもない。」

「言うな！私が愚かだったのだ!!一瞬でもお前と共に生きたいと思っていた!!!その結果あの子を死なせ．．．黙れ!!!」

その時犬夜叉は桔梗を抱き締めた。

「犬．．．夜．．．叉．．．?」

桔梗もいきなりの行動に驚くしかなかった。

「わかった桔梗。お前も辛いめにあったんだな。お前は人間で．．．女で俺なんかよりもずっと．．．ずっと辛かったんだな．．．」

「犬夜叉．．．」

ポロツ．．．

桔梗の目から涙が溢れた。

「魂が静まった。」

遠くから見ていた楓でも驚く。

【お姉ちゃん!】

桔梗の心の中では微かに笑顔で自分に呼びかける兵一の記憶が呼び起こされる．．．そ



う犬夜叉と桔梗だけの記憶があるように桔梗と幼い少年の記憶が呼び起こされた。「放せ犬夜叉、もう遅い……」

先程の殺意が桔梗から湧き上がる。

『ヤベエー！犬夜叉！』

戯牙は、直ぐに犬夜叉と桔梗の間に入る。

ビリビリ！

「ぐああ!!」

犬夜叉の盾になった戯牙は、破魔の力により鎧が解除されダイチに戻り倒れる。

「未だにあの子が冷たくなる感触が忘れられない！私はおまえを憎みながら死んだ……魂が……魂がそこから動けない……おまえが生きている限り救われない!!!」

桔梗の中には自分が裏切られた事だけでなくおそらく幼い少年の死を目の当たりにした記憶も強く残っていた。

「犬夜叉!!おまえの死だけが!!」

桔梗は、憎しみに動かされる様に犬夜叉に襲い掛かる。

「逃げろ！犬夜叉!!」

破魔の力で怯んでいるダイチが犬夜叉に叫ぶ。

此処は？

かごめは、気がつくくと暗闇の中にいた。

【お願い……止めて……】

「!?」

かごめは、振り向くと4才くらいの着物を着た少年がいた。

「あんた……誰なの？」

【お願い！桔梗お姉ちゃんを止めて！優しいお姉ちゃんを止めてあげて！】

少年は、何故か泣きながらかごめに訴えた。

「ちよつと！待って！」

少年とかごめの間が徐々に遠ざかっていく。

かごめは、追いかけるが自身が動いていない様に少年が動いているかの如く流れると目の前が白い光に包まれた。

お願い……お姉ちゃんを……優しい桔梗お姉ちゃんを止めて……

ドクンツ！

「！」

楓に抱き抱えられたかごめに脈動が聞こえると光始める。

「!?」

すると桔梗の身体に入っていた魂が一つまた一つとかごめの身体に戻っていく。

「い！・嫌だ！」

桔梗は、抵抗するがかごめに魂が帰っていく。

「何だよ!?これ？」

ダイチも驚き近くにいる楓に聞く。

「かごめじゃ、かごめが魂を取り戻そうとしておる。」

楓は、説明しながらかごめを見る。

「嫌だ！私にはまだ!!」

桔梗の中にある魂がかごめに入り治る。

「き……桔梗は……はっ！」



足を滑られた桔梗は、崖に落ちようとした。  
その時。

「はっ！犬夜叉・・・」

崖から桔梗を助けたのは犬夜叉だ。

「おい！平気か!?!」

犬夜叉の後ろには、ダイチも待機していた。

「桔梗・・・このままじゃいけねえおめえもかごめの中に帰れ。」

「はっ！ば！馬鹿、犬夜叉!!」

今の桔梗にその言葉はNGだとダイチは思い犬夜叉に叫んだ。

「この私に死ねと言うのか?」

「!?!」

犬夜叉もダイチの言った意味を理解した。

「あの女の中に帰ると言うことは私が私で無くなると言う意味だ。犬夜叉・・・それを望むと言うことだな?兵一だけで飽き足らず!死ぬものか!!」

桔梗の怒りが再び込み上げると犬夜叉に掴まれていない反対の手で破魔の力を込める。

「私が死ぬときはお前の死ぬ時だ!」

破魔の力で犬夜叉も崖に落ちそうになった。

「おい！早まるな！」

ダイチは、犬夜叉の手を掴むと桔梗を説得しようとした。

スルツ！

犬夜叉の手は桔梗の手を完全に掴めず崖に落ちた。

「桔梗！！」

犬夜叉は、ただ叫ぶしか出来なかった。

そしてダイチに引き上げてもらいかごめの元に犬夜叉は向かう。

「……」

ダイチには犬夜叉に返す言葉が見つからず悲しい後ろ姿を見るしか出来ずに見るしか出来なかった。

「行くか……」

崖の下流に降りに行った。

崖の下流に桔梗の紛い物の身体は存在した。

グ……

手が動くそのまま身体も動き始める。

見ていた小動物達も逃げる。

「生きている……犬夜叉、私は生きている……」

桔梗は、歩き始めると！

「……」

目の前にダイチが立ち塞がっていた。

「!!」

桔梗も警戒するが今の自身の状態では勝てない事を悟っていた。

だが

「行けよ。」

ダイチは、戦意も見せずに桔梗を見逃し桔梗もダイチから通り過ぎようとした時ダイチの口が動く。

「今のお前を見たら兵一って子は涙を流して悲しむぞ？」

ピクッ！

桔梗は、その言葉を聞き悲しそうに立ち去った。

「……」

その後ろ姿を見たダイチは、何故か内心心配に見送った。

その後ダイチは、犬夜叉達と合流した帰り道。

「お前本当に何も覚えてねーんだな？」

犬夜叉がかごめに聞く。

「うん、全然……ごめんね。」

「あやまる事じゃねーんだよ。」

犬夜叉も悲しそうな顔になる。

「犬夜叉の奴、元気がないのー。」

「無理もない。しばらくそつとしておこう。」

「それが一番。」

犬夜叉とかごめの後ろにいる七宝、楓、ダイチは、今回の件で無理ない事を理解した。変に意識しないでよりあたしはあたしなんだから。」

「(でも、お前の魂は……) けっ！ あったりめーだろ、おめえと桔梗じゃあ似ても似つかねえよ！」

無理に犬夜叉は、強気になる。

「へー、時々あたしのことやらしー目で見るくせに。」

嫌味ばく犬夜叉に言い返す。

「テメエ！俺がいつ……」

「やつとあたしの顔を見た。」

するとかごめは、笑顔で犬夜叉を見る。



「え？」

犬夜叉も驚く。

「怒った方が犬夜叉らしいよ。」

「やかましい！」

言い返す犬夜叉。

「そうそう、怒って方がお前らしいし、俺もお前がかごめにやらしー目で見てたのは薄々勘付いてたんだよな〜！」

「んだと!？」

イタズラっぽく笑うダイチに顔を真っ赤にしてダイチを追いかける犬夜叉。

「うっわ〜!なんだよ! ジョークなのに退散! 退散!!」

「待ちやがれ!!」

ダイチを追い回す犬夜叉。

「元気が出たみたいじゃな。」

「ああ。(かごめは、不思議な子だ。桔梗お姉様の強い魂ですらかごめには勝てなかった。この子はただの生まれ変わりでない。ダイチも何処か懐かしい感じがするまるで兵一のような・・・まさかな・・・)」

楓は、何故かそんな風に見えた。

「散魂鉄爪!!」

「うわっ! それ反則!!」

「犬夜叉! おすわりっ!!」

ドシューーンっ!

いつものおすわりでお仕置きされる犬夜叉だった。

## 法師

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

桔梗の件から数日が経ち犬夜叉達は、再び四魂の欠片集めの為に旅に出ていた。

「美味しい。」

かごめが湧き水を飲んで休憩していた。

「かごめ？身体は良いのか？」

隣に座っている七宝が心配そうに見ていた。

「ありがとう七宝ちゃん心配してくれて。魂が出たり入ったりしたみたいだけど平気何ともないみたい。」

かごめは、そう言いながら空を見ている犬夜叉を見つめていた。

「犬夜叉。」

近くにいたダイチが犬夜叉に声をかけた。

「んだよ？」

「何考えているだよ？わかんなくなつたみたいなのツラしてよ。」

「何でわかったんだよ!？」

「顔に出てるぞ?」

犬夜叉は、ダイチの言葉で黙ってしまった。

(おそらく四魂の玉を手にして妖怪になれば全て問題無いつて思っていたのに違うじゃ無いのかって考えてるな・・・それよりも50年前に犬夜叉と桔梗を嵌めた犯人はなに者だ!?!いたら絶てえ八つ裂きにしてやる!)

ダイチは、そう決意するとかごめの元に行った。

「かごめ、ダイチ、犬夜叉なんかおかしいぞ?」

「そうよね?」

「何言ってるんだよ、あいつだって悩んだりするんだよ。どんな奴にだって平等に悩むもんなんだしな。まっ、ホツと言ってやりな今はな。」

そう言いつつもダイチ達は犬夜叉が心配だった。

「かごめ、50年前の犬夜叉と桔梗の件なんかおかしい。お前の意見はどうなんだ?」「すれ違う二人、玉の欠片を集めていけばその謎が解けるのかな?」

そんな話をしながら犬夜叉達は、再び歩き出した。

「さてと今日の昼メシは焼き魚でもすつか！」

昼になりダイチは、いつもの昼当番だったので魚を探しに犬夜叉達から離れ魚を探していた。

「ん？」

道に出ると法師の格好をした髪を生やした男が左右に分かれているので悩んでいた。

法師は持っていた錫杖でドラ○もんた○ね人ステッキの様に錫杖を倒した。

「右か……」

進路が決まったのか行こうとすると後ろから旅人二人がやって来た。

「この先の茶屋に若い娘が入ったんだそうだ。何でも色白でクリツとしてええ女子じゃそうな。」

「うむならば腹も空いた事だし立ち寄ってみるか。」

「そうだな。」

旅人二人が法師の錫杖とは反対の道に行った。

ズルっ

「！」

ダイチは、見た！

そう法師は、錫杖を反対の位置に足を使い変えたのだ！

「あつ左だ・・・」

法師はそのまま旅人達の行った道を進んだ。

（大丈夫か？あの坊さん？）

ダイチは、顔を引きつって法師の姿がみえなくなるまで立ち尽くした。

「さてと飯飯！」

ダイチは、魚を探しに向かった。

日も暮れて犬夜叉達は、旅の最中に丁度温泉がわいていた事もあり野宿をする事になった。

「はあ〜温泉だあ嬉しい！はあ〜気持ちいい。」

かごめが先に温泉に入っていた。

「絶対に覗かないですよ！」

かごめは、岩の向こうにいる犬夜叉に言った。

「心配すんな興味ねえからよ。」

「んま！もう！なんか失礼しちゃう！」

かごめは、物凄く機嫌が悪くなる。

「全くよ……元気の良いお二人だな。」

ダイチはとうとうとかごめが覗かれない様に犬夜叉のいる反対側で番をして後ろを向いて座っていた。

「ん？七宝なに脱いでいるんだよ？」

犬夜叉は、服を脱ぐ七宝に聞く。

「オラも入ろうと！」

七宝が入ろうとした瞬間に犬夜叉は、七宝の尻尾を掴んだ。

「待てコラ！」

「犬夜叉お前もこい！」

「なに？」

「オラは、常々思つとんたんじゃが何でお前はかごめと風呂に入らんのじゃ？みんな一

緒だと楽しいではないか。」

「あのな……」

「オラはおつとうやおつかあが生きとつた頃は何時も入つとたぞ？」

「おめえは、ガキだからわからないだらうけどな。」

「実の所かごめと何処まで行つとんじや？」

イタズラつぽく七宝は、犬夜叉に聞いた。

(フツいじり甲斐のある言葉を言うな七宝は。)

反対側から聞いていたダイチが面白そうに犬夜叉と七宝の会話を聞いていた。

「なんて事を言うとな人は困るらしい。何故じやろう？」

「何故じやねえよ！もう少して本当の事を言いそうだったじやねえか！」

犬夜叉は、七宝の頬を左右に引っ張った。

「もうー！」

かごめは、口を湯船に浸けてプクプクしていた。

「どうせ私は桔梗みたいに良い女じやあないですよ！つとか考えていたか？」

「な！何でわかつたの!？」

かごめは、ダイチの言葉に驚く。

「えっ？冗談で言ったんだけどな？……!？」



ダイチは、かごめに茶化しながら言っていると何やら気配を感じて魔戒斧を掴むと氣配のする方に投げた。

ガキーン！

魔戒斧は当たったが何かに弾かれたのか手ごたえを感じなかった。

「どうした!？」

犬夜叉は、弾かれた音を聞きつかさず温泉の中に向かう。

「いやらしい!」

かごめは、大岩を犬夜叉に叩きつけた。

犬夜叉は、氣絶した。

「かごめ、向こうに行っていてくれよ魔戒斧取りに行くからよ。(しかし、誰だ? さつきまでいた奴は? 魔戒斧を弾くって事は腕っ節は強いな。)」

かごめが温泉から出ると直ぐに魔戒斧を回収しながら考えるダイチ。

森の奥には・・・

「危ねえな、何だあの斧は? バカ重いし法力でも込められているのか? 手の痺れが残ってるぜ。」

昼間に出会った法師は片手が痺れていた。

「おれは手荒な事が嫌いだからな。」

法師は、そう言うとは何処に去った。

だがそれが法師の今後の運命を振り回される旅になるとは法師……いや不良法師  
弥勒は知らずにいた。

翌朝いつも通りに犬夜叉達は旅をし続けていた。

「もう！いつまで怒ってるのよ！あんただってあたしの裸を見たんだからおあいこで  
しよ？」

「みてねえよ！」

犬夜叉は、そっぽを向いた。

「見てるわよね？」

「オラからはなんとも……」

「まあ結果的には見た事になるな。」

そんな会話をしていると犬夜叉達はの歩いている上では。

さ

「あつしは野郎達の方をやれば良いんですね？」

狸の妖怪が弥勒に気弱に聞く。

「ああ、その隙に俺は女の方を。」

「弥勒のダンナ。こんな回りくどい事しなくたってその右手を使えば一発じゃないですか？」

狸の妖怪ハチは、弥勒にその右手を見て言った。

「ばーか、おめえだって知ってるだろ？これを使ったらみんな死んじまうんだぜ？」

「それは最もだ。そんなじゃな弥勒のダンナ。なんかあつたら助けて下さいよ。」

ハチは、懐から葉っぱを出すと崖から急降下した。

ドドドド!!

「「ん？」」

犬夜叉達は、上を見上げるとイカツイ化け物が転がりながら襲つて来た。

「きゃあつ！」

かごめと分断したのか残りのメンバーは、谷の下に化け物と一緒に落ちている。

「犬夜叉！」

グイッ！

かごめは、後ろから何かに引つ張られたと思つた瞬間に自転車に乗る弥勒の膝に乗せられていた。

「何よあんた？」

「ご安心ください。私は仏に仕える身怪しいものではありません。四魂の欠片を頂こうとしたらあなたが付いていたんですな。」

「あんた人をおまけみたいに。」

かごめは、睨む。

「ぐぐー！あつ！かごめ！」

「何だあの野郎！」

化け物と戦っているダイチと犬夜叉は、かごめが誰かに連れさらわれるのをみた。

「退けよ!!」

ダイチは、化け物を殴り飛ばした。

「退かねえと!!」

犬夜叉は、鉄砕牙を抜いた。

ポーンッ!

「ひい!!こー!!こー!!殺される!!」

化け物の正体はハチで怯えていた。

「ちっ！」

弥勒は、ハチの危機を確認すると自転車を止めた。

「乱暴なお連れ方だ。」

弥勒は、右手のつけている数珠を解いた。

「なんだよ！さつきまでの威勢は!？」

「犬夜叉、こいつ捕まえたら白状せるか？ん！あの坊主は……」

かごめの方を見るとダイチは、昨日の坊主を確認した。

ヒュウウウウウツ！

突然の風が起こりその勢いで犬夜叉は、鉄碎牙を離すのと同時に自身も風に飛ばされ鉄碎牙共々山ににめり込んだ。

「犬夜叉！」

なんとか無事だったダイチと弥勒に乗せられていたかごめが犬夜叉の元に駆け寄る。

「これさえ手に入れば。」

弥勒は、いつの間にかかごめの持っている四魂の欠片を取ると自転車を乗り何処かに向かった。

「おい！しっかりしろよ！」

「犬夜叉！大丈夫!？」

ダイチとかごめは、犬夜叉を山から必死で抜く。

「つーかあれって昨日の昼間に会った坊主だな。」

「何？」

「ああ、昼飯を取りに行っていたらあの坊主を見かけたんだ。」

ダイチは、昨日の事を説明した。

「仏に仕える者だとか行っていたけど……」

「けど？」

「右手で何かしていたの。」

ダイチは、かごめの言う弥勒の行動に気になった。

「はっ！しまった！」

「え？」

かごめの驚きに犬夜叉は、かごめを見る。

「自転車、乗り逃げされた！ひどーい！」

「まさか！何か置いていたのか!？」

ダイチは、勘が鋭くかごめに聞く。

「うん……その……四魂の欠片も取られたみたい……」

「ああ、やつぱりか・・・」

「なに!!!」

犬夜叉は、かごめと七宝を背負いながら走り飛びダイチも猛スピードで犬夜叉の後を追ひ弥勒を探す。

街に出ると犬夜叉は、立ち尽くしそして鼻を使い弥勒を探す。

「おいおい犬夜叉早くしねえとヤバイぞ!」

「ねえ犬夜叉まだなの?」

流石に犬夜叉が鼻を使って地面の匂いを嗅いでいると周りの人間達が集まって来た。

「うるせえな色んな匂いが混じって解んねえんだよ!」

「人が集まってんだ諦めよう。」

ため息をしながらダイチは、かごめと七宝に言う。

犬夜叉は、周りの人を無視してそのまま探し始める。

「ん?」

かごめ達が犬夜叉に目を向けているとダイチはある物を発見した。

「おーい! あつたぞ!」

ダイチは、遊女屋に止まっているかごめの自転車を発見した。

犬夜叉達は、この遊女屋に入った。

「何が上玉ばかり取り揃ってるだ？これじゃあ狸を見てた方がまだマシだ。」  
弥勒は遊女屋に入ったのは良いがみんな残念な顔揃いで後悔しながら酒を飲んで  
た。

「おーい！」

「ここらあ！」

「この自転車泥棒！」

勢い良く犬夜叉達が弥勒のいる部屋の扉を開けた。

「おお。貴女は。」

弥勒は、すぐに立ち上がりかごめの元に来ると手を握った。

「地獄に仏とはこの事だ。目が洗われる様です。」

弥勒の行動に犬夜叉の顔がイライラに変わる。



「余所見してんじゃねえぞ！」

犬夜叉は、爪で弥勒を襲ったが直ぐに弥勒は避ける。

「こつちもいるつてよ！」

ダイチも弥勒に左足で首狩りをするが余裕で避ける。

「全く乱暴な。」

「おい、盗んどいてその言葉はねえだろ？」

「聞いて呆れるぜ！先に狸を使って仕掛けて来やがったのは何処のどいつで！」

「犬夜叉、こいつは簡単に四魂の欠片を渡す様子もないからやるか？」

「おう！」

爪を構える犬夜叉と魔戒斧を構えるダイチが弥勒を見た。

弥勒は、錫杖を持つと直ぐに遊女屋を後にして犬夜叉とダイチも後を追った。

「大人しくしろ！」

「待ちやがれ！」

犬夜叉とダイチは、そのまま弥勒を追いかけて街の中を走り回る。

「無益な争いは好みません。」

「そうかよ！だつたら死ね！」

犬夜叉は、鉄碎牙を抜くと弥勒を切るが錫杖が防ぎ鉄碎牙が切れない。

「はっ!」

弥勒は、錫杖で鉄碎牙を弾き返した。

「何?!鉄碎牙を弾き返しただど!」

犬夜叉は、驚く。

「おうら!!」

背後に回ったダイチは、犬夜叉同様に振り下ろした。

ガキーン!

「成る程!読めたぞ!お前、昨日の夜にいた奴だな!」

「よくお分かりで。」

「ばーか、あの時の手応えがそっくりだからな。昨日も俺がこの魔戒斧で弾いた錫杖には靈力みたいな力でも宿してたんだろ!」

ダイチは、後ろに下がり魔戒斧を構え続ける。

「てめえ何もんだ!」

犬夜叉は、質問した。

「私は弥勒、法力にて人助けをいたしています。」

弥勒は、自己紹介をした。

「人助けだあ?ふぎけんな盗つ人野郎!さっさと懐の四魂の欠片を返しやがれ!そんだ

け集めんのにとれだけ苦勞したと思つてんだええ!!」

「確かに、しかし悪い事は言わぬ。こんな玉は私に渡しなさい。犬夜叉。」  
「てめえ俺を知つてんのか?」

「いえ。」

犬夜叉は、ズツコケた。

「貴方のお連れの美しい娘子がそう呼んでおりましたので。」

「俺も呼んでたんけど・・・」

ダイチは弥勒にスルーされて顔を搔く。

「まあ、なんか悪い人じゃないみたい。」

顔を真っ赤にするかごめ。

「しつかりせい、かごめ。玉泥棒じゃぞ?」

「そんなんで心揺らぐなよかごめ。」

七宝とダイチが言い返す。

「その軽口二度と叩けねえ様にしてやるぜ!」

犬夜叉は、鉄碎牙を再び振り弥勒を攻撃する。

「そこだ!」

ダイチは、直ぐに弥勒の間を見つければ右手首に掌底を打ち放つ。

「くっ！」

その攻撃で錫杖が弥勒から離れた。

「大人しく四魂の欠片を渡しな！死にたくなかったらな！」

犬夜叉は、弥勒に鉄碎牙を向けた。

直ぐに目を変えた弥勒は、素早く避けると逃げ始める。

「まて！」

「待ちやがれ！」

ダイチと犬夜叉は、弥勒を追いかける。

「周りの衆！できるだけ此処から離れなさい。命に関わります！」

弥勒は、そう注意を言い放った。

街から離れた所に来ると弥勒は、逃げるのをやめた。

「諦めな！てめえの負けだ！」

犬夜叉は、いつでも攻撃できるだけ体勢だった。

「ふっ。」

弥勒は、右手の数珠を解き右手を構える。

（何だ？何かするのかわやバイ気がするな。）

ダイチの直感が警戒を鳴らしていた。

「悪いがこう見えても私は負けず嫌いなんです。法力!!」

ダイチは、瞬時に危ないと感じたのか弥勒の後方に飛んだ。

弥勒の右手から何かそう全てを吸い込むブラックホールの様な物が辺りの物を無差別に吸い込み続ける。

「いつまで耐えられますかな?」

犬夜叉が徐々に弥勒との距離を縮めて行く。

「くそっ!このままじゃらちがあかない!」

ダイチは、チャンスを見つけていた。

「かごめ、オラ達もにげるんじや。」

「止めなくちや。」

「かごめ?」

「だってあの弥勒って人。人間を吸い込まない様になっている。」

かごめは、弥勒の方に行く。

「くそっ!」

「降参しなさい。入ったら二度と出られませんよ。」

「ぬかせ!」

犬夜叉は、そのまま流れに任せて弥勒の右手を切ろうとしている。

「やるしかねえか！」

ダイチは、魔戒斧で召喚陣を描くと戯牙に変身した。

『俺が先にその右手を斬ってやるよ!!』

戯牙は、獣身斧で横から弥勒の右手を斬ろうとした。

しかし！

犬夜叉の後ろにはかごめがやってきて吸い込まれそうになつてる。

『かごめ!』

戯牙と犬夜叉が叫ぶと弥勒は、右手に数珠を再び巻き右手の吸い込みが無くなる。

「かごめ!」

戯牙の変身を解くとダイチを通り越して犬夜叉は、かごめの所に行く。

「いたたたた・・・?」

かごめは、弥勒の右手を見ると数珠が巻かれていたり

(この数珠右手の封印なんだわ。自分から封じた。やっぱり割る人じゃない。)

「かごめ、おまえ。自分から飛び込んで来たのか?」

急いで来た犬夜叉がかごめに聞く。

「だってこの弥勒って人。あの右手の力を使えばもつと前にあたし達を殺せた筈よ。

きつと話せばわかる人だわ。」

スリスリ

気絶した？ 弥勒の右手がかごめの尻を撫で回した。

「ひっ！」

かごめが驚くと犬夜叉が寄って来て守るように抱きしめた。

「やっぱり殺して！」

セクハラを受けたかごめは犬夜叉に殺す様に頼む。

「この生グソ坊主!!」

犬夜叉は、鉄碎牙を構える。

「落ち着きなさい。話せばわか……」

ガシッ!

弥勒の頭はダイチの右手に驚掴みされていた。

「犬夜叉、かごめ。今から俺は蹴鞠するから混ざるか？」

突然弥勒の頭をアイアンクローしたダイチは、蹴鞠をさそう。

「しねえよ！」

「しないわよ！」

二人はこんな状況でする事を考え無かった。

「そうか……一人でお仕置きをするか……」

シュッ!

右手でダイチは、軽々と真上に弥勒を投げると瞬時にジャンプして飛び膝蹴りを弥勒の腹に蹴り再び真上に投げる。

「あんたがたどこさ♪肥後さ♪肥後どこさ♪」

「やめて・・・グゴッ!ガバッ!グビッ!」

ダイチは、弥勒に体制をする暇も許さず人間蹴鞠を足や肘を使い歌いきるまでそれを行なった。

「~~~~!!」

かごめと七宝は、怯え。

「俺の知っている蹴鞠じゃねえぞ・・・」

犬夜叉達は、絵にも書けない恐ろしさを目の当たりにした。

しばらくしてようやく許してもらったのか弥勒は気付くと夕方になっていた。

「私が四魂の玉を集めているのはある妖怪を捜して滅する為。」

顔が至る所に痣を作った弥勒が己の事情を犬夜叉達に説明し始める。

「その妖怪の名は奈落と言います。」

「奈落?」

かごめとダイチは、その妖怪の名前を同時に言う。



弥勒は、右手を犬夜叉達に見せると続けて説明する。

「この風穴は奈落の呪いによつて出来たもの。」

「どう言う妖怪何だ坊さんよ。」

「どんな妖怪なの？」

ダイチとかごめは、弥勒に質問をする。

「邪気が強く。人を喰らいます。あとはわからない。」

すぐに弥勒の回答が出る。

「はあ？どう事だ？」

「わからないってなにそれ？」

どう言う意味なのかわからないダイチとかごめ。

「何しろ・・・実際に奈落と戦つたのは若かりし頃の祖父。もう五十年ほど前の話です。

奈落との戦いは数年に渡り出会うたびに違う人間の姿に変えていたと言います。」

「姿を？変える？」

「最後の戦いでは美しい女の姿で現れたと言います。私の祖父は大変な法力を持つてお

りましたが残念な事に残念なことに。「スケベだったんだろ（でしょ）？」「よくお分か

りで。」

「いやお前さんを見たら大体そんな感じだろ？」

呆れながらダイチは言い返す。

「奈落は封印のお札ごと祖父の右手を貫き逃れ去ったそうです。『我かその手に作りし風穴はたとえ子を成そうとも我を殺さぬ限り呪いは代々受け継がれお前の一族を絶やすであろうぞ。』この風穴は年々大きくなり吸う力も大きくなっている。奈落を倒さねば数年のうちに私自身を呑み込むでしょうな。」

「それって死んじやうって事?」

「はい。それはそれで良いのです。それが私の運命なのですが……奈落をほつとくわけにはいかない。五十年前に消滅した筈の四魂の玉が今の世に再び現れ飛び散ったと言う。奈落は必ずや玉を集めより強い妖力を求める筈です。何故なら奈落は50年前に四魂の玉を手に入れかけたと言う。玉を守っていた巫女と近くにいた童を殺して。」

その言葉を聞き犬夜叉とダイチの目の色が変わる。

「巫女と童を殺しただと?」

「はい。」

(50年前に犬夜叉の姿を借りて桔梗と兵一を殺した奴。あの時の夢で見た犬夜叉の周りに覆っていた気はそいつだったのか!?)

「おい! 弥勒! その奈落とか言う奴は色んな姿をしていると言ったな! 今は! 今はどんな姿をしてるんだ!!?」

犬夜叉は、弥勒の胸倉を掴むと荒々しく聞く。

「おい！犬夜叉！落ち着け！！坊さんの冒頭の話をお忘れかよ！奴は色んな姿になるんだぞー！」

「そうです！だからそれがわかればとうの昔に見つけて成敗しています。」

犬夜叉は、ダイチが宥めると弥勒の胸倉を離し怒りの表情へと変わる。

「この四魂の欠片を集めていれば必ずや奈落に行き当たるとて事よね。」

かごめは、首にかけていた四魂の欠片を見せた。

「あつ、いつの間に。」

「俺が坊さんを気絶してる時に奪って渡した。」

「一緒に集めましょ。」

かごめが弥勒に意外な言葉をかけた。

「はっ？」

弥勒は、驚く。

「だって犬夜叉は譲る気ないんでしょ？」

「当たり前だろ！」

かごめの言葉に犬夜叉は、すぐに言う。

「ねっ、だから。」

かごめは、一緒に旅をする事をすすめた。

「どうも私は人様と深く関わるのが苦手な性分です。」

「でも、早く奈落を倒さなきゃ死んじゃうでしょ？」

「かごめ様、私の身を案じてくださるのか？」

何故か弥勒はかごめの両手が自身の両手で掴む。

「え？そりや……」

「ならば頼みがある。私の子供を産んでください。」

弥勒は、とんでもない事を言い放った。

「え？」

かごめは、訳がわからなくアホ顔に変わる。

「な！」

「おいおい！なんでそうなるんだよ！普通坊さんの状況を聞けば心配するのが普通だろうが!!」

ダイチが割り込んで来て弥勒に突っ込んだ。

「な！なんでそうなるのよ？」

「万が一奈落を打ち果たせず私が死んだ時、我が一族の使命を託す子が必要。」

ダイチを払い弥勒はかごめを抱きしめたが怯えるかごめ。

「いい加減にしやがれ！」

ついに犬夜叉がやって来て来て弥勒とかごめの間に入り込んだ。

「このスケベ坊主！」

「法師です。」

「似たようなもんだろ？」

怒る犬夜叉に弥勒が言い返すとダイチが突っ込んだ。

「今度かごめに妙な事をしやがったら・・・」

「犬夜叉・・・」

犬夜叉の態度にかごめは、嬉しそうだった。

「これは失礼。ただのお連れに見えたが犬夜叉はかごめ様の惚れて。」

「え？」

犬夜叉は、弥勒の言葉に驚く。

「これは、失礼。」

弥勒は、犬夜叉とかごめがそう言う仲だと思った。

「馬鹿野郎！こいつはただの玉兎見器でい！」

すごい言葉を犬夜叉は、言い放った。

「玉兎見器って？おいおい！」

ダイチは、頭を抱えた。

「玉笈見器?! んまあ! そうよね! 犬夜叉には好きな人がいるもんね〜!」

更にかごめの機嫌を損ねた。

「どうしようかな弥勒様の方が優しくそうだし。」

「何だ? てめえ裏切る気か!?!」

犬夜叉も怒り出した。

「はあ〜・・・・」

自分が今居なくても良いと思ったダイチは、呆れて三人の会話から離れて近くで柿を食っている七宝の元に戻って来た。

「ダイチ、深刻な話をしとるんじゃないの?」

「まあ、そうだが今はどうでも良い事になってるから離れても大丈夫だしな。何だか馬鹿馬鹿しいな。」

そんなこんなで犬夜叉達の話はしばらく終わらなかつたらしい。

## 墨

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

……ちよ。ダイチよ。

(ん? 誰? 寝てただけど? 今日は、休日だから起こすなって……)

起きよ。我が愛したコウヤの血を引き戯牙の称号を受け継ぐ子よ。

(コウヤ!? コウヤだと?)

ダイチは、祖父の名を聞くとき意識を集中したらあの写真の女が目の前に立っていた。

「お前は誰だ?」

『今は言えない……だがお前をいつでも見守っている者だ。』

女は上を見上げていた。

『ダイチ、お前ならコウヤを……あの偉大な祖父も超える可能性がある。ダイチ……

強くなれ……』

その言葉を聞くと女の姿は、薄く薄くなっていた。

「ん?」

目覚めると犬夜叉達と野宿しており他のメンバーは未だに寝ていた。

「夢か・・・」

ダイチは、ホツとしたが何故かあの女の事が頭に離れなかった。

カーカーカー

犬夜叉達は、ある戦場跡を見ていた。

「はあくやだやだ・・・この時代行く所行く所、戦ばつかり「いや待てよ」え？」

かごめは、この戦国時代に嫌な気分になっているがダイチが先に変なことに気づく。

確かにカラス達が骸に群がり食べているがその骸の姿が非常に酷い。

何故なら

「変だな・・・落武者の死体が内蔵までえぐられている・・・」

そう落武者達の腹から全ての臓器がなくなっている。

「ああ、そんなんじゃないやねえな。おかしいぜ。血だ。血の匂いが全くしないぜ。」



犬夜叉には、わかる普通なら血の匂いするのが当たり前だからだ。

「おそらく物の怪の仕業。それもそこらの雑魚妖怪などではない。ということは、四魂の欠片を持つていそうですね。」

犬夜叉の後ろにいるのは前回出てきた弥勒である。

何故か一緒に来ていた。

「弥勒、言つとくけどな俺はお前と組む気はねえからな。四魂の欠片は渡さねえぞ。」

「早い者勝ち、という訳ですね。」

「そういうことだ。」

犬夜叉は、睨むが弥勒に至っては涼し気に見ていた。

「おいおい、坊さんよ。四魂の欠片と一緒に集めねえか？俺らの敵は奈落何だしさ。其方のほうが賢明なんじゃねえか？」

ダイチは、弥勒に提案した。

「残念ですけど、ここでお別れです。犬夜叉とは性に合わないでしょう。」

弥勒は、丁寧に言うと去る。

「頼りになりそうな奴じやったのの。」

「ねえ犬夜叉、弥勒様行っちゃうよ。あれ？」

「おーい！何処だ犬夜叉!!」

ダイチ達は、犬夜叉がいらない事に気づく。

ひいひい！お助けをおおおお！！

別の方角から人の悲鳴が聞こえた。

「え？まさか!？」

かごめ達は、声のする方に向かう。

「そーそれはお使いの手紙!!」

男の人は必死で手紙を犬夜叉から奪おうとするが勝てない。

「これか？臭いの元は?」

犬夜叉は、何かを探っていた事には間違いない。

「おすわりっ!」

ドシーン!!

かごめ達がやってくると犬夜叉は、恒例のおすわりっ!で地面にクレーターができ男の人は無事に手紙も戻った。

「つてなにするんない!」

「あの人は普通の人でしょ!？」

「どうしたんだよ?」

かごめ達は、犬夜叉に聞く。

「さっきの場所に墨の臭いが残ってた。」

「ん？」

「たぶんその臭いを追っかければ妖怪の所に行き着く筈だ。」

「なんでそんな大事な話をしなかつたんじゃ！」

「まだ、弥勒の坊さんを意識してんのか？」

七宝とダイチが犬夜叉に言う。

「うかうかしてたら弥勒の野郎に四魂の欠片を取られちまうだろうが！」

「はあくそんなにあの人の事が嫌い？」

そう言うのと犬夜叉は、かごめの所にくると。

「おめえーは、ああ言うスケベ野郎が好きなのか!？」

「だーいすき。」

「え？」

かごめの言葉で犬夜叉は驚く。

「なーんてね。冗談に「かごめ、今の彼奴冗談通じないぞ？ほら。」え？」

犬夜叉は、向こうでかなり気にしていた。

「つて人の話は最後まで聞きなさいよー！」

「アホじゃ。」

「ああ、バカだな。」

呆れるダイチと七宝。

夕方になり犬夜叉が色んな人を同じ様に探したが全て空振りだった。

「なあ、もうそろそろ野營の支度をしないか?」

「そうね・・・(はあ、また野宿か・・・) あれ? 犬夜叉?」

かごめは、探すもまた消えている犬夜叉。

「しゃーねー、探すか。」

「あいつは何やつとるんじゃない?」

三人は、犬夜叉を探すとまた人を捕まえていた。

「あ、もうまた!」

「これで六人目じゃ。」

「全くよ・・・?」

ダイチは、犬夜叉の捕まえた人の顔を見た瞬間に直ぐにわかった。

(あれは、人を殺し慣れた奴の目だ! それも一番タチの悪い!)

ダイチは、直ぐにペースを上げて犬夜叉に迫り着く。

「な、なんじや貴様らは!?! わしは豪族・・・いや、ただの絵師じゃぞ!」

「絵師だあ? おめえ何やらかした!?! 墨の匂いに混じって血の匂いがプンプンしてるぜ

!

「そうか・血か・俺はこいつが人殺しの目だから問い詰めようとしたがおつちゃんよ。少しツラ貸せや。」

犬夜叉とダイチは、絵師に近付く。

「離せ、離せ！」

一心不乱で絵師は、犬夜叉の手から離れ逃げ出した。

絵師は、懐から絵巻を出すとその絵は鬼の墨画であり墨画が突如本物の鬼に変わった。

【ぐわっ！】

鬼は、犬夜叉とダイチを踏みつぶそうとしたが二人は避ける。

「んっ？」

ダイチは、絵師を見ると絵師は小舟に乗って逃げた。

「待ちやがれ！」

犬夜叉は、追いかけようとするが鬼が邪魔して行けない。

(どういう事？あの男妖怪？・・・いえ違う人間だわ。)

かごめは、絵師が人間である事を確認した。

「やろおお！」

犬夜叉は、鉄砕牙を抜いて鬼を真つ二つに斬った。

「凶体だけでかいだけか。」

「弱いな。」

犬夜叉とダイチは、鬼を見上げる。

鬼は、倒れる事なくしばらくすると風船の様に膨らみ。

ドブアアアアアツ!!

鬼から出た黒い液体が犬夜叉とダイチに降り掛かる。

「あー！」

「黒い血じゃー！」

かごめと七宝も直ぐに犬夜叉達の所に行く。

「うえっ！なんだよこれ!？」

「ぺっぺっぺっぺっ！ちくしよう、これは墨と血？う・・・」

犬夜叉は、直ぐに目を回した。

「おいおい！犬夜叉どうしたんだよ？」

「ちよっと！」

犬夜叉は、かごめとダイチに持ち上げられた。

「鼻が利きすぎて墨と血の臭気に当たったんじゃ。」

七宝でも鼻をつまむという事は犬夜叉にとってはとんでもない物である。

「しつかりしてよ犬夜叉。」

「いや、当分はダメだろ?」

その後犬夜叉が気付きすぐに絵師の搜索を開始した。

「ここは離れて何処かの武家屋敷。」

「お祓いだと?」

武家屋敷の門番はお祓いを名目に悪さをする不良法師こと弥勒に警戒した。

「はい、この屋敷に不吉な影が見えております。ぜひ、一夜限りのお祓いをと。」

「たわけい！ここはお前なんぞと比べものにならない徳の高い方に毎年ご祈禱を頼んでおり無事に過ごしておるわ！」

「帰れ！帰れ！何が不吉な影だ！」

弥勒は、門番達に追い払われた。

「はー……仕方ない今夜は野宿か……」

弥勒は諦めて帰ろうとしたその時だった。

「ん？」

空を見上げると黒い雲がものすごい速さでやって来て化け物に変わった。

「来た！本当に来たぞ！！不吉の影が！！」

弥勒は叫んで屋敷に引き返した。

「ん？あの声は坊さんか？」

犬夜叉達と絵師を探していたが二手に分かれて探していたダイチが弥勒の声に反応して行つた。

「おーいおーい！」

ダイチは、弥勒の姿を確認するとすぐに弥勒に追いついた。

「あなたはダイチ殿!？」

「それよりあの2匹の妖怪は何だよ!？」



「あれは地獄の馬頭と牛頭！私も絵でしか見たことがなかったです！」

2人は屋敷にすぐに入ると牛頭と馬頭は門番を殺して屋敷の奥に侵入していた。

「きやあああつ！誰か姫を

!!」

屋敷の女の声があると弥勒の目が変わる。

「いぎゃー！」

(下心見え見えなんだよ坊さん……)

ダイチと弥勒は、屋敷に入って行った。

絵師の自宅。

「うろうろ……」

絵師は、寝ていたが何かに驚かされていた。

絵師の自宅の中は恐ろしい地獄絵で埋め尽くされていた。

この絵師の名は紅達と言いだでは良い家の男だったが地獄絵が好きで何時も戦の跡で亡骸を写生していた。

そんなある日亡骸の血だまりに不思議なかけらそう四魂の欠片を偶然手にした。

紅達は、何故かこの欠片を墨に溶かして鬼を書く絵の鬼が現実となり現れ「もつと・・・血と肝を・・・」と言うので使用人を殺したらそれが最も良い事に気付いた。

その後も通りすがりの人達を殺し都でお尋ね者になり都を出てそしてこの地に流れて住んでいる。

そしてこの地の館の姫に恋していた。

紅達の夢の中では姫の住む館にいて襖を何回も開いていた。

【姫・姫・】

そして襖を全て開けると姫が後ろを向いて座っていた。

ギラッ！

姫は、振り返ると瞳孔を開き恐ろしい雰囲気を見せかけていた。

【ひー姫ー！どうなされたその御顔は!?!】

《お前の血が！血が欲しい！》

姫は、紅達の首と手を握ると手の方が先にミイラになっていた。

【うわああああつ!!】

紅達は、覚めろ覚めろと必死に祈る様に叫んだ。

「はっ！」

紅達は、寝汗まみれで起き上がった。

ドシューーンッ!

牛頭と馬頭は、館に入ると直ぐに姫の居る間に侵入した。

「はっ！」

素早く先回りした弥勒とダイチは、直ぐに姫の前に来ると戦闘態勢に入る。

だが・・・

シューウウ・・・

牛頭と馬頭は、直ぐに消えてどこかにいなくなつた。

「何だありゃ?」

「どういう事だ?」

ダイチと弥勒は、なぜ消えたのか理解出来なかった。

「はあっ！はあっ！はあっ！」

紅達は、夢の光景が恐ろしくようやく息を整えつつあった。

ポタポタ！

紅達は、雨の音が気になって居ると墨の雨が降っているのを確認する。

その雨が止み終わると地面に落ちた墨が全て宙に上るとそのまま墨の入る竹筒に全  
て入った。

「わしが寝ている間に墨が勝手に動いたと言うのか？」

紅達は、震えが止まらくなる。

## その頃

「法師殿。先程の家臣の無礼をお許し下され。いや、それにしても良くぞ姫を守ってくださった。」

弥勒とダイチの周りには豪華な食事が並んでいた。

「礼には及びません。しかし油断は禁物。妖怪の攻撃はまだ終わったとは思えません。そうですな姫は今宵私と一緒にいた方が良いかと思えます。これも同じ布団で……ん？」

弥勒はダイチが庭に出るを確認すると何やら笛を持つて吹いている。

「ダイチ殿？何をしていますか？」

「犬笛で呼んだよ犬夜叉達を。」

すると声が聞こえた。

「こらー！何を二人つきりでしょうとしてんだこのスケベ坊主!!」

犬夜叉が自転車にのるかごめの後ろに立っていた。

「おお、本当だ。すごいですな……この犬笛。」

「だろ？」

弥勒は、ダイチのやる事に関心する。

「弥勒様、ダイチさん。ここにも墨の鬼が来たの？」

「墨の鬼？あの鬼は墨で出来ていたのですか？」

「あ！悪い説明してなかった坊さんに。」

かこめが事の経緯を弥勒に説明した。

「鬼を操る絵師ですと？」

「まあ、そんな感じだ。」

「そう。その人、人間だったわ。」

状況を弥勒が聞くと考える。

「なるほど。その絵師が四魂の欠片の力を借りているかもしれない。」

「さつき、この屋敷を襲ったのも。」

「ええ、その絵師が操る妖怪に違いありません。」

弥勒は四魂の力の凄さに実感した。

「絵師の書きたものが本物の鬼になっておる。四魂の欠片の威力は凄いわい。」

「ああ、まったくだな。はむ！」

ダイチは、七宝と共に饅頭を食いながら話しているとまだ一人だけこの輪に溶け込めない奴がいた。

「おいおい、犬夜叉。おめえは話に混ざんねえのか？」

そう溶け込めない奴が犬夜叉である。

「けっ！」

「もう！いつまで捻くれているのよ！」

「どうしました犬夜叉？」

弥勒はわざとぼく犬夜叉に言う。

「うるせえ！」

「ちよつと位弥勒様を頼りにしたっていいでしょ？本当にヤキモチ焼きなんだから。」

「ヤキモチ！ヤキモチ！」

ダイチは、犬夜叉を揶揄う様にいじまくる。

「ばっ！焼きてなんかいねえ！ん!!」

犬夜叉は、ある光景に驚くと。

ダイチと七宝も振り向く。

すると弥勒は、かごめの手を握っていた。

「そうですか・・・かごめ様。そんなに私をかつてくださるか？」

かごめは、弥勒の手を退けると弥勒の懐の方に指差す。

「ええ、四魂の欠片も持っているし。」

「え？」

弥勒は意外な事を言われて驚く。

「一つ・二つ・三つは持っているわね。」

「いい目をお持ちで。」

弥勒は四魂の欠片を手に当てて褒める。

スタスタスタ！

犬夜叉は、その言葉を聞くと駆け足で弥勒に歩み寄る。

が！

ドカツ！

ダイチは、素早く犬夜叉の足を足で払うと倒れこむ態勢になり更に。

「おすわりっ！」

ドカーンッ！

「かごめ！」

「これは私が集めた物。盗っ人ですよ？」

「いやいや、坊さんに言われたくねえよ。」

ダイチは、突っ込んだ。

「ん？」



犬夜叉が弥勒に口喧嘩している間にダイチは、人の気配に気付き犬夜叉達に気付かれない様に出て行き人の気配を探るとこの屋敷の家臣達であった。

ダイチは、家臣達の後を付いていくと先程の屋敷の親方の方に行き告げた。

「何!?!その絵師が鬼を操っているだど?」

「はっ!その絵師は、四魂の欠片を持つていると言う事です。」

「四魂の玉とな!?!噂に聞いた事がある。欠片一粒でも手にすれば強大な力を手にする事が出来る宝玉。」

「きつとあの絵師です。直ぐに絵師から奪い取りましょう。」

「更にあの法師も四魂の欠片を」

「持つているのか!?!」

(どうやらかなり厄介な事になったな。)

ダイチは、迅速に気配を消して直ぐに犬夜叉達の所に何もなかったかの様に戻っていた。

その夜。

弥勒の寝ている部屋の外廊下に人影が見えるそう家臣達が刀を持って構えていた。

「へえ〜、随分とクセエ事すんのな。」

「!!」

家臣達は、振り返るとダイチに目掛けて斬りかかった。  
だが！

ドカツ！バギツ！グギイツ！

物凄い鈍く大きい音に弥勒も起き犬夜叉達も起きた。

「どうした！」

「ここの家臣の人達じゃない。」

「おっ！犬夜叉！かごめ！坊さん！おはよ！」

ダイチは、家臣達の手や足の関節を外すと人間椅子で座っていた。

「此奴らが坊さんの四魂の欠片を取ろうとしてしえたんだよ。さてと洗いざらい全て話  
な。歯を全部取られたくなきやな。」

ダイチは、アイアンクローで家臣を掴み脅した。

「し、四魂の玉を奪おうとしたただけだ。絵師の方は既に調査済みで親方様が向かわれ  
た。」

「絵師の居場所を教えな！」

弥勒もダイチと共に拷問を始めた。

「かごめ様！車拝借します！」

直ぐに場所を聞くと弥勒はかごめの自転車に乗り紅達の所に向かった。

「待つて！私も！」

かごめは、追いかけるが既に行ってしまったが。

「捕まってる！」

犬夜叉は、かごめを乗せるといそぎ。

（急いだ方がよい！四魂の欠片で作られたなら普通の奴でやり合える奴じゃない！）

ダイチも七宝を乗せて犬夜叉と同じスピードで走る。

「いけええええつ!!」

親方は、部下の家臣達に紅達の家の周りを囲むと一斉に攻めに行つた。

その紅達の家では数え切れない鬼の絵が描かれている。

「ふふふふ！我が軍勢は数が尽きる事を知らぬ！あの墨で書けば鬼など何度でも作り出せるのだ！いでよ！地獄の鬼達よ!!」

紅達が絵に命ずると絵が雲となり次々と外へ出て行つた。

そして鬼の軍勢へと具現化し鬼の軍勢は、家臣達を直ぐに殺し始める。  
生き残った家臣達も一目散に逃げ出す。

「ひいー！」

逃げ遅れた親方も怯え始める。

「こりゃ・・・」

犬夜叉達が辿り着くと紅達の家の周りは鬼達で徘徊していた。

「斬つてはまた墨の臭気にやられる。どうする犬夜叉！」

ダイチの背に乗る七宝が犬夜叉に聞く。

「うるせえ！」

犬夜叉は、御構い無しに鉄砕牙を抜くと鬼達を斬り始まる。

「やってやろうじゃえねか！」

ダイチも魔戒斧を抜くと同じく斬り始める。

「助かった後で褒美を遣わす！」

親方は、そう言い残すと直ぐに逃げ出した。

ドブアアアア!!

その後直ぐに斬つた鬼の墨が犬夜叉達に降りかかる。

「いやああ！この墨がくさあーい！」

人間のかごめでも解る程の臭気だった。

「犬夜叉！」

「うわあ！くっせえ．．おい！大丈夫かよ？！」

七宝とダイチが犬夜叉に呼びかけるが。

「ぐがあー！」

犬夜叉は、目を回し倒れた。

「おいおい！犬夜叉！倒れてる場合じゃねえぞ！」

そう行っている間に鬼が犬夜叉達の方に走って来た。

「ちっー！」

ダイチが魔戒斧で構えて召喚する時だった。

錫杖を持った弥勒が現れ先に鬼を法力を使い倒した。

「弥勒様！」

「おお！坊さん！」

弥勒は、右手の数珠を解くと犬夜叉達の前に来た。

「私の後ろから離れぬよう。風穴を開きます！」

風穴を開くと鬼達は、直ぐに吸い込まれた。

「坊さん！こっちは頼むぞ！俺も向こうの鬼をやるからよ！！」

ダイチは、反対を向くと鬼達が攻めて来てるのを感じ魔戒斧で召喚し戯牙に変わる。  
『オラアアアツ!』

戯牙は、拳で衝撃波を放ち次々とマシンガンの様に左右の拳を放ち続けている。

1分もしない内に戯牙と弥勒は全ての鬼を倒した。

「うー!」

弥勒は苦しそうに膝をついた。

「弥勒様!」

『どうしたんだ?』

かごめと戯牙は、弥勒に声をかけた。

「これ程の邪気を一度に吸い込んだのは初めてだ。いささか疲れました。」

(ちーちくしょう! こんな奴に助けられるなんて!)

弥勒は苦しそうな顔をしていると犬夜叉も悔しそうに弥勒をにらんだ。

「なに?!」

かごめは向こうの彼方から何か来るのを感じた。

そうそれは鬼の軍勢だった、しかも先程の倍以上。

『(まずい! 今犬夜叉も坊さんも動けねえ!) みんな! 動くなよ!!』

戯牙は、衝撃波で次々と倒すが流石にキリがない数だった。

(くそ！そのままじゃ！)

戯牙の包囲網も徐々に鬼の軍勢が破って来ようとしていた。

「落ち着け！ダイチよ！」

『！』

周りが止まって見えると直ぐに別の空間そう内なる魔界に似た空間にいた。

「こうしてお前と話すとはあの夢の時から。」

例の夢の女が出て来た。

「教えてくれアンタは誰なんだ!？」

「今は言えない。だが、お前を常に見守る者だ。ダイチよ、

お前にコウヤが使っていた技を託そう。」

女は、ダイチのデコに手を当てると別の戯牙の記憶そうコウヤが使っていた技をイ

メージだけで伝えた。

「これは!？」

ダイチは、その技を直ぐに理解した。

「ダイチ、コウヤを超える守りし者になれ。」

女は消えるとその空間も消えようとするが。

「おい、アンタは爺ちゃんの女か？」

ダイチは、小指を立てて聞く。

女はその言葉を聞いて嬉しそうになる。

「さあな、だが想像に任せる。」

女は消えていった。

『オリアアアア!!』

戯牙は、今まで以上の強い衝撃波放つと鬼達を後退させる。

『やってやろうじゃねえか!』

戯牙は、足を左右力強く踏み込むと右手に靈力を貯めてそのまま左手で投げ飛ばした。

(あれは、飛天の時に使ったヤツだ!?)

犬夜叉は、あの現場で直接見ていたので理解してはいたが何かが違っていた。

『靈弾獣破アアアアアアツツ!!』

投げ飛ばした靈力が狼の顔に似た形状へと変わり鬼の軍勢に当たった。

ドカアーンンンンツツ!!

鬼の軍勢は、全て消滅した。

『終わったか・・・!』

今度は紅達の家が崩れると紅達が自身の書いた三頭の首を持つ蛇妖怪で逃走し空へ



逃げていく。

「逃すか！」

犬夜叉は、既に動けるようになり紅達を追う気満々だった。

「かごめ！四魂の欠片は何処だ!？」

「見えた！腰の竹筒よ！」

かごめは、犬夜叉に四魂の欠片の場所を的確に教えた。

犬夜叉は、妖怪の身体に素早く乗るとある事を思い出す。

「そうだ！言い忘れるところだったぜ！やい！弥勒！てめえ一人でかっこつけてるんじゃないぞー！」

『おいおい、俺もしたから二人でかっこつけてるんじゃないのか?』

戲牙も直ぐに妖怪の身体に乗る。

「?」

弥勒は、何で犬夜叉が言ったのか理解できなかった。

「通訳するわ。『ここは俺に任せてゆっくり休め。』」

「・・・なるほど。」

弥勒は犬夜叉が天邪鬼な性根な事を理解した。

「地獄の業火で骨も残さず焼き尽くしてくれるわ！」

紅達は、妖怪を操り口から炎を犬夜叉と戯牙に浴びせる。

『てめえいい加減にしろよ!!』

犬夜叉と戯牙は、同時に炎を払い紅達の方まで走って来た。

鉄碎牙と獣身斧で蛇の二つの頭を斬り落とした。

「ひい!!」

流石の紅達も二人の気迫に驚くと竹筒を出す。

「い、これを・・・」

紅達は、墨の入った筒を犬夜叉と戯牙に見せる。

「四魂のかけら。」

犬夜叉も確認出来る位四魂のかけらの光が見える。

「これがなければわしはもう鬼など操れぬ。ただの人じゃ。」

紅達は、命乞いをする。

「ちっ!」

戯牙の前に入る犬夜叉は、鉄碎牙を鞘に収める。

(優しいよ。俺らの中では一番な。)

戯牙の鎧の中のダイチは、微笑んだ。

ニヤ

紅達は、犬夜叉の隙を見つけると空を飛んで入る妖怪に犬夜叉を攻撃する。  
が！

ザッ！

獣身斧が隙を見せた犬夜叉を守るの様に戯牙は動く。

『観念しろや！』

戯牙がそのまま乗って入る妖怪の胴体に重い拳を込めると急降下で落ちる。

紅達は、下手な着地で倒れるとそのまま犬夜叉達から逃走をするが紅達の墨の入った筒が何故か沸騰の様<sup>に</sup>泡が沢山出ていた。

「危ねえ！手放せ！」

犬夜叉は、その瞬間危機感を感じ紅達に叫ぶ。

「手放すものかわしにはまだやること<sup>が</sup>！」

ザンツ！

沸騰した墨が紅達の左手を切ると左手を喰い始めた。

「あー！」

落ちた墨は勝手に流れて出すと紅達に目掛けて集まり食い始めた。

「助け……」

紅達の身体の半分は墨に喰われている。

『くっ！間に合え！』

戯牙は、墨に喰われかけている紅達を助ける為に墨の中に入るが既に戯牙が手を持った瞬間に手以外の部分は消えて墨に喰われていた。

「馬鹿野郎だから……」

『手遅れだったか……』

墨塗れで紅達の手だけ持った戯牙も犬夜叉同様に諦めて直ぐに墨の無い場所に行く  
と墨が浄化される様に戯牙の鎧から消える。

「墨に喰われた。」

「ど……どうして?」

「血だ。この墨は、人の血と肝で出来ている。絵師の野郎は流した血を吸いに来て来や  
がった。」

「あ?これは……」

かごめは、見ると紅達がああ姫を描いた絵だった。

『あの姫さんを描こうとしたんだな。』

「かわいそうに……」

かごめは、紅達の残した絵を見え可哀想に感じた。

「愚かな……このような汚れた墨で美しいものなど描けるものですか。」

弥勒はそう言っても四魂の欠片を取ろうとはしない。

（なるほど、四魂の欠片にまとわりついている汚い気が危ないから坊さんは取らねえのか。）

戯牙から戻ったダイチは、弥勒の行動に察する。

ひよい

いつも間にかかごめがその四魂の欠片を手にした。

「あ！」

ダイチと弥勒は、かごめが四魂の欠片を手にした事にも驚いているが先程の汚い気が消えていた。

「これ誰が持つ？」

かごめは、欠片を持つとみんなに聞く。

「なんで相談すんだよ」

「だって弥勒様に助けてもらったじゃない。」

犬夜叉は、かごめの言葉に文句を言う。

「かごめ様がお持ち下さい。」

弥勒は、あつさりと言り返す。

「え……」

「いいの？」

かごめと犬夜叉は、驚く。

「なあ坊さん？」

「なんです？」

「さっきの欠片についていた汚い気は何だったんだ？」

ダイチは、先程の汚い気が気になって仕方なかった。

「あれは邪気ですよ。」

弥勒は、邪気を知らないと理解してダイチに説明した。

「けっ、供養何かしてことをやることねーのによ。」

ダイチと弥勒は紅達の墓を作ってやった。

「もう死んだんだからいいだろう供養してやるのが一番。」

「そうです死んでしまえば良いも悪いもありませんあるのは仏の慈悲だけです。」

「慈悲だあ？これだから人間の言う事はわかんねえ。」

「犬夜叉お前は絵師を斬ろうと思えば斬れた筈。でも斬らなかつた。」

「その優しさが慈悲なんだよ。」

ダイチが最後に慈悲の意味を。

「けっ。くだらねえ。」

犬夜叉は、顔は興味を持たない様な見えたが薄々理解していた。

「弥勒様一緒に来てくれるの？」

「マジか坊さん？」

「はい、やはり美しい女子と一緒にのほうが楽しいですからな」

「まーっ。」

弥勒は下心満々かもしれない言葉で言う。

「やれやれ・・・」

「けっ！」

犬夜叉がうっとうしそうにかごめ達を見る。

「それに犬夜叉も見かけと違って善人のようですから。」

「そうなのよねー。」

「まあ本人は気づいてねーだけだけどな・・・」

「んんん？」



## 兄弟

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

夕暮れ時

「はっはっはっ！大量だ！」

大勢の野武士達が近くの村で物の略奪を終えて隠れ家に帰ろうとしている時だった。

「ん？」

夕日の方角に一人誰か立っていた。

「面白い甲冑着てるぜ。」

「ぶっ殺して身ぐるみ剥いじまえ!!」

野武士達の頭が命じるとその者に襲いかかった。

グチュ!

その者の左手は、異形の手をしており目が赤く光ると爪から毒を宿しているのか一瞬で野武士達は溶けて無くなった。

そうその者こそかつて犬夜叉と鉄碎牙を奪い合った男……野良公……ギラッ!……

殺生丸だった。

「ふふふ！よつ！お見事です。流石は殺生丸様。やはり青鬼を殺してもぎ取った腕だけあつて強うございますのう。」

殺生丸の側近の邪見は、殺生丸にゴマスリをしながら言う。

「節穴か？」

殺生丸は、青鬼の腕を自らで取り捨てた。

「それは使い物にならん。」

「あらら、これもダメでしたか・・・ガシッ！うわつ！」

それでもその青鬼の腕は生命力が溢れているのか手が勝手に邪見を握り締めようとしていた。

「もつと真面なマシな腕を持つ妖怪を探し出して来い。次は殺すぞ。」

殺生丸は、そう言うのと黙り込む。

「ふーっ！ふーっ！」

邪見は、自力で抜け出すと青鬼の腕は直ぐに骨だけになる。

正直今の生活に邪見は、疲れ始めていた。

(それもこれもあの犬夜叉めが殺生丸様の腕を斬り落としたせいじゃ！)

\*詳しくは、このシリーズの刀を見てね。

「腕をすり替えたところでいずれは使い物にならぬか……」

殺生丸でも理解していた腕を変えたところで同じ様な結果になる事を。

???

「お困りの様でございますな。」

殺生丸は、振り向くと大きい猿の妖怪狒々のしかも白い毛で全身包み込んだ男が現れた。

「ひっ!」

突然現れた事で邪見は、殺生丸の後ろに隠れた。

「恐れながら貴方様は、犬夜叉めの兄、殺生丸様でございますよう。」

「何だ?」

「貴方様同様犬夜叉を憎む者。大体のお話。失礼ながら聞かせていただきました。もしよろしければこの腕お使いください。」

狒々の男は、殺生丸にある腕を見せた。

「ん?」

邪見は、ある腕を確認すると狒々の男に睨む。

「跌させるな! 貴様! それは人間の腕ではないか!」

「いかにも。」

狒々の男は、迷わずに答える。

「これはただの人間の腕ではございません。これは、人間の腕に四魂の欠片を埋め込んだ物。」

「四魂の欠片?」

邪見は、興味を持った。

「この腕をもちいれば犬夜叉の持つ妖刀鉄碎牙を掴むことも出来ましょう。鉄碎牙は、人間を守る刀と聞き及んでおります。本来、貴方様の様な完全な妖怪には触れぬ事の出来ぬ刀だと。」

「ふん、貴様。犬夜叉が憎いと言っておったな。犬夜叉を殺す為に使うつもりか?」

「御意。」

狒々の男は、迷わずに言う。

「貴様!何と恐れ多い!「面白い。その腕貰つてやろう。」へっ?殺生丸様!」  
「それともう一つ。この巢を。必ず役に立つ筈です。」

狒々の男は、雀蜂の様な形の小さい物を渡した。

「貴様の名前を聞いておこうか?」

「奈落・・・ともうします。」

「奈落か覚えておこう。」

そうこれがこの作品で重要になる存在の悪の登場でもある。

その頃近くの村では

「よかつたー野宿じゃなくて。ちゃんと食事も出来て屋根の下でグツスリと寝られてサ  
イコー！」

かごめは、この村の立派な屋敷で七宝と共に何故かご馳走を食べていた、何時もなら  
ダイチや犬夜叉が食べ物を取って来たり寝る場所の確保や作ったりしてたからだ。

「けっ！わるかつたな、何時も野宿ばかりで。」

犬夜叉は、捻くれていた。

「犬夜叉あんた、最近僻みっぽくない？」

「弥勒のお陰で屋敷にまで泊められるのが気に入らんのか？ 布団は良いぞ。」

「ねえ〜！」

七宝とかごめは、口を揃えて言った。

「これでよろしい。」

弥勒は、屋根の柱にお札を貼った。

「これにてこの屋敷の上空の不吉な雲は払われましょう。」

「ありがとうございます法師さま。」

この村の長者は、弥勒に礼を言う。

（本当に騙せるとはな。）

心の中で失笑する弥勒と付き添いで来たダイチ。

「いやー先刻法師さまに突然、屋敷の上に不吉の雲がある！ っと言われた時にはどうなる事かと思いましたがもう安心ですじゃ。」

「これも法師の務め。」

弥勒は、善人ヅラで言う。

（坊さん・・・アンタやっぱ汚れた法師だよ・・・）

もう口で突つ込むのも言えない詐術に口を引き攣っていた。

「ご馳走様でした。」

「さてと、ゆっくり休みましょうか。」

「さてとメシメシ！」

かごめ達がかご馳走を食べ終わる時に弥勒とダイチが戻って来た。

「お祓い御苦労さま。」

「おい弥勒、俺にはどおーも納得出来ねえんだが？」

犬夜叉がかご馳走を食べ始めた弥勒に言う。

「うーしたんだよ犬夜叉？」

直ぐにかご馳走をパクパク食べるダイチも口を挟む。

「寝ぐらを探す刻限になると必ず、決まって辺りで立派な屋敷の空に不吉な雲が垂れこめていってのはどーゆーわけでい!？」

「はあ？何を今更、ウソも方便と言うではありませんか？」

「まあ、時と場合によるが間違いじゃねえな。」

またまた呆れ返すダイチ。

「ウソじやったのかダイチ!？」

「そりゃー、普通はな。」

「私はうすうす勘付いてたけど？」

ダイチとかごめは、弥勒の行動に気付いていた。

「な、なんて悪い奴何だ!？」

「お前は頭が固いのです。」

犬夜叉が言い返すと弥勒も言い返す。

「どっちも正しくて間違っているから味方になれないな。」

「どっちをフォローしていいんだか……!」

かごめは、何かにゾクツとした。

グラッ!

かごめは、四魂の欠片の気配を感じると突然地面が揺れた。

「な!何だ!今のは!？」

「何かデカイのが来るな。」

ダイチと犬夜叉は、各々の武器を持って戦闘態勢になる中。

「さあ、逃げましょう!？」

「おい!それじゃあ食い逃げだろ!？」

犬夜叉は、弥勒に突っ込む。

「だってデカイんですよ?到底敵いません。無理です無茶です。ゴキーン!!」



「何か他に言う事あつつか？」

ダイチの右手は白い湯気が漂いそしえ弥勒の頭はとてつもない位のゲンコツが出来上がっていた。

「いいえ」 ずびません・・・」

頭を抑えた弥勒はダイチに謝る。

「待つて四魂の欠片の気配が！」

「四魂の欠片が向こうから来てくれるなんざ願つてもねえ！」

「四魂の玉となると少々は無茶も必要ですね。」

「おい待ちやがれ！」

弥勒が行くと犬夜叉も追いかける。

「やろうかな？」

残つたダイチ達も外に出る。

外に出ると大きい鬼に似た山の妖怪が現れた。

「おい！犬夜叉！あれを見ろよ！」

「！」

外に出たダイチは、山の妖怪の肩に乗っている物に指を指す。

「あれは！」

犬夜叉も驚いた。

何故なら

「殺生丸!？」

そう兄の殺生丸だからだ。

スツ!

「!」

ダイチは、気付いた。

殺生丸は、一瞬で犬夜叉の近くに来て殺す事に。

ドシツ!

ダイチは、素早く犬夜叉を足払して倒れさせると魔戒斧で薙ぎ払い間一髪で殺生丸自身避けられた。

「何ボーツとしてんだよ?」

ダイチに至っては殺生丸と闘う臨戦対戦を整えていた。

「ふん、相変わらず動きが鈍いな・・・仲間に命を拾われるとはな犬夜叉。」

「殺生丸!何しに来やがった!」

「くだらん事を聞くな。貴様の腰の鉄碎牙に用がある。」

「しつこい奴は嫌われるぞ野良公?」

ダイチは、殺生丸に鬱陶しさに嫌になる。

かごめ達は

「お知り合いで?」

ダイチと犬夜叉以外のメンバーは、避難していた。

「犬夜叉のお兄さん。」

「兄上?」

「半妖の犬夜叉と違って本物の妖怪よ。(まだ鉄碎牙を狙ってたんだわ。刀の結界に拒まれて触れることすら出来なかったのに。)」

かごめも殺生丸が鉄碎牙に触れない事に気付く。

「抜け犬夜叉。それとも大人しく鉄碎牙を渡すか?」

(んだよ?あの余裕は?)

ダイチは、殺生丸の違和感に気付いた。

「ほざけ!今度は腕をぶった斬りだけじゃすまねえぞ!!」

犬夜叉は、鉄碎牙を抜いた。

犬夜叉は、振るが全く殺生丸に当たらない。

「犬夜叉、貴様全く鉄碎牙を使いこなしておらん。」

「な！なんだと!? 巫山戯んなてめえ！」

犬夜叉は、動こうとしたがその時。

「犬夜叉！攻撃するな！」

ダイチは、殺生丸の方が踏み込みが早い事に気付き言うが遅かった。

ガシッ！

「太刀筋が丸見えだ。」

右手で鉄砕牙を持つ手を殺生丸が握ると毒の瘴気で犬夜叉の手を溶かそうとする。

「鉄砕牙を手放さなければ手が溶けるぞ？」

「仕方ねーな！」

ダイチは、殺生丸の懐に入るとすぐに掌底を放つが紙一重で殺生丸も避ける。

シユッ！

殺生丸は、高く飛ぶとモコモコの部分で犬夜叉の持つ鉄砕牙を犬夜叉から手離させる。  
る。

殺生丸は、直ぐに鉄砕牙の元に来ると左手を出して。

「何!?!」

ダイチと犬夜叉は、驚く。

「殺生丸が鉄砕牙を握った!?!」

そう妖怪の殺生丸には持てない鉄砕牙が何故持てたのかすら鉄砕牙を手にした現場を見ている三人には理解できなかった。

「な！何で殺生丸に鉄砕牙が持てるんだ!？」

「何の手品だ野良公!？」

犬夜叉もダイチもわからない事だらけだった。

「教えてやろう犬夜叉。鉄砕牙の真の威力を。邪見!」

「はっ！只今！山の小妖怪どもを追い出しまする!」

邪見は、先程の山の妖怪に命じると力一杯手を叩き地面が揺れて直ぐに収まると無数の光が出て来た。

その無数の光こそが山にする小妖怪達は一斉に逃げ出しまくる。

「よいか？犬夜叉。一振りだ。一振りですべての妖怪を薙ぎ倒す!!」

ブンッ!

殺生丸は、たった一振りですべての妖怪を倒しただけでなく山すらも半分消しとばした。

「ダイチの技と負けずと凄い一振りじゃ!」

「山までも消し飛んだ!？」

かごめ達は、啞然と見ていた。

「これが父の牙で作りし宝刀。鉄碎牙の真の威力だ。使い手を選べぬ刀の不幸。半妖風情にはすぎた刀である事がわからぬか！」

(ち！ちくしょう！)

(ムカつく野良だな！)

二人は殺生丸を睨む。

「犬夜叉！」

かごめは、犬夜叉の方に走ろうとするが弥勒が止める。

「私が出ます。七宝も背後から離れぬように!!」

そう弥勒は、風穴を使う気だった。

「鉄碎牙の鏑となれ。それがお前達には似つかわしい。」

(こんな奴に俺の鉄碎牙を！)

(どう奪え返せばいいのかな?・・・!坊さん?)

犬夜叉達の前に弥勒がやって来た。

「もう黙ってはいられませんな。兄弟喧嘩にしては度がすぎています！」

「おい！」

「頼んだぞ坊さん。」

犬夜叉は、悔しそうだがこの状況なら弥勒に有利だと察するダイチ。

(ん?あの法師?)

殺生丸は、弥勒を見た途端奈落が何かを言っていたのを思い出す。

「引つ込んでろ弥勒。」

「おいおい、今はやべえんだからよ坊さんにも加勢しねえと鉄碎牙奪えねえつてもんだ。」

「その通りです。維持を張るものではありません。」

「やかましい!」

そう言いつつも弥勒も戦いに加わる。

「あの法師の事か?奈落とか言う者が話していたのは?」

そう殺生丸達は奈落に会った時にこんな話もされていた。

『犬夜叉と共に若い法師がいるはず。其奴はあるいは犬夜叉より厄介な奴かもしれない。』

「どう見てもただの人間ではないか。殺生丸様!後はこの邪見にお任せを!貴方様のお手を出す事はありません。」

邪見は、山の妖怪を操り殺生丸に提案した。

「そうだな。見て見たい。」

「ゆけ!叩き潰してくれるわ!」

邪見は、山の妖怪を犬夜叉達に攻撃させようとする。

「みんな下がって！成敗！」

弥勒は、風穴を開くと辺りの物を吸い込み始める。

「！」

殺生丸は、直ぐに不味いと気付く素早く距離を置き鉄碎牙で飛ばないようにしがみついた。

「わわわ！」

邪見は、山の妖怪から離れようと非難し始める。

「おう！風穴！」

「風穴じゃ！」

「すごい弥勒様！……犬夜叉も凄いいけど……」

「もを付けてるぞ？」

「かごめ……フォローになってねーよ……」

不機嫌な犬夜叉も顔を引き攣るダイチ。

「……」

殺生丸は、奈落の言葉を思い出す。

『どうぞ、これは地獄の虫最猛勝です。法師の右手の風穴を封じるには最良かと。』



「ふん！全く念の入った所だ。」

殺生丸は、懐から雀蜂の巣に似た物を出す。

殺生丸が投げると不気味な雀蜂に似た妖怪が巣から無数に現れた。

最猛勝達は一齐に弥勒の風穴に吸い込ませたと言うよりは風穴に行つたの方が正しいのかもしれない。

「なんだ？、ありや？あの蜂供坊さんの風穴に？はっ！坊さん！！早く風穴を塞げ！何か不味いぞおい！」

ダイチは、何か嫌な予感がした。

「え？う!!」

突如弥勒の体調がおかしい事に気付いた。

「坊さん！」

「犬夜叉！ダイチ殿！後は任せた！」

「弥勒様！」

「坊さん！あの雀蜂の毒か何かか？」

「そのようです・・・」

「三魂鉄爪!!」

「てりや！」

ダイチと犬夜叉は、周りの最猛勝を攻撃しまくる。

「弥勒様大丈夫?」

「どうやら毒にやられたようです。」

「毒? 待つて荷物に効くのがあるかもしれない。犬夜叉! ダイチさん! 弥勒をお願い!」

かごめは、直ぐに長者の家に置いてある荷物から解毒に使える薬を探しに行く。

「おい! 坊さん! 悪いが戦えるか!」

「どうなんだ弥勒!」

「い・・犬夜叉、ダイチ殿・・すまん戦えない・・」

「血刃鉄爪!」

犬夜叉は、殺生丸に血刃鉄爪を放つが鉄碎牙が防ぎ意味をなさない。

「後ろもいんだとおおっ!!」

ダイチは、瞬時に殺生丸の後ろに回り込むと魔戒斧を振り下ろすがそれかわされ  
る。

その隙に犬夜叉は、弥勒を連れて山の妖怪の骸に隠れる。

「弥勒! いつまで腰抜かしてやがるんだ! (まずい! 虫の毒って言ったよな? まさか危ねえのか?)」

「わっ！く！来るぞ！」

七宝は、殺生丸が鉄碎牙を振るのを確認した。

「無駄な事を。これまでだ！」

殺生丸が鉄碎牙を振った瞬間。

「させるかよ！」

ダイチは、魔戒斧で鎧を召喚すると戯牙に変わり振った鉄碎牙の斬撃の前に立つ。

『霊弾獣波!!』

ブジュウウウウツツツ!!

鉄碎牙の斬撃と霊弾獣波の技のぶつかり合いが始まりしばらくすると治る。

『犬夜叉！坊さん！七宝！大丈夫か!?!』

「ああ。」

「オラ死ぬかと思った。」

「普通は死んでますよ。」

戯牙の後ろにいる三人は無事だが戯牙の前後以外の鉄碎牙の攻撃されは場所は綺麗に削れていた。

「ふっ！ふふふ！つぐつぐ馬鹿な奴よ。逃げ隠れしても良いのだぞ？お前にとって恥ずべき姿ではない。この世に生きる魂こそが恥辱の極み。」

『野良公：殺す！「うるせい！刀手にした途端にペラペラ喋りやがって！へへへ！こつちからも忠告しといてやらー！仕留める時には一発で仕留めとけってんだ殺生丸！だから手出すなダイチ！」わったよ・・・』

戯牙も一番悔しいのは犬夜叉の方だと思ひ犬夜叉に殺生丸の相手を譲つた。

「さもねえと余裕こいていた口がへの字に曲がつて血反吐知らねえゾオオ!!!」

犬夜叉は、爪で殺生丸に攻撃するが殺生丸には溶融で避けられてしまう。

「全てがくどおい！」

殺生丸が鉄碎牙を振り下ろそうとした。

「ぐっ！」

犬夜叉は、鉄碎牙の鞘を持ち鉄碎牙を防いだ。

「ぐっ！危うく殺されるところだった。」

別の場所では邪見が地面から出てきているのでどうやら本人も無事らしい。

「法師の法力よりも敵味方構いなしの殺生丸様の方が百倍恐ろしいわい。これから先が思いやられる。『へえ〜どういう事だ？』んっ！」

戯牙の声が聞こえると思いきや声のしない方から邪見を掴んだ。

「お前らっ！」

邪見を掴んだのは後ろに弥勒で前には戯牙がいた。

『解せねえな。』

「そうですね。どうも引つかかりますな。貴方方とは初対面のはず。あの毒虫、まるで私の為に預けられた様などういふ事ですか？」

「え？あれはその・・・『何玩具持とうとしてんだよ？』ぐぎい！」

戯牙は、鉤爪のある手で邪見の首根つこを掴んだ。

犬夜叉と殺生丸は

「この鉄碎牙に挑むとはな！」

「そんじよそこらの鞘じゃねえ！今見せてやるよ！てめえの頭がち割る所をな！」

「鞘か・・・何が鞘だ！」

殺生丸は、攻めの姿勢に入るが犬夜叉に至つては守りだけであるこれは結果的に……

シュツ！

殺生丸に鞘を振り払われてしまった。

「一振りあと一振りだ！」

犬夜叉は、絶対絶命の一振りが振られようとした。

シュツ！

何かが鉄碎牙に当たると鉄碎牙の変化が解けてしまった。

「殺生丸！」

声のする方を見るとかごめが弓を持って犬夜叉を助けた。

「次は体に当ててやるわよ！」

「かごめ！」

「犬夜叉！逃げて！早く！」

『かごめ！何してんだ!?!にげろ！』

邪見に尋問という拷問を始めようとしていた戯牙もかごめに叫ぶ。  
続く！

## 別れ

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

前回のあらずじ

鉄碎牙の争奪に負け左手を失った野良公こと殺生丸は、代わりの腕を求め探し続ける  
と狒々の皮を被った謎の男が現れる。

謎の男は、殺生丸に四魂の玉を埋め込んだ腕を与えるだがその謎の男こそ犬夜叉達  
が倒すべき敵奈落だったのだ。

殺生丸は、貰った腕で犬夜叉から鉄碎牙を奪い真の力を見せ万事休すと思われた時に  
戯牙やかごめが犬夜叉達のピンチを救ったのだ。

「殺生丸！今度は左腕を撃ち抜くわよ！」

「左腕？」

犬夜叉は、殺生丸の左腕に何かあると思ひ見る。

「見える。四魂の欠片！」

かごめは、矢を放つが殺生丸に当たらずに直ぐに反撃をされてしまう。

「やめろ！てめえの相手は俺だ！」

犬夜叉の攻撃が殺生丸に当たりかごめへの反撃をやめた。

「速いな、その女の時になると。」

犬夜叉に顔を傷を付けられた殺生丸は笑った。

「犬夜叉、左腕の所に四魂の欠片があるわ！彼処に当てれば「おいかごめ！」ん？」

「殺生丸が簡単に簡単に倒せる相手じゃねえ！お前は弥勒の方を頼む。お前の国の薬なら助けられるかも知れねえ。」

「うんわかった！」

「おいかごめ！」

「ん？何？」

「ありがとな。お前の矢が鉄砕牙の変化を解いて止めてくれたんでどうにか戦えるぜ。」

いつになく犬夜叉が気弱に見えるかごめは弥勒の所に行く。

「たかが人間の放った矢で変化が解かれるとは……どうやら好いてはくれぬらしいな。」  
殺生丸は、皮肉を吐いた。



一方弥勒達は

ガシツ!

「調子こいてるんじゃないやねえぞ! てめえ……」

戯牙に首根っこ持たれただけでなく弥勒に頭を鷲掴みにされた邪見は、怯え出す。

『坊さん、その辺にしろ。』

戯牙が止めに入るように見えるが。

『後で生爪をゆつくり剥いで背中の生皮も何枚か剥げばいいんじゃないやねえ? まあ受験よろ?』

「ワシは受験ではない! 邪見じゃ! ひいいい!」

突っ込んだ邪見だが二人の気迫にビビりばなしだ。

「弥勒とダイチは、不良じゃ! いや……ダイチの方が弥勒よりも怖い!!」

子狐ちゃんもビビる。

「さあ! 吐きな! あの毒虫! 何処で手に入れた!?!」

毒の回る身体で邪見を拷問する弥勒。

「何者かは知らぬ。狒々の皮を被って姿を隠しておった者より譲り受けたのだ。」

『名前は何つーんだ?』

「確か・・・奈落と言っておった。」

『奈落!?!』

戲牙達はその名を聞くと驚く。

「奈落とは弥勒が追つて居る奴じゃ!」

「奈落は何処だ!?!何処に居るんだ!?!」

切羽詰まった表情で弥勒は、邪見に聞き出す。

「知らぬ!それに、今更貴様が知った所で無駄だ!」

「何!?!」

「どうせ貴様は虫の毒をたっぷり吸い込んで間もなく死ぬのだ!」

邪見は、嫌らしく笑う。

「うっ!」

文字通り弥勒で身体は毒で蝕んでいた。

「大丈夫か弥勒?」

『無理すんなって。』

七宝と戲牙は、弥勒を心配し始めた。

「悔しいが私はこれでもか弱い人間ですからね・・・」

「ざまーみるー！」

邪見がその言葉を言った瞬間弥勒は、拳を振ろうとした時だった。

『よしとけよ。』

戯牙が空いている手で弥勒を止めた。

『坊さんは、横になって寝ろ。かごめの荷物に解毒薬らしい物があるかも知れねえんだからな。七宝寝かせてろ。』

「わかった。弥勒今はダイチの言う方が正しいぞ。」

「わ、わかりました・・・」

弥勒がこれ以上激しい運動をさせれば不味いと判断したので七宝に頼み弥勒を近くで寝かせる。

『さてと、この俺が坊さんの分もするか？半殺しフルコースジャアア!!』

「ぎやああああっ!!」

邪見は、恐ろしい半殺しの刑を戯牙にされていた。

「.....」

あまりの恐ろしさに弥勒と七宝は、固まる。

「悪魔じゃ.....」

心滅獣身の様な気迫の戯牙にポコポコにされた邪見は、気絶した。

「七宝ちゃん！ダイチさん！」

かごめが荷物を持ってやって来た。

『かごめ、ちょうどいいタイミングだ。坊さんに解毒に近い奴をやってくれねえか？』

「うん、しっかり弥勒様。薬飲める？」

かごめが解毒の薬を持つ。

「で、出来れば口移しで。」

下心ありでいう弥勒。

「わかった。」

かごめは、了解する。

「……」

しばらくして目を開ける弥勒。

「ほおしいきゆぞみろく？」

七宝が口移しをしようとしていた。

「やっぱり自分で『遠慮するなよ！』ぐがあ！」

戯牙に無理やり口を開けると七宝が口移しを始める。

「(TOT) もうやめてください。自分でのみますから。」

弥勒は自分で飲めば良かったと悔やんだ。

『かごめ、どうも解せないんだか?』

「何?」

『妖怪の野良公が何故鉄砕牙を持てたんだ?』

「実はね。」

かごめがわかつた状況を戯牙に伝える。

『なるほど、そんじゃ俺も一応出るから。』

戯牙も犬夜叉の方に向かう。

(犬夜叉の戦いが長引けば危ないかも知れない。)

かごめは、弓に矢を構える。

『よお!どうだ?』

「助かるぜ。」

戯牙は、状況を聞くと犬夜叉がお礼を言うので不味い判断した。

「読めたぜ。妖怪のてめえには持てねえ筈の鉄砕牙が持てるのか。その左腕人間の物だな? てめえは、人間の腕を四魂の欠片で繋いでいる。」

『左腕壊せば野良公は鉄砕牙が使えなるな!』

「ああ! しかも四魂の欠片が付いてくる! 一石二鳥だせえ!!」

犬夜叉と戯牙は、殺生丸に飛びかかった。

「ふん！私の左腕に触れられるならな。」

殺生丸は、光る鞭を右腕から犬夜叉を。

ガキーンッ！

『クソツタレ！』

獣身斧を振るうが変化解かれてる状態でも鉄碎牙は受け止めた。

犬夜叉は、殺生丸の後ろに回り込んだ。

「三魂鉄爪！！」

ボコッ！

犬夜叉の攻撃を避けると直ぐに殺生丸の拳が犬夜叉の顔にヒットした。

『死ね野良公オオオッ！』

獣身斧を振っても軽々と見切られて光る鞭が戯牙に来ようとした。

ヒュッ！

突如殺生丸の鎧が砕かれ攻撃は、中断した。

「やったー！鎧を砕いたぞー！」

「左腕を狙ったんだけどね。」

かごめの矢が殺生丸の鎧を壊したのだった。

『『かごめ』』

「犬夜叉、やめさせろ。半妖とは言え妖怪の血を持つお前が死に際に人間如きの加勢を受けるな。」

「かごめ手を出すな！殺生丸は、甘かねえ！」

『今はよせよ！野良公は、一筋縄じゃ倒せねんだ！』

犬夜叉と戯牙がかごめに忠告する。

「大丈夫！今度は当てるわ！」

かごめが矢を放つが殺生丸は、二本の指で受け止め溶かした。

「矢が溶かされた・・・」

「邪魔だと言うのがわからぬのかアアアツツ!!」

殺生丸は、鉄碎牙の斬撃をかごめに向かって放った。

『間に合わねえ!』

戯牙の方はかごめから距離があり時間がかかる。

「かごめ!!」

犬夜叉は、かごめの前に立って盾になる。

ドカーンツ!!

犬夜叉とかごめは、吹き飛び倒れる。

「かごめ!」

犬夜叉は、起き上がるがかごめの方は気絶していた。

殺生丸は、持っている鉄碎牙の変化が出来るようになり今度こそ斬撃で焦土に化す威力が出来る。

『かごめ・犬夜叉・野良公!!』

戲牙が犬夜叉達の方に来た。

「かごめ。殺生丸てめえ・・・」

犬夜叉は、睨む。

錫杖が地面に刺さると弥勒もやって来たと言うより錫杖を使いながら来たの方が正しい。

「弥勒。」

『坊さん。』

「完全でない変化であの威力だ。変化した鉄碎牙に挑むにはこの風穴を使うしか・・・『やんねえ方が良い。』え?」

「ダイチの言う通りだ。もう一度風穴を開いたら。」

犬夜叉は、小石を投げると最猛勝の群れが現れる。

「まだあの巣が!」

「いかん弥勒。これ以上虫の毒を吸ったら・・・」



「弥勒、かごめを連れて逃げろ。出来るだけ遠くにな。頼む・・・死なせないでくれ。」

犬夜叉が頼むと言うのは滅多な事じゃないくらい無いので一同は驚きを隠せない。

「逃げられるものか。全ては、この一振りで消し飛ぶ。」

殺生丸は、鉄碎牙を構える。

「振らせるかアアツ!!」

犬夜叉は、気合いで殺生丸に向かい刀を押し戻しただけでない。

『一人より二人いた方が鉄碎牙振れねえだろうが!』

犬夜叉の前には戯牙が盾になり援護して獸身斧でも防いだ。

『な!何してやがる!早く走れエエツ!!』

戯牙と犬夜叉の一喝に弥勒と七宝は、直ぐにかごめ連れて避難した。

「泣かせるな。仲間を救う為に時間を稼いだつもりか!!」

殺生丸の右手が犬夜叉の腹に向かって刺そうとするが。

キーンツ!!

『おいおい、これで終わりはねえだろうが。これでもしつこいのが売りなんだからよ。』

戯牙の鉤爪の付いた手甲で防いだ。

ジュツツ・・・

殺生丸の毒がそれでも止まることなく徐々にソウルメタルの金属が溶けそうになる。

「小賢しい！人間が!!」

殺生丸のモコモコが戯牙をとうとう振り払う。

『ぐっ！はっ！』

飛ばされた戯牙は、振り向くと犬夜叉の腹に殺生丸の右手が貫いていた。

弥勒達は、避難しているとかごめが目を覚ます。

「犬夜叉！」

「かごめ様！」

弥勒がかごめを止める。

「離して！」

「戻れば犬夜叉の気持ち踏みいじる事になります。」

かごめは、犬夜叉を見守る事しか出来なかった。

「言い残す事があれば聞いてやろう。」

殺生丸は、死に際に言葉を聞く気である。

「へっ何だよ殺生丸。おめえ気付いてねえのか？」

「貴様。」

殺生丸は、気付くが既に遅かった。

「俺の刀、返して貰ったぜ！」

犬夜叉は、殺生丸に左腕を引きちぎり鉄碎牙を奪った。

「い、いかん！左腕を取られては殺生丸様は鉄碎牙に触れる事が出来ん。」

ボコボコの邪見がやって来た。

犬夜叉は、鉄碎牙を構えると何故か唸り始め直ぐに鉄碎牙を支える様に気絶した。

『犬夜叉・・!?!』

後ろにいた戯牙は、犬夜叉に寄るが直ぐに異変を察知して止まった。

「殺生丸様。犬夜叉の奴めとうとう気絶。それ以上前には出るな。」えっ?」

ビリッ!

犬夜叉が動いた邪見を確認すると鉄碎牙のエネルギーを刃に流した。

「な、なんで!?!刀を振ってもいないのに?」

「(此奴、気を失っているが私が間合いに踏み込んだら。確実に刀を振り切ってくる。)帰

るぞ邪見。鉄碎牙を我が手に出来ぬ以上は長居は無用だ。」

「あ、もうよろしいので?あ、はい。」

すると殺生丸の身体の周りから雲が立ち上り宙に浮かび邪見もそれに乗り何処かに

去り最猛勝もその後を追う。

「おい!犬夜叉!」

戯牙の鎧を解いたダイチが近づく。

「犬夜叉ー！」

かごめも直ぐに近づく。

「か・・・ごめ・・・」

犬夜叉は、かごめの無事を確認すると鉄碎牙の変化を解き倒れる。

「おい！犬夜叉！犬夜叉！しっかりしろ！犬夜叉！！」

ダイチは、この状況が一番最悪なので叫んだ。

「犬夜叉アアアツツ！！」

かごめは、叫んだ。

「待ってろよ！犬夜叉、手当の道具を使うからな！！」

ダイチは、かごめの荷物を持つと直ぐに応急処置の手当に入った。

殺生丸達はまだ空で移動していた。

だが後ろの最猛勝達は離れる様子もなかった。

「この虫どもいつまで付いてくるのだ？」

邪見は、しつこさに気になっていた。

「大方、狙いはこの四魂の欠片。これを捨てるのを待っているのだろう。」

殺生丸は、左腕の方をめくると繋ぎのあたりが殺生丸を食べている様だ。

「危うく腕に食われるところだった。」

殺生丸は、迷う事なく人間の残りの腕を剥ぎ取り捨てる。四魂の欠片だけとなり最猛勝がそれを拾う。

最猛勝が森の中に行くと奈落が待っていた。

「殺生丸め、しくじりおったか・・・？」

奈落は、振り返ると殺生丸が立っていた。

「これは、殺生丸様。」

奈落は猫被った様にお辞儀する。

「奈落！ 貴様の与えた腕で殺生丸様を食い滅ぼすつもりだったのか!？」

「滅相も無い。お貸しした四魂の欠片を返していただく為。ちよつと仕掛けを施して見ただけ。」

「用意のいい事だな。」

殺生丸も踊らされた事にムツと来たのか奈落を切り裂いた。

「ざまーみろ！殺生丸様をコケにしよって！」

邪見は、頭の部分を蹴る。

「逃したか・・・」

邪見は、殺生丸の言葉を聞くと狒々の皮の中を確認すると何も無い。

《殺生丸様、怒りを収めくだされいずれまた犬夜叉めを殺す算段が付いたらお訪ねする  
やも知れません。》

「つくづく食えない奴だ。」

殺生丸は、不快に感じる。

犬夜叉一行は、変な形をした妖怪に乗って空を飛んでいた。

「ハチよ。長い間世話になったな・・・」

【いやですよ、縁起でもねえ事。】

「そうこの妖怪狸妖怪のハチだった。」

「弥勒様、身体の具合どう?」

「どうやらかごめ様のクスリが聞いたようで命拾いしました。」

「おっ! そうだ!」

ダイチは、ある事を思い出す。

草太とサツカーの朝の練習する約束をした事を思い出す。

「かごめ、悪いんだが草太と約束をしていたから村に着いたら直ぐに骨喰いの井戸の方に向かう。」

「え? うん、わかった。」

かごめは、犬夜叉の方を見た。

「七宝ちゃん、犬夜叉はどう?」

「あの通り眠っておる。ダイチが応急処置の止血をしてくれて助かったぞ。」

「(犬夜叉の方から村に帰りたいだなんてやっぱダイチさんが手当しても相当酷いんだわ。) それでさっきの話だけ。」

「そうなんじゃ。あの蜂の巣は奈落が用意した物なんじゃ。奈落と言えば弥勒の右手に風穴を作り。そして……」

「(そして、犬夜叉と桔梗を互いに憎しみ合わせ殺し合わせようとしただけでなく兵一つて子を殺した妖怪。犬夜叉にとって桔梗と兵一の仇。)犬夜叉は、その事を知っているの？」

「いいや、犬夜叉は殺生丸との戦いで手一杯でこの大変な事は知ってはおらぬ。」

「今、その事を知ったらあんな大怪我しているのに絶対に奈落を追い飛び出して行っちゃうからね。七宝ちゃんしばらく犬夜叉にはこの事は黙っておこうね。」

「そうじゃのう。」

そして村に着く。

「んじゃあおれ用事済ませたら直ぐに帰って来るからな。」

そう言ううとダイチは、一目散に骨喰いの井戸に向かう。

「かごめちよつと来い。」

「ちよつと！大丈夫犬夜叉？いくら犬夜叉が丈夫でもまだ歩いちゃ・・・」

それでも気にせずに犬夜叉は、かごめを連れて行くと後から弥勒、七宝も来る。

「ん？てめえらは、付いてくんない！」

犬夜叉は、人払いをした。

森の奥に進むとかごめが薬草を見て楓から教わった事を犬夜叉に言った。



「かごめ、強くなったな。」

「そうね・・・毎日妖怪に追いかけられる生活してるんだもん。そんじよそこらの中学三年よりはかなりかなりしっかりしてると思うわ。弓の方も上手くなったし。」

そんな話をしてしていると骨喰いの井戸に辿り着いた。

犬夜叉は、井戸に背中を付けて胡座をかいた。

「かごめ、お前の方こそ具合は如何なんだよ？怪我してるんだろ？」

「ちよつとタンコブ出来たかな？ごめんね犬夜叉。あんたが殺生丸は、構うなって言つてたのにでしやばつた事しちやつて、あたしがウロウロしてなかったらそんな大怪我しなかつたわよね？」

「いや、お前の弓で實際助かった。感謝しているかごめ。」

（感謝してるなんて如何しちやつたの犬夜叉？）

かごめは、手を犬夜叉のおデコに当てる。

「あんた変よ熱でもあるんじゃない？」

かごめは、変に心配でした。

その二人を観察しているある二人が見ている。

「犬夜叉め、かごめを森の中に誘つて何をする気なんじゃ？」

「しーっ・・・」

弥勒と七宝だった。

「お前も聞いただろ？五十年前に俺を罫に嵌めた奈落が殺生丸を裏で糸を引いてい  
がった。」

（知ってたんだ。奈落の事で一番敏感なのは犬夜叉だもんね。）

「だからこれからもっと危ない目に会うかも知らねえ。」

「そうかもね。」

「そうかもねってかごめ、お前怖くないのかよ？今度は、何とか命拾いたけどな！」

「怖くないわよ！奈落って酷いやつなんでしょ！絶対にやつけてやらないと……」

ガバッ！

かごめは、言い返そうとした途端犬夜叉がかごめを強く強く抱きしめた。

「犬・・夜叉・・？」

俺は怖かった……かごめが死ぬかと思っただけ怖かった。

「えっ？」

かごめは、その言葉を聞いて驚いた。

そう犬夜叉は、彼女をかごめを愛している事に気付いてしまったからだだった。

そして何か決心したかのように犬夜叉は、かごめの持つている四魂の欠片を取り上げ  
た。

「これは俺が持つ。」

「あ！四魂の欠片!？」

「おめえは、もう二度とこっちに來るな!!」

ドンッ！

「きゃあああああッ!!」

かごめは、そのまま井戸の自分の時代に強制的に歸らされた。

「ああ!!」

隠れていた二人が出てきた。

「犬夜叉！お前なんて事を．．かごめ様がない？」

弥勒は、井戸の底を見るとかごめの姿はなかった。

「この井戸の向こうがかごめの本当の場所なんだ。」

犬夜叉の説明した。

その頃日暮神社の境内

「よし！今日の練習は、此処までだからしつかりストレッチしとけな。」

「うん、わかったよ。」

ダイチは、そう言うのと直ぐに骨喰いの井戸に向かう。

「もう！なんなのよ！いきなり！」

「あれ？」

ダイチは、骨喰いの井戸の扉を開けるとかごめがご機嫌斜めになっていた。

「わけわかんない！もう一度風穴戻ってとつちめてやる！」

かごめは、再び骨喰いの井戸に入る。

「あれ？」

かごめの声ができる事に気付いたダイチも直ぐに駆ける。

「おい！どうしたんだ？」

ダイチが井戸の中を見ると井戸の底にかごめがいた。

「せ、戦国時代に戻れない！？どうして！？あ！四魂の欠片がこつちに無い！」

「じゃあ、俺たち行けなくなつたのか？」

予想も出来ない状況に驚くかごめとダイチ。

## 鬼蜘蛛

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

ん？ここは？

ダイチは、また夢の中にいた。

そう兵一の記憶だった。

「お姉ちゃん？手伝って欲しい事って何なの？」

「ああ、実は大怪我した者を匿っているのだ。その者は、野盗だが全身大火傷をしていてもう長くない。だから、私がいる時だけ一緒にその者の面倒を見て欲しいのだ。」

「ご飯とかを与えるの？」

「そうだ。行ってくれるか？」

桔梗は、兵一に頼んだ。

「うん、わかった。」

兵一は、桔梗の荷物を少し持つと桔梗と一緒に行く。

すると草がかなり茂っており進むのも難しくなり茂みを抜けると洞穴があり進んだ。

「き……桔梗か？」

男の声が洞穴の奥から聞こえてきた。

「そうだ。粥を持って来てやったぞ。」

桔梗は、包帯を全身に巻いた男に言うど荷物置く。

「もう俺に……かまうんじゃねえ……!?!」

男は、桔梗が近くにあった油に火をつけると兵一を確認した。

「……………」

兵一は、突如男の目を見た瞬間に背筋が凍った。

ササツ!

兵一は、怖くなり桔梗の後ろに隠れた。

そう何か兵一を見た男はとてつもない悍ましい事を考え出したのに兵一自身も気付いたのかそれから洞穴から出るまでずっと桔梗の背後から離れなかった。

「はっ!」

ダイチは、目を覚ますと汗だけで瞳孔が開いていた。

「すげー気味悪りー夢だ……」

ダイチは、日暮家の客室の部屋で再び寝始めた。

その頃犬夜叉達は

ドーンッ!!

骨喰いの井戸に木一本丸ごと押し込まれていた。

「何をするんじや犬夜叉!?!」

「うるせえ!」

そう犬夜叉がかごめが来られない様に更に木一本を押し込んだからだ。

「井戸を潰したらかごめとダイチが帰って来られないではないか!犬夜叉は、かごめが会えなくなっても良いのか!?!」

「けっ!あいつがいると俺は思った様に戦えねえんだよ。」

七宝の意見を無視して歩き出す犬夜叉。

「行くぞ弥勒。」

「何処へ?」

「決まってるだろ?奈落を探し出してぶっ殺す!」

「さっ、七宝。」

弥勒は、七宝に気にかけて声をかける。

「知らん。犬夜叉なんか嫌いじゃ。」

「けっ、勝手にしろ！」

「些か乱暴なやり方ですな。かごめ様を危険な目に合わせたくないと言う気持ちわかるが「わかつてるなら黙ってろ！」

弥勒に直ぐに見抜かれてしまう。

「奈落を探すと行ってもどう探すのです？手がかりでもあるんですか？」

「そ、それは・・・」

「無いのですね？」

「うるせい！」

「自分で返した癖にかごめ様がいらないからってやつ当たらないでください。」

「お前な！」

「まー、まー、ともあれ考えようじゃありませんか？」

冷静でいる弥勒。

「そんな暇はねえ！「私だって一刻もはやくこの手で倒したい。50年前私の祖父の手に風穴を開けその呪いを私の代までかけた奈落を。」



そう弥勒も内心は、焦っていた。

「弥勒……」

犬夜叉もようやく落ち着いたのか弥勒の隣に胡座をかいた。

「考えるのは苦手だ。お前が考えろ。」

「こう言うのは順序を立ててやった方が良い。犬夜叉、お前50年前にこの村で奈落の罠にかけられたと言いましたね？」

「ああ。」

「奈落にあった事はあるのですね？」

「あつたと言つたつて桔梗に化けた姿でた。正体はわからねえ。」

「そこが妙ですね？お前は奈落を知らない。なのに奈落は桔梗様に化けてお前に矢を向けて来た。何か恨まれる事でもしましたか？」

「顔も見た事ねえのに知るか。」

心当たりが全く無いらしい。

「んー……もつとも亡くなられた桔梗様は巫女だったと言う。奈落は、お前よりも桔梗様いやそれだけでないのでは？……一緒にいた兵一と言う少年も何か関わっていたかもしれないな。」

「桔梗と兵一と奈落が？」

犬夜叉は、その言葉に驚く。

その頃

かごめが私服(?)で学校に来ていた。

「かごめ!」

振り向くと友人三人がやって来た。

「久しぶりリユウマチ治ったの?」

「あらかツケよね?」

何だがかごめの祖父とまたダイチが仮病を言った事で複雑な心境のかごめだが友人三人はダイチの言う例の男の件だと理解している。

「あれ私服だ。どうしたの？」

「うん、制服汚れちゃってって血がべつとりと・・・」

「「ええ！今度は吐血!?!（どんな騒動に巻き込まれたの!?!）」

「どんだん重病になっていく・・・」

ため息をつくかごめ。

再び犬夜叉達。

犬夜叉と弥勒は楓の家に行った。

七宝は、あのまま骨喰いの井戸から動いていない様子。

「犬夜叉よ。この傷では戦いはしばらく無理だ。」

楓が犬夜叉の傷に塗り薬を塗っていた。

「うるせえ、一、二、三日で塞がる。」

「ええい、瘦せ我慢しおつて終わりだ。」

トンッ!

楓が犬夜叉の傷を叩く。

「ぎいい!何すんだよ!」

「その元氣なら直すかもしれんのお。それよりあの時桔梗お姉様が骨と土で蘇った時以來わしやずつと考えていた事がある。お姉様は、犬夜叉によつて四魂の玉を奪つただけでなく兵一まで殺したと申しておつた。おかしいとは思わぬか?犬夜叉の姿を借りてたその男はそのまま玉を持って逃げても良かったのだ。それなのにそれなのに犬夜叉に村を襲わせ四魂の玉を掴ませる様にしてしむけた。そして桔梗お姉様の手でお前を封印させた。お前達を憎しみ合わせたのか?あるいはお姉様の心を恨みや憎しみで怪我したかったからか。」

「何?」

「四魂の玉は桔梗お姉様が持つ事で浄化されていた。そのお姉様の心が汚れると言う事は玉が汚れ邪悪な力が増すと言う事。その頃それを望んでいた者がたった一人いたのだ。」

話が終わると弥勒と犬夜叉は、興味を持つ様に楓を見る。

「行つてみるかその男がいた所に?」

楓は二人をその場所まで案内していた。

「お姉様が決めた事なのだが……」

「野盗を匿った？」

「其奴が全く動けなかつたからだ。その者鬼蜘蛛と名乗っておつた。」

楓は、洞穴にたどり着くと立つたまま話を続けた。

「その鬼蜘蛛は、全身に酷い火傷をしていて手足が何かで折れて動けばしなかつたが粥を啜り話をする程に回復をしていった。だが奴の性根は……」

50年前

「ようちび。」

「楓です。」

楓は、桔梗が急用で鬼蜘蛛の所に行けないので代わりに行っていた。

「お前の姉貴四魂の玉ってヤツを持ってるんだろ？」

「!?玉の事何で知ってる。」

「悪党はみんな狙っているからな。」

「お前も？」

「玉は恨みの血を吸うほどに悪くなるんだってな。良いな……」

「お姉様が玉を清めている悪くはならない。」

楓は、鬼蜘蛛が嫌いだったが平常心を保っていた。

「桔梗は、何時もすました顔をしてるもんな。ところで桔梗と一緒にいたあの坊主は何処だ？」

「兵一は、もう此処には来ない。」

楓は、兵一から聞いていた。

そう兵一が「楓お姉ちゃん！あの洞穴には行きたくない！」と明るい兵一が珍しく怯えていたので楓が行かなくて良いと言ったからだ。

「見て見てえなああの女の乱れた顔をソクソクするぜ……それにあの坊主……くくく……」  
楓は鬼蜘蛛が不気味でならなかった。

この事を楓は桔梗に報告した。

「そうか鬼蜘蛛がそんな事を。」

「お姉様、私あいつ嫌いです。兵一に会わせない方が良いです。」

「そうだな、でも許しておあげ。おそらく一生あそこから出られないのだから。」

それから桔梗は、犬夜叉を封印し兵一と死んだ。

そして数日後洞穴は、焼き落ちていた。

油の火が燃えたのだろうか鬼蜘蛛は逃げる事は出来ず骨も残さずに焼けたのだと。

現在

「おい、待てよ楓ババアそいつは人間だったんだろ？俺が探している奈落は妖怪だぞ？」  
楓の話が終わると犬夜叉は、楓に突っ込んだ。

「確かになどれ程に邪悪でも奴は人間だった。それは間違いないな。」  
「入って見ますか？この洞穴に。」

犬夜叉達は、洞穴の穴に入る。

「楓様、此処の辺りだけ草どころか苔すらも生えてはいない。」

「ここ、この場所は!？」

弥勒の言う場所に驚く楓何故なら。

「動けぬ鬼蜘蛛が横たわっていた所!？」

弥勒は、直ぐにその場所を触ろうとするが

「!？」

何かを感じたのか驚き錫杖でその場所を払った。

「妖怪の邪気を感じます！何十年も残された邪気を!？」

「なんですと!？」

楓自身も信じがたい事で驚く。

「草一本も生えない邪気を放つなど人間だと言うのか?？」

「この邪気は人間の物なんかじゃねえ。間違いなく妖怪の邪気だ。」

犬夜叉が言うのなら間違いなかった。

「人間である鬼蜘蛛が何故この様な邪気を？」

弥勒は解せなかった人間にはこんな邪気が放てるとは思えなかったからだ。

?????

「た、た、たすけてくれー!!」

洞穴の外から七宝の声が聞こえる。

外に出ると七宝が狼の妖怪達に追われていた。

「七宝！」

犬夜叉は、直ぐに飛び込む。

「三魂鉄爪うう!!」

犬夜叉は、狼の妖怪達を軽々と倒す。

「くっ！」

犬夜叉は、膝をついた。

「犬夜叉？」

七宝は、犬夜叉を腹を触ると血がべつとりとついていた。

「犬夜叉、血が……」

（ちくしょう……腹の傷が開きやがった！）



犬夜叉は、顔を上げると人狼の妖怪が現れた。

「貴様が犬夜叉か？」

「何だてめえは!？」

「地獄の番人狼、狼野干。」

血走った眼で狼野干は、犬夜叉に答える。

「狼野干？お前森を守る妖怪の狼野干なのか？」

楓は、狼野干の事を知っていた。

「ワシは生まれ変わった！犬夜叉！トドメを刺しに来た！」

狼野干は、口から先ほどの狼達を吐き放つと一斉に犬夜叉目掛けて向かった。

「トドメだ!？」

犬夜叉は、戦う気満々だった。

（犬夜叉が手負いである事を知っている。こんな時にダイチ殿がいてくれれば！）

弥勒はそう思いながらも犬夜叉と同様に戦う。

「いくら倒しても無駄だ！」

狼野干は、同じ様に狼達を吐き放つ。

「やはりこれしかない！」

弥勒は風穴を開けた。

何匹かの狼達が吸い込まれると狼野干は怯んだ。

「犬夜叉！早く此方へ！」

「そうはさせぬ！」

狼野干は、弥勒と犬夜叉を合流させない様に狼達を弥勒の所に向かわせる。

その近くの木々の中では・・・

「ふふふ、狼を無限に吐き出す狼野干に四魂の欠片を埋め込んだのは正解だったな。」

そうこれも奈落の策略であつた。

「くっ！」

犬夜叉は、戦い続けているが先ほどの攻撃で傷が開いたのか目眩が起こり始めていた。

「法師殿、このままでは犬夜叉が！」

「ええ、わかっています！ては一つ・・・狼野干を吸い込めば！」

ブンツ！

錫杖を狼野干に投げる弥勒。

「ぐっ！」

狼野干が錫杖で目を暝つたのを確認すると風穴を再び開けて吸い込もうとした。

ドシューーン!!

狼野干は、地面を砕き土煙を上げるといなくなっていた。

奈落の場所。

「狼野干め・・・もう少し強くすべきだったか。」

奈落は直ぐに消えた。

「大丈夫か犬夜叉?」

楓は犬夜叉に直ぐに駆け寄る。

「ろ、狼野干は?」

「逃げおった。」

「奈落は近くにいます。」

「何?」

犬夜叉は、弥勒の言葉で顔色を変える。

「狼野干は、おそらく奈落が四魂の欠片によって操られているんだろう。」

「元々は大人しい妖怪がそれであの様な姿に・・・犬夜叉!?!」

犬夜叉は、無理な身体を起き上がらせた。

「な!奈落!何処にいる!?!いるんなら出て来ておれ・・・と・・・」

バタンッ!

犬夜叉は、その場で力尽き倒れた。

「法師殿！狼野干がまた襲ってくるやもしれん村に戻った方が良さそうだな。」  
「はい。」

力尽きた犬夜叉は、弥勒達に連れられ村にもどった。

その頃かごめとダイチは

「あ、今回は料理教室に参加させていただきありがとうございます。」

ダイチは、かごめのママと一緒に何故か料理教室に参加していた。

「いいのよ。こうやって男の生徒さんが出来て嬉しいぐらいだわ。ねえ日暮さん。」

「ふふふ、ありがとうございます。」

かごめのママは料理教室の先生と会話をしていた。

「すみません。自分これから用事があるんでこれで失礼します。」

「お疲れ様、また暇な時に来てね。」

上機嫌な料理教室の先生とかごめのママと他の主婦達に手を振られて料理教室を後

にするダイチ。

「もう3日になるんか……」

ダイチもかごめ同様この世界に為か戦国時代へ行けないので向こうの様子が心配だった。

「かごめの話だとあの野郎四魂の欠片をかごめから奪ってそれで俺まで行けないんだから困ったもんだ……ん？」

ブツブツ言っているとかごめの通う中学に来ていた。

「日暮、身体の調子良いの？」

この声の主に覚えがダイチには、あつたそう北条である。

「うん、まあ。」

近くにはかごめが北条と話していた。

「じゃあさ、今度の土曜日映画見に行かない？」

「え？今度の土曜日？」

「うん、勉強の息抜きにさ。」

「それともなんか予定とかある？」

北条が不味いのかなと思いつながらも聞いた。

「うん……予定って言うか……」

「行けば良いじゃん？」

「え？」

振り向くと柵の向こうからダイチの声が聞こえた。

「そうよ行きなつて。」

「行くべき。」

いつの間にかお友達まで行つて来て何故かお友達の隣にダイチまでいた。

「ちよつと北条くんだっけ？少し借りるね？」

ダイチとお友達は、かごめを連れて行つた。

「何よ？」

「あんた他に好きな人いるでしょ？」

ギクッ！

かごめは、お友達から凶星の様な言葉を言われて驚くそしてダイチはまたまた悪戯心が発動していた。

「この際だし行つて来いって！」

「ため息ばかりついてるし。」

「勉強で悩んでいる顔じゃ無いわよね？」

「そ、それは・・・」

「何か凄い事か？」

洞察力が鋭いダイチは、かごめを問い詰める。

「ずばり片思いだろ（でしょ）!？」

お友達は、推測するがダイチに至つては犬夜叉が好きだが鈍感なかごめを自覚させたかった。

「じよ！冗談じゃ無いわよ！誰があんな乱暴で我が儘なヤツ！」

かごめは、北条のところに行く。

「北条くん！行くわ、映画！」

「本当？やったー！」

よろこぶ北条だがかごめは、未だに犬夜叉の事が忘れられない様子。

「ところでダイチさん？」

「ん？」

「何でかごめに対してデートを積極的に勧めたんですか？普通反対するもんですよ？片思いの子がいるんだから。」

「だからこそじゃねえか。」

「「え？」」

お友達は、目を丸くさせながら疑問になっていた。

「かごめは、ああ見えて心に不器用な所があるから素直にさせる為にワザとテートさせて本心を焙ろうとさせるべきなんだ。その方が気付くかもな。」

「ダイチさん、案外楽しんでます?」

「あちやーバレた?」

（（この人本当のDSだ。））

お友達は、ダイチのさらなる心を察した。

その後かごめとダイチは、帰宅して直ぐに何時ものアレをした。

骨喰いの井戸

「ええい!!」

かごめとダイチは、井戸に飛び込んだ。

スー!

現代のままだった。

「やっぱりだけか。」

「何時もと変わんねえな。」

（はあくいまごろ何してるんだろ?）

かごめが心配している。



その頃の犬夜叉。

ドンドン！

「開けろ！開けろ！開けろお！」

犬夜叉は、縄で縛られ札の貼られた小屋に入れられていた。

「無駄じゃ犬夜叉。この小屋には妖怪封じの札がしこたま貼っておる。」

「何で俺が封印されなきゃならねんだよ！開けろ「お願い犬夜叉大人しく寝てて。」

犬夜叉は、聞き覚えのある声そうかごめの声を聞いて振り向いたが。

「まだ傷口が塞がっていないんですよ？」

七宝がかごめに化けた姿であった。

「七宝……てめえ……」

犬夜叉の怒りが盛り上がった。

「化けてんじゃねえ！こら！こら！こら！こらあ！！」

犬夜叉は、足で七宝を蹴り続けた。

「犬夜叉、まだ暴れているのですか？」

薬を持った楓と弥勒が小屋を開けてやって来た。

「弥勒てめえ！」

「せっかく封印してもこの有様では。」

弥勒は呆れていた。

「こっから出せ！」

犬夜叉は、足を使って飛び込んで来た。

ドン！

弥勒は、錫杖で犬夜叉を叩き怯ませた。

「楓様、封印の札を戸に！」

楓は、札を戸に貼る。

「まだ無理です犬夜叉。」

楓に塗り薬を塗りながら犬夜叉は、弥勒の説教を嫌々聞いていた。

「焦る気持ちはわかるが完全に傷を治すのが先です。」

「そうだよ。お前とて奈落を甘く見てるわけではあるまい。だからかごめを井戸の向こうに逃したのだろう？」

弥勒だけでなく楓も犬夜叉を説得していた。

「私とて無駄に命を落としたりたく無い。その為にはお前に早く元気になつてもらわなければ困ります。」

「何弱気な事言つてるんでい！だから俺は今からでも戦うつて言つてんじゃねえか！」

この言葉を聞いた弥勒は、不自然なくらい爽やかになつた。

「犬夜叉、大人しく寝ていなさい。何度言つたらわかるんだ！」

ドシ！ドシ！ドシ！

逆ギレした弥勒は犬夜叉を踏み続けた。

「これこれ、また傷が開くぞ？」

（ダイチ・・・こんな時に何でお前はかごめ世界に行つておるじゃ・・・）

七宝は、楓が弥勒を注意しているとダイチもいれば助かつたのにと思ふのであつた。

弥勒達が帰つた夜の事

「なあ、犬夜叉？」

「なんでい？」

「かごめとダイチは、今頃どうしてるのじやろう？」

「しつけれ！ガキだなおめえもダイチがいるんだ、かごめの事は忘れろ！（何処かで生きていればそれでいい。女が死ぬのはもう嫌だ。ダイチ、頼んだぞ。）」

狼野干の寝ぐら。

「探したぞ狼野干。」

狼野干が怯えながら横になっていると奈落が現れた。

「な、奈落!?!か、帰れ!俺はもう犬夜叉とは関わらん!」

狼野干は、昼間の弥勒の風穴が余程恐ろしかったと見える。

「仕方ない・・・お前の恐怖を打ち消してやる。」

四魂の欠片を狼野干に見せる。

「な、奈落何を!?!」

怯えると奈落は、狼野干に四魂の欠片を吹き矢の様に頭に目掛けて飛ばした。

「があああ!!」

狼野干は、苦しみ出し暴れて姿が丸い狼の頭からリアルな狼の頭になり身体も数倍に大きくなった。

## 翌朝

弥勒と楓は、犬夜叉のいる小屋の周りを結界で貼り妖怪が更に近づけない様に手を印で結んでいる。

「嫌な風だ。楓様ご用心を。」

「ああ、近づいておる。」

すると空から狼野干の放った狼達が空から襲いかかった。

「犬夜叉く〜！何処だああ〜？」

涎を流しながら血なまこで犬夜叉を探すが弥勒達の結界で姿は見えないどころか入れないでいた。

しかしこれは妖怪の攻撃だけであり通常の武器などは簡単に入ってしまう。

「ふ、小賢しい。」

奈落は隠れて見ていると矢を楓に目掛けて飛ばした。

「はっ！楓様！」

「ほ、法師殿！動いては！」

「そもいかん！」

錫杖で矢を弾き返した。

そして結界が破れ小屋が丸見えになった。

「見つけた〜！犬夜叉！」

狼野干は、ジャンプすると小屋を踏み潰した。

ズバツ！

潰した瞬間に一閃の光と斬撃の音が聞こえると狼野干に斬り傷が出来ていた。

「外に出してくれてありがとよ狼野干。そのババアとクソ坊主と小説を書いている馬

鹿凱聖に閉じ込められてたんでな！」

犬夜叉は、鉄砕牙を抜きながら既に戦闘態勢に入っている。

「保護してやったと言うのに・・・」

「恩知らずな輩ですな。思いません凱聖殿？」

ですよね〜弥勒さんに楓さん。

「大人しくしろお！」

狼野干は、犬夜叉に攻撃をするが避けて斬りこもうとするが！

ガシッ！

「!」

狼野干は、四魂の欠片を更に埋め込まれ鉄碎牙を真剣白刃取りをした。

「ぐあー!」

犬夜叉は、鉄碎牙共々投げ飛ばされる。

「犬夜叉が投げ飛ばれた!?!」

「犬夜叉の奴! 口だけでまだ力が戻っていないのです!」

弥勒の言う通り四魂の欠片の力だけでない犬夜叉自身の体力もまだ出せないでいた。

「な、なんて力だ! あー!」

犬夜叉の目に止まったのはかごめが持っていた四魂の欠片だった。

そうあの投げ飛ばられた時に四魂の欠片が外に出ていた。

「でっかい四魂の欠片だあ〜!」

狼野干は、それに目掛けて走るが犬夜叉もよろよろで走る。

だがその間を七宝が素早く四魂の欠片を取り走る。

「わ、渡さぬ!」

七宝は、全力で逃げまくる。

「逃すか〜!」

狼野干は、再び狼達を吐くと今度は七宝に目掛けて追いかけ始めた。

「わああああああ!!!」

七宝は、走る走る！死ぬ気で走る!!

「七宝！伏せなさい！風穴を開きます！」

弥勒は風穴を開け様としていた。

「あ、あれは!?!」

楓は、ある物が空から複数出てくるのを確認するとそれは最猛勝だった。

「奈落の毒虫!?!」

弥勒はこのままでは風穴が使えない。

そう今最悪の事態になろっていた。

続く！



## 再会

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

前回のあらすじ

かごめを（ダイチも）現代に送り二度戦国時代に戻れなくした犬だったが弥勒と考え奈落の事で考えておりそこで楓に聞き昔鬼蜘蛛と言う男の話聞かされるそこには楓だけでなく兵一も関わっていた。そんな時に狼野干と言う妖怪の奇襲があり犬夜叉は戦うが殺生丸との戦いの傷が癒えておらず苦戦を強いられていた。その翌朝再び狼野干の奇襲があり苦戦を強いられていた。

現代日暮家

ピッピッピッピッピッピッ!!

「はい、日暮でーす！」

ダイチが日暮家の電話を取る。

『あ、ダイチさんですか？』

「あ、由佳ちゃんおはようね。」

『あのかごめいます？』

「それがよ。肝臓にコレステロールで出来る胆石が出来て今病院に行く所なんだよ。」

『え？胆石？』

由佳ちゃんは、驚きを隠せなかった。

「そうな・・・あ！」

色々弁解の流れで言っていると腕を組んだかごめが立っていた。

「誰が胆石よ！貸して！もう！」

かごめが電話を奪い由佳ちゃんに都合の良い言い訳をし始めて事なきに終わる。

ピッピッピッピッピッピッ！

『かごめちゃんお願いします。』

友人の一人が電話をしたら今度は祖父が出た。

「それが糖尿病が再発しましたな。」

『え!?!また検査入院ですか!?!』

「あー！」

祖父が話を続けようとしているとかかごめがダイチ同様に事なきに話を続ける。

ピッピッピッピッピッピッ！

今度はダイチが出て近くにはかごめの祖父がいてまた嘘の病名を言おうと電話に手を出したらかごめの手が先に電話を持った。

「もう！良い加減にしてよじいちゃん！ダイチさん！なんで若い私が胆石とかにならないのよ？」

かごめは、ダイチと祖父に文句を言う。

「ワシだって嘘などつきとうない！お前が戦国時代に行っている間姿を隠す為の手伝いをしてるだけではないか!?ワシらの言っていると事の方が正しいわい！」

「そうだって俺だって犬夜叉達と居なく日暮家にいる時の楽しみがそれなんだぞ!!」

祖父に至っては問題ないがダイチに至っては問題ありありだ。

「何よ！今日はあたしはこつちにいるでしょ!!?ダイチさんも悪戯好きはほどほどにしてよー！」

かごめは、北条とのデートの準備で部屋に戻る。

「ん？」

ダイチは、家の中をブラブラしていると草太が格闘ゲームをしていた。

「あ、ダイチ兄ちゃん。ゲームやる?」

「え? 良いの?」

ダイチは、草太と一緒に格闘ゲームをして暇しているとかごめがやって来た。

「草太! 朝っぱらからゲーム? 天気良いんだから外で遊んで来い!」

かごめは、玄関を出た途端にダイチはコントローラーを止めた。

「草太、俺用事思い出したから行くな。」

「うん。また遊ぼうね。」

ダイチも日暮家を出てかごめの後を追う。

「居たな。」

ダイチがかごめを発見すると其処は骨喰いの井戸だった。

「.....」

かごめは、骨喰いの井戸を見ながら無言になる。

「気になるんだろ? 犬夜叉が?」

「!? ダ、ダイチさん!」

「まあ駄目でも行ってみるか?」

ダイチが誘うとかごめが頷いた。

二人は井戸に入るが井戸自体に全く反応がなかった。

「犬夜叉、デートに行っちゃうからね。」  
「らしいぞ犬夜叉。」

二人は、井戸の其処に向かって言う。

かごめは、デートに向かう。

ダイチは、かごめがいつ帰って来ても良いように鳥居で待機していた。

一方戦国時代では

「わあああああ!!」

七宝が全力で狼達から四魂の欠片を持ち逃げていた。

だが目の前には骨喰いの井戸があり行き止まりになっている。

「かくなるうえは!」

七宝は、懐から木の葉を出す。

「分身!」

木の葉がそれぞれ七宝に変化した。

狼達は、それらに嘯み付いたり攻撃したりしたが直ぐに木の葉に戻る。

「今じゃ。」

七宝は、井戸に入れられた木の幹の中から出て来るとそのまま逃げようとした。  
が！

ゴチーン!!

「くかあ……」

木の枝が当たり七宝は、目を回して井戸の底に落ちそして四魂の欠片も底の所に落ちた。

現代

「!?」

かごめは、何かに感じたいや四魂の欠片の気配に感じたと言うべきだった。

かごめが井戸に走って行くのを見たダイチは、共に井戸に向かう。

「つて何よ!? 誰も居ないじゃない! せっかくだのにバツカみたい!」

「かごめ。これ。」

「え?」

ダイチは、紙を渡すと北条の電話番号だった。

「本当は北条つて子よりも犬夜叉の方が心配なんだろう?」

「……うん……そうみたい。」

沈黙後にかごめは、素直に答える。

「電話して謝りやわかってくれるさ北条君は。」

「ダイチさん……」

かごめは、直ぐに家に入ると北条にデートに行けない事を電話で謝罪して井戸に戻る。  
る。

(あの馬鹿、死んでねえだろうな。)

ダイチは、心配そうに考えながら骨喰いの井戸を見つめる。

「感じる……四魂の欠片の気配がする。」

「な、何?」

互いに頷くと再び井戸の中を探しだした。

戦国時代 骨喰いの井戸

ピカアアツ!

四魂の欠片が光り出した。

「う．．．！」

七宝が目を開けると狼野干の狼達が井戸に刺さっている木の間を器用に入ろうとしている。

「み！見つけた！」

七宝は、怯える。



現代 骨喰いの井戸

「く！何処だ!?四魂の欠片は!？」

「も、戻りたい！犬夜叉は、無事なの!？」

ダイチもかごめも必死だった。

「あー!」

ピカアアツ!

かごめが掘り続けると光り出し何かを手にするとダイチと共に何時もの戦国時代に行く空間が開いた。

「ん、これは!？」

かごめは、手にしたのを見ると犬夜叉が没収した四魂の欠片だった。

「し、四魂の欠片!？」

気付くと戦国時代の骨喰いの井戸だった。

「あ・・・」

突然現れた二人に七宝は、驚く。

「七宝ちゃん。」

「よっ！七宝。」

二人も七宝を確認した。

「かごめ！ダイチ！」

「七宝ちゃん！」

七宝は、かごめに抱きついた。

「七宝・・・感動の再会はわかるけど・・・上の狼どもは何なんだ？」

狼達が井戸まで侵入して来た。

「さてといつちよ！やるか!!」

魔戒斧を持ったダイチは、鎧の召喚陣を描き戯牙に変身した。

『伏せてな!!』

かごめと七宝は、嫌な予感がして伏せると戯牙が木を片手で持つと軽く弾みその勢いで反対の片手で衝撃波を放つ。

ドカアーンツツ!!

狼達と木を衝撃波で滅ぼした。

「はっ！かごめとダイチの匂い！」

外からも聞こえる音の後に犬夜叉は、二人の匂いを感じた。

「え？」

戦っている楓と弥勒が驚く。

「間違えねえ！かごめとダイチが来た！」

「逃すか！」

行こうとするが狼野干が邪魔をする。

「やかましい！」

ボコッ！

犬夜叉は、狼野干に渾身の拳を一発浴びせる。

「いきなり強くなった!？」

弥勒が驚くと犬夜叉は、そのまま骨喰い井戸に向かって走る。

「コーンコーン！トドメくらいさして行きなさい！」

弥勒が文句を言うと狼野干が犬夜叉を追い始めた。

『まあ、狼どもは掃除したから良いとして七宝？こりやどう言うことだ？』

戯牙は、七宝に尋ねる。

「犬夜叉は、まだ怪我が治りきっておらん。それを狙って敵が攻めて来たんじや。」

「やっぱり危ない目にあつていたんだ。」

『無事でいろよ。・・・!』

戯牙は、何かを確認した。

「どうしたの？」

『犬夜叉?』

「え？」

戯牙は、確認すると犬夜叉の方に行く。

「ダイチ!？」

『よ!あの狼のが敵か?』

「ああ。」

犬夜叉がそう答えると戯牙は、一目散に狼野干の懐に潜り込みボディーブローの放つ。

「があああ!!」

狼野干は、その一撃で倒れたら狼ども達も煙の様に消えた。

「あ。」

かごめが犬夜叉の姿を確認すると犬夜叉もかごめを確認してお互いにゆっくり歩む。

「ば!馬鹿野郎!何で戻って・・・」

かごめは、犬夜叉に抱きついた。

「犬夜叉!」

そうかごめは、強く犬夜叉を抱きしめた。

「死んじゃったかと思った。全然向かいに来ないから!」

「もう来るなって言ったじゃねえか!」

「だってしようがないじゃない！会いたかったんだもん。」  
(会いたかった？俺に？)

犬夜叉は、驚く。

「な、何よその顔？あたしに会いたくなかったの？何それ！ずっと心配してたあたしが馬鹿みたいじゃない！もう何もわかってないんだから！」

泣き始める。

「おい、かごめ。泣くのか？そんな事で泣かんで「悲しくて泣いてんじゃないのよ！悔しくて泣いてんのよ！」

かごめは、犬夜叉に怒りをぶちまける。

「会っては喧嘩じゃ。しかしとにかく全てが片付いてよかったわい。」

『ああ、あの二人全くの唐変木だなあ。』

戯牙は、犬夜叉とかごめの鈍感さに呆れる。

すると弥勒と楓がやって来る。

「かごめ様が戻られた。楓様、かごめ様戻られた様です。楓様？」

「法師殿。妙だとは思わぬか？」

「はい？」

「あれだけ群れていた毒虫が全て姿を消した。」

「確かに。」

最猛勝が全ていなかった。

森の奥には奈落が何かを確認していた。

「あの女？ 桔梗？ いいや、違う。桔梗は、あの女は50年前に死んだ。あの童と共に。」  
奈落は監視を続ける。

「!?!」

かごめと戯牙は、何かの気配を感じた。

『嫌な気配がする!』

「うん何かがある! 感じる四魂の欠片の気配!」

「[[[[[!]]]]」

他のメンバーも驚く。

『彼処よ(だ!)』

戯牙とかごめが指を指すと犬夜叉と戯牙が先に先行し気配を感じる戯牙が先に奈落を見つける。

「!」

『よう、初めましてだな。』

戯牙は、獲物を捕らえた猛獣の目で奈落を見る。

「近くにいるのはわかってたんだ。」

犬夜叉は、奈落の背後にいた。

「てめえ奈落だな？」

奈落はニヤリと笑う。

「ついに追い詰めたぜ。」

弥勒が来ると奈落は、犬夜叉と戯牙に挟まれていた。

「こいつが奈落か？」

そう弥勒自身も祖父の代から風穴の呪いを付けた妖怪を目の当たりにした。

その後ろにはかごめ達もたどり着いていた。

「息の根を止める前に聞かせてもらうぜ。てめえ、一体俺や兵一に何の恨みがある？」

「恨みか……ふふふ。なぜ自分やあの童が恨まれるのか分からぬのでは死にきれぬだろ

うな。」

理由がある口調の奈落。

「お、お前は……」

楓は何かに気付いた。

「楓か？ふふふ、すっかり年老いたな。」

「ワシを知っておるのか？やはり貴様は鬼蜘蛛なのか！」

「鬼蜘蛛？懐かしい名だ。この奈落は鬼蜘蛛ではない。だが50年前に鬼蜘蛛から確かに生み出された。鬼蜘蛛と言う男は愚劣な奴でな己を介抱してくれる心優しい巫女に浅ましい欲望を抱きよった。凄まじき邪気により妖怪達を呼び集めた。」

『俺の腐った魂も捨てたもんじゃねえな。美味そうだろ？食いてえんだろ？俺は自由に動ける体が欲しい。四魂の玉が欲しい……そして桔梗を俺の物にする為に……さあ！食え！そして体を！力を俺に超越せえっ！』

「そうして群がる妖怪が一つなり生まれたのがこの奈落。体を作るには数えきれぬほどの妖怪を要した。巫女が無力な女に成り下がっていたお陰でこの地には妖怪が溢れ返っておった。巫女が……桔梗が……つまらん半妖に惚れそしてたかが一人の童に母の様に愛情を注いだお陰でな。幼稚な情欲の為に四魂の玉を使おうとした罰。それは犬夜叉お前も身を持って体験したのであろう？」

犬夜叉は、奈落が化けた桔梗を思い出す。

「巫山戯んな！全てはお前が仕組んだ事じゃねえか！お前が俺と桔梗を騙し俺達を殺し合わせたんだろうが！」

「では聞こう。お前たちの重んじる信頼とはそんな簡単に崩れる物か？」

「な、なに!?!」

「お互いを殺そうとするまでの怒りのみが真実。あれがお前達の偽りない真実の姿なの



だ。桔梗も悟れなかった。死などを選ばずとも我が身可愛さゆえに四魂の玉に縋れば良かったのだ。自分だけは生き残りたいと浅ましい願いは受け入れられ闇の心理を悟れただろうにな。愚か女よ・・・四魂の玉が汚れてこそ美しいと言うのに。」

(桔梗は、四魂の玉の力を使って生きようとはしなかった・・・)

犬夜叉は、その時に少しの間時が止まってしまった。

(桔梗は、死を選んだ。犬夜叉と兵一の後を追って。)

それを間近で聞いていたかごめも驚く。

「て、てめえ！」

シュツ！

目に止まらない速さの戯牙が奈落の顔と顔のすれすれまで瞬発力を使って来た。

『ガタガタうるせんだよ！膿栓野郎！』

ドカーン！！

戯牙は、ド派手に奈落に目掛けたな拳をぶつ放した。

『そうか、そうか！膿栓野郎は、廃棄ゴミだって事だけ理解した！』

直ぐに上空に飛ぶと奈落もそこにおり戯牙の拳が奈落をマシンガンの様に当てるが

奈落は次々と避ける。

「かごめ！幾つある!?!奴の懐に!?!」

犬夜叉は、目が怒りで宿る。

「四魂の欠片・・・10・・・いえ20・・・30・・・もつとたくさん持っているわ!!」  
かごめが奈落が沢山持っている事を把握する。

「おい、奈落。望み通り汚れてやるぜ!おめえの小汚い血を被ってやらあ!」

犬夜叉は、構えると上空に飛ぶ。

「三魂鉄爪!!」

犬夜叉が先に奈落を攻撃に当てる。

狒々の皮から人間の男の姿に近いのが出て来た。

『おうらあ!』

戯牙は、足に衝撃波を出すと再び奈落の元に来て拳を精密に全力で当てる事に成功した。

ブシューウウツ!

当てたが奈落の体から瘴気が出て来て周りの森を溶かしていく。

「瘴気だ!逃げて!」

弥勒達は直ぐに避難しました。

「沈んだか。我が瘴気の中に・・・」

奈落は戯牙と犬夜叉が死んだかと思つたそんな時。

「鉄碎牙アアアツツ!!」

『気合じやアアアツツ!!』

犬夜叉は、鉄碎牙で瘴気を斬り。

戯牙に至っては己の中にある靈力を全開にして瘴気を浄化していつの間にか獣身斧を持つている。

「刀で瘴気を斬り靈力で瘴気を浄化しているか!？」

逃げようと奈落はしたが鉄碎牙と獣身斧で斬られる。

上半身か裸になり背中が見えそこには大きな蜘蛛の火傷があった。

奈落は瘴気と共に消えた。

「逃げただと?」

『ああ、手応えない。』

そう言うのと戯牙の鎧をダイチは、解除した。

「逃げやがっただと奈落の野郎……くそおお!!戦いやがれれれれれれれ!!」  
森だった場所に犬夜叉の声だけがこえました。

「背中に蜘蛛の火傷な。」

「ああ、俺と犬夜叉がハッキリと見てる。」

ダイチは、奈落の特徴を楓に聞き楓も鬼蜘蛛についてかごめとダイチに説明した。

「野盗鬼蜘蛛は、酷い火傷を負っていた。それは、鬼蜘蛛の名残り鬼蜘蛛の名残りやもしれん。」

「背中の蜘蛛、それが奈落の目印になると言うことか。」

弥勒は、右手を見ながらそう言う。

犬夜叉達は奈落の特徴を発見した。

## 死魂虫

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

「ふうく……」

ダイチは、用を済ませて（生理現象の大きいやつ）犬夜叉達のところへ戻ろうとした。  
「あれ？」

そうダイチは、気付いた。

「迷っちゃった……」

それもそのはず嗅覚が敏感な犬夜叉が来れない位の距離まで一心不乱で走って持っていたスコップを掘ったまでは覚えていたが犬夜叉達のいる方角がわからなくなった。

「ちくしょう……運が悪いな……ん？」

ダイチは、しばらく彷徨っていると子供の声が聞こえた。

「行ってみるか？」

ダイチは、子供の声のする方へ向かった。

「あつはつはつはっ！」

小さい少女が遊びながらお花を摘んでいるとダイチが歩み寄る。

「あ、ごめんねお嬢ちゃん。ちよつと聞きたいんだけど・・・」

「？」

少女は、ダイチに振り向いた。

「この近くに私の子供を産んでくださいとか言うエロ坊主と銀髪の犬耳を付けた江戸っ

子半妖と妙な格好をした15位の姉ちゃんと子狐の子妖怪いなかった？」

「？」

少女は、ダイチの言う言葉が理解できなかつた。

「はあ~~~~・・・」

無理ないか・・・つとダイチは、諦めていたその時。

???

「小夜?どうしたんだい?」

女の声が聞こえたそれも大人の声だった。

「うん。この人知り合いの人達と逸れちゃったんだって。」

???

「それはお困りですね。」

その声はドンドン近づいていく。

「そうなんツスよ。うっかり逸れちゃって・・・」  
苦笑いをして情けな過ぎた。

「近くに村があるんで聞いてみては？」

「そうツスカ？じゃあお言葉にあまえ・・・!?」

「・・・」

ダイチは、女と顔を合わせると黙り女も黙る。

「・・・」

そう目の前には桔梗がいた。

世の中には仲間の元カノに会うベタなシュチュレーションが存在するそんな少女漫画のようなシュチュレーションが今現実になった。BYダイチ。

「・・・」

ダイチは、桔梗が川を見ているので自分は胡座をかいて川を見ていた。

「貴様、何でここにいる？」

「え？おまえ・・・俺と同じ術が使えるのか？」

ダイチは、驚いた自分以外にもテレパシーを使える人間がいたことに。

「そうか貴様も使えるのか。答えろ。何でここにいる？」

「ほらアレだよ。人間食べればいつか出るだろ？アレして遠くに行ったら彼奴らが迷

子になったんだよ。」

「なるほど、お前が迷子になったのだな。」

「だから彼奴らが迷子になったんだよ！」

ダイチは、意地でも言い換えようとしなかった。

「桔梗様〜！桔梗様〜！」

先程のダイチが訪ねた少女小夜が桔梗を呼んでいたのでダイチと桔梗はテレパシーをやめた。

桔梗は、振り向いて小夜が近寄る。

「見て見てこれ薬草でしょ？」

「よく見つけたね。サルホウヅキ、腫れ物に効く。」

桔梗は、優しい母親の様に答えた。

「桔梗様！こっちは？」

「これ何桔梗様？」

子供達が桔梗に集まって来た。

「どれ・・・」



桔梗は、子供達が持つて来た草を見て丁寧に説明した。

(これが本当にあの時の亡霊か？ただの優しい女にしか見えねえな……)

ダイチは、不思議な光景を目の当たりにした。

「みんなおいで。草の見分けたかを教えるから。これは傷口に貼るといい。」

「桔梗様は、何でも知っているな。」

桔梗は、子供達(ダイチも)を座らせると薬草を教えていた。

(つて言うか俺もガキ扱いなの?)

ダイチは、苦い顔で桔梗の隣に座りながら話を聞いていると。

「！」「おい！」

ダイチが桔梗にテレパシーを送る。

「気付いたか？」

桔梗も気づいている様だった。

木の影に二人の人の気配がする事に。

ピンッ！

ダイチは、後ろから大きい手のひらサイズの石を持つとそのまま木の影の方に目掛けて振り向かないまま投げた。

「!!」

木の影の人間達も驚いたのか固まった。

「そこのお坊様。」

桔梗が声をかけると正体は坊主が二人いた。

「ずっとこちらを見ておられた様ですが。」

すぐに坊主が出て来た。

「これはこれは気づいておられたのか？ いや、あまりの美しさに見惚れてしもうてな。」

坊主は、桔梗とダイチの方に近づく。

「お戯れを。」

(怪しそうな坊主だ。)

桔梗は、平然と言い返しダイチはその坊主に警戒していた。

「まだまだ私も精進が足らぬ。お恥ずかしい・・・あっ！」

坊主はワザと転んだのか巻物が都合良く桔梗の目の前に落ちた。

「！」

桔梗は、巻物を見ると目の色を変えた。

「おい、これ何だよ？」

「破魔の経文だ。」

それだけの桔梗の説明だったが都合の悪い品という事だけは間違いなかった。

「拾っていただけぬかな？これは破魔の経文でな。妖怪がこれに触れるとたちどころに正体を現すという。」

桔梗は、破魔の経文を触ろうとするが隣のダイチはすでに臨戦態勢を整えていた。

桔梗が破魔の経文を触れても何もなかった。

「ありがたいお経でございませぬ。さ、どうぞ。」

坊主は驚いだがそのまま経文を手にした。

ババツ！

その瞬間無数の粒が体を通り抜けて一瞬だけ意識が飛んだ事にダイチと桔梗とそして経文を手にした坊主の三人にしか見えなかった。

「さ、行こうみんな。」

桔梗は、子供達（ダイチも）を連れてこの場を離れようとした。

（おいおい、大丈夫なのか？）

ダイチは、桔梗が心配だった。

「巫女どの！」

ダイチの心配は現実となり坊主が叫んだ。

「どの様な未練があるのか知らんがここはお前さんの居場所では無いはず！あるべき所に帰りなさい！おい！タコ……」

坊主がいい終わるまでにダイチの殺気を込めた声が響く。

「それ以上、この子らの前で調子こいた事言つてんじゃねえぞ！」

羅刹の顔になったダイチが坊主を睨むとあまりの恐怖で坊主は動けなかった。

桔梗達と共に行くと村が見えて来て村人も桔梗に対して感謝の念の意味でお辞儀をした。

「あ、すいません。ちよつと訪ねたいんですけど。」

村人に桔梗の事を聞いた。

「桔梗様が来てから村に来てから病気の者も治り子供達にも元気に懐いておる。良い巫女様が来てくれた。この村は安心じゃ。」

「へえ〜。」

そう尋ね終わると桔梗の所へダイチは、戻る。

桔梗の心

巫女の靈力を欲し・・・骨を奪い・・・焼き上げられた・・・この身体。

転生させた魂は冷たきこの身によく馴染む。

『何故裏切つた!?何故兵一を殺した!!犬夜叉あつ!!』

今再び死ぬと言うお前・・・なぜ哀れむ?ならなぜ兵一を殺した?

我が手に温もりを感じずであるう・・・怒りと言う怨念の炎を!

桔梗の心終わる

「桔梗様、桔梗様。」

桔梗が心の奥底で恨み言を思っていると小夜が声をかけて来た事に驚く。

「小夜？」

「ねえ桔梗様は何処にも何処にも行かないよね？」

小夜は心配そうに桔梗を見る。

桔梗は、微笑むと小夜の目線が見える所までしゃがむ。

「小夜は、私の事が好きか？」

「うん。」

小夜は、正直に答える。

「ありがとう。私も小夜が妹みたいに可愛いよ。」

「本当？」

「ああ。」

それを聞いた小夜は喜んで手を振り家に帰って行った。

桔梗は、少し考えてた。

「孤独は嫌いなんだろ？静かにこの村で過ごすのも良いんじゃないかねえ？」

いつの間にかダイチと桔梗の二人だけになりダイチは、さりげに話した。

「なんだよ？驚いた顔してよ。まあ良いや此処からは一人で奴ら探すからじゃーな！」  
ダイチは、手を振り去る。

(あいつ・・・あの子に対して嘘じゃない・・・本当の事を言っていたな・・・子供好きも悪くないな。)

ダイチは、桔梗の意外な面を発見した。

### その夜

「くそく・・・何処にいんだよ？犬夜叉達？坊さんめ・・・あんな依頼受けるから俺が迷うんだよ・・・疲れたから休もう。ん？」

流れ星が出て弥勒に対する不満を言う為口が開く。

「決めた！坊さんに！坊さんに！坊さんに！罰が災いがいきますように！いきますように！いきますす！！」

ダイチは、流れ星に願をかけた。

### その頃

犬夜叉達は、ダイチが一人でも大丈夫と判断したのか以来の武家の屋敷に来ていた。なんでもこの頃若い女の魂が妖怪に連れてかれるらしいと言う噂があり屋敷の当主は、弥勒達に頼み先日亡くなった姫の魂を守って欲しいと依頼があった。そして弥勒は、もう一人の妹姫の護衛に行き犬夜叉とかごめが亡くなった姫の魂を守る事になった。

弥勒は………

「そろそろ戻らねば！姉姫様の魂が心配だ。」

弥勒は、何故か去ろうとしたが妹姫の手が離さない。

「行かないで法師様！こわ〜い！」

かなりの醜女だった……

「父親似じやな。」

付き添いに来た七宝も弥勒に呆れる。

「ひ！姫もこわ〜いでございます！」

「あ！ひど〜い！」

ダイチの願いは、成就した本人は知らないが。

「はあくあく・・・何だ？」

夜空を見上げると何かがいる。

それには白い虫か鰻が解らない妖怪の群れが魂を持って桔梗のいる村に向かう。

「は、初めて見た魂を・・・って言って場合か！」

ダイチは、その妖怪の群れを追いかけ始めた。

小夜の自宅。

（何だか桔梗様元気に無かったな。昼間のお坊様のせいだ。）

小夜は、僧侶が変な事を言い始めたがダイチのお陰で僧侶が言わなくなった。

（あの人にお礼を言いたいな・・・眠れないや。）



小夜は起き上がると壺に入つてゐる水を飲んだ。  
「？」

外を見ると桔梗が何処かに行く所を見て小夜は追いかける。

桔梗は、月が見える水辺に一人の立たずんでいた。

(もしかしてこのまま村から出て行くのかな?)

そう思っていると元結を桔梗は、解くと空から妖怪の群れ……死魂虫が桔梗の所に集まる。

「哀れな女の魂達……私と共に来い。」

(桔梗様が妖怪を操つて?)

小夜は恐ろしいものを見てしまった。

「おーい。おめえ何してんだ？」

ダイチが桔梗の背後に立つてゐる。

「私は死人……魂を満たさねばこの身体動かぬ。」

「そーいう事かよ……」

ダイチは、魔戒斧を出す。

だが！

「やーめた。」

「！何故だ？」

桔梗は、ダイチが何故自分に対して戦わないのか理解出来ない。

「お前は、こう言う村で静かにしてたいんだろ？恨み以外は？だったらその恨みが昇華して無くなるならそれで良い。まあへマしない様にせいぜい頑張んな！じゃーな！」

ダイチは、後ろを振り向くと昼間の僧侶が弟子を連れて現れた。

「成仏出来ぬのか？」

「タコども。面倒クセエな。」

ダイチは、頭を掻いた。

「見逃してはくれませぬか？私はこの村で静かに暮らしたいのです。」

「そう言ってるんだらさっさと海にでも帰れタコども。」

ダイチが言い終わると僧侶は、懐から龍の模様をした木の玉を出した。

「何をなさるおつもりで？」

「おい、この女お前よりも強いぞ？やめとけて！」

ダイチは、口で説得する。

「あるべき所に戻す！それがお主の為！」

木の玉が光るとまぼろしなのか龍の模様が現実となり桔梗を巻きつく。

「我が魂縛術からは逃れる事は出来ぬ！成仏せよ！お主の魂救ってしんぜる！」

(あ、タコ終わった……)

ダイチは、その言葉で桔梗がキレル事を知ってたからだった。

「救う？ お前如きが私を救うだど!？」

桔梗は、自身の霊力を放ち龍が消滅しその龍の爪が僧侶に刺される。

「ひいひい!!」

弟子の僧侶は、恐ろしさのあまり逃げ出した。

「関わらねば死なすなずに済んだものを。」

「本当だな。馬鹿だよこのタコは。」

桔梗は、怖い顔をしてダイチは諦め顔だった。

ガシツ!

僧侶は、最後の力を使って桔梗の足に掴む。

「お主……何をしようとしている？ 生きている者は新しい時を刻んでおる。だが……死人のお主の時は止まっている。決して交わる事は出来ぬと言うのに……哀れ……な……」

僧侶は、力尽きた。

(哀れか……確かに桔梗は、可哀想だな。)

ダイチは、桔梗に対してそう思う。

(哀れだと? 私が?)

桔梗は、考え込む。

ザザッ!

「!誰だ!!」

桔梗は、血走った目で何かの気配を感じて気配のする方に威圧感を放った。

「あああ!」

桔梗が目にしたのは・・・そう桔梗を慕ってた子供の小夜が怯えていた。

「桔梗!よせ!」

ダイチは、小夜の前に立って魔戒斧を持つとうとしていた。

「小・・・夜・・・?見ていたの・・・か?」

桔梗は、知らない間に小夜がこの一部始終を見てた事を知らなかったらしい。

ダイチは、桔梗が先程と変わり冷徹な女の心の顔から心優しい女の顔に変わったのを理解すると小夜の前に立つのをやめて桔梗を通した。

「ヒイツ!」

小夜はそれでも怖がる。

「ごめんね。怖い想いをさせてしまったね・・・」

桔梗は、小夜の所から離れる。

「桔梗様？」

「さようなら．．．ごめんね．．．」

桔梗は、そう言い去っていった。

「小夜だったか？聞いてくれないか？桔梗はな本当は優しんだよ。誰よりも優しく誰よりも傷つきやすい自分を完全に冷徹になれない女だって事を忘れないでくれよ。じゃなあ。」

ダイチは、小夜の頭を撫でると去って行った。

「犬夜叉達を探すか．．．」

「あの身体を動かすのは桔梗の怨念よ。」

ダイチは、裏陶の言葉を思い出す。

「あらかたの魂は、元の身体に戻つたらしいが陰の気だけは骨と墓土で作つた身体に良く馴染んだと見える。清らかだった巫女だった女がもはや怨念の塊ぎままはないの。」

本当にそうなのか？あの女は本当に怨念だけの存在なのか？

だって．．．

「ありがとう。私も小夜が妹みたいに可愛いよ。」

子供達の前ではあんなにも本当の自分をさらけ出していた．．．

「！誰だ！！」

弱さを見せない冷徹な怖い人の仮面しかし……

【ご、ごめんね。怖い想いをさせてしまったね……】

直ぐにあの冷徹な仮面が心を開いた子供の前で優しさと言う素顔に溶かされる誠の女。

本当は……性格が人一倍不器用なのかもしれない。

「犬夜叉達は、まだいいや！」

何故かダイチは、足を早め桔梗を探し始める。

そしてあの妖怪の群れを見つけると桔梗がいた。

「何だ？ 私に何か用か？」

またあの女は弱さを見せない仮面を被る。

「一つ言つとく犬夜叉は、お前や兵一を殺していない。殺したのは犬夜叉の姿に化した妖怪だ。」

ダイチは、桔梗の冷たい視線に動じなく真実をつけるが。

「私に信じろとでも？」

「信じてもらわなきゃ俺が困るんだよ。」

桔梗は、ゆっくり振り向きながらダイチと視線を合わせる。

「何故困る？」

「俺の仲間がアンタの犬夜叉が今も苦しんでるからに決まってんだろ？」

ダイチは、犬夜叉にはかごめがいるのにも関わらずアンタの犬夜叉と言いつつ。

「喜べとでも？」

「喜ばなくて良い。だがな、仲間の苦しみを救ってやりたいのは仲間の務めだろうが。」

「苦しんでいるなら私は嬉しい。」

その言葉を聞いて素直になれない桔梗に苛立ちを顔で表す。

「そうかよ！そうかよ！だったらアンタの頭が理解するまで俺はアンタに何処までも付いて行ってやるよ！」

「勝手にしろ。」

「おう！上等だ！勝手にしてもらおう！お前の怨念と俺のしつこさどっちが強いかな！」

ダイチは、意地でも桔梗について行く。

スッ！

桔梗が寝れるくらいの木の下に来ると手で印を結び桔梗の身体から光が出てきた。

「くっ！な！何だ！何かに押されるのはぐあ！！」

ダイチは、そのまま何処に飛ばされた。

「畜生！たかが元人間に負けて・・・たまるかアアアツツ！！」

ダイチが叫ぶと魔法衣から何が光り出した。

ピタッ!

その光のお陰でダイチは、飛ばされずに着地した。

「な!何だ?」

ダイチは、魔法衣からの光を見ると。

「次元鳥の羽?」

そう次元の鳥の羽が桔梗の結界の中に入れてくれたらしい。

(さてとあいつのいる所からかなり離れたな・・・)

ダイチは、森を散策していた。

「気をつけて!足場が滑りやすくなっているから!」

「!」

ダイチは、聞き覚えのある声を耳にした。

「きやあああああつ!!」

悲鳴を上げながら上から落ちて来て直ぐにダイチは、掴んだ。

「よっ!かごめ久しぶり!」

ダイチが掴んだのはかごめだった。

「だ!ダイチさん!」

「何やってんだお前?」



ダイチは、かごめを安全な場所に行くとは詳しい事をかごめからの説明を聞いた。

「死んだ女の魂がたくさんの妖怪の群れに誘拐させた？」

「そうなの、ダイチさん？」

ダイチは、考え事をした。

「心当たりあるぞ？」

「本当に!？」

ダイチとかごめは、そのまま森を散策していると桔梗が操る妖怪が見てえる。

「あれよ、女の人の魂を集めていたのは。」

「なら近いな・・・」

ダイチの言葉に疑問になりながらも進んで行くと桔梗が印を結んだ場所に辿り着いた。

「ここは? あ・・・」

そこには桔梗が木の上で寝ていた。  
続く。

## 接吻

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

前回のあらすじ

犬夜叉達と逸れたダイチは、そこで偶然にも桔梗と再会する。

その頃犬夜叉達は、死んだ女の人の魂を集めてる妖怪の群れを発見した。

ダイチは、桔梗が死んだ女の人の魂を集めている犯人ある事を知る。

そしてダイチは、かごめと再会していなかった間の事をかごめから聞き桔梗のいる場所まで案内した。

「眠ってるの?」

「そうだな。」

かごめ達は、木で寝ている桔梗を確認した。

(楓婆ちゃんや犬夜叉は、私の顔は桔梗に似てるって言うけど……私より美人よ……)  
かごめは、己が比べ物にならない程桔梗の方が美人であると認めた。

(かごめの方が美人だと思うけど……悲しいような顔をしているな……)  
ダイチに至ってはかごめの方が美人だと思いつつ悲しそうな寝顔に心配した。

《お姉ちゃん!》

「兵一。」

夢の中で桔梗は、笑顔で桔梗を呼ぶ兵一がいた。

「兵一……無事だったんだな!やはりそうだったのか……良かった。」

桔梗は、兵一を触ろうとするが。

スウツ

兵一の身体は、透けていった。

「兵一！待ってくれ！兵一！！」

桔梗は、追いかけるが兵一は、遠くへ遠く行ってしまう。  
徐々に白い光が現れると直ぐに真っ暗になった。

桔梗の目がゆっくりと開くと直ぐに驚く。

「お前達、私の結界を通り抜けて来たのか？」

怖い人ぶってる桔梗がかごめ達に言う。

「け、結界？あつたっけ？そんなの・・・」

かごめは、理解出来なかった。

「お前は？」

桔梗には理解出来なかったなぜダイチが自分の結界にいられるのかを。

「あ？そんなの決まってるんだろ？お前よりも強い気合いと根性。」

桔梗は、この男ならしでかしそうだと思ひ聞くのをやめてかごめに視線を送る。

「そうか・・・お前は私だからな。」

そうかごめは、来世の自分だから結界を通り抜けて来たのだと理解した。

「ちげえよ。かごめはかごめ。お前はお前だろ?」

ダイチは、桔梗に言い返した。

「女の魂を集めていたの貴女何ですか?もしそうだったら返してあげてください。」

かごめは、桔梗を説得して魂を返して貰おうとした。

「一緒ではないのか?」

「え?」

桔梗は、犬夜叉と一緒にじゃないのかと聞いたがやはりかごめ自身犬夜叉の事はあまり話したからない。

何故なら犬夜叉は、森に入る前に死んだ僧侶の弟子から聞いて直ぐに桔梗を探しに行ってしまったからだ。

「犬夜叉は、貴女の事を探しに行くって。」

「お前犬夜叉の何なのだ?」

桔梗は、かごめに探りを入れる。

「今カノ(ボソ)。」

「ちよっ!ダイチさん!!」

かごめは、ダイチの口を塞ぎ慌てた様子を見せるが今カノ等と言う言葉は桔梗が知るはずもない。

ピタッ

桔梗は、かごめの頭に指を置くと近くで口を塞がれているダイチも動けなくなった。

「お前達は、邪魔だ。」

無表情に桔梗は、言い放つと動けなくなったダイチとかごめを自身が操る妖怪・・死魂虫に命じて木に縛り付けた。

死魂虫の一匹が魂を桔梗に与えると何かを知ったような顔をした。

「犬夜叉が来たか。お前を助けにはない。私に会いに来るのだ。」

桔梗の視線がまたかごめに向けた。

「まあそうだろうな、犬夜叉なら。」

喋る事が出来たのでダイチは言う。

「邪魔は、させない。」

憎しみの目をしていた・・・そうあんな夢を見たらそうかも知れない。

「邪魔って？あ！まだ犬夜叉を殺すつもりなんじゃ・・・違うの桔梗。あなた達を憎しみ合わせ様とした奴がいるの貴女と兵一って子を殺したのは犬夜叉じゃなかったのよ。」

「かごめ・・・無理だと思う。」

ダイチは、先程桔梗にも同じ事を言ったが信じてくれなかったのを知っている。

「フツ！喜べとでも言いたい顔をしているな？」

信じてはくれなかった。

「え？」

「俺も同じ事をあの思い込みに言ったんだよ。」

ダイチは、かごめに理由を明かす。

「私を死に至らしめ兵一を殺した者を殺せば私は生き返るのか？それともあの子の人生が戻って来るのか？」

「それは……」

言い返せない質問をされた。

「死人が望み、それは再び命を得る事だ。フツ！叶わぬ願いよ。だが、死人にも叶う望みがある。私はもつとも私を忘れられ事を許さぬ者の心を奪い尽くしたい。」

(なんか……恥ずかしい事を言っちゃってるよ？あいつ……)

「忘れる事を許さぬ者の心？犬夜叉の事？」

かごめは、ダイチの心境を知らぬまま桔梗に聞く。

「奴は、兵一だけでなく私の死を望んでいる。良い事だ、奴は私との戦いに悔いを残していると言うのか？ふふふっ！悔やむが良い！忘れさせはしない！私の事を時は進ませ

なしない。そうすれば私は止まった時の中で生き続ける事が出来る。あやつの心の中に生き続ける事ができる。」

(やめてよ〜恥ずかしいよお〜)

「今だつて犬夜叉は、貴女の事を考えている。それじゃあいけないの？犬夜叉は、貴女の事が好きなのよ。ずっと思われているわ！それでいいんでしょ!？」

「犬夜叉と私は憎しみ合いながら別れた。お前の言う生ぬるい感情など憎しみを高めた踏み台にしか過ぎぬ。心と言う結ぶ物で恨みと言う感情に勝るものは無い。愛するのであれば私は苦悩に陥るやつの心を愛おしもう。」

(厨二病? いや高二病かな?)

「違うわ! 屁理屈よ! そんなのぜったいおかしいわ!」

「おいおい、その思い込みは困るんだけど・・・あ!」

ダイチは、何かを発見したように目に止まるとかごめも見た先は。

「はあつ・・・はあつ・・・」

先程まで走っていたのか犬夜叉は、息を荒れて此処に来ていた。

「犬夜叉、桔梗に話して!あなた達の事、奈落に騙された事を!」

「おめえの口からこの思い込みに言つてやれよ犬夜叉!」

かごめとダイチは、犬夜叉に言うが全く反応が無いや何かが変だった。



「桔梗・・・」

犬夜叉の目には桔梗しか見えていないらしい。

「かごめ、俺らの声聞こえてないな。」

「私達の声が聞こえてないし見えないみたい。」

そんな二人の心境を無視して犬夜叉は、桔梗の目を見つめる。

「やっぱりおめえなのか？ 女の死魂を集めていたのは？」

「この土と骨の紛い物の身体は、魂で満たしておかねば上手く動かせない。犬夜叉・・・私が悍ましいだろ？ お前への怨念に動かされ死者の魂を纏ってこの世にあり続けているのだから。」

（お前な・・・犬夜叉は、お前が思ってる事これっぽっちも思ってたねえって・・・）

「ば！馬鹿な！お前は俺を憎んでいるかもしれないねえけどな俺は・・・」

辛そうな犬夜叉は、切なそうな顔をする口が開く。

1日だってお前の事は忘れた事は無かった!!

その言葉が森に響き更にはその言葉がかごめや桔梗の心に響き渡る。

「・・・・・・・・」

予想もしてしない言葉に桔梗は、切なそうに嬉しそうにも見える。

（言っちゃった・・・言っちゃったよアイツ・・・）

気まずそうな顔をしてダイチは、かごめの顔を見る。

（やっぱり犬夜叉は、ずっと……桔梗の事を……そうだよね！なんか寂しい……かな？犬夜叉取られちゃった……え？何言ってるのあたし!?べ・別に犬夜叉と付き合ってるわけでもものに。）

かごめは、未だに鈍感なのか自覚しているのか曖昧だった。

「お前がどんな姿になってたって俺は悍ましいとも憎いとも思わねえ。」

犬夜叉は、桔梗に迷いなく正直に気持ちを伝える。

「本当なのか？」

桔梗は、後ろを犬夜叉に見せると再び犬夜叉に振り向き近寄り手を犬夜叉の顔に付けた。

「今、この手でお前を殺すかもしれないのに。」

桔梗は、唇を犬夜叉の口に持って行き口付けをした。

（え？ちよっと!!?)

見てる観客は驚く。

「犬夜叉……お前に出会ってから私は巫女では無くなった。一人の女になった……生きている時にこうしたかった。」

桔梗は、犬夜叉を抱きしめ犬夜叉も抱きしめる。

「犬夜叉……受け入れちゃうのね……そうよね……受け入れて当然よね。」こんな近くであたし何やってんだろ？なんかバツカみたい！やっだ〜！なんか涙が出て来ちゃった！」

（氣づけよかごめ……）

ダイチは、かごめの鈍感さに辟易してる。

（懐かしい桔梗の匂い。昔と同じだ。違うのは温もり無いって事だ。死んでしまつてからでは……冷たくて……悲しくて……寂しくて……）

「私達はあの頃には戻れない。だから……もう少しこのままでいたい。」

「俺は桔梗をいや兵一も助けてやれない。もうお前達を助けてやれないのならこのまま、このまま時が止れば良い。」

「良いのか？時を止めても？」

ゾッ！

（な、何だ！今のあの思い込みの言葉から悪寒が走り鳥肌が立つ!!!）

ダイチは、氣付いた桔梗が何やら恐ろしい事をしようとしていることに。

「ああ！見てられない！もう邪魔しないから動ける様にしてよ！ど、何処かに引つ込むから「犬夜叉!!逃げろおおおっ!!!」？」

かごめは、ダイチが怒鳴りながら犬夜叉に避難をする様な言うのと桔梗と犬夜叉の間に

何やらブラックホールの様な穴が空き吸い込み始め死魂の次々と吸い込み始めた。

「犬夜叉……もう逃しはしない。私と共に兵一のいるあの世へ来い。」

桔梗は、犬夜叉をあゝの世の地獄に連れ込もうとしている。

「犬夜叉！何やってんだ!! 気合いで目を覚ませ!!」

「駄目だわ! 意識を奪われている! 桔梗! アンタには聞こえてるんでしょ!?! 卑怯よ! 犬夜叉は、アンタと一緒に居たいと言っただけだアンタと一緒に死ぬとか言っていないでしょ!?!」

「犬夜叉はな! お前と違って50年前にハメヤがった奈落を倒そうとしてんだよ!」

「犬夜叉は、生きて戦う事を望んでんのよ! 犬夜叉は、貴女の為にも仇を打とうとしてんだから!」

かごめ達が言うくと桔梗は、向いた。

「わかってくれたの?」

「いや……あれは……」

ダイチは、桔梗の様子があまりにも変わらない事に気付き桔梗の行動に注意をする。

「うるさい貴様等。」

桔梗は、人差し指をかごめ達の方に向ける。

ピカッ!

バリっ!!

人差し指が光ると縛られていた木が直ぐに桔梗の霊力で壊された。

「桔梗・・」

「それがお前の答えか？」

ダイチは、一緒に動ける様になりかごめを起こすと桔梗を睨む。

「仇を打った所でこの身だけでなくあの子も蘇らない！なあ犬夜叉、私や兵一を忘れられずにいるより共に兵一が待っている行こう。私とお前願いは同じ。」

言いたい放題の桔梗。

（あ、あの思い込み。なんか・・なんかさ・・かごめに対して不味いこと言っちゃってるよ。やっちまえよかごめ。）

ダイチは、かごめの顔を見るとかなりブンブンな顔に変わる。

「あんたねえくくく！犬夜叉が気を失ってなければアンタなんかと一緒に行くもんですか！冗談じゃわないわよ！犬夜叉から離れて！犬夜叉に触らないでくく!!」

かごめは、叫ぶ。

【お姉ちゃんやめて!!】

「へ！兵一？あ！」

かごめが叫ぶと桔梗の頭に兵一の声が聞こえ魂が再びかごめに奪われて行く。

(この女、また私の魂を奪う!? それに兵一の声が!? 何故なのだ? 兵一邪魔をするんだ!?)

桔梗は、兵一もかごめに力を貸していると思ひ戸惑う。

「犬夜叉! 目を覚ませよ!」

「そうよ! 犬夜叉! 目を覚まして! 犬夜叉!!」

かごめとダイチの言葉が犬夜叉に向かつて大声で訴える。

「ダイチと……かごめの声? かごめいるのか?」

犬夜叉は、声の方に目を開けるとダイチのかごめがいるのに気づく。

「か……ごめ? かごめ!」

犬夜叉は、直ぐにかごめの所に向かう。

「……………」

桔梗は、かごめの所に向かう犬夜叉を見るしか出来なかった。

「かごめ? ん? ダイチ? 何でお前までいんだよ!」

「まあ成り行きだから気にすんな。」

「あ、あんたこそ何やってんのよ!」

かごめに至っては犬夜叉の一部始終を全て見ていたのと言うまでもない。

「お、おれは……?」

死魂虫が魂を持って桔梗の所に集まると先程のあの世の穴は閉じて桔梗に魂を渡す。

「その女の方が大切なのか？」

桔梗は、寂しそうに犬夜叉を見つめる。

「……」

犬夜叉だけでなくかごめも黙ってしまふ。

(お二人さん……なんか言ってやれよ。)

ダイチもその気不味さはビンビンに感じる。

桔梗は、死魂虫に連れられて空へ登ると犬夜叉を見続ける。

「待て桔梗！おれは！」

「犬夜叉忘れるな。お前に口付けした気持ちに嘘ではない。忘れるな。」

桔梗は、何処かに行ってしまう。

「かごめ、大丈夫か？」

「うん、けど一人でいたい。」

ダイチは、返す言葉が出ないので返事をしなかった。

「お、おい！ん？」

犬夜叉は、変な様子のかごめに近寄る。

「来ないで！」

「何怒ってんだよ？」

いや普通は、怒るものだ犬夜叉。

「あのさ犬夜叉、あんた一人で四魂の玉を探せる？あたし……もう一緒に探せないかも  
しれない。」

「お前何言ってるんだ!?お前にしか四魂の欠片は見えねんだぞ?駄目に決まってるだろ  
?」

ダイチが犬夜叉の前に立つ。

「犬夜叉よお……それだけなのか?かごめの存在自体はお前からして見たら。」

溜息をつくダイチ。

「な!何なんだよお前もさつきからおかしいぞ!」

「犬夜叉?そうか無理ねえな。」

「そうね知らないもんね犬夜叉は。」

ダイチの後にかごめも続けて言う。

「ん?」

全く気付かない犬夜叉。

「悪いけど私達は全部見てたの。」

すると犬夜叉の顔色が変わる。

「ぜ!全部って?」



「文字通りの意味だ。VIP席だな。」

「そう、最初から全部。だからねほつといて。」

ダイチは、察しているのかかごめを見るだけだった。

「お、おい！ダイチ！全部って!?!」

「馬鹿なこと言うな。」

犬夜叉は、挙動不審になりかごめの方へ行こうとするがダイチが止める。

「今はソツとしとけ！」

「うるせえ！」

犬夜叉は、飛び上がるとかごめの方に走りながら行く。

「はあくく……」

ダイチは、去りながら二人の会話を聞く。

「お、おい！かごめ教えろ！」

「おすわりっ!!!」

ドシーンっ!!!

「全部って言ったら全部よ!!ずっとダイチさんと一緒に特等席で見ちゃいました!!はあ

く……帰るわ。」

かごめの怒りが犬夜叉に当てられた。

「馬鹿だな。お！坊さんに七宝！」

目が見える距離から弥勒も七宝を確認した。

「お！ダイチ今までどこにいたんじや？」

「ダイチ殿、こんな所で何を？」

「まあ良いや、詳しいことは直ぐにおすわりされた状態の犬夜叉がいるから聞きな。俺楓婆さんの村に帰ってるから、じやな。」

ダイチは、楓の村に行った。

### 楓の自宅

「ん？」

楓は入り口に物音がして見ると驚いた。

そこに・・・

「桔梗お姉様!?!」

「どうした楓？ 姉の私が怖いのか？」

「い、いえ。お姉様は、崖から落ちたと聞いてつきり私は・・・」

「そう私は死人だ。どうやら現世にたつぷりと未練があるらしい。」

その姉妹の会話をしていると外では。

（早えな桔梗は。）

桔梗の後から楓の自宅に来たダイチは、気配を殺しつつ外で聞いていた。

「まだ犬夜叉の命を狙っておられるのですか？」

「今し方その犬夜叉と会って来た。命を取り損ねたがな。話せ楓。」

桔梗は、座って楓と視線を合わす。

「お前が知っている限りの奈落と言う者の事を。」

その後桔梗は、楓から奈落の事を説明した。

「そうかあの野盗か。」

「はい。四魂の玉は汚れていてこそ美しいとも申ししておりました。」

楓は、暖炉に火をつける。

（私と犬夜叉を醜く殺し合わせ汚れた玉を手に入れようとしたのか。）

「お姉様。犬夜叉もまた奈落の罠で深く傷付いた。ですから「私はただ自分が死んだ理

由くらいしっておこうとしただけだ。」

桔梗は、外へ出ようとするその時止まり楓に振り返る。

「ところで犬夜叉は、変わったな優しい顔付きをしていた。昔のあいつは何者も信じないすねた目をしていた。」

「かごめは、不思議な子です。犬夜叉の心を少しずつ癒しているのです。」

「やはりあの女か犬夜叉を変えたのは。（生きていればこの私が犬夜叉の心を癒す筈だった。兵一・・・すまない。私と出会った為にお前の人生を奪ってしまった。）」

桔梗は、犬夜叉を癒すかごめに対する嫉妬の目をする急変して兵一に対して更に後悔と悲しみを宿す。

「お姉様、未練は断ち切れませんか？」

「また会おう。」

桔梗は、楓の自宅を後にした。

「?。」

「よっ!。」

外を出るとダイチが待っていた。

「.....」

桔梗は、無視して行こうとすると。

「なくに怖い人ぶってんだよ?。」

「何が言いたい。」

視線で威圧を放つ桔梗に平然と耳を掘りながら呆れるダイチ。

桔梗は、言い続けずに去る。

「楓婆さんただいま。」

ダイチは、楓に挨拶する。

「ダイチお前一人か？」

「まあな。ところで婆さん。」

「どうした？」

「兵一のお骨や墓って何処にあるんだ？」

楓は、黙りそして口が開く。

「兵一の霊骨と墓はない。」

驚く答えを出した。

「どう言うことだ？」

「お姉様の遺言で火葬する様に頼まれてな。桔梗お姉様の次に兵一の遺体を火葬する前にお姉様の火葬の時に突然兵一の遺体が燃え上がった。お姉様の火葬が終わっても火は弱まる事はなく数日は燃えていた。そして兵一のお骨は形も無く粉になった。ワシは、残った粉を桔梗お姉様の入った骨壺に入れてお姉様のお墓に入れた。」

それが真相だった。

「婆さんあんがとな。じゃあ俺かごめの国に行ってるからじゃおやすみ。」

ダイチも楓の自宅を後にして骨喰いの井戸に行き現代に向かった。

その翌朝。

現代の骨喰いの井戸から戦国時代の骨喰いの井戸にダイチとかごめが戻る。

「かごめ? どうだ?」

「うん。少し落ち着いた。と言うよりも何やってんだろ。ボーツとして荷物置き忘れて来ちゃった。ねえ! その辺に誰がいる?」

そうすると・・・

「どうするのだ犬夜叉?」

弥勒の声が聞こえる。

「どっちを選ぶのだ犬夜叉?」

また七宝の声も聞こえる。

「さあ!」

おそらく桔梗かかごめのどちらかを選べと選択させようとしていた。

「りよ、両方つてのはダメなのか?」

犬夜叉の声がとんでもない事を言う。

「ふ！二股か!？」

七宝は、呆れる。

「まあ、男でしたらよくある事。ただしご本人に悟られてはいかん。」

弥勒は、一応忠告する。

それ聞いていた骨喰いの井戸のメンバーは。

「あ、か、かごめ？落ち着けな？い、犬夜叉だつて何かしら理由があるんだしここは…  
「ダイチさん。お願い邪魔しないで。」うんわかつた。」

犬夜叉の定番のヤツが始まろうとしていた。

「万が一バレることがあれば「おすわりっ!!!」ドシーンッ!!!「そう。おすわりで、ん？」  
弥勒は犬夜叉を見るとお仕置きされた犬夜叉の姿があつた。

「天罰が下ると言う事じゃな。」

「犬夜叉の場合、悪気はないのだがな。」

弥勒と七宝は、ただそれを見ている事だけしていた。

## 退治屋

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

「来たー！森から来るぞー！」

此処はとある村で村人達が武器を構え何かが来るといった感じだ。

「退治屋さん頼むー！」

そう言うのと村人達の後ろから大きな骨のブーメランを持った全身黒いタイツに近い服を着た16才くらいの少女がいた。

少女は、村人達よりも前に来て森から来る何かを待っている。

「シャアアアアツツ!!」

森から巨大百足が現れ向かって来た。

「はっー！」

少女は、大きいブーメランを軽々と投げると巨大百足のくびを真っ二つにした。

ピカッ！

巨大百足の身体から何かが落ちる。



「?」

少女がそれを手にしたのがそう四魂の欠片だった。

(やはり四魂の欠片か。)

少女は、全てわかつていたかのように落ち着いていた。

「退治屋さんそれは?」

村人達も気になっている。

「百足が巨大化したのはこれが原因さ。」

少女は、仕事を終わると直ぐに小屋で素早く着替えるとその時代の女性らしい着物に着替えた。

「それじゃあまた。御用があつたららお呼び下さい。」

「退治屋さんお礼の方は?」

「いいよ。これ貰っていくから。元々四魂の玉はウチの里から出た物だからさ。」

何の因果なのかこれからこの少女珊瑚はこれからの運命を知らないでいる間でもあつた。

一方その夜犬夜叉一行は。

「星がいっぱい出ておるわい。あの星の数と四魂の欠片の数とどっちが多いじやろか？  
まだまだ先が長そうじゃ。」

夜空を見上げる七宝がそう呟く。

「そーでもねーんじゃねえか？」

犬夜叉は、七宝に妙な事を言う。

「何故じゃ？」

「奈落も俺たち同様に四魂の欠片を集めている。考え様によつちやあ俺達の手間が省けるって事だ。彼奴に集めさせてあとでぶん取る！中々良い作戦だろ！」

「犬夜叉よ。もっと考えればわかるんじゃねえか奈落が多く持てばそれだけ強くなるって事でもあるんだぞ？」

「ダイチの言う通りじゃ。」

ダイチがもつと厄介な事を犬夜叉に教える。

「うー！」

「そうなつては手遅れになるかもしれん。」

「七宝の言ってる事が正しければ俺らが先に集めるべきって事でもあるな。」

その事を言われて戸惑う犬夜叉。

「はあくオラのような子供でもわかる事が何故分からのか！全くどこまで頭の中がおめでたく出来とるんじや？」

「何だとお!？」

犬夜叉は、七宝をゲンコツしようとしたが。

「犬夜叉は、すべての欠片を手に入れてどうするおつもりですか？」

「おっ！俺も坊さんと同じ事を考えてたどうなんだよ？」

ダイチは、七宝を背中に隠すと弥勒同様に聞く。

「んな事決まつてるじやねえか。俺は正真正銘の妖怪になるまでだ。」

迷いなく犬夜叉は、答える。

「ほうそんな物ですか？」

「弱くちや何も出来ねえからな。気に食わない奴がいたつて力で負けたらおしまいだ。」  
(まあ今までの生き方して来たらそうなるかもな。けど本当にそうなのか?)

ダイチは、昔犬夜叉が四魂の玉を使い人間になり桔梗と共に生きたいと思ったので思う……そう居場所が欲しいだけじゃないかと。

「しかし犬夜叉、お前が四魂の玉の力で妖怪になった時お前はお前のままでいられるん

でしようか?」

「ど、どう言う事でい?」

弥勒の意外な言葉に戸惑う。

「四魂の欠片の力を使って良い事をしている者を見たことありますか? 私は思うのです。四魂の玉の力を得る者はそれと引き換えに心を失うのだと。」

「え?」

ダイチも考えるが確かにそんな感じもする。

「けっ!俺は別に良い妖怪に成りたいと言った覚えはないぞ。」

「だがお前はかごめ様を守りたいと思っている。その為に力が欲しい。しかし四魂の玉を使って妖怪になった時お前はかごめ様や七宝やダイチ殿を食い滅ぼすかも知れません。」

ダイチは、弥勒の話の聞きながらかごめが息を潜めて起きている事に気付く。

「み、弥勒、お!オラもか?お前も喰われないのか?」

七宝は、ダイチにしがみついて震える。

「私はとつとと逃げます。」

あつさりと弥勒は、答える。

（く、くだらねえ!今までの四魂の欠片に関わったら妖怪共は最初から口クでもない妖

怪共はだったんだ。それだけのこった！俺は違う！

犬夜叉は、自分だけ違うそう何度も思い込んでいた。

翌朝

「何?!女が四魂の欠片を持ってた!?!」

訪れた村で四魂の欠片の情報を聞くと昨日の巨大百足の事を犬夜叉達に村人が話した。

「こら!答えろ!」

犬夜叉は、強引に聞き出そうとする。

「また妖怪じゃ!」

「退治屋に頼まねば!」

村人たちは、怯える。

「落ち着けよ。犬夜叉は、さがつてろ。坊さん村人たちを落ち着かせよう。」

「そのようですね。」

ダイチと弥勒が村人たちの誤解を解くために話し合いで説得した。

「何?退治屋だと?」

「へえ。妖怪退治を商売にしている人達がいるんだ。」

村人たちも無害と判断したのか説明してくれた。

「それでその退治屋が四魂の玉の欠片を集めていると言う事ですね。」

「まあ何でも玉は元々自分達の里から出た物だと言つてたな。」

「んだ。」

その言葉を聞いて犬夜叉一行は驚く。

「犬夜叉知つてましたか？」

「いや・・・俺が玉の存在を知つた時はもう四魂の玉は桔梗が守つていた。」

「それ以前つて事か玉が何処から来たのかなんて考えなかつたな。」

ダイチも当たり前の事を見逃していた。

此処は退治屋の里

里の周りには巨木の壁となつており普通の妖怪では侵入は困難だったがその扉が重

く開いた。

「おかえり珊瑚ちゃん。」

「ただいま。」

扉から巨大百足を倒した珊瑚が帰って来た。

「百足の足と皮を持って来た。鎧作りに使えるよね。」

珊瑚は妖怪の素材を里の人に預けた。

「キューーン！」

里の奥から尻尾を二本持ったシヤム猫に近そうな猫が珊瑚に飛びついて甘える。

「よしよし雲母良い子にしてたか？」

珊瑚は、雲母を撫でまわす。

「姉上えー！」

少年がやって来て珊瑚を姉上と呼ぶ。

「ただいま琥珀。」

「父上が・・・お頭が呼んでる。」

珊瑚は、弟に連れられて父が待つ小屋に向かう。

「そうか・・・四魂の欠片を手にしたか。出来したぞ珊瑚。」

父は四魂の欠片を神棚に祀ると手を合わせる。

その神棚の奥には絵が描かれており斧槍を持った狼か熊の様な甲冑を着た侍の絵だったがどうやらこの退治屋の里の神様のものらしい。

「父上。そんなんで欠片の邪気は鎮まるの？」

「ダメだろうな。」

「やっぱりね。」

「50年ほど昔靈力に強い巫女様にお預けして清めてもらったと言うがその方も結局は玉をめぐる争いで亡くなったと言う。儂等に来ることは玉を清める靈力を持つ者が見つかるまでこの里に集めて守っておくことぐらいだな。少し休んでおけまたすぐに仕事だ。」

「はいよ。」

「琥珀お前も準備しておくのだぞ。」

「え？俺？」

琥珀は、不安と驚きを隠せない。

「お前もーだ。そろそろ実戦出ねばな。」

「うん。」

琥珀は、気が進まない様子。

「ねえ姉上？」



「ん？」

琥珀は、自宅の庭で姉と二人だけになっていた。

「妖怪は、火や毒を吐くのか？」

「時々ね。」

「そうか……」

琥珀は怖いらしい。

「琥珀お前怖いのか？」

「そ、そんな事は無いけど。」

「平気だよ。あたし等が退治するのは蛇や蜘蛛のデツカイ奴だもん。父上が言ってるよ。一番怖いのは人間のフリをしている奴だつてそう言う奴等は四魂の欠片を手にしたら大変だつて。」

珊瑚は、一番タチの悪い奴のことを弟に教えた。

それから珊瑚達退治屋は、仕事の為にあるお城に向かった。

「よく来たな退治屋。夜な夜な大蜘蛛が遅い城中の者も数名喰われておる。しとめられるか?」

「はっ!お任せあれ。里の中から手練れ者を選びすぐりておきました。」

珊瑚達の父のお頭が言葉巧みに言う。

「ほう。手練れと申しても女子らしき者や子供までおるでは無いか?」

殿様が嫌味たらしく珊瑚と琥珀を見る。

「この二名は手前の娘と息子にて里の中でも一二を争う名手。今宵はその腕をとくとご覧入れましょう。」

「だつてさ頑張れよ琥珀。」

琥珀の隣にいた珊瑚が小声で言う。

(ち、父上の嘘つき。)

琥珀は、ますます不安になる。

ゴロゴロ!

雷鳴が聞こえたと何かの気配がして来た。

「く!来るぞ!頼むぞ退治屋!」

侍達は、刀を抜いたり槍を構えていた。

「はっ!行くぞ!」

お頭が言うと同は素早く持ち場につく。  
すると雲から大蜘蛛が降って来た。

城の奥では・・・

「また物の怪が出たのか？」

「若の御病気がそう長くあるのは物の怪の陰の気のせい。退治屋を呼びました故この騒ぎも今宵限りかと後は一日も早くご回復を。」

「退治屋？」

若様は爺やらしい者からそう説明される。

大蜘蛛は、口から大量の糸を吐いた。

退治屋達は隙を探しながら進む。

「うわああー！」

琥珀は、蜘蛛の糸に絡まるが。

ビリッ！

仲間の退治屋がそれを斬って助ける。

「琥珀。落ち着いていけ。」

慣れていない琥珀を仲間がフォローする。

「おらー！」

「よし！抑えた！」

「飛来骨！」

珊瑚がトドメをさした。

「す、すごい姉上ー！」

「珊瑚は村一番の手練れだからな。」

「よーし！念の為首を切り落とすぞ！」

退治屋達は大蜘蛛の首を切ろうとしていた。

「よーし、俺も。」

琥珀も行くこうとするが何かの糸が琥珀の首にくっ付いた。

「凶体だけデカくて大した事はなかったな。」

退治屋達はそう言いながらも首を切ろうとしている。

(簡単過ぎる。この蜘蛛・・・?)

退治屋達が何かに斬り裂かれた。

「ぐあああああつ!!!」

退治屋達は次々と珊瑚の目の前で殺された。

「!?あー!」

珊瑚は後ろを振り向くとそこには。

琥珀が血塗れの武器を持って人形のように立っていた。

「どうして?」

珊瑚ですらも分からなかった。

「琥珀! 何故父上達を!」

そう言っている間に琥珀は珊瑚に向かって走る。

「やめろ琥珀!」

シュッ!

琥珀の武器でもある鎖鎌は珊瑚のマスクの辺りに攻撃してマスクが外れた。

「お前? 私がわかんないの?」

珊瑚は、琥珀に異変が起こっているに驚く。

「おい！退治屋!? 一体何を!？」

侍達が止めようとすると。

「やらせておけ。良い余興だ。」

殿様は殺しを見たいかの様に侍達に待たせる。

「どうしたんだ琥珀!？」

珊瑚は、腰の刀を抜くと琥珀も刀を抜き罅迫り合いになる。

「はっ!？」

琥珀の首から蜘蛛の糸らしき物が出てるが見える珊瑚。

(蜘蛛の糸?)

その糸を辿り見ると殿様の方に糸が繋がっていた。

「あいつ!？」

珊瑚は、琥珀を避けて飛来骨を持ち殿様の方に走る。

「お前の仕業か!?!ぶっ殺す!？」

珊瑚は殿様が琥珀を操る犯人だとわかった。

「姉弟諸共乱心したぞ。殺せ!？」

殿様が命じると侍達が珊瑚に襲いかかる。

「おのれ！」

珊瑚は、軽々と飛来骨を振り侍達を払う。

クザツ！

「うー！」

珊瑚の背中に刺さる様な激痛が身体の中を走り巡る。

「？」

珊瑚は、自分の背中に琥珀の鎖鎌が刺さり振り向くと琥珀が自分を刺した事に気が付いた。

「あ、姉上！」

その瞬間から正気を取り戻した琥珀は自身の意思でないとは言え最愛の姉をやってしまった事に深い後悔と悲しみで涙を流した。

「琥珀？」

「お、俺！姉上！」

琥珀は珊瑚に向かって叫びながら来ようとする。

ヒュッ！

「あ！！！」

「琥珀！」

琥珀は、侍達の放たれた矢に撃たれて倒れる。

「次の矢を放て！」

殿様は、今度は珊瑚を殺す様に仕向ける。

「こー！琥珀！」

「あ、姉上……怖いよ……」

口から血を出して琥珀はそう呟く。

「だ……大丈夫、あたしが……！」

今度は珊瑚に矢が撃たれた。

「姉弟仲良く仲直りか。めでたしめでた……ズバツ！」

殿様の後ろから何者かが斬る。

「と、殿！若！殿に一体何を？」

侍達は、分からなくなっていた。

「これは父上ではない。見てみよ。」

死んだ殿様の頭が突然動き出して蜘蛛になりそのまま若の刀が刺し殺す。

「父上の様子が尋常ではないと思つていたが妖怪に乗つ取られていたのだな。退治屋達は、気の毒な事をした。庭の隅にでも埋めてやれ。」

退治屋達はそのままだに葬られた。



その頃の犬夜叉一体は

「まいましたな。誰一人退治屋の村の場所を知らぬとは。」

「忍者の里じゃねえのに厄介だな。」

「山の中ってだけじゃね。」

弥勒とダイチとかごめは、困り果てる。

「うるせい！兎に角探すんだ！」

犬夜叉は、愚痴を言わずに歩き続ける。

「犬夜叉、退治屋の里から奪う気か？」

犬夜叉の肩に乗っている七宝が聞く。

「あつたりめえだろ！」

「逆に退治いいですけどね。」

「そうね、プロみたいだし。」

「頭を使って倒される事まであるかもな。知りてえな四魂の玉が何で出来たのか。」

「そうね元々四魂の玉は自分の里から出た物だって言うしね。犬夜叉もそれが知りたいと思うわ。」

ダイチとかごめは、そんな話をしながら犬夜叉を見てると妙な風が吹いたまるで唸り声の様な感じだった。

「何か近付いてくる。すごく沢山。」

夜空を見上げると雲らしい物が月を隠しているがよく見ると。

「よ！妖怪の群れだ！」

「物凄い妖気。何これただの妖気じゃないわ！」

「確かに禍々し過ぎて気分が悪くなる。」

「多分殺気だ！何かを襲う気だ！」

「行くぞダイチ！」

犬夜叉は、七宝を乗せながらダイチも後から追う。

「追いましょう！」

弥勒とかごめも犬夜叉達を追い走る。

退治屋達が葬られた城

「あの退治屋の姉弟よく見りやまだ幼かったのにな可哀想にのお。」

城を夜の警護している侍が見回りしながら墓の前で言いながら去ると墓の辺りが盛り上がり珊瑚が出て来た。

「ち、ちくしょう．．．死んでたまるか．．．」

珊瑚は、手を使って歩んだ。

すると屋敷から若が出て来た。

「！退治屋の娘!?まだ生きていたのか?」

若が見ると珊瑚は血走った目で目上げた。

退治屋の里では

「ふうふう。」

退治屋の里には妖怪の群れが襲いかかり戦場のそのものに狒々の皮を被った男そう奈落が徐々に近付き里に侵入した。

奈落の目的の場所は妖怪達と同様に四魂の欠片だった。

小屋の中では複数の四魂の欠片を奪おうと妖怪達が殺し合いをしようとしていた。

「退治屋への積年の怨み晴らせたようだな。ワシが退治屋の砦に手練れがいないと教えてやったと言うのにそのワシを襲うと言うのか？」

妖怪達が奈落を囲み遅い始めた。

だか！

妖怪達は瞬時に奈落に吸い込まれ喰われてしまった。

「良い気になりおつて。」

奈落は退治屋の里の四魂の欠片を奪い何処かに去る。

## 翌朝

犬夜叉一体は、妖怪の群れの後を追ったが見失うと。

「あれは？」

「妖怪達が狙ってたのは。」

「此処だ！」

「おい！待てよ犬夜叉！」

犬夜叉の向かう先には煙が上がる退治屋の里だった。

「！」

里の中を見ると沢山の人間と妖怪の骸だらけだった。

「こゝ、これは!?!」

「妖怪と戦ったのか？」

「間違いない。この砦は俺達が探していた妖怪退治屋の里だ。」

犬夜叉が言うとかごめが辺りを見回した。

「どうしたかごめ？」

「四魂の欠片の気配ないね。」

「奪われた後という事ですね。」

「直ぐ追えば追いつくかもしれない。」

「おいおい七宝その前にやることあるだろ？」

「そうだけ。まずは村人の墓を作つてやらねえとな。これは惨すぎる。」

「そうですね。」

辺りにも酷い有様で犬夜叉も墓を作る方が良いと思う。

「！何かいる!？」

かごめは、犬夜叉に隠れる。

「！！」

犬夜叉は、鉄碎牙を構えダイチも魔戒斧を待つ。

小屋から虎よりも大きい二本の尻尾を持つ猫の妖怪が現れる。

「グルルルル……！」

猫の妖怪は、ダイチを見た瞬間に威嚇の声を出さずにまるで驚いたかの様にジツと見つめていた。

「え？何お前？」

ダイチの目が意味わからない様に丸くなる。

「ん？」

ジュー……

ダイチは、この妖怪に何か知っている変な気配がしてるので自分には触るぐらいなら何もしないとわかり頭の毛中の物を掴んだ。

「お、おい雲母よーひ、久しぶだなダイチ。」

冥加（ノミジジイ）だった。

そして

プチッ！

定番の手で潰され真っ平らになった。

ドシューーン！

猫の妖怪は、ダイチを倒し顔を舐めまくる。

猫の妖怪の周りから火の様な煙が出ると今度はシャム猫の様な猫に変わりましたダイチを舐め回す。

「なー！」

「あ、可愛い。」

かごめが可愛いと見惚れるがそれでも猫の妖怪雲母はダイチを舐めまくる。

「お懐かしゆうございます犬夜叉様！」

冥加は、犬夜叉の鼻から血を吸うが直ぐにダイチ同様に潰され真つ平らにまたまたなる。

「冥加じじい。」

「何でこんな所に？」

犬夜叉とかごめは、真つ平らの冥加を見る。

「お知り合いで？」

「犬夜叉の家来じゃ。」

初対面の弥勒に七宝が説明する。

「はっはっはっ！お、おい！やめろよくすぐったい！はっはっはっはっはっはっ！！」

しばらく雲母はダイチを舐めまわした。

そして一行は、死んだ里の人の供養をした。

「此処が退治屋の里なのかノミジジイ？」

作業が終わるとまた雲母に懐かれるダイチは、冥加に聞く。

「さよう、此処は妖怪退治屋の隠れ里。この里の者達は先祖代々妖怪退治を生業として



来た者達じゃ。」

「そりゃ妖怪供からさどや恨まれていただらうな。」

犬夜叉も話に入つて来た。

「しかし、よりによつて今襲つて来るとは……」

「どういう事だよ?」

「数名の手練れがさるお城に呼ばれ里の守りが手薄時じやった。何やら胸騒ぎがする城に向かった者達は無事であろうか。」

冥加は、心配であつた。

その城では

「良かった……せめてお前一人でも生きていて。」

若は心配そうに声をかけるが珊瑚は返事の一つも返したくなかつたらしい。

「これ退治屋! 若にご返事をせぬか!」

「爺、良い。珊瑚と申したなすまなかつた．．．お前の親父殿も弟も仲間達も。」

若は珊瑚に謝罪をした。

（何故だ？どうしてこんな事に．．．）

珊瑚は、悔やんでいた。

???

「若。」

若はその声が庭にあると感じて見ると。

「奈落。」

「はっ、仰せの通り急ぎ里の退治屋に馳せ参じましたが里は攻め滅ぼされておりました。」

珊瑚は、奈落の言葉を聞き耳疑う。

里ではダイチとかごめがお墓に花を丁寧においていた。

「残念ですな。里の人に色々話を聞きたかったのですが．．．」

弥勒は手を合わせて呟く。

「冥加じじいてめえ少しは知ってんだろ？」

「え？」

犬夜叉は、勘強い。

「え？ 四魂の玉の事でございますか？」

「冥加爺ちゃん、もしかすると此処で玉の事を調べていたの？」

「うむ．．．以前から気になっておつてなそもそも四魂の玉とは何なのか．．．なにしろ玉に関わった者達は皆不幸な目にあつておるし。四魂の玉の噂を徹底的に調べこの村に辿り着きました。しかし一つ気になる事があるのですじや。道中白い狒々が見え隠れするのですじや。」

「白い狒々だど!？」

ダイチと犬夜叉は、驚く。

(奈落だ近くにゐる。)

全ては奈落が元凶だった。

城では

「詳しく話せ。そちが退治屋の里で見た事を。」

「夥しい里人の亡骸と里を襲う半妖犬夜叉。犬夜叉は、四魂の欠片を集めており完全な妖怪に望む者。」

「四魂の欠片？」

「妖怪退治屋の里なら手に入ると考え里を襲ったと思われます。」

その話を聞いていた珊瑚が力一杯立ち上がり若と奈落の所に来た。

「珊瑚。」

「あたしの武器を・・飛来骨を返せ！里を襲った奴を半妖の犬夜叉を殺しに行くー！」

珊瑚の目は殺気立っておりそれを見ていた奈落は己の事が運んだ事に笑っていた。

## 傀儡

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

森の中

「此処から先は馬では無理。」

奈落は、馬の手綱を気に縛ると死んでいるかの様な珊瑚に近づく。

「珊瑚・・・死んだか？」

奈落は行こうとする。

「巫山戯るな！死ぬものか！」

珊瑚は、目を開けて殺気を奈落に放つ。

「ふっ、ならば良いが果たしてその体で満足に戦えるのかな？」

「よ・・・妖怪退治はあたしの仕事だ。」

城の若が珊瑚を止めたが珊瑚は、聞く耳を持たなかつたので奈落に手伝う様に命じ必ずまた帰ってくる様に言った。

（戻りはしない。あたしはきつと長くはない。頼む私の身体持ち堪えてくれ。最後の仕

事が終わるまで！)

珊瑚は、死を覚悟していた。

退治屋の里

「四魂の玉が作られた洞窟だと？」

「はい、これから参ります村外れにある鍾乳洞なのですがこの里は工房の役割もありません。」

「工房？」

「退治した妖怪の骨や皮で武器や鎧を鎧を作っております。」

冥加が長々と説明しているとダイチの肩には七宝の他に。

「おい！だから舐めるなつくすぐつたい！」

「キューン！キューン！」

雲母は、未だにダイチから離れない。

「ダイチ？」

「七宝なんだよ?」

「雲母の奴お前の事をコウヤと呼んでるぞ?」

七宝のその言葉でダイチの動きが止まった。

「コウヤだと?」

ダイチは、何故祖父の名を雲母が知っているのか疑問になりながらも再び動き出す。

「此処です。不必要な残骸は此処で廃棄されます。」

冥加は、話をしていた鍾乳洞に辿り着く。

「この鍾乳洞中には妖怪の残骸だらけなのですがどうやらその奥には元々大量の妖怪の死骸があります。」

「そこで四魂の玉が?」

先頭を歩いてきた犬夜叉とかごめが鍾乳洞を見る。

「はい、そういう話がこの地に伝わっております。」

「よく調べたな冥加じい。」

「ありがたきお褒めの言葉! 犬夜叉様のお力になればと苦労したかいはありました。」

「そっか、俺の側にいると危ねえ目にあうからてつきり逃げたんだと思つてたんだぜ。」

「犬夜叉様! それはないでしょう!」

「悪かった悪かった。」

「では入って見ますか？」

「そうだな。行くぞ。」

「おう！」

ダイチと犬夜叉が先に鍾乳洞へと入ろうとした。

「あ、犬夜叉様！ダイチ！お待ちください。」

冥加が犬夜叉達を止める。

「何だ？」

「どーしたんだよ？」

ダイチは、先に鍾乳洞の奥に進むが

ビリッ！

「うわー！」

犬夜叉は、何かの壁があるのか先には進めない。

「何やってんだよ犬夜叉？パントマイムごっこか？」

先に進んだダイチは、犬夜叉だけでなくかごめ達の様子が変な事に気付き止まる。

「なわけねーだろが！」

「この洞窟には強力な結界の様な物が張られておりまして容易に入る事は出来ません。」



「そういう事は先に言え先に！何でお前だけ行けんだよ!？」

犬夜叉は、鉄碎牙を抜いて結界を斬ろうとするが直ぐに跳ね返されてしまう。

「犬夜叉!」

「くそっ!」

「お手上げじゃな。」

「洞窟には入れず詳しい話を聞くにもこの里の人間は死んでしまってる。」

「皆ではないでしょう?」

「何?」

「確か退治屋の手練れ達がどこかの城に行ったと?」

「まだ生きてる可能性もあるかもな。」

何故かダイチは、洞窟から出て来た。

「それよりダイチおめえだけ行けるんだ。行って来い。」

犬夜叉は、ダイチだけ行けるので言うが。

「え〜〜や〜〜だ〜〜ツ!!俺だけ行けてもなんかさ差別じゃん。みんなで行けば怖いなし。」

ダイチの場合怖いという言うよりもみんなで行かなきゃ意味ないとそんな感じがした。

「けっ！じゃあ、その城に行つて生き残りの退治屋に四魂の玉の秘密を聞き出すなりこの洞窟の結界を解かせりや話は簡単だな。」

諦めたのか犬夜叉は、次のことを言う。

「さてそうと決まったら出発するぜ。」

犬夜叉達は、城に向かおうとした。

かごめがいやダイチも洞窟の中を覗いていた。

「何やつてんだかごめ、ダイチ！」

「おう！」

「あ、待つてよ！」

犬夜叉達は、城に向かう為森を歩く。

「で、冥加じじい城に向うにはこの方角なのか？」

「あれ？犬夜叉様？城の場所を知らずに歩いておったのですか？」

「う！お、お前が何も言わないからこつちで良いのかと思つたんだよ！」

「犬夜叉、その城はさほど離れていない筈お前の鼻は城を嗅ぎつけられませんか？」

弥勒は、犬夜叉に案を出した。

「ああ、それがこの辺りには全く気配がねえ。」

すると雲母の耳が動くとダイチも動き始める。

「伏せろ！」

ダイチは、魔戒斧を構えて叫ぶと犬夜叉達は伏せて前方から何か投げられる。キーンツツ!!

ダイチは、魔戒斧を野球のフルスウィングしながら投げ返した。

「貴様が犬夜叉だな。」

珊瑚がダイチに聞く。

「いや、俺はダイチ。犬夜叉は、こつち。」

ダイチは、珊瑚に犬夜叉を指差す。

珊瑚は、ダイチの指差す方を見ると睨む。

「退治する！」

戦う気満々だ。

「な、何もんだ？」

「珊瑚！」

「ノミジジイ知り合いか？」

ダイチは、冥加に聞く。

「犬夜叉様退治屋の里者です。珊瑚と争ってはなりません！」

「飛来骨！」

珊瑚は、飛来骨を先程の様に投げ飛ばした。

「んな事言ってる場合か！」

犬夜叉は、鉄碎牙を抜くと飛来骨を受け止めるがかなり後ろに下がった。

「鉄碎牙が押されている!？」

「犬夜叉・・・」

ダイチと犬夜叉以外は避難していた。

「てめえ何故俺を襲う？」

犬夜叉は、狙われるのが理解できなかつたので聞いた。

「黙れ半妖！里のみんなの仇！」

戻って来た飛来骨を再び投げ飛ばす。

「おい！お前何言ってるんだ！」

「どう言う事だ冥加じじい！」

飛来骨を避けながら冥加に聞く。

「わ、ワシにもさっぱり！」

冥加にもわからない。

「犬夜叉様戻って来ます！」

犬夜叉達も下手に攻撃は出来ず避けるしかなかった。

「あの武器なんとかしないと!」

「ですな風穴!」

弥勒は、右手の風穴の封印を解き飛来骨の軌道を変えた。

「捕らえた!」

すると空から最猛勝達がやって来た。

「あれは奈落の毒虫!」

「いかん弥勒!吸ったら毒にやられるぞ!」

「な、何故ここに!」

弥勒は、風穴を閉じた。

「ま、まさか!」

珊瑚の後ろを見ると奈落がいた。

「ふふふ、犬夜叉。大人しく退治屋に成敗させるが良い。」

「膿栓野郎!」

「てめえここにであつたら百年目だ!」

ダイチと犬夜叉は、奈落に向かって走る。

ダイチは、飛来骨が邪魔で行けず犬夜叉も通り越したが足元を珊瑚の持つ鎖で奈落に攻撃は出来なかった。

「お前達の相手は私だ。」

珊瑚は、犬夜叉達を完全に敵だと思い邪魔する。

「てめえ！邪魔しやがるとぶつ殺すぞ！」

「やってみろ！里の者達にもそう言つて殺したんだろうが！私にはそうはいかない！」

「待て。俺達は里なんか襲つてない！誰も殺してない！妖怪達が里をおそつたんだよ！」

ダイチは、珊瑚に説得させようと話す。

「黙れ！」

珊瑚は飛来骨で攻撃をする。

「！」

珊瑚が飛び上がった時にかごめは背中から四魂の欠片の気配を感じた。

「くー！」

犬夜叉は、飛来骨を弾くと帰つて来る前に珊瑚に向かう。

「毒粉！」

珊瑚は、装備から何かを投げると辺りが毒の煙に覆われる。

「お前の様な耳をしている奴は大体は臭いに弱いんだ。」

妖怪を熟知している退治屋だからその知識。

「流石は妖怪退治専門の退治屋。これはこれは法師殿。」

犬夜叉達が珊瑚に目をやっている隙に弥勒が奈落の所まで来た。

「奈落！成敗する！」

「そうはいかん。ワシは四魂の欠片を全て集めねばならんのだ。」

「何を企んでいるのか知らんが此処までだ！」

奈落は刀を抜き弥勒も錫杖で交戦し始める。

ズバツ！

奈落の刀を持つ手が錫杖で斬られると倒れ込む。

「これまでだな。」

倒れた奈落に弥勒がとどめをさそうとする。

斬られた腕がかごめの元に来て首にかけていた四魂の欠片を奪い再び奈落にくつつく。

「これは貴様等なんぞが持つ物ではない。四魂の欠片さえ手に入れられれば長居は無用。」

「奈落てめえ！」

犬夜叉も奈落にやって来た。

「さらばだ。法師それに犬夜叉。」

「おのれ！逃すか！」

犬夜叉と弥勒はかかるが奈落の身体から瘴気が放たれ近づけない。

「珊瑚さらばだ必ずや犬夜叉を倒し戻ってこい。」

瘴気の竜巻となった奈落は珊瑚に言い残すとこの場を後にした。

（奈落・・・本当に信用して良いのか？）

「ん？」

ダイチと珊瑚の間に雲母がやって来た。

「雲母。お前生きていたの？」

ダイチは、魔戒斧をしまうと何もしないでただ珊瑚と雲母を見る。

「雲母、あいつの後を追え。もし妙な事をしたら殺せ。」

珊瑚が命じると雲母は、顔色を変えて大きな猫の妖怪に変わる。

「もう止めろ。これ以上戦ったら死ぬぞ！手見てみる？」

「え？あ！痛みを感じなかったの・・・」

珊瑚の気付かぬ間に珊瑚の手が血塗れになっていた。

「ダイチさん！」

かごめと七宝が来ると珊瑚は微かだが力がなくなっていく。

「俺も混ぜてくれよ。なに雲母だっけ？俺も膿栓野郎には色々あるしな！」



ダイチは、魔戒斧で召喚陣を描き戯牙に変身した。

「あ！あれは！」

ダイチが変身した戯牙を見て珊瑚は驚く。

そうかつて退治屋の里に伝わる伝説の侍『戯牙』の事を。

「琥珀……」

戯牙を見た途端に気が緩まったのか珊瑚は、最愛の弟の名を呼び気を失う。

『かごめコイツを頼む。悪いいな雲母に乗させてもらおうぞ。』

戯牙は、雲母に跨ると雲母も走り空に飛び奈落を追う。

「かごめ！」

「犬夜叉！」

かごめが珊瑚を介抱していると犬夜叉がやって来た。

「待て奈落！」

弥勒は追いかけ続けるが道が無くなっており追えずにいた。

『坊さん！』

雲母に乗った戯牙がやって来ると弥勒を戯牙の後ろに乗せた。

「ありがたい！」

そして再び奈落を追う。

「奈落！」

直ぐに奈落に追い付くと弥勒は錫杖で殴り飛ばすと身体から蔓の様な物が出て襲い掛かる。

『くっ！』

戲牙は、獸身斧で斬り裂き飛ぶが雲母が奈落に掴まれそれに続き弥勒も一緒に落ちる。

ズバツ！

蔓も斬れるが直ぐに再生する。

『面倒だな！』

「甘く見るなよ。」

戲牙が獸身斧を待ち構えると弥勒と雲母も後ろに来た。

「こいつ一体？」

奈落のその姿に弥勒は驚きを隠せない。

犬夜叉達の方は

(背中・・・暖かい・・・誰?・・・はっ!)

微かに意識が戻ると見覚えある赤い着物を見て我に返った。

そう走ってる犬夜叉に背負われながら珊瑚は、起きた。

「おまえ!」

「気が付いたか?」

「おろせ!あたしをどうする気だ!」

「何!」

犬夜叉は、珊瑚の態度に怒りそうになる。

「奈落を追ってるのよ。四魂の欠片取られちゃったから。」

犬夜叉の髪の下から珊瑚同様に背負われているかごめが説明する。

「おう、珊瑚とか言ったな?てめえこれ以上ウダウダ言つてると捨ててくぞ!」

「何!」

珊瑚は、怒りそうになる。

「もう！犬夜叉！あんたそう言う言い方するから誤解されるのよ！ごめんね、口と目つきは悪いけど本当は優しい所もあるのよ。」

「お前な・・・」

犬夜叉は、色々言われ言い返せなかった。

「珊瑚、犬夜叉様達は手傷を負ったお前をほっとけなかたんじや。」

「冥加爺。」

「へっ！飛ばすぜ！」

犬夜叉は、戯牙が行った方向へ向かった。

『坊さん！こいつはどうなってるんだ!?!』

「はい、奈落のこの身体は・・・まやかかし？」

戯牙達と奈落の睨み合いが続いていた。

「まやかしかどうか自分達の身体で味あうが良い！」

奈落の蔓が戯牙達を襲い始める。

『てえい！』

「はっ！」

戯牙達は次々と蔓を壊すが直ぐに再生する。

「くそ！斬つても元に戻る！」

シュッ！

『坊さん！』

奈落の蔓が弥勒の身体を貫こうとしていた。

「てあああああっ！」

そこへ犬夜叉が鉄砕牙を抜いて蔓を切り落とした。

「弥勒！てめえ何やってんだ！だらしねえぞ！」

「はっ！犬夜叉後ろ！」

弥勒は、貫きそうになっていた蔓を払うと犬夜叉に注意する。

『おりゃ！』

戯牙が獣身斧や拳を使い犬夜叉へ来た蔓を破壊した。

「犬夜叉生きていたのか？」

「けっ！俺が人間ごときにやられるかってんだ！」

「手負いの退治屋に苦戦してる様に見えたが？」

奈落は挑発をして来た。

「うるせえ！奈落てめえなんだな！妖怪の群れを里に差し向けて全滅させたのは！」

近くにいる珊瑚はかごめと一緒に犬夜叉と奈落の会話を聞く。

「ワシはただ里の守りが手薄だと妖怪供に伝えただけ。」

言い方を変えれば奈落が全て仕組んだ犯人と言うことになる。

「！」

珊瑚は真の敵は奈落であると悟った。

「里にある四魂の欠片が狙いだったのか!？」

「ほう、察しが良いな。全く四魂の欠片の周りには争い事が尽きぬ。」

奈落は不敵に笑う。

「それだけの為に！たったそれだけの為に!!」

『巫山戯た膿栓野郎だ!』

犬夜叉と戯牙も怒る。

「奈落！」

「珊瑚か？」

奈落は今更生きていたのかと言う表情で見てた。

「城の妖怪は。あの化け蜘蛛は貴様の罨だったのか!？」

「罨?あの程度の戯言を罨と申すのか?この里の退治屋は今までどんな妖怪を退治して来たのやら。」

その言葉聞いて珊瑚は、飛来骨を持つ。

「貴様!」

飛来骨を投げようとする。

が!

「あ!」

珊瑚の身体に埋め込まれていた四魂の欠片が直ぐに抜けると今までと違い飛来骨を投げる力が一瞬で無くなり倒れた。

「珊瑚さん!」

かごめは、珊瑚の側に行く。

「愚か者め。刃向かう者にこれを貸し続ける事はなからうが。」

奈落は、蔓で珊瑚から出た四魂の欠片を直ぐに手にした。

「珊瑚さん!」

かごめは、珊瑚を介抱する。

珊瑚も動きたかつたが四魂の欠片が無くなると全身から痛みがやって来てまともに動けなくなっていた。

「ふっ、犬夜叉を仇と信じ討ち果たせて死んでいれば良かったものを。」

『あんまし調子をこくなよ!』

「奈落!てめえは、何時もそうやって人の心を!」

後ろに戯牙と正面に犬夜叉が同時に攻撃するが真上に飛び器用に避ける。

「桔梗とあの童の事を思い出したか?」

「黙れ!この外道が!」

『死ねええ!』

ズバツ!

鉄碎牙と獣身斧が同時に奈落の首を斬った。

ドシューーンツ!!

首を落とされると奈落の残った胴体は倒れた。

「巫山戯たやがって!」

『同感だ!』

犬夜叉と戯牙の所に弥勒がやって来た。

「呆気ない。これが本当に俺が求めていた奈落なのか?」



弥勒は簡単過ぎるので逆に不気味で仕方ない。

「この程度の男が桔梗と兵一を死なせただけじゃなく他の奴らも苦しめて来たのか？」

『ああ、おかしい……！犬夜叉、気を付けろ！』

戯牙がそう言うのと胴体が再び動き出した。

「くっ！」

『ちっ！』

犬夜叉達はその攻撃を避ける続けていた。

「ワシは死なぬ。」

斬られた首が起き上がり喋り出す。

「首を斬られて生きてるどう言う事だ？」

弥勒は驚いたが奈落は攻撃を始める。

犬夜叉達は、攻撃を止めずに続けるが何度やっても蔓は再生する。

「元に戻る!?!（四魂の欠片の妖力を使ってるんだわ。）」

かごめは、理解していた奈落は欠片の力を借りている事に。

「（何故私は気づかなかったんだ？あんな妖怪の妖気を感じなかった？いやそれどころか今でも……はっ！今のアイツは妖気を発していない。だとすると!?!）犬夜叉！それは傀儡だ！」

珊瑚は、退治屋の経験からか犬夜叉に今の奈落の正体を明かす。

「傀儡?!」

「傀儡の術は大体内の奥に本体を隠している!胸を!ソイツの胸を狙え!」

「ふっ、気付きおったか。」

そう今の奈落は本体でなく操り人形である。

『そうか!』

戯牙は、獣身斧を奈落に目掛けて投げ放ち縦一文字に胴体を斬り裂く。

「そこか!」

傀儡の本体が見えると犬夜叉は、直ぐに斬った。

傀儡の奈落は、直ぐに灰と化して消えた。

「これが傀儡って奴か坊さん?」

戯牙の鎧を解くいたダイチが落ちていた四魂の欠片を回収すると斬られた傀儡を持つ弥勒に聞く。

「はい、これが傀儡の術です。この人形に巻き付けた髪がおそらく奈落の物。」

「じゃあ、今まで俺らが戦っていたのは!」

「奈落の作り物です。大方本物の奈落は安全な場所でこいつを操っていたのでしよう。」

その頃あの城では

ピキッ!

若の部屋では先ほど犬夜叉達が戦っていた奈落の傀儡があり壊れた。

「若。退治屋の娘も奈落も戻って参りません。返討ち合いにでもなさったのでしょうか？」

「ありうるな。城の警護を怠るな。」

「はっ!」

若はそう言うのと部屋を後にして行く。

(この城とこの姿は仮の姿これから存分に使用して貰うぞ蔭刀殿。)

通路から出てくる影姿が直ぐに狒々の皮を被った奈落に人見蔭刀はなったそう……人見蔭刀は奈落に殺され奈落が人見蔭刀になっていたのだった。

## 祖父

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇氣で人類は希望の光を得たのだ。

傀儡の奈落との戦いから5日後の退治屋の里

「かごめ、暇になったから手伝う事あるか？」

「ありがとうじゃあ洗い終わった服を干してくれるダイチさん。」

「おう。」

ダイチは、せっせと洗濯を全て干し終わると小屋に七宝がいた。

「どうしたんだよ七宝？」

「ダイチ見てみる色んな武器があるぞ。」

「これみんな妖怪な素材で作ったのか？」

ダイチも不思議そうに武器を持って眺める。

「これらの武器でこの村の衆は妖怪を退治しとった。」

「あ、ノミジジイ。」

七宝から出て来た冥加は、武器を眺めながら説明する。

「人間も勇ましいおるのお。」

「まるで魔戒騎士みたいな事をして来たんだな。」

「それでこの村は妖怪にも怨まれて来たわけじゃ。」

「おいおい、奈落がそれを利用したってのか?」

「さよう。妖怪を嚇けおった。」

その話を聞くとダイチは、小屋を後にしてある所に向かう。

「.....」

ダイチが辿り着くと珊瑚が里の人達の墓で手を合わせていた。

「おい、もう大丈夫なのか?」

ダイチの言葉で珊瑚は振り向いた。

「珊瑚ちゃん!」

かごめもやって来た。

「もう起き上がって大丈夫?」

かごめも珊瑚が心配だった。

仕方ない珊瑚は、肉親だけでなく里の人達まで亡くなったのだ心の傷が癒える筈もない。  
い。

「お墓をみんなのお墓を作ってくれたんだ。」

「ああ、俺らにはそれしか出来ないからな。」

ダイチとかごめは、それ以上言葉が出なかつた。

「身体に治つたらあたし達と一緒に行かない？」

かごめは、勇気を出してその言葉を言った。

「坊さんも犬夜叉も根は良いやつらだからよ。」

ダイチも続いて誘う。

「あんた四魂の欠片を持つてたよね？」

珊瑚は、かごめを見る。

「え？妖怪が邪悪な力を増す四魂の欠片。まだまだ元の形に戻るのかわからないけ

ど……」

かごめは、首にかけている四魂の欠片を出す。

「奈落は、それを狙ってくるね。良いよ一緒に行っても。」

「親父さん達の仇を討つ気か？」

「まあねそれに四魂の玉は……」

「この里で生まれた。」

珊瑚が言う前にかごめが言う。

「俺らよその事を知りたくてこの村に来たんだ。それに……キーン！」

雲母が珊瑚からダイチの方にやって来て甘え出す。

「お仲間呼んでおいでよ。」

「え？」

「みんなの葬いしてもらったしき。教えてあげるよ四魂の玉が生まれたワケを。」

そうこれが犬夜叉やかごめ、弥勒だけでなくダイチも他人事で無くなる話へなるのだから。

「いよいよ四魂の玉が生まれたこの鍾乳洞に入る事が出来るわけですね。」

「おい、珊瑚。」

犬夜叉に負ぶさっている珊瑚に犬夜叉が聞く。

「で、ここの結界はどうやって外すんだ？」

「さよう、この里に伝わる呪文を唱えれば「そんな呪文なんてないよ。」え？」

冥加は、知ったかの様に言う。珊瑚は否定する。

「そりやそうだろ？現に俺は何の呪文無しで簡単に入れるんだからな。」

ダイチは、結界を簡単に入れる。

「じゃあどうやって？」

冥加は、知りたくて仕方ない。

「冥加……ふう……」

「ひえく……」

犬夜叉が息を吹くと冥加は何処かに行つてしまう。

「此処はお墓なんだよ。」

「墓？」

「見よう見ようと思つてしていると駄目なのさ。最初は妖怪の怨念か何かが此処へ近づかせない様になっているとみんな考えたんだけどどうやらあの人が寄せ付けさせないんだ。」

「あの人？」

弥勒は、珊瑚のあの人の言葉に気になる。

「四魂の玉を生み出した人さ。その人の無念な気持ちや悲しさなんか誰も近づかせない。あたしはそう感じてる。」

「でもよ。何で俺だけ入れたんだ？」

「さあね。それはその人に聞いて見なよ。中に入った方が話が早いよ。良いよ入つて。」

「大丈夫なんだろうな？」

「今まで四魂の玉に関わつた多くの人々が巻き添いになつてきた。その事を哀れんでくれるあんた達ならあの人も受け入れてくれると思うよ。」

ダイチに続いて犬夜叉は、今度は難なく結界に入れた。



「本当じゃ、入れたわい。」

七宝も驚いたが鍾乳洞の奥へ進むが一人だけ……

「がみよーんー！！！！」

冥加だけ入れなかった。

そして犬夜叉達は奥に進むと少しずつ妖怪の自体が多くなって来た。

「！！！！」

犬夜叉達は奥に辿り着くと其処には……

妖怪の死骸とそして女性らしき骸もあるそれかなり保存の良い状態で保たれていた。  
た。

「鬼や龍や土蜘蛛など無数の妖怪が一つになって戦った後だよ。たった二人の人間を倒す為に……」

「鍾乳石の中にミイラみたいのがある。」

よく見るとミイラと言うよりも遺体はまるで眠っている様な死顔だった。

「妖怪が食らいついている古い鎧・昔の武将ですか？」

「いや、坊さん女だよ。」

「そう、女の人だよ。何百年も昔巫女だって。」

「巫女？」

珊瑚からそのミイラの正体を教えられる。

「しかしこの巫女に取り憑いている妖怪の数は半端じゃありません。かなりの霊力を持つていた巫女様の様ですな。」

「昔、まだ貴族が世の中を治めていた頃戦や飢饉が長く続いて人が沢山死んだ。その死体や弱りきった人間を食いながら妖怪の数が一気に増えていった。色んなお坊様や武将が妖怪退治をしていたらしいよ。中でもこの緑子と言う巫女は妖怪の魂を取り出して浄める術を使い十匹の妖怪を一度に滅する程の霊力を持っていた。最も活躍したらしいんだ。そして一度に千匹の妖怪の攻撃を防ぐ力を持つ伝説の戯牙の侍と供に。」

ガッ！

「おい！戯牙って！言ったなど言う事だよ！おい！」

ダイチは、その言葉を聞いた瞬間に珊瑚に迫って来た。

「ダイチさん！落ち着いて！」

「ダイチ落ち着かんか！」

かごめと七宝に宥められて落ち着くダイチ。

「珊瑚ちゃん。魂を取り出して浄める術？」

「うん。何でもこの世の物は人間も動物も木も石も四つの魂で出来てるんだって。」

「四つの魂？四魂？」

「坊さん悪いけど説明してくれね?」

「はゝ。」

四魂とは荒魂・和魂・幸魂・奇魂の四つの魂があり、それらが一つとなり肉体に宿ったのが心であると荒魂は勇で和魂が親、奇魂が智、幸魂が愛とこれら四魂が正しく働いた一連を直霊と言ひ正しく保たれる。

「犬夜叉わかったか?」

ダイチは、チンブンカンブンなので犬夜叉に聞く。

「そ、それがなんでい!」

ダイチ同様にならなかつてないらしいんだ。

「悪行を行えば四魂の働きは邪悪に転び直霊は曲霊となり人は道を誤る。」

珊瑚は意味有りげな言葉を言う。

「つまり人間の魂でも妖怪の魂でも魂と言うものは良くも悪くもなるって事です。」

弥勒が説明を加える。

「妖怪達にとつて翠子と戯牙の侍は強敵だったろうね。妖怪の魂ですら無力化してしまふんだから。それよりもダイチだったね。何で戯牙の侍の事を知ってるいんだ?」

そう今のダイチは、少し違っていた。

「俺がその戯牙の称号を持つてるからだよ……ん?」

ダイチは集合妖怪の骸を見てある事に気付く。

「あれは人間か？」

そう集合妖怪の骸の中に人間の男の姿があった。

「翠子を秘かに恋心を抱いていた男がいたんだって。男は戯牙の侍に嫉妬して妖怪達はその男の心の隙につけこんで取り憑いた。たくさんの妖怪が一つに固まるには邪心を持つた人間をつなぎに使うのが一番簡単なんだって。」

犬夜叉達はこの話をどこかで聞いた様な気がした。

そうまるで奈落の生まれた話に似ていたからだ。

「奈落と一緒に事か？」

「奈落が？」

珊瑚は奈落が生まれたのも同じで驚く。

「続きを話せよ珊瑚。この巫女は妖怪に勝ったのか？負けたのか？」

「戦いは七日七回続いたんだってその前から激しい妖怪達との戦いで戯牙の侍は傷が癒えずに戦ってとうとう戯牙の侍は倒れかけたその時翠子が庇ったんだって。そして妖怪達に身体を食われ魂を吸い取られそうになった。その時翠子は、最期の力で妖怪の魂を奪い取って自分の魂を取り込み身体の外に弾き出した。そして戯牙の侍以外翠子と妖怪も死に魂の欠片が残ってそれが四魂の玉。私の先祖達は、戯牙の侍の弟子だったか

ら様々な技を教えると戯牙の侍は羽根を使ってまた自分の国へ帰って行ったけど最期にこう言つてた「翠子は、死んでも玉の中で妖怪達の魂と戦っている。四魂の玉は持つ者次第で善にも悪にもなる誰も持つてはいけない玉だ。」つて。」

「!!まさか……」

ダイチは、そのミイラの顔に見覚えがある。

「………あ!!」

ダイチは、しばらく翠子の顔を見た瞬間に驚いた。

「どーどうしたの?」

かごめ達は驚きダイチに聞こうとするとダイチが魔法衣からある物を取り出した。

それは写真だった。

ジーツ!チラツ!ジーツ!チラツ!

写真と翠子の顔を二回見渡すと肩の力が抜けた様にあまりの驚きに口が開きつぱなしになる。

「み……翠子つてき……その……さ……」

驚きが益々膨らむ。

「どうしたのです?」

「何かあったの?」

「どうしたんじゃ?」

「なんだい?」

「良いからケチらないで言え!」

ダイチの意味有りげな顔に一同は聞く。

「……………俺の爺ちゃんの昔の女だ。」

その言葉を聞いて犬夜叉達は……………

「「ええええ!!!」」

ダイチの意外な言葉に犬夜叉達は驚いた。

「ほいコレ!」

ダイチは、写真を渡す。

「なんでいダイチが写ってるだけじゃねえか。」

「いやいやこれ俺の爺ちゃんの若い頃。」

写真を見て驚く戦国時代の人間達。

「ダイチさんって隔世遺伝?」

「ああ、そうらしい。」

あまりにも似ててかごめも驚く。

「たしか此処に……………あった。」

魔法衣からコウヤの日記帳を取り出した。

「……」

ダイチは、犬夜叉達と日記帳の中を見ると祖父が若い頃の話が書かれていたが壮絶な戦いの戦記が記されていた。

その中には平安時代に出て来る有名な妖怪達との戦いや翠子に対する密かな想いが書かれていた。

「ダイチさん？」

直ぐに大体を読み終わるとダイチは、近くの石に腰を降ろした。

「けっ！何にせよだ。奈落なんかが奪いに来やがるから話がわからなくなるんだ。四魂の玉の力は俺が大妖怪になる為にちゃんと使つてやるぜ。それで翠子も浮かばれるだろう？」

「ばーか、犬夜叉お前分かつちやいねーだろ？翠子の前でそんな事言つてると……」  
ダイチが溜息混じりで言うのと犬夜叉の身体が光り出す。

「うわああああっ!!な、何なんだよおおおっ!!」

そのまま犬夜叉は、洞穴から外へ翠子の力で強制送還された。

「ああ言う考えの者はこの洞穴の結界から弾き出されると言う事ですね？」

「翠子のおすわりじゃな。」

「そう言うことだ。馬鹿だな。」

それから犬夜叉達が洞穴を出てもダイチは、此処で翠子の骸を見ていた。

その間犬夜叉達は里に残り何故桔梗の所に四魂の玉が来たかの経緯が珊瑚の口から説明されていた。

夜になり月光が輝き始めてもダイチは、翠子の骸を見ていた。

「はあ~~~~ん?」

ダイチは、欠伸をしていると雲母とかごめがやって来た。

「ダイチさん。まだいたのね。」

かごめは、おにぎりをダイチにあげた。

「ありがとな。ああ、四魂の玉がまさか爺ちゃん代の獣身騎士からの因果なんて思ってもいなくてな。」

ダイチは、この四魂の玉が自分に関わりを持つ事に未だに動揺を隠せなかった。

「ダイチさん。お爺さんってどんな性格だったの?」

「あ?な、何だよいきなり?」

ダイチは、かごめがいきなり祖父の性格について聞いて来た。

「まあ、魔戒騎士の零やワタルなんかが言うには俺みたいな性格だったらしい。」



「ふうくくん……」

「あ、でも爺ちゃんのお親友の道寺の爺さんが言うには昔は他の魔戒騎士と同様の考えを持っていらしい。クロノデインの任務の前は。」

かごめは、それを聞いて思った。

（ダイチさんのお爺さんって翠子と出会ってそうだったのかな？）

翠子の影響は、ダイチの祖父すらも変える存在だったのかもしれない。

「と言うか出て来いよ！」

ダイチは、雲母の身体を触ると直ぐに何かを掴んだ。

「だ、ダイチいつから！」

ダイチが掴んでいたのは冥加だった。

「かごめ達が来てから気配をな……まあ、結果を通れたんだし大丈夫だろう。」

ダイチは、冥加を直ぐに離れた。

「翠子とやら……ワシとて人を哀れむ心は持ち合わせておる。しかし長く生きていると多くの死を見てると慣れっこになってくるのだ。許せ……昼間は探究心が勝ってしまつて。通してくれたと言うことはわかつてくれたと思つて良いのじゃろ？」

「多分な。」

ダイチは、また石に腰を降ろして翠子の骸を見始める。

「あー！」

「どうした？」

かごめは、何かに驚く。

「無い！四魂の欠片がないの！さっきまであったのに！」

「何だって！何処だ！」

ダイチは、四魂の欠片をかごめと探し始める。

「ん？ノミジジイ？」

ダイチは、冥加が何かを持って翠子の骸に近づく。

「おい！何で持ってんだよ！」

ダイチは、冥加がそう四魂の欠片を持つてるのに気付くと翠子の骸に目掛けて走る。

「なんなんだ！なんなんだ！」

冥加は、翠子の骸の首の辺に来ると拝み見渡す。

「ノミジジイ！返せよ！」

「すまん、四魂の欠片を持って近づいておれば何かかわかると思ったんじやが・・・」

「おいおい・・・」

冥加の発想には感心するが時と場合を考えて欲しいとダイチは、思う。

「しかし、膨大な妖怪の数じゃ。これだけの妖怪とたった二人の騎士と巫女が渡り合っ

たと言うのか……」

「本当にスゲーよ翠子に俺の爺ちゃんは。」

「お主の祖父は人間なのだろうダイチ？ 翠子は、数百年前の巫女だがお前の祖父は人間じゃろ？」

「ああ、爺ちゃんは、五十年くらい前だと思ふ戯牙になったのは。俺の推測だがこの世界と俺のいた世界との時間にはかなり誤差があると思うんだ。こつちが時間の流れが早く俺のいた世界が時間が遅いんだろ。」

ダイチは、その辺はそう言う事だと語る。

「成る程な……なら筋が通っているな……な、何じゃ!？」

グラララ!!

いきなり揺れ始める。

「じ、地震!？」

下にいたかごめも驚く。

「うわっ!？」

冥加は、迂闊にも四魂の欠片を妖怪達の骸に落としてしまう。

「何だよ!?! 嫌な予想すんだけど!？」

「ど、同感じゃ!？」

妖怪達の骸から赤い光の玉が出て来た。

「ま、まさか!？」

「し、しまった! 四魂の玉の力じゃ! 完全に奪いきれない魂が復活しようとしている!？」

ダイチは、冥加を掴むと直ぐに下に飛び降りて魔戒斧を持つ。

雲母も妖怪の姿に変身する。

「かごめ! 下がってろ!」

「うん!」

かごめは、今弓も持っていない状態なので安全な所に身を隠す。

「雲母、ダイチ! 犬夜叉様達を呼びに戻ろう!」

冥加は、既にかごめの近くにいた。

「冥加爺ちゃん……」

かごめは、呆れている。

「何言ってるんだ! このまま四魂の欠片を置いてけばそれが一番タチが悪いだろうが!」  
ダイチは、雲母に跨り四魂の欠片を取ろうとしてする。

シユルル!!

妖怪達の骸に龍の身体をした妖怪が霊体のまま動く。雲母とダイチを締め付けた。

「ぐあああ！」

霊体とは思えない肉体を持った様な感覚でダイチは、怯み魔戒斧も落としてしまう。

「ち、ちくしょう……」

「ギャウウウウウ……」

ダイチも雲母も目が霞んで来てこのまま龍の妖怪に殺されてしまう。

「ダイチさん!!!」

かごめは、叫んだが何もできない。

ピカアアアアツ!!!

四魂の欠片が光ると翠子の骸とそして落とした魔戒斧から光が出る。

「魔戒斧がダイチさんが持つてないのに召喚陣が……あ！あれって！」

「あれは……!?!」

かごめとダイチは、見ると翠子の骸から生きた翠子の姿が魂として現れそして戯牙もダイチが召喚していないのにダイチの目の前に存在していた。

「あの戯牙、ダイチさんが着た時の瞳と違う。青い瞳？」

「じ、爺ちゃん？」

「え!?!じゃ、じゃあアレってダイチさんのお爺さん!?!」

あり得ない事が起きていた。

『よく見てろよダイチ。俺達の戦いを。』

翠子が先に刀を抜き破魔の力を込めた一振りで妖怪に大きなダメージを与えるとコウヤは何故か獣身斧を地面に刺す。

『はあああああつ!!』

左手に靈力を込めているが霊弾獣波ではない感じた。

靈力の玉が徐々に膨らむと直ぐに縮まる凝縮しているがかなりの靈力の量を込め続けている。

『てあああつ!!』

右手で左手にある靈力の玉を伸ばすとそのまま投げる。

『獣爪無双ウウウツツツ!!』

投げた靈力の玉が不規則に動き妖怪に襲うが妖怪もそれに負けずと桁外れの体当たりをするが勢いは止めること無くそのまま妖怪の魂を壊した。

「.....」

ダイチは、その戦いの光景を黙って見ていると冥加もかごめも同様だった。

「じい・爺ちゃん!」

ダイチは、近付こうとするが鎧を着たコウヤは解いて振り向いた。

『ダイチ! 本当の意味での強さを探せよ。』

老人コウヤの魂は笑顔でダイチに言うとそのまま四魂の欠片を渡し翠子の魂と共に消えて行つた。

「何が起こつたんだ!」

洞窟の外から犬夜叉と弥勒が現れた。

「おつ!犬夜叉に坊さん!もう終わった。心配すんな。」

「そうか・・・さてとこんな事する奴は・・・」

犬夜叉は、探している事の原因とも言える奴を。

「居るぞ〜〜!」

ダイチは、冥加を掴んでいた。

「あ、これは!これは!犬夜叉様!まあ何事も無かつた何より。」

「へえ〜何事もだど?四魂の欠片をかごめから万引きしておいてか!!」

ダイチは、睨んで冥加に威圧をかける。

「こんな所へ四魂の欠片を勝手に持ち込みやがつて!」

「そ、それは雲母がですな・・・」「白状しろ!」

弥勒も混じつて冥加に尋問をし始める。

「ギアアアアアアツツ!!」

その後冥加がどうなったかは言うまでもない。

ダイチ達が帰った後雲母だけが翠子の骸に近付きそして丸くなり寝始める。

### 雲母の夢の中

草原で寝ている青年コウヤがいた。

「コウヤ。またここで寝ているのか？」

「……………」

目を静かに開けると翠子と雲母が自分の顔を覗き込んでいた。

「なあ翠子、もしもさ戦いが終わって俺の国へ一緒に行けるなら……………」

コウヤは、これ以上言えなかった。

「なあコウヤ何が言いたいんだ？」

真剣そうなコウヤに驚いた翠子は、不思議そうに聞くがこれ以上聞けないので何が話



題を変えようとしていると魔法衣に入っているポラロイドカメラがある事に気付いたのである事を思い出した。

「おい、ちよつといいか?」

コウヤは、翠子と雲母を連れて森の中に連れて行くとポラロイドカメラを大きな岩にセツトして撮れる範囲で調節する。

「雲母頼みがあるんだ。」

コウヤは、雲母にポラロイドカメラの操作を教えると雲母に操作を教えて翠子の隣に肩を並べそして。

カシャツ!

眩い光が出ると写真が出た。

「コウヤ?今の光は?」

困惑した翠子は、コウヤに聞く。

「心配ない。直ぐに目のチカチカは治る。どれどれ!おっ!上出来だ!」

コウヤは、翠子に写真を見せる。

「こ、コウヤ!魂かぬかれたのか!」

「大丈夫だ!写真って言って絵みたいなものなんだよ俺の世界ではな。」

「そ、そうか・・・」

「それじゃあもう一枚！」

コウヤは、雲母に指示して写真を二枚撮って貰った。

そうこれがこの時の写真コウヤと翠子の写真であった。

一枚は、今もダイチが所持している。

そして……

寝ている雲母が未だに夢を見ていると翠子の胸に穴が開いていない反対にその写真が収められていたがその事は犬夜叉達は誰も知らない彼女翠子だけの秘密でもあった。

## 番外編 日記

一枚のページを開く。

俺はこの日記を書く事は恐らくこの任務を終えた頃からだ。

俺は、元老院から過去と現在と未来の陰我から生まれたホラー・クロノデインの討伐に俺を指名した事から始まる。

俺は、新しい系譜になつた事で大手柄を立てて自分の名を上げようと頑張っていた。そしてその機会が出会つたんだ。

俺は元老院から次元鳥の羽を授かりクロノデインが出る情報の場所まで来た。

そこは普通の山奥だった。

突然吐き気が出る感覚が生じた。

俺は直ぐに次元鳥の羽を翳し時空の彼方に向かつた先に奴がクロノデインがいた。

俺は戯牙へと変わり交戦したが奴は俺の想像以上に強かつた必死の思いで距離をとつたが奴は己の力で大きな渦巻きを生じて俺を何処か次元の彼方に飛ばした。

気付くと見慣れない光景が広がっていた。

なんとそこは平安時代に飛ばされていた。

俺は過去に飛ばされたものだと思いたがそうじゃなかった。

ソウルメタルの突然変異で鎧の制限の時間が表示されないだけじゃない俺の身体も何か変な感覚が出来ていた。

見えないものが見え始めていた。

混乱してホラーに隙を見せてしまい絶対のピンチになる。

その時刀を持った女が現れ刀を振るうと数匹いたホラーが滅された。

俺は安心したのか気を失い眼を覚ますと女が介抱してくれていた。

女に俺は魔戒騎士の掟でもある魔戒騎士とホラーの存在をバラしてはいけない事を無視する覚悟であのホラー達は何だ？と尋ねるとほらーとは何だ？あれは妖怪だが？と聞き返された。

しばらくして俺は女から事情を話した。

女は不思議とこの世界の森羅万象にはほらーなぞ生まれない事や魔導力の事も見た事が無いと言う。

それから俺は女から……いや翠子から様々な事を学んだ。

俺が見えないものが見える事を言うと言うと翠子はそれが霊力だと言われ霊力を翠子の教えの元で鍛え始め基礎的な事を学ぶと翠子の霊力の見様見真似で戦いの技を覚えた。

翠子と俺はいつの間にか妖怪達を退治する毎日になり妖怪達を退治するのに妖怪ま

でも味方につけて妖怪達と戦った。

翠子と出会ってから一年も経ってアイツを思う度にこのまま戦いの毎日で良いのか  
と思ひ始めた。

翠子だって年相応の女性でもあったが今まで戦っていたのだからお洒落なんて無縁  
で恋だつてしてないそれから翠子の事を思う日が続いた。

ある日俺はさりげなく翠子にもしもさ戦いが終わって俺の国へ一緒に行けるな  
ら・・・何故か俺はある大事な事を言えなかつた。

翠子は、なあコウヤ何が言いたい？と聞き返されたが俺はいや忘れてくれ馬鹿が言っ  
た妄言だから。

この先も妖怪を退治している日記だったので日記をダイチ達が見ていない部分まで進  
める。

妖怪を倒していくうちに人が俺の元にやって来て「俺を弟子にしてください！」つと  
言い出す輩が出始めて困ったが翠子は良いじゃないかこれも何かの縁だなんて言い出  
すんだ困った。

更にページを進める。

正直今身体が悲鳴を上げている。

それもその筈酒呑童子の末裔と闘い今も治りきつていない。

ヤツは何とか封印したが弟子たちや緑子にこれ以上戦わせたくないそれが本音だ。

俺たちはその後アジトにしている所に行き療養していると今度はあの野郎がやって来た。

そう緑子にやたらと声をかけてくる男だった。

緑子は、普段から他の人に接している様に慈愛を持って接している。

緑子も普通の人なのだから警戒するな。つと宥められた。

しばらくして弟子達の身体も良くなり妖怪の情報を得る為アジトから出て行き緑子と一緒にになった。

こうして二人つきりつてのもなんだか久しぶりな感じがする。

その時だった！

地震が起こり治ったと思ったら無数の妖怪が集合したのが入り口から現れた。

俺は、戯牙に変身して闘い緑子も刀を持って戦っていると驚く。

その妖怪の一部にあの野郎の顔があったのだ。

妖怪達は、緑子を倒したい為に野郎の密かな想いにつけ込んで合体した。

それから何日か戦ったが妖怪は、未だに倒されず平然と戦っている。

緑子も俺も体力の限界が来てそして闘いで塞いでいた傷が開き鎧の内側から血が流れて膝を地面に付けるとその弾みで鎧が解除された。

その隙を狙い妖怪は、俺に襲いかかりもう駄目かと思いい死を覚悟し目を閉じた。

だが妖怪の攻撃は来なかった。

目を開けると悪夢が広がっていた。

緑子が俺の前に立って盾になっていたのだから。

緑子!!!!

俺は大きな声で叫んだ。

そして動かそうとしたが疲労もあるのか全く動けない。

動け！動け！俺の身体動け!!お前は魔戒騎士だろ！守りし者だろ！

懸命に動かしたが動かない。

緑子の口から小声であったが聞こえたその言葉。

生きて・・・

緑子は、最後の力を振り絞り絞り妖怪の魂と融合して妖怪と共に骸と化した。

俺の瞳から涙が溢れ叫んだ。

それからすぐに弟子達が走り戻って来た。

これは誰のせいでもない俺が未熟で無能だから弟子達が何度も謝っても何も戻っては来ない。

弟子達は、ある日洞窟に何か光っている事を俺に告げ一緒に見てみると緑子の心臓のあたりから球が吐き出された。

その球は、綺麗だが不気味な物だった。

俺は触るとわかった。これは魂その物の理を持つものだと言われ、緑子が以前教えてくれた四魂の理に似ているとそしてこの球を四魂の玉と名付けた。

弟子達にその四魂の玉の危険性を教えると次元鳥の羽が光り出した。

どうやらこの世界と別れる時が来たらしい。

弟子達にこの後どうすると聞くと教えられた事を活かして退治屋になると言ってきた。それもいいかもしれないと笑顔で答え俺は去った。

その帰り道クロノデインを探したが奴は何処にもいない何故だろうか俺は幻でも見ているのか？

すぐに元の世界に戻ると直ぐに元老院にクロノデインの件を報告した。

元老院の神官達は、俺を直ぐにガジヤリに合わせると言う。

どう言う事だ？と思つたが俺はガジヤリと会うことになる流石に正直に言うとな奴は不気味だ。



何を見たんだ？

ガジヤリの間に行くとその不気味な姿でガジヤリは俺に質問をしてきた。クロノデインのいる空間に今までいた。

下手に全てを話せば何か危ないと思ひ緑子の世界の事は言わずにしているとガジヤリはガシツ！

魔導力を使い俺の心臓を掴んだ。

俺は今までに何苦しみを感じた。

言え！何があつた！

ガジヤリの口調は、焦りがあつたようで心臓を少しずつ強く潰そうとしていたそう俺はもう終わったのか……

ごめんよ緑子……俺こんなとこでくたばっちゃう。

【死ぬなコウヤー！】

緑子の声が聞こえると魔法衣にしまつていた緑子との写真が光り出すとそこに彼女が……緑子が俺の前に立っていた。

緑子？

俺はそう眩くと緑子は、微笑み後ろを振り向きガジヤリの前で刀を抜いて構えた。

……もう良いこれ以上は何も無かつたらしいな。

ガジャリは、緑子を見て……まるで天敵を見て恐れたのか俺への心臓を掴むのをやめた。

緑子！

俺は呼ぶが緑子は直ぐに消える時にその言葉だけを残した。

コウヤ、生きてくれ。

彼女は、そう言うた消えた。

その後俺は何故か元老院の所属になっていた。

それから多くの神官や魔戒騎士の目の敵になる行動ばかり取るようになった。

友人の道寺も驚いていた。

あまりの人の変わり様に嫌う者も出来てしまい苦労した。

魔戒法師や修練場の子供の面倒を見てたのか教え子や魔戒法師からは慕われる事が多くなる。

阿門法師が魔導輪を作るかって訪ねてきた。

でも俺のパートナーは、生涯緑子だけで魔導輪なんかいらなかった。

だからホラーだけわかる道具を注文してそれでやっている。

魔戒法師の女で俺を見ている奴が出来たので一応話してみると面白い奴なので来いって言ったらいつの間にか嫁になっていた。

まあ人生色々あるし緑子も生きろって言ったんだその通りにして見るか俺がこれから起こる未来の為に。

ここで日記は終わっていた。

そして時は流れ孫のダイチが18の時。

「ダイチ、お前にこの汚ねえ魔法衣と魔戒斧をやる。お前は今日から勝手に戯牙と名乗りやがれ。」

「爺ちゃん……」

ダイチは、高校卒業して直ぐにコウヤからそう言われ戯牙の称号を手に入れた。

書齋で死期を悟ったかの様に色々まとめていた。

「さてと……緑子。これからは俺の孫が時代を切り開くから心配するな。」

コウヤは、次元鳥の羽と写真を聖獣の記した図鑑に挟み寝室に戻って行った。

夢でコウヤは、あるシーンを見ていた。

人間は死ぬと今の記憶を遡りながら死ぬと言うがコウヤに至っては違うそれはダイチと他に5人と一匹の一行の中にダイチがいたからである。

そうか……ダイチは、俺の時と一緒に緑子の世界に行くのか……しかもこんな

に良い奴らと出会ったのか・・・ダイチよお前幸せだぞ・・・  
そして老人は孫の未来を見て幸せなのか夢の中で緑子に迎えられて戯牙の鎧の中に魂が宿った。

## 水神

古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

「お城みたいなきい物でも探して見るとないもんね。」

洞窟の件から里を離れた犬夜叉一行は、珊瑚がいた城を探していたが手掛かりがなくていった。

「でえ、身体は治ったんだろ？お前の目的も奈落を倒す事。しばらくは俺たちに付き合いな。ん？なんかの文句ある顔だな!？」

幼稚な犬夜叉は、珊瑚に睨む。

「おいおい。犬夜叉、ややこしい事になるからやめろ。まあ、奈落に対しては俺たちの方が詳しい。それに珊瑚にとつても損は無いと思う。」

ダイチは、犬夜叉にフォローして珊瑚に説明した。

それでも珊瑚は、犬夜叉を睨むと弥勒が珊瑚の前に入る。

「ですな。ここは焦らず四魂の玉をまず集めましょう。集めてさえいればいずれ奈落の方から欠片を狙ってきます。直ぐにも仇を討ちたいだろうが此処は聞き分けなさい。」

(なんか坊さん紳士っぽいけど何か裏ありだな?)

察しの良いダイチは、そのまま弥勒を観察する。

「ああ、わかったよ。」

珊瑚も納得していた。

「分かりますよお前の気持ち。」

「ありがとう……でも法師様。何で話しながら撫でまわす?」

ギユウウツ!

珊瑚は、弥勒が腿に対してセクハラをしていたので手をつねった。

「どうとう本来の坊さんが覚醒したな。」

「珊瑚ちゃんの怪我が治るまで我慢してたのね。」

「弥勒いい加減にしゃがれ!」

すると風船の様な妖怪の姿をした七宝が戻ってきた。

「何か見つけたの七宝ちゃん?」

「どうかしたか?」

かごめとダイチは、七宝に行く。

「この先にてつかい湖があるんじゃないかとど偉い社が建つとった。」

「ど偉い社?」

「奈落の城か!？」

一行は七宝の言う社に向かう事にした。

向かう途中水害の後を治す村人達が作業をしている。

ゴーン!

一行は、その鐘の音を聞くと村人達が神輿の様な物を担いで何処かに向かっている。

「生贄の子供じゃ。今度の洪水は酷かったから酷かったからの。」

「今度はどこの子だ?」

村人達がそんな話をしていると。

「子供を生贄に!？」

「穏やかじゃありませんね。」

「こりや裏がありありだな。」

ダイチが言うのと犬夜叉と一緒に神輿の方に走って行く。

「名主様、おいたわしや。」

近く者が名主にそう呟く。

「何を言う村を守る為に我が子を水神様に差し出すのは当然じゃ。「何が当然だ?」!？」

名主は、見上げると犬夜叉とダイチが神輿に乗っていた。

「水神とか言つてよ、実は変な妖怪じゃねえのか？」

「おいおいそんなに驚くなつてよ。」

ダイチは、ヘラヘラと驚く村人達を見る。

「四魂の欠片で妖力を高めて化け物だろ？隠すと為にならねえぞ？」

「全部吐いちまえよ。その方がいい筈だ。」

「な、何じや此奴らは!？」

いきなりダイチと犬夜叉が出て来て驚く。

「この村は水神様を守ってもらえる有難い村じや。余所者は立ち去れ！」

名主は、犬夜叉達に怒鳴る。

「な、何?!このクソ親父！」

犬夜叉は、名主に喧嘩をしようとするとダイチが抑え弥勒も来たのか錫杖で叩く。

「落ち着きなさい犬夜叉。」

「何するんでい弥勒!ダイチ!」

犬夜叉は、二人に文句を言うがダイチと弥勒は名主達に話を続ける。

「怪しい者ではありません。我々は故があつて人助けを生業にする旅の者。お話は伺いました。よろしければお祓いを致しましょう。」

村人は、弥勒の言葉で驚きお祓いをしてもらうかと思ひ始める。



「皆の衆！惑わされるな！インチキに決まっている！お祓いなどをして水神様の怒りを買ってしまう！ワシの子の時にお祓いで終わっては今まで生贄になった子供達に合わす顔がないわ！」

（子供が生贄に食われたのか……）

ダイチは、密かにその食った水神に対して殺意が湧く。

「ん？」

ダイチは、殺意を湧出させているとかごめが神輿の中にいる名主の子供が此方を見ているのに気付くとかごめに続いてダイチも見た。

そんな事をしている間に名主達は生贄を水神様のお堂に納める為に犬夜叉達を退かして向かった。

「なんだか妙じゃな？ん？どうしたダイチ？」

七宝は、ダイチが珍しく考えていたので尋ねる。

「なあ、みんな。俺さその生贄に食ってる水神をさ………。罫り殺したくなつた。どうしてもしたい。」

ダイチの殺意が凄まじく外に出ていた。

（あ、ダイチさん殺す気だ。）

（ダイチ殿本気ですか。）

(ダイチは、絶対にするのお。)

(ダイチってそう言う男か。)

(けっ、意地でもやるなああの野郎。)

ダイチを見て感じる一行。

「でどうする?」

「そりゃ助けに行くに決まってるでしょ!」

「うん。」

一行は、助けようとしていると。

「おめえら本気か?」

子供が現れて一行に聞く。

「ああ、そうだ。」

ダイチは、即答で言う。

「だったら着いて来い。」

その子供は、藁を巻いて姿を見せなかったが言われた通りに着いて行く。

着いて行くと子供は、物を地面に置いた。

「くれてやる持っていけ。」

「なんだよこれ?」

ダイチは、子供が置いた物の価値など分からなかったが。

「これは値が張りますな！」

「立派な織物だ！」

弥勒や珊瑚は、理解したのか驚く。

「拾ったな！ 貴様等を雇おう！」

「雇う？（水神をぶっ飛ばしたいんだけどな・・・）」

「さつき言っていただろ人助けが仕事だって。だからこれから雇って水神を退治するんだ。いいな！」

「……………」

犬夜叉は、子供に寄ると。

「ゴーン！」

いつも通りにゲンコツをした。

「犬夜叉！」

流石にダイチとかごめが怒鳴る。

「ん？どつちが偉いかはつきりさせねえとな。」

そのままゲンコツを続けて答える。

「お前嘘でも謝っとけ。」

七宝も子供に言うが次の瞬間。

「いい加減にしろ!!」

ドスンッ!

「おすわりっ!」

ドシーンッ!!

ダイチのチョップとかごめのおすわりのダブル制裁で事なきを得た?

日が沈む。

ここは水神のお堂。

子供の話によると生贄は、お堂の近くの池に水神の船がやってくる。

そこを狙って追いかけて水神を退治する流れだ。

「いいなっ!」

子供は、犬夜叉達に指示を言うと犬夜叉達は無視しているのかあるいは子供が与えた物を眺めているかのどちらかをしていた。

「坊さん、これ盗品かな？」

「おう、どう見てもそれだな。」

「いいじゃないですか。」

「良かないでしょ。」

犬夜叉達は、その物を眺めてそんな話をしている。

「聞いたるのか!?!こら!」

「つーかよ。お前なんか名主の顔に似てるなボウズ。」

「あ、言われてみれば。」

ダイチが言うと子供は、直ぐに黙り込んだ。

「ふん、貴様らには関係なからう。」

「助きたい友達でもいるのか？」

「!?!」

子供の考える事にダイチは、洞察力を持って回答する。

「そ、そうだ。俺は名主の跡取りで太郎丸と言う。」

太郎丸の話によると水神が生贄を欲しがるのは今から半年前ぐらいになるらしい。

雨や洪水など様々な水害で祟りが恐れれば生贄を寄越せと水神は言ってきたらしい。

そして名主の子供の番になった途端に名主は、姿を隠せと言い出しよく遊ぶ使用人の子供を代わりに生贄にしたと言う流れだ。

「親バカですな。」

「親バカだな。」

「太郎丸は、どうしても助けたいダチだったんだな。」

「だからその子を。」

「ああ、大切な友達なんだ。だから……これ以上言うな。俺は、感心してんだよ。お前が勇気を持って友達を救いたって言う気持ちに。」

太郎丸は、ダイチの言葉に言葉を失う。

「で？あるんだらう船。」

今まで姿を見せなかった珊瑚が退治屋の衣装を着てやって来た。

「やる気あんのなサンゴンは？」

「サンゴンって何さ？……人食い水神なんてのさばられておけば退治屋の名折れだ。

あたし一人で片付けてやるよ。」

「しけた事言わずにやろうじゃねえかよ。」

「病み上がりか威勢の良い事を言うな。まだそのドデカイ武器は振り回せないんじゃないか。」

えか？」

「試してみるか？」

「やろうじゃねえか！」

珊瑚は、犬夜叉にそう答えると犬夜叉もやる気満々だった。

「落ち着けよ。」

「犬夜叉！」

「まあまあお代は頂いたのですからその分きっちり働きましょう。」

弥勒は、ダイチとかごめと共に犬夜叉を止める。

「犬夜叉も仲間割れしないで。」

「それはあつちに言いな。仲間なんかは何なんざさらさらねえみたいだしな。」

そんな感じでも犬夜叉達はそのお堂で水神の船を別の船に乗り待つ事にした。

そして水神の船を発見し尾行していると鳥居が見えてきた。

「水神の鳥居だ。」

「昼間オラが見た社じゃな。」

七宝は、飛んでいた時に見たと言っていた物だった。

「生贄は、中にもう入った様だ。」

珊瑚は、水神の船を見ると誰も乗っていない。

「ー」

社の門にカニのような妖怪がいた。

「門番だ。隠れ」「隠れるか！」

太郎丸が忠告を終える前に犬夜叉とダイチが拳でボコボコにした。

「おい！早くしろ！乗り込むぞ！」

犬夜叉は、そのまま拳で門を壊した。

「ほらぐすぐすしない。ぱっぱと終わらせるんだから。」

「す、すごい……」

太郎丸は、ダイチと犬夜叉の腕つぶしに驚く。

その頃社の中では太郎丸の友達の水神のいる間にやって来ていた。

「名主の子ですか？近うよりなさい。」

水神は、不気味な程細く青白い肌をした男だった。

ブルブル！

太郎丸の友達は、怖さのあまり動けずにいた。

「ん？何ですか？その豆だらけの汚らしい手は？お前名主の子ではありませんね。どう言うことですか？神を欺こうと言うつもりだったのですか？」



「す、水神様！堪忍してくださいえ！どうかオラを食ってくださいえ！」

水神の手が伸びると太郎丸の友達の顔を鷲掴みして持ち上げる。

「水神の面目が丸潰れではありませんか？お前は八つ裂きにして雨と一緒に村へ降らせ  
ます。」

すると外が騒ぎ出したのに気付いた水神は、太郎丸の友達から外からの警戒を強め  
た。

「おらおらおらおら！退け退け退け!!!」

「犬夜叉一行のお通りだ!!」

犬夜叉の後ろに珊瑚、弥勒、ダイチが門番の妖怪達を次々と倒して行きその倒した後  
は魚や蟹と言った元々の姿に戻って言った。

「(っ)か!!」

犬夜叉が先に辿り着くと水神は、太郎丸の友達を鷲掴みにしたまま待っていた。

「お前か？エセ水神は？」

二番手に来たダイチが魔戒斧を持って水神に向ける。

「た、太郎丸さま！」

鷲掴みにされた状態で視界が最後の方にやって来た太郎丸を確認する太郎丸の友達。

「す、末吉！」

太郎丸は、駆け出そうとしたが直ぐに犬夜叉に止められる。

「慌て過ぎだ。」

ダイチも太郎丸を宥める。

「ん？お前が汚いナリをしているのが名主の子だな？」

「そうだ！分つたなら末吉を離せ！」

水神の問いに答える太郎丸。

「おいおい、エセ水神。末吉を離せよ。」

「臭うぜ妖怪の臭いがな！」

犬夜叉は、鉄碎牙を抜いて水神に攻撃をした。

水神は、近くにある三又の槍を手にすると鉄碎牙を受け止めて押し返した。

「何?！」

倒れた犬夜叉が鉄碎牙を見ると変化が強制的に解けてしまった。

「どうやらあの槍に秘密があるらしいな。」

ダイチは、エセ水神の槍を見て言う。

「妖怪如きの刀が我が神器雨乞の鉾に勝てると思いませんか？お前達の神域を怪我した罪は重い。死を持って詫びてもらいます。」

刃先のない棒の方を床に叩くと社の中だったのが水の中に流されていた。

(かごめ！)

犬夜叉は、太郎丸を抱き抱えているかごめを助けようとしたが水流の激しい流れに負けて動けないでいた。

(犬夜叉！アイツなら大丈夫だ。それよりもかごめを！)

ダイチも息が続かない状態でかごめが行く方に一心不乱に泳ぎ出す。

かごめは、亀裂の様な所に吸い込まれるのを見て消えしばらくして亀裂が消えないギリギリでダイチも消えた。

「けほけほ！」

水を飲んでしまったかごめは噎せて倒れる。

(この子を食べる気だわ。何とかしなきゃ。)

そう考えている時に水神の後ろで末吉が火を付ける長台の棒を持ち水神に攻撃するもすぐに水神に末吉が捕まってしまう。

「今だ！当たって！」

かごめは、弓に破魔の矢を水神に放った。

水神は、矢を掴んだが破魔の光が水神の手を壊した。

「ば、馬鹿な人間の矢如きで！．．．!!」

水神は、何かに勘付いたのかしやがむと亀裂から魔戒斧が水神に当たりそうになる。

「おうえ！おうえ！かごめ！大丈夫か？」

亀裂からダイチが現れ魔戒斧を手に戻すと末吉を保護したダイチがいた。

「うん大丈夫。」

「とりあえず今は撤退するか！」

ダイチは、太郎丸や末吉が居る状態では戯牙で戦うと巻き込まれてしまう事を理解して戦わずに撤退を開始した。

「ダイチさん。あの建物に入る。」

外を見ると人間が数人入っても大丈夫な大きさの建物に入って隠れる事にした。

「弥勒様に珊瑚ちゃん大丈夫かな？」

「まあ大丈夫だろ？直ぐに音が響くと思う。」

「音？」

かごめは、どう言う事なのかわからなかった。

弥勒達は

「珊瑚！珊瑚！しつかりなさい！」

弥勒は、珊瑚を呼ぶも意識が無く近くにいる雲母も心配そうに見ている。

「いかん水を飲んだらしい。息を吹き込まねば。」

弥勒は、珊瑚に人工呼吸をしようとしていた。

すると珊瑚は偶然目を覚ましそして……そして……

パチーンンンツ！！

「とんだ誤解ですな……」

弥勒は、デカイ紅葉を珊瑚につけられて淡々と言ひ。

珊瑚も顔を真っ赤にさせていた。

パチーンンンツ！！

「何今の?」

遠くからでも聞こえる音にかごめは、驚く。

「良い響きだなサンゴンの紅葉当ては・・・坊さん・・・アンタ何やってんの・・・」  
ため息を漏らしながら予想が当たったダイチは、呆れていた。

再び弥勒達の方に戻り。

「でここ何処よ!」

「水神の社の外です。私も気が付いたら此処に居ました。ん?犬夜叉か?」

弥勒は、犬夜叉が何かに運ばれた様に気絶されたままやって来ていた。

犬夜叉を運んで居たのは金魚の妖怪の様な二匹だった。

「かたじけない。」

弥勒と珊瑚は、犬夜叉を岸にあげるとお礼を金魚の妖怪にした。

「私達もあなた方に助けられたのか。」

「はいー!」

「見た所あなた方も水神の眷族のようだが?」

どう言う事なのか理解できない弥勒。

「あの水神は、偽物です。元々は私共と同じくこの湖に住む精霊でございしましたが……」  
「水神様を騙してあの岩に幽閉し、そして神器雨乞の矛を奪って水神様に成り代わったのです。」

金魚の精霊は、涙ながらに説明した。

「成る程わかりました。では本物の水神様をお救いしましょう。」

弥勒がそう言っていると犬夜叉が目を覚ます。

「ば、馬鹿野郎。何悠長な事言つてやがる。俺は社に引き返すぞ。かごめを助けるのが先だ!」

犬夜叉だけが社に引き返した。

（誰か来てくれよ！かごめ達を避難させれば戯牙になってあのエセをぶつ殺せるのに！）

建物で隠れているダイチ達は、エセ水神を殺したくて仕方なかった。

「ん？足音が消えおつたぞ？」

隠れている七宝もいきなり音がなくなり驚く。

ギギ！

「まさか！」

ダイチは、気が付いた妖怪ならもとの姿になり足音も無くし建物を壊せる事に。

グシャーントンツ！！

建物が直ぐに壊れて中のダイチ達が直ぐに丸見えになった。

「まずはお前を殺します。」

エセ水神が現れかごめに狙いを定める。



「良いのか犬夜叉とダイチだけで？」

珊瑚と弥勒は、水神を救うために封印されている岩に向かっている最中珊瑚が弥勒に聞いた。

「犬夜叉なら互角以上に戦えるでしょう。それにダイチ殿もいれば尚のこと安心です。」

「そんなに強いのか犬夜叉とダイチは？」

「犬夜叉はあれで頭がキレるんです。それにダイチ殿は……怒らせたら一番手がつけれない方です。」

珊瑚は、弥勒の言っている事が大体理解出来た。

金魚の精霊達が言っていた岩に着くとすぐに弥勒達はその岩を探す。

「本物の水神様が閉じ込められている岩って何処にあるの？」

「多分この辺だと思えますが……誰か居るのか？」え？」

誰かの声がした。

「若い女の声？」

「誰じゃ？」

「もしや水神様は女神様で？」

この生臭坊主は、これに反応した。

全く仕方ない兄ちゃんだなあ……

「早う札を外ずして妾を此処から出せ！」

岩に札が貼られて居る所から声が響く。

「はっ！ただ今！」

弥勒が札を外すと光り出し治ると誰一人出てこない。

「す、水神様？」

珊瑚と弥勒は、探してもいない。

「此処じゃ。」

声のする方を見ると小さい女が岩の穴から出て来た。

「お！お……お美しいのですが……そこまで小さいといかんとし難いですな。」

「何が!!」

珊瑚が弥勒のやましい事に怒る。

その頃かごめ達は

「あー！」

かごめは、偽水神に足を掴まれ倒れる。

そのまま偽水神が雨乞の矛で刺そうとするが。

ガギーンッ！

ダイチが魔戒斧で受け止めて鏝迫り合いになる。

「なんです？その斧!?!はこの雨乞の矛が当たっても何ともないとは!?!」

偽水神は、魔戒斧の存在に驚く。

ガギーンッ！

そんな最中に雨乞の矛が何かに弾かれる。

ダイチが振り向くと犬夜叉がいた。

「犬夜叉！」

「丁度いい時に来たな犬夜叉!」

雨乞の矛で再び鉄碎牙の変化が解ける。

「かごめ、無事か!」

「うん。」

かごめが他のみんなを見るとみんな無事だった。

「あ!水神が逃げるぞ!」

七宝が指差すと偽水神は、逃げようとしていた。

「水神何処に逃げた!」

犬夜叉は、キョロキョロと水神を探すと床が泡になり崩れた。

「犬夜叉!」

ダイチは、咄嗟に犬夜叉の足を足払いして後ろへ蹴り飛ばすと今度は自分の足が偽水神の一部の尻尾に巻かれて湖に引きずり込まれた。

「ダイチ(さん)!!」

犬夜叉とかごめは、叫ぶがダイチが浮かんでこない。

「浮いて来ねえ!」

「ダイチさん……かごめちゃん!」

近くから珊瑚の声がして振り向くと弥勒と珊瑚がやって来た。

「(無事で!)」

「ダイチが水の中から戻って来ねんだ!」

「無事でいて!」

すると弥勒の手にいた水神が動く。

「おろせ法師。偽水神をあばく!」

弥勒は、言われるがままに水神を床に下ろした。

「水神様?」

「これがか?」

かごめ達も流星に小さい水神に驚くが水神は、気にする素振りも見せずに耳飾りを取る。

「水切りの宝!」

水神が耳飾りを投げると円を描くように水の無い空間が作られた。

「なに!?!」

偽水神は、いきなりの事で驚く。

「おい・・・クソ蛇随分とやってくれたじゃねえか!」

ダイチの体内に秘められた霊力が放出され偽水神の尻尾の拘束を跳ね返した。

「お仕置きの時間だ！」

ダイチは、魔戒斧に円を描くと戯牙へ変身した。

「女神を引つ張り出して来るとは！しかし私こそが水神なのです！」

偽水神は、怯む間も無く近くにいるかごめ達を攻撃しようとした。

『何？それ自慢？ガタガタうるせえんだよエセ水神!!』

だが攻撃する前に戯牙が高く舞い上がると偽水神の背中に左足の踵落としを炸裂させ地面に叩きつけられた。

「貴様も殺してくれる！」

「この野郎！」

犬夜叉は、起き上がって戯牙を襲う偽水神の後ろへ爪で攻撃する。

「雲母！」

珊瑚は、雲母に乗り飛来骨で戦う。

「愚か者め！神器雨乞の矛の力を見るが良い！」

「このー！」

偽水神が雨雲を呼ぶと珊瑚に襲いかかり珊瑚も飛来骨で攻撃するが弾き返された。

「珊瑚ちゃん！」

「トドメだ！」

偽水神が雨乞の矛で珊瑚を攻撃しそうになるが犬夜叉が偽水神の腕を掴み奪った。  
「大丈夫か珊瑚！」

偽水神は、真つ赤な目をした白い大蛇になり犬夜叉の腕を噛んだ。

「犬夜叉！」

珊瑚も雲母に乗って体勢を変えて犬夜叉の名前を呼ぶ。

すると雨雲が竜巻に変わら村の方へ行く。

「竜巻が村へ向かっている！」

「このままじゃ村がやられる！」

外野で見えていたかごめと太郎丸も驚く。

「竜巻をおさめるなぞいとも簡単じゃ。」

水神は、すぐに答える。

「本当ですか？」

「ならば早く！」

「おさめてつかわすから早う矛を戻せ！」

雨乞の矛がどうしても必要らしい。

犬夜叉と偽水神が水面から出て来た。

『オラア！』

戲牙は、高く飛ぶと偽水神の頭に頭突きをして犬夜叉の援護をする。

『かごめ!じゃああの槍をその水神さんに渡せば良いんだろ!』

「そうよ!」

『犬夜叉、珊瑚。あの槍奪つたら後は俺に全部任してくれねえか?許せねんだよあの工セ水神。』

今までの雰囲気とはまるで違う事に珊瑚は、気付いた。

「わかった好きにしな。」

「うん。」

「昼間の言つた事を有言実行する気ですなダイチ殿は。」

やる気が風穴をいつでも出せる準備でいる弥勒も理解した。

『おまけだ!』

戲牙の再び頭突きをすると怯み口が開き犬夜叉は、解放させると直ぐにかごめの方へ投げる。

珊瑚は、雲母を使い湖の中にいる犬夜叉を救出した。

「好きにしなダイチ!」

珊瑚の後ろに乗る犬夜叉が声をかけると戲牙は、直ぐに水中で偽水神の尻尾を掴むと



あの水の無い空間に投げる。

「水神様お願いします。」

かごめは、「雨乞の矛を立てると水神に渡し光り出す。

水神の身体が大きくなり一般女性と同じ大きさに変わった。

「雲切り！」

水神は、雨乞の矛を天に翳すと竜巻が消えた。

『さて歯食う縛れ!!』

戯牙は、偽水神の腹へ殴ると空高く舞い上がらせ真下から拳の嵐を炸裂させた。

『寝てんじゃねえぞこら!!』

片手で頭を鷲掴みすると反対側の片手で平手打ちを何発も食らわせる。

『今までの子供の分がこれで終わりだとか思うなヨオオ!!』

手刀で顔に炸裂して片目が失明しかける。

『オラオラオラオラオラッ!!』

拳が止まない雨を降らせる戯牙。

『くたばれ!!』

戯牙は、獣身斧で最後偽水神が真つ二つにすると痛みのみあまり上へ伸びた。

『坊さん後はよろしく!』

「はい。」

弥勒は、戯牙が吸い込まれない範囲と確認すると偽水神を風穴で吸い込んだ。

戯牙は、高くジャンプしてかごめ達のいる方まで戻ると鎧を解除した。

そして犬夜叉達は、偽水神が退治するとすぐに太郎丸に別れを言つて去つてしまつた。

「しつかり礼を言いたかつたな……」

太郎丸は、感謝の気持ちで一杯だ。

「たくつ！四魂の欠片を持っていない蛇の相手をしちまつたぜ。」

「良いではないか。これも人助けです。」

「つーか坊さん。この荷物は？」

顔を引き摺つたダイチが弥勒の持つている値の付けられる物を馬に乗せながら質問した。

「ええ、それが名主様に息子殿の立派な働きを村の衆にもお話ししましょうかつとまさかこんなに。」

「それ恐喝だろうが!!」

犬夜叉とダイチは、突っ込んだ。

「いつもこう言う事してんの?」

珊瑚は、かごめに聞く。

「まあときどき……」

かごめも呆れている。

「さあこれを買っぱらってパーっと遊びましょう!」

「あー!あー!俺は二度と人助け何てやらねえからな!」

そんなこんなで犬夜叉一行の旅は続くのです。

## 番外編 過去1

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

僕のじいちゃんは戯牙の称号だ。

じいちゃんは何時も元老院の仕事をする前に魔戒法師の人達に仕事を一緒にする事を第一に行動する。

そして何時も元老院の人達に手柄を魔戒法師に殆どあげているのと他の魔戒騎士や神官達にはあまり快く思われていない。

「ねえじいちゃんは何で魔戒法師の人達の顔を立ててるの？」

「おっ！そんな風に見えるか？」

コウヤは孫の意外な言葉に驚く。

「俺はもう称号を持つているからいいんだ。だけど魔戒法師だつてそれに負けないぐらいのガッツがあるからそれだから俺よりもカッコいいトコをやらなくちゃいけないだ。」

「じいちゃんがうらかたになつてるの？」

「まあ裏方だな。俺よりも腕つぶしの良いのなんか魔戒騎士よりも魔戒法師の方が多いんだ。」

「へえ〜。」

ダイチには、魔戒法師の方が主役であるのだとコウヤに教わった。

「さてと何処で仕事をサボるか・・・ん?」

孫を連れて元老院の外でそう呟くコウヤの目に映ったのは一人の女魔戒法師だった。

「.....」

女魔戒法師は、俯いてため息をしている。

(なるほどさしずめ相手の魔戒騎士と揉めたという感じか。)

「よっ!」

ビクッ!

「わっ! ああ!!」

いきなり後ろから脅かされて女魔戒法師は、驚く。

「悪いな姉ちゃん。で暇か? 俺もう良い年で誰かの手を借りないとダメな爺さんなんだ。やってくれねえか?」

気さくにコウヤは、己の正体を隠しながら女魔戒法師に頼んだ。

「まあそう言うならやるよ爺さん。」

女魔戒法師は、気乗りしなかったが切り替えを早くしたかったのでコウヤの誘いに応じた。

「おうあんがとよ。」

「じいちゃん！」

丁度いい所にダイチが来た。

「おうダイチか？ 今回の仕事で後一人分の荷物を用意するぞ。」

「うん。あのお姉さんがそうなの？」

「そうだとよ。」

コウヤは、元氣よく言うのと女魔戒法師は苦笑いでダイチに手を振る。

「じいちゃん。用意出来たよ。」

4歳児とは思えない手際で荷物を持ってくるダイチ。

「す．．．すごい．．．。」

女魔戒法師は、自分の荷物を簡単に持って来たことに驚く。

「俺はコウヤでこつちは孫のダイチだ。お前の名は？」

「ああ、あたしは「チアキじゃえねえかよ？」

振り向くと魔戒騎士が女魔戒法師の名を呼んでいた。

「何だよ。いきなりもう無理だからさよならっている先がジジイとチビの魔戒法師か

よ。ウケるな。」

魔戒騎士は、上から目線でチアキだけじゃなくコウヤとダイチまで小馬鹿にしながら言う。

「ごめんあたしアンタとはもう「はあ？何言つてんだよ！意見言いやがって魔戒法師のくせに！」

その瞬間チアキの前にコウヤが瞬時に現れ莫迦魔戒騎士の首根つこを鷲掴みして地面に叩きつけた。

「おいワツパ粹がつてるんじゃねえぞ！」

その威圧感は、まるで猛獣の目その物で黄金騎士すらも動揺するほどでもあった。

莫迦魔戒法師は、口から泡を吹いて気絶していた。

「チアキだったか？五月蠅い莫迦は、静かになつたらか仕事に行こうか？」

コウヤは、先程までの猛獣の目から落ち着いた目に瞬時に変わりチアキに仕事を誘う。

「うんよろしく爺さん。」

チアキも少し動揺していたが不思議とコウヤを怖くなかつたむしろ味方をしてくれる雰囲気を持っていたからだった。

「じいちゃんカツコよかったよ！」

「お？そ、そうか？」

「僕も大きくなったらじいちゃんみたいになるよ！」

「よせよせ、照れるって！」

コウヤは、笑いながら言う。

（いいや、なったら駄目だろうダイチ。）

チアキは、ダイチの将来が心配に思える。

仕事の為山奥でホラーを倒す事になりそなホラーがある時間にならないと現れないのでキャンプをする事になった。

「コウヤさん。あたしがご飯作るから。」

「良いつて良いつてメシとかテントの設営とかは俺らでするからチアキは休んでろつて。」

「そうそう、じいちゃんは、名裏方なんだからホラーが、出てくるまで休んでいて。」

ダイチとコウヤは、手早くテントの設営や川魚や山菜などをすぐに取ってきてくと二人揃ってナイフに枝を羽根の様な形のフェザースティックに作りそれから松ぼっくりを暖炉に入れ火打ち石でフェザースティックに火をつけて火を起こした。

「暖かくなつたね。」



「ふー温いな。チアキお前も当たれよ。それと俺にダイチは、呼び捨てで構わないからよ。」

取ってきた川魚と山菜を手早くフライパンで調理しながら陽気に言う。

「ああ、ありがとコウヤ、ダイチ。」

チアキは、こう言う事は初めてだった。

何時も組む莫迦魔戒騎士は、ソウルメタルを持てる以外無能で殆どをチアキにさせていた。

たがコウヤに至っては違っていた。

コウヤは、チアキを仲間として受け入れそして自分をコケにした莫迦魔戒騎士を制裁したからだった。

夜になりダイチは、既に寝ていた。

「コウヤは、なんであたしなんかと仕事しようと思ったの？」

魔戒斧を眺めているコウヤは、チアキに目をやるところを眩く。

「お前には良い素質があると思っただからただ単にそれで組もうと思っただし、俺は昔魔戒法師の様な奴と長く一緒に戦っていてな。ソイツは、俺が至らなかつたせいで命を落としまつたんだ。だから俺がもう失わない為に魔戒法師達の役に立ちたかつたそれだけだ。」

コウヤは、直ぐに立つと腕輪が光輝く。

「チアキ、仕事らしい。」

ホラーが現れた事を告げるとチアキは、走るコウヤの後を追い付いていく。

山に住む漆黒の巨人のホラー・キャンプファー。

コイツは、山に住み着き夜の一定の時間に起き近くの山村を襲うホラーでもある。

「怖いかな？」

「大丈夫だ。」

「なら結構。俺に良い考えがある。」

コウヤは、チアキにその考えを伝えると二人は行動を開始した。

【グルル】

キャンプファーの前にコウヤが立ち阻むとキャンプファーは、コウヤに巨大な拳で殴る。

シュツ！

だがコウヤは、素早くキャンプファーの腕に飛び乗り魔戒斧で叩きつけるがキャンプファーの硬さは想像以上に固く弾かれる。

キャンプファーは、動こうとするが動けない。

「良いぞチアキ。」

そうチアキが瞬時に魔導筆で札を放ちホラーの動きを封じる札を発動したからだつた。

コウヤは、魔戒斧をさらに気合の入った一撃で胸の核の部分にヒビを入れることに成功する。

【ガルルルツ！】

ケンププファーは、すぐに動き始めるとチアキに目掛けて吹雪の様なブレスを放つ。

コウヤは、すぐにチアキの前に立つと魔戒斧で召喚陣を描く。

目を瞑るチアキが目を開けると緑の鎧を纏った騎士が現れ吹雪をチアキの盾となり防ぎ平然と立っていた。

(あれってまさか!? 獣身騎士戯牙のコウヤ!? あのヒグマのコウヤなのか!?)

そう先輩魔戒法師から聞いた事があった常に魔戒法師と組む時は裏方で戦う変わり者の魔戒騎士で神官や魔戒騎士から嫌われている問題騎士別名ヒグマのコウヤだった。

動きを始める獣身騎士戯牙がケンププファーの巨体に回し蹴りをするるとケンププファーは、体勢を崩してチアキの当たらない方向に向いた。

『テリヤアアアツ!!』

戯牙は、獣身斧で先程のヒビを入れた所に攻撃して亀裂を大きくするがケンププファーが倒れない様にした。

『任せたぞチアキ!!』

戯牙の背後隠れていたチアキが戯牙が横から飛ぶと魔導筆を発動していたのかすぐに魔導力の込めた一撃を放つとケンプファーは、完全にチアキの手で封印された。

「助かったぞチアキ。」

「いいや、コウヤのお陰だよ。」

「あ? そうか、はははっ!」

「?」

チアキの目にはコウヤの後ろに一瞬だけだが巫女の服を着た女性がコウヤを見守る様に映っていたがすぐに消えた。

(何だったんださっきのは?)

こうして夜が明けた。

元老院に戻るとケンプファー討伐の報告をコウヤは、チアキを連れて来た。

「ケンプファーを討伐の報告で何で魔戒法師を連れて来たのだコウヤ。」

上から目線の神官が鼻糞を掘っているコウヤに聞く。

「いいや、俺がケンプファーを倒したんじゃないやなくチアキが倒して封印したんだ。」

信じられない神官は、チアキに目を移すと番犬の銅像に魔導筆を入れホラーの封印した証のダガーが出て来た。

そう事実上チアキが倒した事になりチアキの手柄になった。

その後チアキは、元老院の魔戒法師に奇跡の昇格をした。

その後

「すまん!!」

コウヤがダイチを連れてたまにチアキの所でサボろうとしていると声が聞こえる莫迦魔戒騎士の声だった。

見ると莫迦魔戒騎士は、チアキの前で土下座をしていた。

「え?」

「今まで勝手な事言つて本当にすまなかつた!許してくれ!!」

未だに土下座をする莫迦魔戒騎士。

すると土下座をしていると隙にコウヤがチアキの前に立ちそして黒い軍靴の様な革靴の底を莫迦魔戒騎士の頭に振り下ろした。

ドシイイイインンンツツ!!

莫迦魔戒騎士の頭がコウヤの力強い足踏みで大きな音を出しながら地面にめり込み虫の息で生きていた。

「コイツの土下座にどんな価値があるんだろうな?チアキ?」

「価値何でないよコウヤさん。やってるて言う上からの目線つて最低だよ。」

「ばーか！ばーか！」

ダイチに至っては額に肉やら色々落書きをしていた。  
おしまい。

## 風穴

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

街の中で煙が出ていた。

「何だ？何だ？火事か!？」

「妖怪退治をやっているそうさ。」

「臭えな何だこの煙は?」

街の人達が騒ぎでいると外で退治屋の衣装を着た珊瑚が飛来骨を構えていた。

「良い?こつちに追い出すんだよ。」

珊瑚が言うとかごめが竹筒から煙が出ている物を扇子で仰いでいた。

「なんか害虫駆除みたい。」

その様だね。

その他のメンバーは・・・

「う~~~~~」

犬夜叉は、煙の匂いでダウンしていた。

「犬夜叉大丈夫か？」

「犬夜叉は、臭いに弱いからの。」

「ん？」

弥勒は、集まる人ごみの中に美女を発見した。

(これはお美しい。)

弥勒は、美女の後をついて行く。

「あー！（あの女目に生気がない妖怪か？）」

ダイチは、弥勒の見た女を見て瞬時に妖怪と疑う。

「七宝、俺小便してくるから後頼む。」

「ああ。」

ダイチは、七宝にそう言うのと弥勒の後をついて行く。

【シャアアアアツ!!】

建物から妖怪が現れ襲おうとしていたが！

ガコーンッ！

だがそう大きくなくむしろヤモリほどの小さい妖怪だったので珊瑚が飛来骨で叩き倒された。

「かごめちゃんもう良いよ。」



こうして仕事は終わり宿に戻る。

「うゝゝゝ……」

「犬夜叉、まだ辛いのか？あれ弥勒様は？」

かごめは、弥勒がいない事に気づく。

「知らない女について行ったぞ。」

「まっ！」

女癖の悪い弥勒に若干の引き気味なかごめ。

「なにそれ？人が働いていたときに？」

珊瑚は、呆れている。

「その女子美人じゃった。きつと子供産んでくれと頼みに行つたんじゃ。まあダイチが付いて行つたから大丈夫じゃ。ダイチは、チャランポランな所はあるが常識のある大人じゃしな。」

「え？子供!？」

珊瑚は、驚いた。

その頃の弥勒は

「さようですか。さる名家の姫君であるか?」

「はい、家は戦で攻め滅ぼされわたくしは一族最期の生き残り。再び家を起こすために強い殿方の子を産みたいと。」

「それで私と? お目が高い。」

女は弥勒に抱き締めてきた。

「願いを叶えてくれますか?」

女の背中から蠅螂の鎌が見えた。

「はあつ……まあ話が上手いと思っていましたかね。」

「坊さんもそう思う?」

隠れていたダイチが出て来て互いに溜息をつく。

ドーンッ!

弥勒とダイチがそれぞれの武器で女の頭を叩くと女の皮を破って大きな蠅螂の妖怪

が出て来た。

「すごい手品だな。あんなだけの大きさどうやって収まっていたの？」

「大蠮螋！女子の皮を被っていたのか!？」

【中身は喰らってやった!】

大蠮螋は、弥勒とダイチを攻撃した。

二人は攻撃を軽々と避けて大蠮螋の後ろに行つた。

「狙つた相手が悪かつたな！風穴!!」

大蠮螋は、そのまま弥勒の風穴に吸い込まれた。

大蠮螋は、悪足掻きで鎌の刃を風穴に切り付けて吸い込まれる。

「おい！坊さん！今風穴が!!」

ダイチも驚くそれは風穴が開くと言う事は弥勒がその穴に吸い込まれるのが早まっ

ていると言う事だからだ。

「ちっ！風穴を切られた・・・ダイチ殿・・・この事はかごめ様達に内密に。」

今の弥勒の目が血走っているのを感じる。

「俺は何も見なかったし聞いていねえよ。心配すんな坊さん。」

「かたじけない。」

と言っているが弥勒自身かなり動揺していた。

そして宿に戻り夕飯を食べている時。

「気のせいでしょうか犬夜叉？ 女子達の視線が冷たいのだが？」

「おめえ女を引つ掛けに行つただろ？」

「ああ、坊さん綺麗な女に目が無いよな。」

「だから汚ねえ物を見る様なもの目で見てるんじやねえか？」

「誤解ですな信じて貰えないかも知れませんが……信じられない。」「嘘だね。」一応弁解だけでもさせて貰えませんか？」

「いや坊さんの日頃の行いが現れているだよ。」

最期にダイチがトドメの言葉を言う。

夜みんなが寝静まっている時を狙って弥勒は風穴を封じている手が痛みながら昔の事を思い出していた。



翌朝

「夜明け前に出て行つただと!？」

翌朝犬夜叉達は弥勒がいないので宿の主人に聞くと出て行つたとの事だった。

「はい、法師様ともう一人のお連れの方がこの紙を渡してくれと言っていました。」

主人が渡すと犬夜叉は、紙を開く。

「なにになに?」

ダイチの字をかごめは、覚えていた。

それもそのはずダイチは、草太のサッカーの練習が終わった後にかごめの受験勉強を手伝っていたからだった。

(間違いないダイチさんの字とボールペンだ。)

神社で手伝って集めたお金で良い外国のステンレス製のボールペンを買ったから魔法衣の左胸ポケットに入れると言っていたので思い出した。

坊さんと少し遊んでくるから早く追い付いて来てくれ。なるべく早く。ダイチと書かれています。

「あの野郎何かあつたんだな弥勒に!」

察しの良い犬夜叉は、直ぐに弥勒とダイチの後を追うためにかごめ達を連れて追いか

け始めた。

その頃の弥勒は

狸妖怪のハチの変化でダイチを連れて飛んでいた。

「親父は、自分の手の風穴に吸い込まれて骨も残さず消えた。俺もいずれはああいう風に死んで行くのかな？」

ダイチが寝ているので独り言の様に呟いた。

「.....」

ダイチは、寝たふりをしながら弥勒の話を黙り込んで聞いていた。

弥勒の今抱える死の恐怖を。

【弥勒の旦那見えて来ましたぜ。】

ハチが言うのとある場所に着いたそこは大きなクレーターの様な場所がある所に着地した。

着地すると起きた様な素振りのダイチも起き上がり地面に降りた。

「坊さん？これは？」

「そうですよ旦那。この大穴は？」

「親父の墓ですよ。」

「……」

ハチとダイチは、揃って手を合わせる。

（坊さんの親父さんはじめましてダイチって言います。）

ダイチは、そう心で話すとすぐに弥勒の後ろに付き近くの寺の中に入った。

「無心様。居られるますか？弥勒でございませす。」

寺の中に入ると酒臭い爺さん和尚がいた。

（坊さんの育ての親なのか？）

「また飲んでやがる。起きろ！生臭坊主。」

そう言うのと無心は、起き上がる。

「ん……なんじゃ弥勒まだ生きておったか？」

「無心様そこまたお酒を飲んでる時長生きできませんぞ？」



「お前説教しに来たんか？」

弥勒は、無心にただ風穴の手を見せた。

「ええ、妖怪に風穴を切られました。治してくださいますか？」

無心は、弥勒の風穴を封じている手を観察していた。

「ん!?お前!今夜あたり死ぬぞ!!」

無神は、驚きそう答える。

「!!」

「な!!!」

弥勒の顔が険しくなりダイチも大声を上げる。

「なーんてなっ!冗談!冗談!ヒックツツ!」

ゴギーンツツ!!!

ゲンコツ×2

「吸い殺すぞテメエ!」

「馬鹿な冗談言ってるな!」

流石にダイチも無心に弥勒と一緒にげんこつして怒った。

「まあ待て。治してやるが一つだけ言っておく治療の後傷がすっかりくっ付くまで風穴を開いてはいかんぞ。」

「開くとどうなる?」

弥勒はその最悪の事態を無心に聞く。

「裂け目から風穴が開き死期が早まる。そうなたらワシでももう助けてやれんは……さてとワシは薬草の用意せにやららん。その汚れた身を清めて来い。」

無心は、薬草の準備をしに行くと言ふ弥勒も寺の裏にある滝に当たり身を清めていた。

「え?じゃあやっぱりあの無心の爺さんが坊さんの育ての親なのか?」

「ええ、悪い事は全て教わりました。」

「なんか惚けたお方ですけど良い方ですね。」

弥勒は、ハチとダイチに教えた。

(弥勒のヤツあれくらいに傷で弱気になりおつて。無理もないかあまりにも過酷な身の上なのだからな。)

遠くから無心は、隠れて心配していた。

「犬夜叉どうやって弥勒様とダイチさんを探すの？」

犬夜叉は、自転車を押しているかごめが手がかりがあるのかと聞く。

「ああ、するな。あの臭いが。」

犬夜叉は、鼻をかきながら走りかごめが自転車に七宝を乗せると走り珊瑚も雲母に跨り追う。

「あの臭いって何よ？」

「ダイチが以前位置が分からなくならないように臭いが出る鉄の筒で知らせるって言うていたんだ。お前の国の忍者食の臭いをな。」

そうダイチは、以前の桔梗の件で迷わないようにその時の対処を犬夜叉に知らせていた。

「それと臭いが消えたら犬笛でも知らせるって言うていた。あっちの方が正確だからな。」

犬夜叉達はその臭いがする方角に向かって行った。

「何じゃ？まだ昼だと言うのに暗いのう。」

無心は、水を飲みながら窓から空を眺めていると・・・

キラリッ！

奥から赤く光る二つの光が現れる。

「な！何者じゃ!？」

無心は驚き見ると変な壺を持つ妖怪が現れ壺から煙が出て無心の口に入って行った。それも知らないハチは、弥勒が寝ている建物の中で座って寝ている。

「薬は飲んだか？」

「ああ。何かボーツとしている。」

「安心しろ直ぐにすむからな。」

「ああ、頼んだぜ。まだ死にたいねえ……」

弥勒はそのまま意識が失う。

それを見計らったのか無心の口からは煙が出て来た。

「他愛ない直ぐにすむからな。」

無心は、懐から包丁を取り出す。

包丁が弥勒の喉笛に振り下ろされるその時！

ガキーンツ!!

「ふうー……間に合った。」

ダイチが魔戒斧で弥勒を包丁から盾として守った。

「何!?!」

操られた無心は、ダイチの存在に驚く。

「坊さん起きてるか?」

「ん? ダイチ殿? ……!?! これは無心様!?!」

「坊さんどうやら少し前に爺さん妖怪に操られたらしいな。」

ダイチは、弥勒を背負うと魔戒斧を構え直した。

「テメエは誰だよ?」

「ふっ！奈落から四魂の欠片を貰う代わりに殺しに来た妖怪じゃ。」

「奈落だと？」

弥勒は先程飲んだ薬で身動きが取れない状態らしい。

「俺一人でも大丈夫だが坊さんの状態を考えると無茶ありありか……」戦略撤退だあああああつつつ!!」

ダイチは、背後の戸を黒い革靴で蹴り壊すと真横に偶然いるハチも驚く。

「えっ?!弥勒の旦那！ダイチの親分?!」

ハチはいきなりの状況に戸惑うがいつの間にかダイチに対してのあだ名をつけられていた。

「タヌ吉!!行くぞ!!」

「へー！へい！」

ハチは、術で煙を作り弥勒とダイチを逃した。

ハチは弥勒を背負うダイチと共に走っていた。

「ハチ、お前はダイチ殿と一緒に逃げろ！」

「え?でも！」

「後ろから妖怪が来てるな。」

振り向くと妖怪の大群がやって来ていた。

「仕方ない……使うか……」

ダイチは犬笛を力いっぱい吹いた。

「!?」

遠くない森にいる犬夜叉達が弥勒達を探していると犬夜叉が犬笛の音に気づいたらしい。

「犬夜叉どうしたの?」

「笛の音が聞こえる! あっちか! って事はヤバイって事かよ!」

犬夜叉の言葉を聞いたメンバーも驚き珊瑚もすぐに退治屋の衣装になる為に準備を終えるところその方向に向かったのだった。

『さてと目立つ事でもするか。』

魏牙になったダイチは、弥勒とハチを弥勒の父親の墓の周りに避難させると墓の外の妖怪達と対なっている。

「霊弾獣破!!!」

ドカーンッ!!

魏牙は、その一発を昨日の大蟻螂と同じのに放ち殺すと他の妖怪達が我先にと弥勒の所に向かうが。

ドシーンッ!!

魏牙が身体に似合わずに瞬足で妖怪を蹴り倒す。

『面倒だな！よくしっ！新しい技の実験台になれゴミども！』

ダイチは、通常の霊弾獣破の構えの靈力の弾を出すとその弾からもう一個出て更に一個と少しずつ出て三つ位になると一個目の弾を右手で放つと二個目を放ちそして無くなるかと更に二個出て来た。

『霊弾獣群!!!』

右手の拳が放たれるペースが徐々に上がって行くのと同時に弾の作る速度も上がっ



て行つた。

『ハアツ！ハアツ！ハアツ！ハアツ！飛ばし過ぎてシンドいな．．．くっ！』

疲れを見せた戯牙を見計らつたのか妖怪達は、墓で座つて動けない弥勒に襲いかかるうとしていた。

「ひいひい!!」

弥勒の近くにいるハチもビビる。

「さあ食いたきや食いな俺は誰さん達と違つて往生際がいいぜ．．．犬夜叉やダイチ殿と違つてな．．．」

弥勒が死を覚悟した。

『くそっ！間に合わない!!』

戯牙は、疲れのせいか鈍くなっている。

ズバツ！

弥勒を襲おうとしていた妖怪達が何かに斬られた様に倒された。

『この斬撃は！』

戯牙がよく見ると犬夜叉がいた。

「弥勒！テメエこんな所でダイチに子守させてたのか!? やい！弥勒！ダイチ！テメエらな！「弥勒！」「弥勒様！」

犬夜叉が言い切る前に七宝とかごめが動けない弥勒の元に駆け寄る。

「無事だったんだね法師様！」

続いて雲母に跨った珊瑚も弥勒を心配する。

「本当は心配の言葉を言いたかったんだろ？」

戯牙の鎧を解いたダイチが犬夜叉に呟くと……

ゴキーンツ!!

ダイチの頭に犬夜叉の拳骨が当たる。

「な、何で俺が……?」

「けっ!」

ダイチは、大きなタンコブ頭を抑えながら痛がり犬夜叉に至ってはすねる。

「誰じゃ!!ワシの寺を騒がす奴等は成敗してくれる!」

無心が寺から現れる。

「テメエか!」

「おい!犬夜叉!あれは坊さんの育ての親の無心って坊主で妖怪に操られているんだ!!」

「犬夜叉!頼むその人を殺してくれるな!」

墓から出てきた弥勒が犬夜叉に頼む。

「そういう事だ。何たってワシは弥勒の育ての親じゃからのう。」

「そんな事は知ったこつちやねえ！行くぜ老いぼれ坊主！」

犬夜叉は、鉄碎牙で無心に攻撃にかかる。

無心は、大きな数珠を鉄碎牙めがけて投げると数珠が鉄碎牙に絡み元のボロ刀に戻った。

すると今度は数珠が犬夜叉に絡まり電撃を帯びている様に犬夜叉の動きを封じる。

それを見計らったのか無心の背後から妖怪の群れが犬夜叉に向かって来た。

「散魂鉄爪!!」

「てりやつ!!」

ダイチも魔戒斧でブーメラン投げして戦う。

「ほう！元気なことよのう！」

無心が指で印を結ぶと更に犬夜叉に絡まる数珠の力が強くなる。

「犬夜叉！くそつ！外れねえ!!」

ダイチは、犬夜叉に絡まる数珠を離そうとするが離れない。

「我が法力の前でまだ動けるか。だがいつまで保つかな？」

口から煙を出す無心の背後から次々と妖怪の大群が入った球体が現れる。

「何あれ！和尚様の口から煙が！」「蟲壺虫じゃ！」「冥加ジイちゃん！」

「和尚は、あれに心を操られておる。」

「助からんのか？」

「近くに蟲壺虫を使う蟲使いがいる筈じゃ。其奴から壺を奪つて和尚に向ければ蟲壺虫は離れ壺に戻る筈。」

「わかつた蟲壺虫を使う蟲使いを探しに行くよ冥加ジイちゃんダイチさん！」

「おう！サンゴン！犬夜叉と坊さんを頼む！」

「珊瑚！」

冥加は、珊瑚の所へ行こうとするが！

ガシツ！

「逃げるなコラ！」

「ひい〜！！」

冥加は、珊瑚の方へ避難する筈がダイチに捕まり逃げられなかつた。

「かごめ！ダイチアレじゃ！」

七宝が指差す方を見ると蟲壺虫を操る妖怪が屋根にいた。

「アレか？ノミジジイ!?!」

「間違いない奴じゃ！」

ダイチが魔戒斧を投げ飛ばすが避けられかごめの矢も直ぐに避け切る。

「よっし！行くぞかごめ！」

「うん！」

「サンゴン！雲母！犬夜叉と坊さんの援護を頼む！蟲壺虫を操る奴を倒したら直ぐに向かうからそれまで何とかしてくれ!!」

ダイチとかごめは、寺の中に向かう。

犬夜叉は、無心の術で力を封じられ動けない。

犬夜叉もやりたいが無心がその時口を開き。

「ワシをもし殺してもしたら弥勒の風穴を治すのはワシしかおらん。明日にでも己の風穴に引き込まれてかねんからな。」

無心の背後の空には味もわからないクズ妖怪の大群が犬夜叉と珊瑚に襲いかかろうとしていた。

それを見た弥勒は右手の風穴を開けようとしていた。

「弥勒のダンナ！動ける様になつたんで!?!えええ!!風穴を!!」

「ハチ覚悟は良いな？たぶん俺もお前も吸い込まれるぜ？あんな連中に食われる位ならその方がマシだろ!?!」

「へっ！へいっ！付いて行きますぜ弥勒のダンナ！」

そして風穴を開くと妖怪の大群は、次々と風穴に吸い込まれて行く。

「弥勒の奴！アレでは四魂の欠片まで吸い込んでしまうではないか！」

操られている無心の術が弱まったのを見計らって犬夜叉は、数珠を引き千切り無心を殴り気絶させた。

「踏ん張りが効かねえ！」

弥勒は薬のせいか力が入らず風穴を閉じてそのまま倒れそうになり倒れ落ちそうになつたその時だつた。

右手の首を犬夜叉が掴み背後では雲母に乗る珊瑚が支えていた。

「い、犬夜叉、珊瑚？」

「この野郎！もう一度風穴開きやがったらこの腕へし折るぞ！」

「早まつた真似しちやいけないよ法師様！」

犬夜叉は、直ぐに鉄碎牙の元に行く。

「テメーが死ぬのは勝手だが俺とつるんでいる時に簡単にくたばるな！」

犬夜叉は、鉄碎牙を握る。

「俺が見捨てたみていで明日の目覚めが悪いだろうがアアアアアアアアアアアツツ！！」

その時犬夜叉の振つた鉄碎牙から強烈な力が放たれ全ての妖怪の大群は、直ぐに消滅してしまつた・・・そう殺生丸が鉄碎牙を一振りした時のあの感覚だつた。

「おい！かごめ！あれって！」

「よ！妖怪が一瞬で消し飛んだ！」

ダイチとかごめが蟲壺虫の操る妖怪を探している最中に犬夜叉の驚くべき攻撃に目を奪われた。

「アレが野良公が言っていた鉄砕牙の本来の力か？」

「初めて出せたのね。」

その隙を見て蟲壺虫の操る妖怪が屋根から逃げようとする。

「逃すかよー！」

ダイチの魔戒斧のブーメラン投げで蟲壺虫の操る妖怪は、横真つ二つになり消滅して壺もダイチの側にいた七宝が見事にキャッチした。

こうして無心に取り憑いた蟲壺虫も無事に壺に戻りこの件は一件落着に終わった。

そして再び無心が弥勒の治療を開始してからかなり経つが未だに来ない状態だった。

「まったく無茶しおって……」

無心が扉を開けると言う事は無事に終わったという事でもある。

「和尚様！弥勒様は!？」

かごめが無心に尋ねる。

「寝ておる。犬夜叉とダイチと言ったかなちよつと来い。」

ダイチと犬夜叉は、無心に連れられて滝のある場所に連れられた。

「おい坊主。風穴の傷は直したんだろうな？」

「つーかよ爺さん。アンタさ来たあん時に『お前今夜死ぬぞ』って嘘言っていたがあの時の目冗談に見えなかったぞ。風穴開きかかっているんだろ？」

ダイチの洞察力で無心の心理を読んでいた。

「勘が良いのお主。出来る限りの事はしたが既に風穴は開きおつていた。」

「!？」

ダイチは、深刻に黙る。

「じゅ、寿命が縮まったのか？後どのくらい生きられる!？」

「分からん。兎に角弥勒の持つ風穴は、妖怪奈落の呪いで生まれた物。即ち奈落さえ倒せば呪いは解けて弥勒の命は助かる。一刻も早く倒す事だ。それしか手はない。」

ダイチと犬夜叉は、頷いた。

一方かごめ達は寝ている弥勒の側にいた。

「心が強い人なんだね。何で何時も明るくしてられるんだろ？」

「うん。本当は毎日不安でたまらないんだと思う。」

珊瑚とかごめが話していると弥勒が眼を覚ます。

「もう大丈夫よ！和尚様が手当してもらったから。」



「?」

弥勒は、風穴のある右手を見る。

「ああ!!こ、これは!?!」

弥勒は、何かを驚いたかのように右手を見る。

「手がどうかした!?!」

一同は驚く中、珊瑚は、背後から誰かにそれも下半身の一部を触れる感覚に襲われる。  
スリスリ

なんと!!あのスケベ坊主の野郎はあろう事か珊瑚の尻を撫でまくりセクハラをしたのだ。

神様、どうかこのスケベ坊主の脳内構造を教えてください。

パチーン!

珊瑚は、無論弥勒の頬をビンタする。

そりゃ、最もですね。

「こ、こんな時までセクハラを……」

一同は、弥勒を呆れる。

「いやあれば死なねえだろう。」

ダイチはアナログ式のカウンターで弥勒の珊瑚ペンタ数（後の珊瑚のお尻に対するセクハラ略と称して尻愛の数）を水神の件から計っていた。

「ああ、あれは当分は死なねえな。」

「恐るべき弥勒一族。」

犬夜叉や無心も弥勒のスケベに呆れる。

## 幼児

光あるところに漆黒の闇ありき、古の時代より人類は闇を恐れた。

しかし、騎士と仲間達の刃と力そして勇気で人類は希望の光を得たのだ。

ここは夢なのか？

ダイチは、兵一と桔梗の夢の中に入った時と同じ感覚だと理解した。

『犬夜叉 四魂の玉を使って人間にならないか？』

気付くとダイチは、またまた兵一になり桔梗の膝元に抱かれ犬夜叉と桔梗は話していた。

『俺が人間になれるのか？』

『なれるさお前は半分は人間だもの。』

『俺が人間になったら桔梗……お前はどうなる？』

『私は玉を守る者。玉が無くなれば……ただの女になる。』

そして夢が終わり目覚めると犬夜叉達と野宿をしていた。

「夢か……」

ダイチは安心したが……

「あ……あれ？」

涙が出ていた。

それから日が出て一同は再び四魂の欠片と奈落を探す旅をしていると。

『くそっ！技を放つても直ぐに再生しやがる！』

「きりがねえぜ！」

そんな中旅の途中で一同は四魂の欠片を取り込んだり樹木の妖怪と交戦していた。

「こうなればあぶり出すしかありません！」

弥勒は魏牙と犬夜叉が攻撃した後に素早く札を地面に向かって投げると本体の根っ子が地上から出て来た。

「見えた！あの根に四魂の欠片があるわ！」

かごめも四魂の欠片の位置を確認すると犬夜叉達に言う。

「飛來骨！」

珊瑚が飛來骨を投げると犬夜叉と魏牙の連携攻撃で樹木の妖怪は、倒され四魂の欠片を手に入れた。

「けっ、ざまねーな！」

犬夜叉は、鉄碎牙を鞘にしまい魏牙の鎧を解除したダイチもホッと一息する。

「妙ですね。簡単過ぎます。」

弥勒は、おかしい事に気付く。

「倒して四魂の欠片を手に入れたんだ。心配いらねえよ。」

「そうだよな……」

犬夜叉は、自信過剰なのか安心してているがダイチも弥勒と同じ意見だった。

「おすわり！」

ドシンンッ！

犬夜叉は、七宝が何か変な事をまた言ったのか七宝を殴りつけてかごめの恒例のおすわりで躡けられていた。

「おいおい七宝大丈夫か？」

ダイチは、七宝のタンコブを消毒と絆創膏で手当てする。

「？」

かごめと犬夜叉の間に変な花が咲いていた。

「さつきまであんなのあったけ？」

すると花は、少しずつ大きくなっていく。

「まさか！」

ダイチは、直ぐに犬夜叉とかごめの間にくると手で突き飛ばし避難させる。

ポワーツ！

花から花粉がダイチに向かって飛び散った。

「くっっ！」

ダイチは、魔戒斧で花を壊して消滅したが花粉の煙が未だに消えない。

「「「ダイチ（さん）（殿）！」「」」」

犬夜叉は、花粉の煙がすぐに消えるのを見て確認すると。

小さい子供が魔戒斧を持って横で寝ていた。

「思い出した！」

珊瑚は、ダイチが壊した花に見に覚えがあった。

「どうしたの珊瑚ちゃん。」

「あれたぶん妖花だよ。」

「妖花？」

「妖花の花は獲物を花粉で幼くしてから食べる樹木の妖怪さ。」

だがその妖花も既に消滅しているが未だに効果が残っているらしい。

「確か元に戻す薬を飲ませれば大丈夫だったとおもうよ。」

珊瑚は、その薬の作り方を知っていた。

「ん……」

小さくなったダイチは、目を覚ました。

「あ、目を覚ました。ダイチさん大丈夫？」

かごめは、目覚めた小さいダイチを見ると。

「お姉ちゃん誰？」

「え？」

かごめ達は驚いた。

「おいおい何言ってるんでい！寝ぼけてるのかダイチ。」

犬夜叉がズンズンと来たが。

「犬夜叉おすわりっ！」

ドシンンっ!!

嫌な予感があったかごめは、犬夜叉におすわりをした。

「えっと……ダイチくん。年いくつ？」

「4さい。」

かごめ以外の一同は、固まった。

そう今のダイチは、28分の4だったからだ。

そしてかごめは

「可愛い！」

とチビダイチを抱っこして頬づりして可愛がっていた。

モミモミ

「柔らかい。」

チビダイチは、何故かかごめの耳たぶを触ると機嫌が良くなった。

「ダイチくん耳たぶ好き？」

「うん！」

笑顔で答える。

「可愛い!!」

かごめは、また頬づりをしチビダイチも耳たぶを揉む。

「まさかダイチさんが小さい頃こんな可愛かったなんて……誰があんな屁理屈でいい加減な男にさせたの？」

かごめは、そうさせた奴を訴えてやろうかと思う。



【悪いなかごめ！はっはっはっはっ！】

犯人はコイツ（コウヤ）だった。

魏牙の鎧の中から笑いながら謝っていた。

「ダイチがオラよりも小さくなっておるな。」

チビダイチは、七宝よりも小さくなっていた。

その証拠にかごめの背中におんぶして後ろの髪の毛の中に器用に隠れる事も出来た。

「……」

何故か犬夜叉は、かごめとくっ付いているチビダイチに嫉妬心を宿すが

ピョコ。

かごめの髪の毛から器用に出て来るチビダイチは、今度は犬夜叉の身体にしがみ付いた。

「な、なんでい!？」

「髪の毛の中に隠れんぼ!」

チビダイチは、かごめの時と同じで犬夜叉の長い髪の毛に隠れる。

「ハ、ハ、ハ！出て来い!」

捕まえるが直ぐに逃げるチビダイチ。

「ハ、ハ、ハの!」

犬夜叉は、捕まえるがフェイントを使うチビダイチを捕まえられずに倒れる。

「犬夜叉コッチコッチ！」

笑顔で手招きするチビダイチ。

「この！・・・!!？」

一瞬犬夜叉は、笑顔で言うチビダイチをある子供と重ねた。

「へ・・・兵一？」

犬夜叉は、その笑顔がかつて怖がらずに来た少年の笑顔だったからだ。

そう桔梗以外で接してくれる兵一を思い出す。

「ねえ珊瑚ちゃん。その薬ってどの位で出来るの？」

「そうだね材料は、直ぐに手に入れられるけど出来るのに二、三日くらいで完成すると思う。」

つまり二、三日はチビダイチはそのままの姿だと言う事だ。

「ダイチ。その背中に背負ってる斧オラにも持たせて貰えんじやろうか？」

七宝は、チビダイチの通常と変わらなく背負ってる魔戒斧を持ちたがっていた。

（そう言えばダイチさんが言っていたけどソウルメタルの出来た物は訓練をしないと持てないって言ってたけどチビダイチくん大きさに似合わず背負ってるから嘘だったのかな？）

かごめも一度持ってみたが全く持ち上がらないのを思い出す。

「良いよ。無理なら落としてね。」

チビダイチは、軽々と魔戒斧を持ち七宝に手渡しすると

「わっ!」

ドシューーンツツツ!!!

七宝が重くて魔戒斧を落とすと地面が揺れて地震の様な現象になる。

「「「「「」」」」」」

チビダイチ以外の一同は、驚いた。

「大丈夫?」

チビダイチは、魔戒斧を持つと背中に背負う。

やはりチビでもダイチはダイチである。

ちなみにダイチは、ソウルメタルの武器を簡単に扱うまでに一週間で覚えたらしい。

それだけコウヤの教えが物凄く上手と言う証拠である。

その為か修練場で教えた子供達は、ソウルメタルの武器を簡単扱えた。

そして夜になり森で野宿をする事になり次の日からダイチを通常に戻す為の薬の材料を探す事になる。

「ん・・・オシッコ・・・」

一同が寝静まった夜チビダイチは、魔戒斧を背負い森の奥に入って行った。

森の奥に死魂虫達を引き連れる桔梗がいた。

そう犬夜叉の匂いでも分からない程の森の奥にいる。

桔梗は、顔を俯く。

(時々……孤独にいるのが無性に虚しい……無数の死魂で満たしても心まで満たされない……)

桔梗はため息をついた。

森がとぎれた先は、月明かりで照らされる草地になっていた。この向こうに川があり、草地は段丘の一部らしい。桔梗の住んでいた村と、どこか風景が似ていた。

その時何時もあの兵一を膝に乗せていたからだった。

桔梗は振り向いた。今しがた出てきたばかりの森に何かいる。

「誰だ？」

とつさに右手があがり、背に負った矢筒の中の矢を探った。森には木の陰から、4歳くらいの子供がこちらのほうを見ていた。

「おいで」

思わず桔梗は口にした。子供はぱたぱたと出てきた。見覚えのある顔に。

「へ、兵一?!」

桔梗はつい、高い声を出してしまった。

兵一にそっくりの子供は、おびえたような顔で立ち止まった。

「おどかすつもりはなかった」

桔梗はそう言った。

まがいものの体でも、胸がどきどきするような気分だった。

チビダイチは、じつと自分を見ている。桔梗はそつと近寄った。

川風が、そのとき、ふと桔梗の後れ毛をなびかせた。

(ママみたいな匂いと雰囲気がする)

チビダイチの表情が戸惑いに変わり恥ずかしいのか森の中へ駆け戻った。

「怖がされてしまったか……」

桔梗はそう思い呟くとそれ以上、近寄るのもかわいそうだった。

「もうよい。行きなさい」

それだけ言つて、桔梗は森と反対に草地の奥へと足を進めた。脱力が来る。紅の切袴のひざが、草むらについた。恨めしい川風が、正面から吹いてくる。

ふいに、ぱたぱたと音がした。

振り向くと、チビダイチだった。

「怖くないのか?」

「なんで?」

チビダイチは不思議そうな顔でトコトコと近寄ってきた。

昔兵一が自分を見る様について桔梗が何も言わないでいると腕を払げた。

「何か用か?」

チビダイチは左右の腕を桔梗の体に回して抱きついた。

「おまえ、何を?」

小さな手が、そのとき、桔梗の背中に触れた。偶然ではない。まるで、母親が子供を寝かせるかのように、チビダイチは桔梗の背を、やさしく、ほんほんたたいていた。

「僕と一緒に居てあげるから大丈夫だよ。」

チビダイチの言葉を聞いた桔梗は、ある事を思い出したそう亡き兵一の思い出であった。

自分が不在の時に村人の子供が妖怪に殺されてしまい子供の親が桔梗様がいてくれればと恨めしく言った時に内心傷ついた。

そして直ぐに一人になった時に兵一が同じ言葉を言ったからだった。

ふいに涙があふれた。

「わたしを、慰めようとしているのか?」

「うん！」

桔梗はそつと子供を膝に抱え上げた。ぽんぽんは、まだ続いている。

「私は桔梗。お前は？」

「ダイチ！」

桔梗は、チビダイチがそう言うのと強く抱きしめ、幼い肩に顔を押し当て自分の涙を吸い取るにまかせるのは、甘悲しく、そして幸せだった。

翌朝

「？」

無人の古寺で寝ていると二つの布団の内の自分の布団に中で何か違和感を覚えた桔梗は、布団をめくると

「すーっ……すーっ……すーっ……すーっ……」

自身の布団の横に魔戒斧を置いてチビダイチが寝音を立てながらいつの間か桔梗の布団に潜つて来ていた。

「あ……」

桔梗は、チビダイチの布団に戻そうとしたがあまりの可愛さにそのまま寝させた。

「温かい……お姉ちゃんの身体……」

チビダイチの寝言を聞いた途端に死人の自分には温かみも無いのに変な事を言うの

かと最初は思う。

だがチビダイチチからしてみたら桔梗と一緒にいると凄く安心したのか心の温かさを感じるのかもしれない。

それからチビダイチチは、桔梗と外に出かける時は子熊が母熊に着いて行くように後ろから歩いた。

「桔梗お姉ちゃん。これ！」

チビダイチチは、在るもの渡した。

「これは？」

桔梗は、チビダイチチからドングリの首飾りをもらう。

「僕の国にはねドングリの首飾りは、幸運を呼ぶんだよ。桔梗お姉ちゃんに幸せがありますように。」

「ありがとう大事にするね。」

チビダイチチは、桔梗から薬草の知識や見つけ方、子供らしい遊びなど様々な物を桔梗に教えてもらった。

寝る時も池で水を浴びる時も一緒にいた事で他人から見たら仲の良い親子か年の離れた仲の良い姉と幼い弟だった。

一週間が経った。



「つたくよ！どこい行つたんだあのチビめ！」

犬夜叉達がチビダイチを懸命に探していたこの一週間。

「何処にいるんだろう？」

かごめ達も一週間懸命に探しているがチビダイチは全く見つからない。

「犬夜叉の鼻でもわからないとは何処へいるのやら。」

「あの夜からずっと見つからないのもおかしいね。」

「おいダイチ出て来い！出て来ても犬夜叉は、殴り怒りはせんぞー！」

など言いながら探していた。

「早くこの薬を飲まないといけないのに……」

かごめは、珊瑚が作った薬を持って眩くするには理由があった。

妖花の粉には子供にするだけでなく徐々に高熱を発症してしまう毒も含まれていた

からだった。

かごめが森の奥に入ると弥勒と七宝も入ろうとしたが突然入れなくなつた。

「これは結界!?!」

「弥勒かごめだけ入れたと言う事は?!」

七宝と弥勒は、この結界の事を気付いた。

「ねえ離れない様に何か目印に……あれいない?もしかして……」

かごめは、森の中に入った瞬間に弥勒と七宝が突然いなくなつた事を以前にも覚えがあつたそれは桔梗の結界の中に入った時と同じだつたからだ。

「まさか……」

かごめは、森の中を懸命にチビダイチを探していた。

そう犬夜叉が突然チビダイチを見て兵一と呟いたのを覚えていたからだつた。

犬夜叉がチビダイチを兵一と呼ぶと言う事は桔梗も兵一と思う可能性が高かつた。

森の中を抜けると大きな無人の古寺が聳え立っていた。

「？」

かごめは、中へ入ると其処には……

「すーっ……すーっ……」

「……」

桔梗が古寺の柱に寄りかかり片足の脚膝を立てたまま座り寝ており、その脚膝を立ててない方で器用に丸く寝ていたチビダイチが気持ちよく寝ていた。

「……」

かごめは、そのまま忍足の状態でゆっくりと桔梗に寝ているチビダイチに近寄つた。

そして桔梗からチビダイチを離れた瞬間。

「んんん!!」

チビダイチは、愚図り始めた。

「あー！」

かごめは、チビダイチが大声で愚図り出したので思わず驚いた。

「どうしたダイチ？……！！おまえ！！」

いきなり愚図り始めたチビダイチの声に気付いた桔梗は、目を覚まし膝を見るとチビダイチが居なく近くにチビダイチを抱き抱えたかごめを見て驚いた。

一方結界に入れずにいる犬夜叉がいた。

「此奴は桔梗の結界か……！！」

突然何故か結界が消えた。

直ぐに結界の中に入ると直ぐに結界が元通り直ったが既に犬夜叉に入られ侵入されてしまったがもう戻る事も出来ないと感じたのか犬夜叉は、結界の中へ進んでいくそう桔梗に会う為であった。

「お前何の用だ？」

桔梗は、チビダイチに見せた態度と違いかごめに対して威圧感を出してかごめに言う。

「聞いて桔梗、この子は信じられないかもしれないけど妖花の毒で子供になったダイチさんの早く薬を飲ませないと命を落とすかもしれないのだからこの子を渡して。」

「ふっ……お前の話を信じろとでも？」

「お願い。」

「この子は、望んでここに居るそれを離すことが出来るとでも思つて居るのか？」

「そ……それは……」

かごめは、チビダイチが望んでこの一週間居なくなった理由を理解した。

そうチビダイチは、桔梗と一緒にいたいからこそ此処にいたのだと。

その時古寺の外から

「桔梗！」

犬夜叉の声が響くとチビダイチが完全に目を覚ました。

「犬夜叉？」

桔梗は、犬夜叉が来た事に驚く。

「かごめ？ダイチは桔梗と一緒にいたのか？」

犬夜叉がかごめに近づくと桔梗は、ますます悲しく切なく表情を変えていく。

「……………」

チビダイチは、そんな桔梗を見てられなかった。

すると突然

ガブツ！

「いたっ！」

力がかごめで勝てないと判断したチビダイチは、かごめの腕を離す程度まで強く噛んだ。

すぐに桔梗に近づくと。

「大丈夫桔梗お姉ちゃん？」

「ダイチ？」

「僕だけがずっと桔梗お姉ちゃんの味方だよ。」

来てくれた事に驚いたがそれと同時に嬉しかった桔梗。

「犬夜叉にはかごめがいる！」

チビダイチは、犬夜叉に向かって大きな声で言う。

「な！何言つてやがるんだ！」

チビダイチの言葉に動揺する犬夜叉。

「けど桔梗お姉ちゃんは、何時も一人ぼっち！だから僕がいらないとお姉ちゃんは、もつとダメになる！僕がお姉ちゃんと一緒にいる！」

「ふぎけた」二股や浮気は、心の弱い負け犬野郎のやる事って爺ちゃんが言っていたもん  
！．．．．．

（ダイチくん容赦ないのね．．．）

チビダイチのピュアな言葉が犬夜叉の心を刺すいや鋭く刺した。

「ダイチくん、私達と一緒に行かないとダメなの。」

かごめも動揺しながらチビダイチの妖花の毒を飲ませなければならなかった。

「嫌だよ！お姉ちゃんも一緒じゃなきや嫌だ！お姉ちゃんは一番優しいもん!!犬夜叉達と一緒に居る時よりも楽しいし！かごめ何かよりも優しいし、綺麗だし遊んでくれるし、良い匂いがするから良いんだもん!!」

チビダイチは、ワザとかごめに対して嘘な事まで言つて桔梗の味方になる。

(ダイチくん優しいわね。)

直ぐにかごめは、チビダイチの優しい嘘に気づいてあげた。

「だ・・だから僕は・・あれ・・」

チビダイチは、突然倒れた。

「ダイチ!?!」

桔梗は、直ぐに抱き抱えた。

「不味いな妖花の毒がもうまわり始めたか。」

「何?」

犬夜叉の一言で桔梗は、本場の事と理解した。

「・・・・・・・・」

【桔梗お姉ちゃん！】

桔梗は、兵一の笑顔を思い出した。

「（もう失いたくない。）犬夜叉、かごめこの子を頼む。」

そう言ううと桔梗は、死魂蟲に連れられ何処かへと消えてしまった。

「ほらダイチ飲め。」

「ゆっくりね。」

犬夜叉とかごめにゆっくりと薬を飲み始め飲み終わるとそのまま寝てしまい光り出した。

「ん?」

ダイチは、目覚めると古寺の天井を確認して後に犬夜叉とかごめの顔が入ってきた。

「犬夜叉?かごめ?何で俺は此処に?」

今までのチビダイチの記憶が無かった。

その後かごめから妖花の毒で4才になった事を説明したが桔梗の事は全く話さなかった。

「ダイチ殿あの森で何があつたのですか?」

「いや坊さん俺も覚えてねんだよ。それを知っているのは犬夜叉とかごめだけだしなんか今でも聞ける雰囲気じゃねえしよ。」

旅をしながら弥勒はダイチから聞いても覚えがない事と犬夜叉とかごめの様子かわか桔梗の件だと直ぐに察した。

七宝も珊瑚もあまり深く関わって聞いてはいけなさと察したのか犬夜叉とかごめから何も聞かなかつた。

「……………」

かごめと犬夜叉は、重い空気だった。  
すると

「犬夜叉お手!!」

ダイチが犬夜叉の前に回り込んで右手を出して試す。

「いきなりなんでい!?!」

「おすわりができるんだからお手とか伏せとかハウスとか出来て犬らしい事出来るんじゃないかねかと思つてな!」

ふざけ混じりでダイチは、犬夜叉に言う。

それを見たかごめや他のメンバーは笑いを堪える。

「犬扱いですんな!!」

ダイチは、犬夜叉に三段アイスの様なタンコブを作られた。

(重い昼ドラ見たいのは合つてねんだよ。かごめ、犬夜叉。)



ボコボコにされても笑顔なダイチだった。

月明かりが出ている夜。

(やはり孤独にいたるのが無性に虚しい無数の死魂で満たしても心まで満たされない。)  
桔梗は、再び襲う孤独に悲しんでいた。

が！

ジャラ・・・

袖に何か入っている。

それを見るとチビダイチがくれたドングリの首飾りだった。

(何故だろうかこれを持っていると何故か・・・何故か心が・・・)

桔梗の瞳から涙が出て。

「温かい。」

笑顔になりしばらくすると何時もの表情に戻りドングリの首飾りを袖に戻すと桔梗

は、何処かへと行ってしまった。